
ONE PIECE 世界を照らす太陽譚

麻美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECE 世界を照らす太陽譚

【コード】

N8738M

【作者名】

麻美

【あらすじ】

ある日その少年は突然異世界へと飛ばされた。何故かはわからない。気がつけばそこにいた。その少年は周りを不思議に思いながらも探検してみるとそこがONE PIECEの世界だと気づく。そんな少年は数々の原作人物と物語を織り成していく。

この小説はONE PIECEの二次創作です。

ご都合主義・オリ主最強・不定期更新・原作ブレイクなどの成分が含まれているのでご注意ください。

ここは何処？（前書き）

小説を見ていると自分でも小説が書きたくなって書いてみました。
駄文ですがよろしくお願ひします。

ここは何処？

「ここは……何処だ？」

俺は今森の中に居る。…ここに来る前も森の中に居たのだが、違う森だ。俺の家は田舎にあるから森の中でよく『戦争』って云う名のエアガン・ガスガンの撃ち合いをする。

今回はその途中だったわけだが、気付けばここに居た。誰かに撃たれて死んだわけでもない。…まあ近距離で目や耳の中に連射しなければ死なないくらいモデルガンの威力は弱いから死ぬ事は無いだろう。

そんなことを思いながら森の中を歩いた。因みに何故か右手には本物の銃ピストルを持っている。随分古い型だが使い方は分かる。火縄と原理が近い作りになっているから。

よく分からないがこの森は危険そうだから銃を持っていて不憫な事は無いだろう。

取り敢えずここがただの森か、それとも島か調べる必要があった。だから基本的には一直線に歩いた。そうして出たのが

「海……ってことは半島か島か。」

限りなく広がる蒼い海。綺麗なものだった。…が、今はそれどころでは無い。この次は民家。あるとすれば山の中では無く海岸線や浜だ。

そう思つて海岸線を歩いて行く。暫く歩いた頃に、河口の近くに備え付けられた1つの小屋があった。

そこまでは他に家らしきものが何もなく、恐らくこの小屋しかないだろう。飽く迄予測だが、川沿いにも建っていないから他にはない

筈。

そう思つて見つけた小屋へ駆けていく。ここが何処だか分かるヒントが隠されていると思つて、必死に駆けた。

因みにこの時はここに来て10時間は経っている。何も食べず、何も飲まなかった俺はフラフラだった。

小屋に近付いた俺は先ず川で水をがぶ飲みする。喉は潤されるが、何も食べていないだけに気持ち悪くなった。

そうして小屋の扉のノブに手を掛けた。中からは音がしない。誰もいないだろうが一応警戒しながら中に入る。

「やっぱ誰もいないか。どっちかって云うと居てほしかったんだけどな。」

もう随分人に会つて無い所為か誰でもいいから会いたくなつた。友達でも彼女でもなくていい。ただ誰かに会いたかった。それが俺の命を狙うものでも。

それだけ不安定だった俺の心は、空っぽだった。何かで埋めたいと思つた時に、妙な果実が目に入った。

形は歪。しかし何処か趣がある。そんな果実を手にとって、口に運んだ。寂しさを紛らわすために我武者羅に食べた。

その果実は苦かった。しかしそれが逆に今の俺の心には調度良かった。

全てを食べ終えてその果実の下に在った紙を手を取つてみる。そこには色々と書いてあつたが、矢張り目に留まつたのは有り得ない言葉達。

いや、まあ英語で書いてあつたが、順応出来たことへの驚きもあつたが。

その紙には『悪魔の実』や『六式』、『海軍』や『海賊』、『世界政府』などの言葉が書き連ねられていた。

意味不明だったが、理解は出来た。割り切る事は不可能だったが。

詰りはここが“ONE PIECE”の世界だと云う事。これだけで判断するのも微妙だが、実際に悪魔の实の様な果実を食べたのだから信じざるを得ない。

それにその紙には悪魔の实の能力も描いてあった。

名前は『サンサンの実』文字通り太陽人間。自然系。ロギア説明によるとマグマの上位にあたる能力。体をガスに変換する事が可能。分かっている範囲では熱も放出できる。それ以外は特筆されていない。

「最強・・・か？別にそんなのは必要ないし時代が分からねえと原作に介入できるかどうかもわからねえ。」

既に原作が始まっていたら関わる事は不可能だ。それは何故か？それは今の俺の年齢にある。

調度この部屋に等身大の鏡があつたから分かつた事だが身長が140cmほど。髪は金髪と云うか飴色と云うか・・・その中間あたり。恐らく悪魔の实が原因だろう。長さは腰までである。

顔は中世的で、以前とは比べ物にならない程美形。イメージとしてはNARUTOの波風ミナト。と云うよりそのまま。

そんな有り得ない容姿に狂喜しながらも年代が分からないと云う問題で愕然とする。しかしいつ誰が助けに来てくれるか分からないこの島で生き抜くには鍛えなければならぬ。

そう思つてもう一度紙を取つて六式の欄を見る。そこにはご丁寧に修行方法が描いてあつた。これを描いた人の証拠となるものが無いからCPとか黒い人だつたと判断。・・・まあ誰であろうと関係は無いが。

そんなこんなで修行を開始・・・の前に腹が減つた。今日は何か食べて寝よう。そう思つて外に出る。

外は既に薄暗くなつており、気味が悪い。森の中に入るのも嫌なので近くにあるものを寄せ集めて竿を作つた。しかし餌が無い・・・それにどんな魚が食べられるか分からない。安全性からすると陸上

生物のほうがいい。そういうことで結局森の中に入った。死なない体ではあるが、能力を上手く使えるかどうか分からないので一応銃も持っている。殺す道具はある。あとは殺す勇氣だけだ。まあしかしそんな事は出来ない。

「日本人舐めんなあ！！！！」

とまあこういうわけだ。史上最強に殺しを好まない国民である俺にとっては動物を殺す事など不可能。

魚は捌ける。鶏も・・・なんとか。豚と牛は死んでいれば余裕。猪も捌き方は分かるが殺すのが不可。

こういう時は小さな・・・そう、例えば兎の様な小動物を狩る事が多い。しかしそれは俺にとっては逆効果。大きな動物の方が可哀想でないように思える。

そんな事を考えていると叢がガサゴソと音を立てる。それに反応して銃を構える。

「ブオオオオオ！！！！」

そうして出て来たのが猪。少し躊躇いながらも引き金を引く。単発式だから外せない。確りと狙いを定めた。

ズドオオオン！

しかしあまりの反動で銃弾は猪とは全く関係の無い方向へと飛んで行く。発砲音で猪は逃げていく。

「俺の食糧・・・。」

そう思って愕然としようとするが何やら悶え声の様なものが聞こえ

る。先程外した銃弾の軌道の方から。
興味本位でそっちに行ってみると見事に頭を貫かれた猪。

「ラッキー・・・でいいよな。」

俺はその猪をビビりながら木の棒で叩いて確実に殺し、担いで家まで帰った。猪のサイズは大きく、重量感があるが案外簡単に運ぶ事が出来た。

そんな自分の腕力に驚くがこの体に憑依する前の誰かが鍛えたのだろうと思つて納得した。・・・そうなつて来ると六式も既に習得済みと云う可能性もある。

そんな可能性に賭けて見ようと思つたが、修行をサボるのは良くないと思つて使えてもさらなる向上を目指そうと思つた。

そんなことを考えながら焚き火をして猪を捌いて焼いた。毛を抜く作業が1時間も掛かったのは仕方のない事だろう。

そうして晩御飯を食べ終えた頃には既に周りには完全な闇に包まれていた。フクロウが鳴く声、草木が風に揺れる音など全てが不気味に感じた。

無人島でこれから毎日同じような夜を迎えるのだと考えたらゾツとした。前世の記憶に関しては何故か基礎知識とこの世界の記憶しかない為、以前の世界の人の名前は思い出せない。勿論自分の名前もその事が妙に哀しくなつたためか、俺は知らず知らずのうちに泣いていた。自分が高校生だつた事など詰らないものばかりは憶えていて、家族や友達顔や名前を憶えていない自分が妙に腹立たしく思えて、自分で自分を傷付けた。

叫びたくなつた時は自分の腕を噛んだり、他にももろもろと。まあ傷跡が残らない程度の行動だが。

そんな事をしていたわけだが、その内に疲れて深い眠りについてしまった。そうして俺ことミナトの長い長い無人島生活が始まるのであった。

ここは何処？（後書き）

感想・評価等々ありましたらお願いします

鍛え抜かれた肉体（前書き）

今回もご都合主義満載です

鍛え抜かれた肉体

昨日はシャワーを浴びるのを忘れたので朝起きてシャワーを浴びた。その時に自分の肉体が鍛え抜かれている事に気付いた。

鍛え抜かれたと云ってもゴリマッチョなどでは無い。無駄がなく、引き締まっている。腹筋も綺麗に6つに割れており、脂肪など何処にも見当たらない。それなのに肌は白く、毛など無く、もっちりとしている。

そんな体は『若いから』と云う一言で片付けてしまえばそれまでのだが、スポーツマンだった俺としてはかなり嬉しい。誰もが理想とする様な体だ。嬉しくない訳がない。

しかしそんな体が無駄にしてしまう自信が俺にはある。鍛える事は嫌いじゃないが、こんな体を維持してさらに向上させる事なんて出来る自信がない。

・・・いや、この体もここで鍛えられたものならば六式の鍛え方で何とかなるかもしれない。そうなればこの体で六式が使えるかもしれない。

だとすればこの体の持ち主がこの家の持ち主・・・詰り俺か。では無くてそうならば何故悪魔の実を食べなかったか。

情報まで書き留めていて、食べないのはおかしい。それだけ泳げなくなるのが嫌だったか、後で食べようと思っていたか。理由はその2つの内どちらかだろうが、今となっては如何でもいい事。どうせサンサンの実の能力は俺のものだから。

そんな持論を噛ました俺は服を着ないまま外に出る。服が2着しかないのと、誰もいないからいいという2つの理由で何も着ていない。その素っ裸のまま俺は六式の内の一つ、剃そるを試してみる。原理は憶えているのでやってみる。

すると一瞬で十数メートル先に移動した。それに感動しながらも次

は能力を使いつつ剃を使おうと試してみる。

すると先程は十数メートルだった距離が一気に百メートル弱まで伸びる。これに関しては顎が外れるかと思った。

今の能力は体を水素に近くしたただけ。太陽と云うのは水素とヘリウムで殆どが構成されている。水素は原子番号が1番と云う地球上でもっとも軽い気体である為体重を軽くする・・・と云うよりは体重をほぼ完全に無くす事が出来る。それを剃を使った瞬間にやってみたらこの通りだったと云う訳。

この後月歩げつぽうで試してみると一回の蹴りでかなり高くまで飛ぶ事が出来た。その後も順調に嵐脚らんきゃくと紙絵かみえも習得・・・と云うよりやり方を憶えていった。そこまでは順調だったわけだが、次からが難題だった。

「鉄塊てつかいつて筋肉を硬くして鉄の様にするんだつたよな。でもそんな事するのも面倒だから・・・これで如何だ？」

能力を使って体内の炭素と鉄を一点に集める。元々人間の体なので素材は十分にあつて、太陽にもその2つは微量だが入っている。微量でも入っていれば操る事が出来る。そうして

一点に集めた鉄を外側に、炭素を鉄の内側にして2重の鎧を作る。そうして作られた所を叩いてみると、鉄塊以上の強度を誇る鎧の完成だった。

しかし問題もある。体の鉄分など使っているわけなので庇いきれない事がある、と云うことだ。四方八方からの攻撃は全て防げないし、能力を確実に、しかも早く使うことも出来ない。現に今のだって10分は掛かった。それでも完全とは言えないだろう。

だから結局鉄塊を会得しなければならぬ、と云う結論に至った。今のは要所で使えばいいと思い、これからも鍛える予定だ。

肝心の鉄塊の確認の仕方だが、指銃しがんで試す事にした。これだったら

2つの事を一気に確認できる。そう思ってた木に向かつて指だけに鉄塊をかけて放って見る。

ザクツ・・・バリバリ・・・!!!

穴が開いたと思ったら音を立てて倒れてしまった。しかし指は一切痛くない。と云う事は両方が成功。

・・・なんか異常な体に憑依したものだ。体は鍛え抜かれて既に六式は使えるし、端正な顔立ちだし、流れる様な艶のある金髪だし。そんな体で序でに六王銃ろくおうがんも試してみた。結果は成功。木に思いつきり放ってみたら木が破裂した。

「ふ・・・これが内部破壊か。」

つい自分の力が凄過ぎて言葉を漏らしてしまった。本当に馬鹿みたいに強い。・・・けどどちらかと云えば力よりは速さの方が有る。それに速さがあれば力は無くともやって行ける。黄猿ことボルサリーノがいい例だ。カモそこそこ有るから何かを考える必要もないのだが。

取り敢えず今は誰とも喋らない状態が続いて言葉を発せられなくなったり、人格が崩壊してしまう事が恐い。少しの間人と会わないことがどれほど辛いことは分かっている。

それに心の拠り所と呼べる暇潰しも存在しない。いつでも能力開発が出来る程の体力だっただろうし、体を鍛えるのにだって限界はある。

それに未だ10歳だ。無理な運動は体に悪い。成長の妨げにもなる。折角10さいで140強と云う身長なのだ。これから伸びる背を縮めたいとは思わない。あわよくば190くらいは欲しい。無理だろうが。

そう云う事で心の拠り所となる癒しを探し求める事にした。虎やライオンなどでは無い。目的はキツネ！出来れば九尾とかそんなカッコイイ火を吹いたりしそうな奴。

そう思つて森に侵入した。この森は結構獰猛で大型の動物ばかりいるから恐い。攻撃が効かないと分かつていても襲われる瞬間は恐い。木々が生い茂る道を奥に進んでいくと、狼の群れと出くわした。その狼たちは何かを囲むように陣取っている。

俺はそれが気になつて月歩を使つて狼たちの上からその中心を眺める。

「あ！ 九尾発見！」

何ともご都合s・・・もとい、偶然だろう。森に入つて30分ほどで癒しの材料が見つかるとは。さすが俺。

そう思つて声を上げたら狼たちが一斉に俺の方を見た。正直目になり怖い。しかしあの九尾は俺の獲物。

「貴様ら俺のペットに手を出すんじゃねえ！！シュツシュ！」

下に降りてシャドーボクシングをしてみるが狼は怯まない。当り前ではあるが哀しくなつて来る。だって九尾でさえ軽蔑の眼差しを向けて来る。

「俺が可哀相な人みたいじゃねえか！！！」

俺は九尾を抱えて月歩で狼の上空に再度飛んだ。九尾は暴れることなく大人しく抱きかかえられている。

狼はこつちを見て咆えているが関係ない。俺の癒しだ。

このふかふか感といい、クリーム色の美しい毛並みといい、柔らかい尻尾と云い、全てが完璧。これで火でも吹けばもう申し分ない。

あと六式を使えたりして。・・・まあ無理だろうが。取り敢えずその九尾を連れたまま家へと持ち帰った。

「お前の名前は今日から次郎だ！」

「くう！！」

家の近くの浜で九尾に名前を付けている途中、『次郎』と云う名をつけると火を吹かれた。まさか本当に火を吹くとは思っていなかったが、問題はそこでは無い。

「死ぬ！焼ける！俺は燃えやすい体質なんだ！」

サンサンの実の所為で体が殆ど水素になっているので発火しやすいのだ。多少の火でもかなり燃え盛ってしまう。

因みにマグマの上位にはあたるが、メラメラの下位にもあたる。詰り『溶かす』のには強いが『燃やす』と云うのには弱いのだ。その弱点をこの九尾は見事について来た。

「頼む！お前の名前は真面目に考えるから水掛けてくれ！」

シユオオオオオ・・・

九尾が海に入って器用に尻尾を回転させて水を掛けてくれた。これで死なずに済んだ・・・。

「助かった。お前はメスだよな。・・・アンゲロイなんてd・・・止めて！火だけはやめて！」

俺が天使階級最下位の複数形の名前を出すが九尾の威圧によって止

めざるを得なかった。それよりも天使階級を知っているとは流石だ。

「じゃあ『セラフ』だ。これなら満足だろう。」

俺が天使階級最上位の名前を出すとすやすや寝始めやがった。俺がそれを小屋の中まで……って立場おかしくね？と云う感じで新しい家族？主人？が誕生した。

鍛え抜かれた肉体（後書き）

能力についてはまた詳しく公表したいと思います。

拾い人（前書き）

今回は原作と交わります。微妙にですけどガッツリ。

拾い人

九尾のセラフと出会ってから早3ヶ月。いくら癒しがあるからと云って誰とも話さないまま3ヶ月も過ごすのは気が狂いそうだった。

全てを壊したい

この島の動物を全て殺そうか

いつその島を沈めようか

いや、俺が死のうか

そんなことを考えながら一日を過ごす。それが俺の日常。セラフはそんな俺を見て心配そうな表情を浮かべる。

最初こそ威張ってはいたものの、最近はよく俺に懐いてくれている。それが可愛くて、仕方がない。が、消えない焦燥感には勝てない。セラフに暴力を振るう事は無いが、他の動物にやつあたりすることなど屢ある。

そんな決して平和とは言えない日常を壊してくれる人が、とうとう現れた。

side ????

偉大なる航路で海賊を追い掛けている途中、水分や食糧が底を突きそうな俺たちはとある無人島に立ち寄った。

海賊を追わなければならぬ状況だが、船を速く進ませるなら部下がよく働く様に十分な食料を供給してやる必要がある。

部下共は全員遠慮して『早く海賊を追いましょう！』とは言いが最近皆が糞れ気味だ。無理をさせて戦場で死んでもらっては困る。そ

れこそ海賊に逃げられるより。

それで数個あるエターナル・ボース永久指針を探って近場の無人島を見つけたわけだ。その無人島は川もあり、木々が生い茂っている。食糧も、水も豊富に見える。・・・ただそれだけの理由で立ち寄る。

しかしその無人島は無人島では無かった。・・・いや、正規には無人島だ。しかし1人の金髪の少年が小さな小屋で尾が九本あるキツネと共に暮らしていた。

その少年が暴れていたのを見て俺たちが臨戦態勢に入ったのは仕方ない。しかし俺たちを見ると暴れるのを止めて、泣きそうな表情で見えて来た。

その時は何故か表情が緩んでしまった。そして俺に純粹無垢な笑顔に向けた。

こんな殺伐とした島であんな笑顔が出来るなんて思っていなかった。だから・・・つい。

俺も笑い掛けてしまった。

何処にでもいるような子供の表情が出来るその少年の許に駆け寄った俺は事情を聞こうと思った。

この偉大なる航路では漂流者なんてよくいる。無人島に住まざるを得ない状況になったのならそれが有力だろう。

実際その少年から出てきた言葉はそのようなものだった。

『気が付いたらここに居た』と。

矢張り漂流者。もしかしたら・・・いや、もしかしなくても捨て子と云う可能性もある。

ずっとこの島に置いて先程の様に暴れていたら可哀相だと思い、俺が預かる事にした。

海賊を追っている途中だが、1人の子供を守れない海軍などあってもなくても変わりはない。反対する部下をそう言っただけ無理矢理納得させた。

side out)

いつもの様に俺が暴れていると、一隻の海軍の軍艦が泊まった。初めはそれに気付かなかったが、人の声が聞こえて人が居る事に気付いた。

全員が闘う姿勢を見せており、その殺気に寒気がした。それでつい、泣きそうな表情をしてしまった。

そんな俺の表情を見て、その船を統率しているであろう人の表情が緩んだ。それを見て俺は笑顔を向けた。何故かは知らないが。その俺を見てその人も俺に笑い掛けた。

その直後にその人は俺に駆け寄ってここに来るまでの経緯を聞いてきた。俺は異世界に居た事以外は全て話した。そうは言っても『気が付いたらここに居た』と云っただけだが。

それを聞いて情が湧いたのか、部下を説得して俺を保護すると言い出した。勿論セラフも一緒に。その時は嬉しかった。

「ところで君、名前はなんだ？」

「俺の名前は……ミナトです。」

悪い人ではなさそうなので……と云うより海兵に悪い人などいたらおかしい……名前を素直に教えた。偽名であるには変わらないが。

「そうか、俺は海軍本部大将のセンゴク。よろしくな。」

若いから見分けがつかなかった。しかしよく見てみれば原作時の面影もある。そしてまさかこんな人に出会うなどとは思っていなかった。

そんな俺は口をパクパク動かす事しか出来ない。未だ大将と云う事

は原作20年以上前だ。

「ははは、理解するにはもう少し時間が掛かるか。ならば先に船に戻っておれ。俺たちはこの島で食糧調達をせんといけんからな。」

「あ……それなら俺が倒した動物……。」

漸く自我を復活させた俺は今まで自分が殺してきた動物を保管している所に案内する事に。今までと云っても腐ったものは捨てている。衛生的に考えて3日前までのものしかないが。

「今はいつですか？」

「今か？天暦で言っと……。」

「あ、天暦は分からないので最近起こった事件とかで教えてください。」

「最近起こった事件……海賊王の処刑とかでいいのか？」

それは一番記憶に残っている。なのでそれがベストだ。

「はい。それはいつですか？」

「去年の出来事だ。あの時は……。」

センゴクが1人でぶつぶつと云い始めた所で俺も自分の世界に入る。ロジャーの処刑が原作22年前だから今年は原作21年前。俺の年齢は不明だが原作開始時は32・3だろう。

その歳になれば精神年齢は50近く。なんかおかしい。

まあそんな先の事を今考えても仕方ない。俺は流れからして海軍に入隊する事になるだろう。その事に対して異論はないが。オハラのパスターコールに関しては色々ある。しかし1年で原作を変えられるほどの力はずつけられないだろうし、政府に口出しできる立場にもなれない。

悔しいが、切り捨てるしかないのだ。せめて原作通りにロビンだけでも生き残れる手配をしたい。

そんな事を考えながら歩いていると、食糧庫に着いた。そこは川の上流でもあるので水分も確保できる。

「これは全てミナトが・・・？」

途中にも数々の動物達が倒れていたが、ここには外傷を付けずに殺したままの状態で保存されている獰猛な動物が居る。

10mを越えるサイヤライオンなど食糧になりそうにない動物は食糧庫の近く、食糧庫にはイノシシなどの食糧になるもの。それが無傷のまま保存されている。

いや、ライオンなどに限ってはここの食糧を荒らそうとしたから六王銃おうがんで殺したただけだが。

「はい、一応は。特にすることもなく鍛えてばかりだったので。」

俺の言葉を聞いてセンゴクの顔は青褪めていく。まあ10〜12歳の子供が大型の動物相手に戦っているのだから当然だろう。

それに俺には外傷が一切ない。セラフの火で一度火傷のあとが残りそうだったが、1週間ほどで焦げ跡も消えた。

「そうか。(ミナト・・・。見た所10歳くらいか。その小さな少年がここまでやるとは・・・。鍛えれば近い未来海軍を引っ張る存在になるだろう。ならば・・・。)」

セングクは暫く考え込んだ後口を開く。

「ミナト、海兵にならんか？行き場もないなら俺が直々に鍛えてやるが。」

俺はその言葉を待っていた。孤児扱いでセングクが引き取り、直々に鍛える。そうすれば昇進も楽になる。

まあセングクと共に生活しなければならぬかもしれないという点はデメリットだが。

それでも『否』という理由にはならない。

「はい！セングクさんの期待に添えるよう立派な海兵になります！」

俺の言葉に気をよくしたセングクは『ああ・・・いい！』とか言っていたが気にしないでおう。

セングクがそうなったのを見た部下は珍しいものを見る様な目で見ながら食糧と水を運んで行った。

「セングクさんも行きましようよ。」

全て運び終えたのを確認した俺はセングクの服の裾を引っ張って催促する。その姿にまたセングクは胸キュンで動けなくなった。

俺はそんなセングクを担いで軍艦まで運んだ。

拾い人（後書き）

感想・評価待ってます

敵船（前書き）

今回はミナト大爆発です！

敵船

俺とセラフはすることもなく甲板で修行していた。海兵たちは海賊船と出会った時の為に束の間の休息と云うものをしている。

センゴクも俺とセラフの修行を楽しそうに見ながらそうしている。因みに無人島は昨日去った。特に名残惜しいと云うこともなかったし、センゴク達も急いでいる様だったのだ。

「セラフ！嵐脚！」

俺がセラフに頼んで鎌鼬を発生させてもらう。9本の尾から9つの不規則な鎌鼬があちこちに飛ばされる。

俺はそれを剃そで移動しながら同威力の嵐脚で消滅させていく。同威力で且つ精確に当てないと船が傷付くのでかなり神経を使う。

「まだまだ無駄が多いが良い動きだ。これだったら昇進も早いだろう。」

センゴクの前ではもう既に何度も六式を見せているので驚かれない。最初こそ驚かれたが、俺の無人島での戦績を知っているので納得していた。

六式に関しては見せているが悪魔の実の能力に関しては見せていない。その内ばれるだろうが、それまでは言う必要もないだろうと思つて。

それから暫くセラフと修行して、昼頃だろうか。一海兵がセンゴクに追っていた海賊を発見した事を報告した。

俺は危ないから下がっていると云われたが、海兵になるならこのく

らいは経験しないとダメだろう。

俺は必死に説明するとセンゴクは溜め息を一つ吐いて渋々了解を出した。俺の実力を買つての事だろう。

そうして俺は戦場に出た。戦場は敵海賊船の上。初めこそ砲弾の撃ち合いだったが、今では軍艦が海賊船に寄つて乗り移っている。

相手の海賊の名前は“錬武”のヘイトス。懸賞金は1億3千万ベリ。センゴクが追い掛けているのだから高額 of 賞金首である事は覚悟していたが、まさかそんな奴だとは思っていなかった。

まあ出て来たからにはやるしかない。俺はモブを相手に六式を駆使して善戦していた。

大抵のやつは首裏を手刀で叩いて気絶させていく。それが無理な相手は何度か拳を交えて倒して行く。

セラフは俺の近くで俺が対応しきれない敵を倒して行ってくれた。

「ミナト！ “錬武” と闘つてみる！」

俺の戦闘ぶりを見たセンゴクが指示を出す。さっきまでの心配性なセンゴクは何処に言ったのかと思わせる指示。

俺だつて一戦交えてみたいとは思うが対人戦が初めてな俺としては不安がある。そして相手の実力は『1億3千万』と云う懸賞金が証明している。

流石に初戦でそんなのを相手に勝てるわけがない。・・・いや、負けもしないのは事実だが。

「俺も援護する！ 強い奴と戦つて自分の実力を知るのもいいことだ！ 戦績によつてはいきなり高い階級がつけられるぞ！」

その言葉を聞いて俺は“錬武”の許へと駆け寄つた。センゴクが援護してくれると云う心強さもあるが、矢張り『高い階級』と云うものに惹かれた。

勿論疾しい意味では無い。何年も掛けて自由な地位に昇り詰めるよ
り、手っ取り早く昇格して原作に関わりたいと思ったただけだ。

「セラフ！周りの雑魚よろしく！」

「コンッ！」

セラフに背中を任せて“錬武”にいきなり殴り掛かる。しかしそれ
は掌で受け止められる。

「やりますね・・・！！！」

「お前もな！！！」

俺は剃を使って一度距離を取る。

「指銃しがん！！！！」

そして右手の指先を鉄塊てつかいで硬くして“錬武”の頭を貫こうとする。
しかしそれは軽々と避けられて、そのしゃがんだ反動を利用して俺
の腹を右膝で蹴る。

しかし俺に痛みは無く、攻撃を喰らった場所は何もなくなっている。
簡単に説明するとその場所だけがガスとなった。

何故見えないか。それは『気体が視認できるか』と云うことだ。

「な！？」

「能力者か！？」

当然“錬武”の右膝には蹴った感覚がなく、その勢いで前のめりに

倒れ込みそうになる。しかし如何にか体勢を立て直す。

センゴクも驚いているが、今は如何でもいい。

その一瞬の崩れを見逃さずに俺は同様に右膝で蹴ろうとする。当然鉄塊を掛けた状態で。

しかしそれを“錬武”は右手で防ぐ。勿論蹴りの方が威力は強い。

しかし大人と子供の力の差だろう。簡単に防がれてしまった。

俺が悔しさを顔に出した瞬間、“錬武”は俺の右頬を左拳で捉える。しかし矢張りそこには何もなくなり、擦り抜ける。

まるで攻撃する時しか実体化しない様な、そんな感じ。しかし“錬武”はそんなことに怯まずに何度も俺を殴る。

そこら辺の精神力は流石だと思う。そして避けようと思っても避けきれない程のパンチを繰り出してくる実力も流石。偉大なる航路の^{グランドライン}過酷さを思い知らされる。

「チツ！当たれ！当たれ！」

もう何十回も殴られている。恐らく能力者では無ければ既に死んでいる。これ以上死ぬ気ももうない。それに普通じゃ勝てないことも分かった。

それならば・・・

^{オーバーヒート}
「過熱！！！」

俺が声を発したと同時に周囲に散漫した俺から出た水素が一気に過熱させらる。それは“錬武”が吸ったものも同様に。

「ぐ・・・あああああ！！！！！」

胸を押さえて“錬武”は苦しみ始める。次第に“錬武”の胸が溶けていき、ドス黒い液体が体内から流れ出して来る。

その光景から俺は気持ち悪くて目を背ける。そして異臭を漂わせるので鼻も押さえて。

しかしそれはセンゴクによって阻まれる。

「お前が断った命だ。最期まで見届ける。それがこいつへの手向けだ。そしてこれはお前が成長する為の材料だ。今まで人を殺した事がなかっただろうが、これからは殺す事なんてよくあることだ。慣れるとは言わん。」

センゴクはそう言って俺の顔を無理矢理“錬武”の方へと向ける。耳に当てていた手も外された。

見たくはなかったが、センゴクが言った事が正しいと思ったので確りと見た。

呼吸が出来ないまま未だに悶え続ける“錬武”。生きる為に必死なその姿は、俺には矢張り見るに堪えなかった。

そんな“錬武”は二つ名通りに鍛え上げられた武術を扱う天才だった。もし海賊でなければ海軍でも上位に入り込めただろう。そんな男の死を俺は目に焼き付けた。

* * *

「能力者だったのか？」

「はい。」

「何故云わなかった。」

「聞かれなかったのです。」

と、海軍本部のあるマリンプォードに戻る道中、俺はセンゴクから

詰問されていた。

聞いて分かる様に、悪魔の実のこと。本来なら船に乗せてもらった時に言うべきだったのだろう。

『聞かれなかった』と云う屁理屈の様な言い訳は言い返し用がない言い訳。だって本当に聞いて来なかったのだから。

まあ会ってから『能力者か？』と聞くのもおかしい話だが。

「ミナト……。これから本部で検査すれば分かった事だが、そう云うことは聞かなくても言ってくれ。俺だって心配はする。だからこれ以上隠し事はするな。分かったか？」

「はい……。」

センゴクの真剣な表情を見て俺も真剣に向き合って頷いた。今回の件に関しては俺も罪悪感があるので、頷かざるを得なかった。

「それともう隠し事は無いだろうな？」

「流石にもうしてませんよ。これ以上は何も持ってないですから。」

異世界から来たと云う事以外はもう何も隠していない。その事は言わずとも大丈夫な事……。いや、言ったら不味いことだ。

異世界から来た？そんなことが知れ渡れば格好の研究材料。体はこつちのものだが、知識などは前世から引き継ぎ。

それを利用して原爆や水爆などでも作られた日には堪ったものではない。だからそれだけは決して言う事を許されない。つい口を滑らせる可能性もあるが。

「それならいい。これ以上俺に心配掛けるな。」

セングクは溜め息を一つ吐いて俺の手を引いて船室に連れて行った。
その後の汗などをシャワーで落とし、その後に爆睡した。

敵船（後書き）

感想待ってます！

海軍本部（前書き）

海軍本部です。

海軍本部

マリンフォードにある海軍本部に着いた俺たちは指令室へと向かった。

マリンフォードと云うものは案外に広い島。海軍本部がかなり大きいのが原因ではある。

何せ中将1人の書齋に30畳以上も使う程だ。書齋に何故それだけの広さが要るのかと思うが、それは気にしてはいけなさとセンゴクに言われた。

センゴクも兼ねてから経費削減の為に少しでも無駄なスペースを無くそうとしている。この世界でも土地代は払わないといけないので当然の行動だ。

しかも無駄なスペースとは書齋に限らない。既に使われなくなった部屋は数知れず。どうも古い部屋は使わずに新しく建造するのだとか。

そんなことをしている暇があれば海賊を捕えろと云いたいが、今の俺がそんな事を言えば首が刎ねられてしまう。

センゴクとそんな事を話しながら指令室へと歩いて行った。道中で会った海兵にはちゃんと挨拶もした。

そんなこんなで指令室に着いた俺とセンゴク。センゴクはコンコンと2回ノックして返事を待つ。

『入れ〜。』

と気の抜けた声がかからするがセンゴクは顔色を変えずに入ってくる。俺もそれに連れられて中に入って行く。

「コング元帥、任務完了しました。」

「そうか。それで“錬武”は？」

「取り押さえるつもりでしたが・・・殺してしまいました。」

セングクの返答に溜め息を吐きながら漸くこっちを見る。そして俺を見て顔を顰める。

「・・・まあその子は後にしよう。それで殺した“錬武”は如何した？」

「既に死体処理班に渡してあります。」

実はここに来る前にそんな物騒な所に立ち寄って死体を引き渡した。その死体の傷に興味津々だったその人たちは検死し始めた。

そして全てが終わった後に全身の写真を取り、あるうことが首だけを切って写真に納めていた。

それには流石に声も上げられなかった。

セングクに聞くとところ『政府の死体の確認はあぁしないとダメなんだ。』らしい。

「そうか。で、船の破損状況は？」

「多少の傷はありますが支障はありません。」

大砲で穴が開けられたりと云った事は無かった。あるとすれば流れ弾が穴を開けたくらいだ。

「それで、船員クルーの状況は？」

「全員無事です。死者はいませんが多少大けがをした者はいます。」

「名は？」

「全員将校以下なので御教えする必要はないと思います。」

それから何度か質疑応答が繰り返された後、コングが漸く俺に目を移した。その目は何か愛らしいものを見る様な眼であった事を記述しておこう。

「その子は？」

「俺の養子です。」

「なに！？」「」

セングクの応答に俺とコングは目を見開いてセングクを見る。・・・
まあ今考えれば養子みたいなものだが。

「『なに！？』と云われましても事実です。」

「でも今この子も『なに！？』って可愛い声で言ったぞ！可愛い声で！」

コングの主張する所が少しずれているのに呆れながらも俺はその様子を傍観する事にした。

「それはきちんと言ってなかっただけです。それに俺が拾ってきたのでミナトは俺の子供です！」

「ま、待て！元帥命令じゃ！」

コングは職権を乱用し始めた。それはやっている事が天竜人と変わらない気がする。

「それはダメです！そんなことで使うならガープの行動の制御に使ってください！あいつには自覚が足りないから好き勝手に行動するんです！いつそその『元帥命令』と云う奴でガープを昇進させればいいじゃないですか！そうすれば“大将”と云う肩書きに行動が制御されます！」

センゴクの言っている事はご尤もだ。一番自由なのは中将。偉くなれば一番自由と云う訳ではない。

元帥になれば本部を離れることは許されないし、大将だつて大体の活動区域が新世界だ。よつて中将が最も自由に行動できる。そのことを知った上でガープは中将の座に居続けるのだ。

「そんな職権乱用は出来ん！」

「今自分でやろうとしました！」

「知らん！」

「・・・はあ。一つ報告に漏れがありました。」

「何だ？」

「“錬武”を殺したのがこの子だと云う事です。誰の力も借りず、自分の力だけで。」

セングクの言葉にコングは顔を青褪めさせる。それもそうだろう。未だ小さな子供が億越えを殺したのだ。しかも無傷で。

「それは本当か!？」

「はい。自然系ロキア悪魔の実・サンサンの実の能力者の太陽人間で六式使いのこのミナトが。自覚は無いようですが覇気も使っています。」

セングクの言葉にコングは言葉を無くした。それより俺が覇気を使っていた事にビックリだ。3ヶ月の間に自然と入手できたと考えればいい話か。

「それでミナトは海兵志望です。どこからやらせるべきでしょうか。」

「どこから、とは恐らく階級の事だろう。それ以外に特に思い当たらない。」

「六式使いで自然系の能力者。それに加えて覇気使い。申し分ないが・・・未だ子供だ。億越えを倒しておるからこれが大人だったら中佐や大佐、准将にも喰い込めるくらいだが・・・子供だからな。大尉か少佐くらいだな。」

やはり子供と云うのは大きい。いくら実力があるうが小さな子供について行くこうなどと思う人は少ないだろう。

上手くやれば准将か。いきなりそんな所まで行けたらどれほど幸せだろうか。少佐でも予想以上の階級だが。

と云うのも俺は軍学校に通わなければならぬと思っていた。何年も研修を経て、漸く一海兵として働ける。そんなものだと思っていた。

「そうですね。少佐が妥当ですかね。あまり高い階級を与えるのもミナトに良くない。それでいいか？」

センゴクは俺の方を見て同意を得ようとす。これから上司になる人にそんな事をされれば領かざるを得ない。そうして俺は頷いた。

「じゃあ少佐で決まりだな。部隊は・・・如何する？お前の所は適任ではないだろう。」

「確かに・・・。俺のところはもう空きがないですから。」

確かにセンゴクの所有する軍艦には大量の海兵が乗っていた。

「じゃあガープにでも任せるか？」

「それだけはダメです！あいつに子供の世話が出来るわけがない！」

「その言葉聞き捨てならんのだ！」

話がややこしくなりそうだ。そしてこの時からガープは指令室に住みついているのか。仮にも上司の部屋だと云うのに。

ガープは髪も黒く、まだまだ若かった。

何にせよセンゴクは同期？らしいから大丈夫にせしてもコングは明らかにな上司だ。

「ガープ！貴様勝手に入って来るな！」

そしてそれを何故かセンゴクが咎める。まるで『ここは自分の部屋

ですよ』とでも言っかのように。

「仕方ないじゃろう！わしだって悪口を言われれば出て来るわい！」
どんな地獄耳の持ち主なのだ。

「悪口では無い！事実だ！」

事実を言うのも悪口の一つだ。『ブスにブスと云って何が悪い！』
と云うのと同じ。明らかに言っている方が悪いのに、何故それに気
付かないのか。

「事実がなんじゃ！わしだって子供の1人くらい世話出来るわ！」

「ほう、ならやって見せる。」

ああ、馬鹿だよセンゴク。見事に口車に乗せられてるよ。そして何
故かコングはいじけてるし。それだけ精神的なダメージがあったの
だろう。特にセンゴクからの。

「子供の世話なんて簡単じゃ！確か・・・ミナトとか云ったな、行
くぞー！」

俺はガープに手を引かれて指令室から連れ出された、センゴクはそ
の直後に自分の失態に気付いたが時既に遅し。

ガープは俺に合う軍服と背中に正義と書かれたコートを探す為に倉
庫へと向かっていた。

その倉庫には大量の制服があり、サイズも様々だった。そこから俺
の体に合う服とコートを見つけた。

かくして、俺の海軍生活が始まったのであった。

海軍本部（後書き）

感想ください！

適当な人

「まだまだ甘いわ!!」

拝啓、名前も顔も思い出せない父上様。

今俺こと金髪ミナト君は大の大人に殴られ、吹っ飛ばされています。

「何を言っておるんじゃ!早く立て!!」

とうとう心まで読まれた。取り敢えず言われた通り立とう。

「よいしょ。」

「次もう一回じゃ!」

「は〜い。」

今俺はガープと修行をしています。俺の配属が決まったすぐ後に何やら任務らしく、今は軍艦の上。

ガープに修行をつけられているとはいえ俺も海軍本部少佐だ。部下だっている。・・・今はその部下もガープの部下の様なものだが。そんな部下たちはガープに書類仕事を丸投げされて船室で奮闘中。親父代りのセンゴクは本部で書類を纏めている。

因みに修行と云うのは六式の修行。全てにおいて荒削りだったらしく、只今鍛え直されている途中と云う訳。

それで今が鉄塊てつかいの修行で殴られていると云う訳。

この人は子供に対しても覇気を容赦なく使ってくるので本当に痛い。鉄塊しなくても痛みは変わらないと思うくらい。

一回試そうと思ったが本気で死にそうなので止めた。

「鉄塊!!」

「ふんぬらぶあ!!」

何その掛け声？本気で殴るの!？と思う様な声を上げて齒軋りをするガープの愛ある拳は俺の右脇腹を捉えて俺の体を再度吹っ飛ばした。

そこまではいい。・・・いや、よくは無いのだが、今はいい。

問題はそこからなのだ。何せ今俺は

「俺泳げませんけど!!」

海の上に居る。さっきまでも海の上に居ると云えばそうだが、あそこは飽く迄「船の上」だ。

現在その船を離れて正真正銘海の上に俺は居ます。

バシヤアアアンツ・・・!!!

遂に俺の体が海水に到達。これで俺の人生終わったよ。

そう思った時に誰かが助けてくれた。ガープじゃないことは確か。

いや、自分で落としておいて助けないとかどんだけですか？殺す気ですか？

そんな事を思いながら力の入らない体を引っ張られて船上に引き上げられた。

ガープは今度殴った瞬間に熱放出させて手でも溶かしてやろう。密かにそんな事を決意した。

「助けてくれてありがとうございます。危うく死ぬところでした。」

確実にガープよりいい人に礼を告げる。

「いえ、上司を補助するのも部下の仕事です。」

今の言い草からして俺の部下か。ガープの部下で階級が俺より下と云う可能性もあるが。直属の確率の方が低いか。少佐の部下なんて少ないものだ。

「お名前は？」

「私ですか？私はしがない一海兵です。だからお名前などお教え出来ません。」

「そうなんですか……。」

俺はそのしがない一海兵のことを変な人だと思いながらその場を離れた。そして俺を殺そうとした男のところへ向かう。

「ガープ中将！せめて助けにくらい来て下さいよ！」

「大丈夫じゃと思ったんじゃ！」

ガープの脳内はおかしいのだろう。能力者が海に浸かって大丈夫なわけがない。

「大丈夫なわけないでしょ！俺が能力者ってこと知ってた癖に！」

「そんなことは初耳じゃ！」

「じゃあなんで覇氣纏って攻撃してくるんですか！意味わかんねーです！」

「覇氣などでは無い！『愛』じゃ！」

もうガープと話したなくなってきた。反論した自分が馬鹿らしい。

「もういいです。修行再開しましょう・・・。」

話すことは無いが、生憎この人じゃないと修行にならない。この船には他に覇氣が使える人は少数しか居ない。

その少数の人の覇氣はガープほど制御しきれないので俺を攻撃する事が出来ない。

そう云う事でガープに修行をつけてもらっているわけだが、この人には手加減が出来ないのだ。

いや、しているにはしているのだろうがもう少しして欲しい。

「うわああああ！！！」

ふと周りを見てみるとセラフが容赦なく海兵相手に9本の尾から嵐脚きやくを繰り出していた。

そしてそれを見事に受けている海兵たちは苦い表情を浮かべて山積みみやになっっている。

一方のセラフは楽しそうに尻尾を振り回している。全く恐ろしい動物だ。

あれで火を吹くのだから更に恐い。実力的には俺よりセラフの方が上だ。それは俺がセラフに攻撃できないと云うところが原因ではあるが。

取り敢えず無惨にもやられている海兵たちに合掌してガープを見る。

「あのキツネはミナトより強いんじゃないか？」

そんな事を言いやがった。それは事実ではあるのだが、もの凄いムカつく。

俺が本気を出せばセラフくらい瞬殺だ。それこそ能力を使って。セラフにそんな事は出来ないが。

「セラフは特別ですよ。俺が今唯一攻撃できない相手ですから。」

「まあ興味ないが。」

自分で聞いておいてそれは無いだろうに。せめてもう少しだけいいから関心持とうよ。

と心の中で言っではみるが口には出さない。曲がりなりにも上司なんで。

「そう言えば俺任務の内容聞いてないんですけど。何処行くんですか？」

俺はガープの補佐を命じられたわけだが、任務の内容を聞いていない。ガープの補佐はもう1人大佐が居るのだが、その人はどちらかと云うと書類を丸投げされる人。その人の補佐をするのも俺の仕事だが。

でも俺はそれよりもガープの暇潰し序でに期待の新人として鍛えられる人。・・・つーか暇なら書類仕事もしたらどうかと思うが『有能な海兵に育てる為にわしは全力を尽くす！』と云って押しつけていた。

言葉通りに俺に修行をつけてくれている。手加減は出来ていないがいい修行にはなる。

しかし俺だって海兵であってガープの補佐でもある。修行ばかりで

はなく、自身に与えられた書類もある。

それが今回の任務中の海兵の動きの観察。1人1人がどのように動かか観察して動きを憶える、と云う意味でもコングからそんな事が言い渡された。

しかし実際は『ガープの観察』。大佐では見きれないところを俺が観察してそれを調書に纏める。

つまり俺の仕事は『ガープが任務中にふざけた事をしてないか』と云うことを報告するのだ。どれだけあの人が信用されていないかが分かる。

いや、戦闘面においては信頼されている。それこそ大将と同格に。しかしそれ以外は別。信用など一切ない。

一回の任務で軍艦を壊したり休暇中に大型帆船を壊したり。兎に角ダメなのだ。

「……ん？何かよからぬ事を言われた様な……。」

勘も人より優れている。流石は『野性』と云う言葉が最も似合う男だ。

……と、そんな事は如何でもいい。何処に行くのか聞かせてほしい。

「何処に行くんですか？」

本日2度目。1度目は完全に無視された。

中將が行くところなどは大体が限られているが、それでも知りたい。

「それは大佐にでも聞いておけ。」

汗ダラダラ流しながら口笛を鳴らすガープ。

普通自分に与えられた任務を忘れる人なんていますか？

と云いたくなるがそこは矢張り上司なので。言われた通り大佐に聞きに行きましたとも。

大佐は真面目なので『海賊の討伐だよ』と優しく教えてくれた。それで今回の海賊は実力的にはそうでもないが、兎に角人数が多いらしい。原作で言えばクリークの様な存在。

まあ彼は偉大なる航路グランドラインに入って直ぐに敗走する様な奴だったが、今回は偉大なる航路に何年も居座っている海賊らしい。

実力的にそうでもないと言うのは偉大なる航路、それも新世界にしたらと云う事。何千と居る中でも10人近くが賞金首らしい。

船長の名前は“艦隊”のドリス。そのままだ。艦船の数は数えきれなくらい多いらしい。

そんな海賊ではあるが、大佐曰く「あの人なら1人で4分の3は沈めるよ」らしい。それなら船が壊れて海の上で漂流なんてものは無いだろうから安心してその日は寝た。

適当な人(後書き)

感想・評価待ってます!!

鉛筆の焔（前書き）

今回の話は2つ名の為の話です

飴髪の焰

“艦隊”のドリース。二つ名通りに多くの艦船を駆使して戦う海賊。操舵手・指揮官としての実力は高く、70を越える艦船を自由自在に手足の様に動かす程。

そして船長兼指揮官兼操舵手と云う多くの事を一度に行える程視野が広い。その為ドリースが乗る艦船・・・軍艦と云うべきだろう。それには舵輪が船首近くに取り付けられている。

そんなドリースの懸賞金は『8千万ベリー』。この海賊のトータルバウンティは『5億2千万ベリー』。

それだけ聞けば恐ろしいが、実際は多くの人数がいてそれしかないと云った方がいい。

事実、“麦わら”の一味は10人足らずで7億50ベリーだ。“白ひげ”のところだつて本船に乗っているものだけで十数億と云う懸賞金が懸けられている。

そんな小物・・・とは言えないが中型海賊団を相手にするのは海軍本部も軍艦一隻だけで大丈夫だと判断した。

しかし3等兵や階級が低く実力がない者、ミナトの様に自然系悪魔ロギアの実際の能力者でない者、況してや能力者ですらない者にとっては恐ろしい相手だ。

いくらガープが戦闘に置いて優秀で、何十隻も敵船を沈めると云つても不安である事は変わらない。

70もの艦船からの砲撃を一齐に受ければ無事では済まないだろうから。特にミナトは爆発による炎で燃えるかもしれない。他の人は焼け爛れるかもしれない。

そんな事があるかもしれないのに、不安にならない方がおかしい。そしてガープの指揮する船には作戦と云うものがない。あるとすれば『ガープが遠くから囲まれる前に船を沈めて、ミナトが前線で戦う』くらいだ。それ以外の人は独自に考え、砲撃をしたりと云う感

じだ。

そんな事では勝てないと分かっているミナトと大佐はのいる部屋へと足を進める。本来ならガープのところで作戦会議するべきだろうが、先にも言った通り彼は考えようとしないのでその補佐である2人が考えなければならぬ。

「失礼します。」

コンコンと大佐の部屋の扉を2回叩いて中に入る。そして敬礼をする。

「固くならないでいいよ。それより・・・何か用かい？」

大佐に言われた通りに敬礼を止めて、大佐の許に歩み寄る。そして確認して椅子に座る許可を得る。

「ドリースと戦う時の作戦を練りたいと思ひまして。中將は考えがない様ですので。」

「ははは、そうだな。あの人はそう云うのが苦手だから。」

大佐は苦笑いを浮かべながら頬をポリポリと掻く。それに対して矢張り苦労されているのだな、と思ってしまう。

そんなことも知らずに大佐は話を続ける。

「でも作戦なんてものはガープ中將にもその配下にも必要はないんだ。中將も他のみんなも自分で考えて行動する、それが作戦みたいなものだから。それは勿論僕もね。」

矢張りこの船に乗る人はおかしい人ばかりだ。普通だと思っていた

大佐までもが作戦は要らないと云い始める。

しかし大佐の云っている事にも感じるところはある。碌に作戦を立てていないのに今まで幾つもの海賊を沈めて来た。それを考えればこの船の海兵にはそれが最も合っているのかもしれない。

無理に担当を決めて縛り付けるよりはやり易い形でやらせるほうがいつもの様に実力を発揮できる。

悔しいが実際にそれで優秀な戦績を残しているから仕方ない。今回は諦めるしかない。

今度自分の船が持てるようになった頃にはきちんと作戦を立てようと心に誓った。

「それだったら仕方ないですね……。俺も勝手にやらせていただきます。」

「そうするといい。でも怪我だけは……。つてしない体だったね。」

「ですね。ではこれで失礼します。」

そうして敬礼をして外に歩いて出た。そして戦闘に備えて寝た。

次の日の昼頃、“艦隊”のドリースの艦隊が泊まっている島を見つけた。ここに居ると云う報告を受けての任務だったのだが、ここに居ない可能性もあったのでラッキーだ。

ドリース達はこっちの気配に気付いていない様で、最初にガープが仕掛けた。

「特大鉄球！！」

艦船一隻の大きさを上回る巨大な鉄球を何処から出したのか知らないがそれを敵船に向かって投げる。すると停泊している敵艦船は一隻沈む。

「拳骨流星群！！！」

今度は軍艦に積まれた砲弾を幾つも投げしていく。相手はこれに気付いて応戦しようとするがガープの肩力は大砲の力より遙かに強い。よって敵船の攻撃は全くと云っていい程届いていない。

「ぶわっはっはっはっは！楽しいのう！！！」

笑いながら砲弾を投げるガープは恐かった。と云うよりバスターコールはこの人1人で大丈夫だと思ってしまう。

そんなガープは敵船を確実に沈めていき、既に使えそうな艦船はない。そして1000個も積まれていた砲弾が全部なくなってしまった。

それにより軍艦を島につける。表の海上では大火事になっているので、少しだけ回る様にして。

島に降りるとかなりの人数が倒れていた。何発か流れて島内に入っていたから仕方のない事だろう。

しかしそれはミナトにとつては不利になる事。敵が少ないのはいいが、森が燃えている。体に火が燃え移らない様なところでしか戦えない。

それはつまり海岸線や浜と云ったところだけ。仲間が戦うのを見て抜けて来た敵を倒す事しか出来ない……。

「全員海岸線で敵を待て！奴らの船は全て潰した！逃げるにはこの軍艦を奪うしかない！全力で守れ！」

そう思ったがガープの指示によってそれは無くなった。ガープはなんだかんだで人の事をよく理解している人だった。

ガープの言葉に補足をつけ加えるとすればここが尻の帯付近の偉大なる航路グランドラインなので泳いで逃げようと思っても海王類が出る可能性がある。るので不可能。

よって必然的に敵は『海軍の軍艦を奪う』か『命を落とす覚悟で泳ぐ』と云う選択肢しかなくなる。

どちらにしても死ぬ可能性はあるが、海で海王類と戦うより陸で一斉に攻撃を仕掛ければいくら海軍の英雄といえど勝てるのではない。か。そう云う結論に至った海賊たちは向かってきた。

「ミナト！わしはドリースを殺る！お前は他のやつらを頼む！」

云われた通りにミナトはガープの援護をする為に六式を駆使して確実に潰していく。セラフも楽しそうに尻尾を回して真空の刃を発生させている。

そうして敵を2人と1匹で確実に撃退していくと、ドリースが漸く出て来た。ガープはそれに向かって突っ込んでいく。

ミナトとセラフはその周りに居る賞金首と戦う事に。セラフに周りの雑魚を頼んでそいつと向き合う。

「俺は“鉄筋”のマイケル。自分を殺した人間の名前くらいは知っておきたいだろ？」

筋肉モリモリの褐色肌のボディビルダーのような男は勝手に名前を名乗り始める。しかしミナトは自分の名を教えるつもりはない。

と云うよりは自分にはまだ二つ名がつけられていない。名乗る名がないのだ。

「あ、そう。じゃあ憶えておくんでやりましょうか。・・・指銃しがつん！」

！」

ミナトは相手の懐に潜り込んで腹を貫こうとする。それに対してマイケルは一切動こうとしない。それを不思議に思いながらも鉄塊てっかいで硬くなり、銃ピストルをも凌駕するほどの速さで突きを繰り出す。

「な!?!」

しかしそれはマイケルの腹を貫くことは無かった。確実に捉えたが、相手の筋肉によって阻まれたのだ。

流石は“鉄筋”と云う事だけはある。筋肉を硬くして鉄塊に近い状態にしたと云う訳だ。

そういうことならこっちにだって戦い方がある。前世からの記憶の引き継ぎは伊達じゃない。

「両指銃!?!」

そう思ってマイケルの両脇を指銃で突く。するとマイケルの脇には穴が開き、両腕が使い物にならなくなる。

穴の開いた脇からどす黒い血が流れ出して、周りには異臭が立ち込める。

それが臭くて鼻を片手で押さえて戦う事に。

説明すると脇の筋肉は鍛えようがないのだ。それに脇は他よりも脂肪が少なく、守るものが少ない。そして肩の関節に繋がっていて、筋もある。攻撃するにはもってこいの場所だ。

関節を外すことも出来れば、筋を断ち切ることも出来る。

まあ欠点としては相手の脇が臭かったら自分の指も臭くなってしまつと云うものがある。

「ぐおおおおお!?!?!」

雄叫びを上げたマイケルは蹴撃を見舞ってくる。それを避けずに喰らって、周囲に水素を充満させる。その事にマイケルは驚愕の表情を浮かべる。まあ蹴ったところが消えて無くなれば当然だが。

「これで終わりにしてあげます!!」

そう言つて水素を更に充満させていく。そしてその水素を全てマイケルの皮膚に執着させる。

プロミネンス
「紅炎!!」

ミナトの言葉と同時にマイケルの体が燃え始め、一瞬で溶けて消えてなくなる。そこには血ですら残らなかった。それを確認してガープの方を見ると、既に終わっていた様でこつちを見て驚いていた。

「お前……」

驚くのも無理はないだろう。人が一瞬にして消えて無くなったのだから。そして周りには何の被害も出ていない。

しかしこれは意味無くやったものではない。人が死ぬのを如何したら見ないで済むか？そう考えた結果がこれだ。これでも多少は心が痛むが、それでも殺しに慣れるまではこの方法がベストだと踏んだ。周りに被害が出ていないのは自分から出した水素しか燃える事は無く、熱を持たないので周りには影響を及ぼさないのだ。

「未だ慣れないんですよ……殺すのは。だからせめて見ない様にしたいんです。」

ガープは不満そうな顔を浮かべる。

「今回は仕方ない。しかしそれはあまり使っな。証拠も無くなるからな。それにお前にも悪い。・・・分かったか？」

そのガープの言葉に頷いて、そのまま軍艦へと戻った。その後一応電伝虫でガープが本部に連絡して、帰省を命じられた。

そして本部に帰って付けられた二つ名・・・

海軍本部少佐“しほつ 飴髪ほのおの焰”
ミナト

そしてもう一つ、熱・炎を自在に操る様が帝王の様に見えたことからつけられた通り名・・・

えんてい
焰帝

後に世界を照らす者の2つの呼び名が今日生まれた・・・。

鉛筆の焔（後書き）

感想・評価待ってます！

桃色の甘えんぼ（前書き）

今回はヒロイン??的な人が出てきます。

桃色の甘えんぼ

「それで、ガープは真面目にやっていたか？」

二つ名がガープによって決められて、ガープが任務の報告を終えた後に俺はコングによって呼び止められた。序でに大佐も。

呼び止められた理由はコングの言葉通り、ガープの任務中の行動について。

一応言っておくが、“艦隊”のドリースが船長を務める海賊団を仕留めるだけが任務では無い。そこに行く道中、帰路も任務の内だ。これを聞くと小学校の頃の遠足を思い出す。『家に帰るまでが遠足よ!』・・・よく言われたものだった。

・・・と、今はそんな事はどうでもいいか。ガープの報告をしなれば。

「道中は自分に修行を付けてくれていました!・・・が。」

俺は敬礼の姿勢を崩さずに落胆した様な表情になる。それを見たコングと大佐が不思議な顔をする。

「が？」

それを代表してコングが俺に聞いて来る。

「・・・ですが自分を船の外まで殴り飛ばし、海に落ちたのにも関わらず助けてくれませんでした!その拳撃能力者とは知らなかったと、言い訳を・・・。」

因みの俺がここまでガープの事を悪く言うのに特に訳があるわけではない。ただここにセンゴクもいるからつい口を衝いて出て来るだけだ。

「はあ……。あいつは……。」

センゴクとコングが見事にシンクロして溜め息を吐く。その表情からは呆れが7割だが、3割憤怒の表情も混じっている。何故かと云うとセンゴクとコングは俺を溺愛しているから。久し振りに俺を見た2人は喧嘩しながら抱きつこうとして来た。

矢張りこの海軍という組織には変人が集うのだろう。常識人だと思っていたセンゴクまでもその有様だったので驚いた。

これからは知識人の許に配属されたい。今日にでも配属を変えてもらえる様に頼んでみるか。最も常識知らずな男の配下は嫌……。ではなかったが。

実際ガープの配属の部下は楽しい。他のみんなも元気が良くて、自由。それなのに統率も取れている。……まあもう暫くはこの配属でもいいか。

何か問題が起きた時にでも変えてもらえばいいか。

「それで……。他には？」

俺が嫌だと思ったのは結局それくらいだったので、俺は首を横に振る。するとコングは大佐の方を見る。

「いつもの様に書類仕事をしていませんでした。それと今回はもう幾つか……。」

「……はあ。」

センゴクとコングはまたも溜め息を吐く。俺には思い当たる節がないから大佐が俺と書類仕事を交代した時の事だろう。

因みに俺はこの世界に来て英語に似た言葉がペラペラになった。以前の様に漢字を使うこともないから本当に楽だ。

それに引き継いだ知識によって敬語の使い方も知っているので書類仕事は向いている。

「1つ目は夜に起きた事なんです、中将が何を思ったのか突然海に飛び込んで。それに気付いた見張り番は急いで船を停めたんですが、中将は2時間近く泳いでいて進行が遅れました。」

多分俺が寝ている時に起こった事なのだろう。全く記憶にない。

それよりもあの人は何をしているんだ。夜の海に目的もなしに飛び込んで、しかもその後2時間も泳ぐとは。

本当に頭が悪いのだろう。態々任務を遅らす理由なんてないのに。その事に対してもセンゴクとコングの両人は溜め息を吐く。もう言葉も出ないと云った感じた。

「それと2つ目ですね。中将は任務内容を途中で忘れていました。」

それは俺も知っている。今思えばそんなこともあった。

しかし海に落とされた記憶が鮮明に残っていてその事など一切覚えていなかった。

これもいつもの事なのだろうか、センゴクとコングは溜め息を吐くのすら止めてしまった。

「それと3つ目です。任務報告の中に誤りがありました船の破損状況について。報告では無傷と仰いましたが実際は所々破損しています。・・・これは戦闘でついた傷では無く、中将がつけた傷です。」

俺の知らないところでそんな事があったのか。しかし船全体を回って見たけど傷が付いている様には見えなかったが。

「これは側面についた傷です。泳いでいる時に馬鹿をやって穴を開けたみたいです。」

本当に馬鹿つだたんだ。それより部下にも馬鹿って呼ばれてるよ。何してんだあの中年は。

「それで最後か？」

「はい・・・恐らく。」

恐らくと云う所がまた恐い。後からまだまだ思い出しては報告するのだろう。

矢張りそれに対してセンゴクとコングは溜め息を吐く。この2人は苦労人なのだろう。

「それでは失礼します!!」「」

「ミナトは残れ。」

「・・・はい!」

俺と大佐は出ていこうとするが何故か俺だけ止められる。任務外報告も終わったと云うのに何かあるのか？

まあ呼び止めたのだから何かあるのだろうと思って再度コングの机の前まで歩みを進める。

「まあ座りなさい。」

そう促されて俺は近くにあったソファに腰掛ける。するとコングとセングクも向かいのソファに座って、こっちをまじまじと見ている。おっさん方から見つめられるのは気持ち悪いが上司なので目を背ける訳にもいかず、2人を交互に見る。その度に目が合って少し気分が落ちる。

「なんですか？」

俺は堪えられなくなって口を開く。しかし2人は依然俺を見詰めたまま。・・・いや、もう睨んでると云っていい程の眼光を俺に向けて来る。

そんな状態が10分ほど続いて、2人は同時に俺を見るのをやめた。その10分は一生より長く感じた。

「どっちでした？」

「私だろう。」

「いや、俺ですよ。」

「いいや、私だ。」

目を離れたかと思えば2人は訳の分からない会話を始める。本当におかしな人たちだ。

元々おかしいのか。それともガープに対するストレスが溜まって、それを発散できずにいる苦勞が祟ったためにおかしくなってるだけなのか。それは2人にしか分からない。

「ミナトは私の方を長く見ていた！」

「これだけは譲れません！ミナトは確実に俺の方を見てました！」

漸く行動の意図と口論の内容が分かった。別にどちらを見ていたと云うのは無いが、それが何だと云うのだ？

まさかこれで俺がどちらの養子になるのか決めるとかでは？・・・いや、それは無い。いくらこの2人でもそんな事は・・・

「ミナトは私の方を見ていたから私の養子だ！！」

そんなことあったみたい。俺は少々2人を見縊っていた。

それよりも廊下から多くの足音が聞こえて来るのは気のせいだろうか？・・・いや、気のせいでは無かった。

『元帥！ミナトは俺（僕）（私）（わし）が預かります！！』

バタンツ、と指令室の扉を乱暴に開けて多くの人達が入って来る。

中将でありながら大参謀のつる。その他中将のボルサリーノ、オニグモ、ドーベルマン、モモンガなど多数。そして他にも准将クラスや少将クラスの人間が多数。

恐らく・・・いや、確実に指令室には入りきれない程の人数が雪崩の様に流れ込んでくる。こんなにも俺を溺愛している人間が居るとは思わなかった。

恐らく家に帰っても癒しがない人達ばかりなのだろう。俺は何処に行っても同じような扱いしか受けられないだろう。

そう思つては見るものの矢張り希望は絶やしたくない。出来る限りおっさんじゃない人を探す。

そこで何人が候補が出て来た。先ずは拾ってくれた命の恩人であるセンゴク。その次に家には多くの本がありそうなる。その他は美人で優しそうな人。後の3大将の中で唯一来ているボルサリーノで

もいかなと思ったりもする。

まあ仮にも親となる人だ。自慢できるような人物がいい。

・・・とは言ってみるがここに居るのは全員将官クラス。誰でも自慢にはなる。

「少し静かにしろ！ここは正当に私が決め・・・ません。ミナトに全てを託します。」

コングの声で静かになるが、後半はそこにいる人物全員から殺気をあてられて全ての選択権を俺に託した。

いくら元帥と云えど大人数の将官から殺気をあてられればそうなるだろう。

全て俺に任してくれたのはラッキーだ。しかしここで誰かを選べば違う人にはぶられると云う可能性もある。・・・子供にそんなことする人は居ないだろうが。

しかし決め難い。恩があるセンゴクが一番いいのだろうが、出来れば優しくて美人がいい。俺の栄えある未来の為に。・・・いや、そう考えればセンゴクの許がベストなのだが。

大体決めると云うのがおかしい。最初はラッキーと思っただが。

何で態々上司の恨みを買わないといけないんだ。これから出世街道まっしぐらな俺が。

「え〜と・・・じゃんけんで。」

自分は選ばれないだろうと思っていた人は歓喜の声を上げ、逆にセンゴクやコングなどは落胆していた。これなら平等だろうし、人の恨みも買わないで済む。我ながらいい案だ。

そんなこんなでじゃんけんが行われた。何故か『ミナト争奪！海軍本部じゃんけん大会！』勝者には永遠の至福が与えられる』と云う名前付きで。タイトルはいいとしてサブタイトルの意味が分から

ん。その内自立するぞ？俺は。
じゃんけんは俺に勝てた者だけが残り、最後まで勝ち残った者が俺の親代わりと云う事になった。
一番最初にコングとセンゴクが負けたのに反則をしようとしたりと云った事があつたが、順調に進んでいつて今は残り3人。大参謀つるとボルサリーノと知らない人だけど超絶美人で優しそうな桃色髪の人。

「私は負けないよ。」

「わっしだつて負けられないよお。」

「私は勝ちます！」

「「うう……。私（俺）のミナトが……。」」

先程云つた順番で意気込む3人を余所にコングとセンゴクがorzとなつて悔し涙を飲んでいた。

「じゃんけん……。」

俺はそんな2人を余所に大きく手を掲げて叫ぶ。そして……

「ポン！」

と、グーを出す。因みにグー チョキ パーの順で出している。これに気付いて居れば絶対に負けない。
そして3人が出したのは

「負けた……。」

「あいこ……。」

「やりました！勝ちました！」

つるがチヨキ、ボルサリーノがグー、そして桃色美人がパー。よつて桃色美人の勝ち。

そして親が決まった俺はその桃色美人の胸へとダイブする。

「おかしさん！」

「ミナト！」

2人で熱い抱擁を交わした後、2人で見つめあう。そして悔し涙を飲む人が2人増えた指令室を後にした。

海軍本部を出てマリンフォードの住宅街。そこを新しい母と共に歩いている。住宅街とは言ってもあるのは大きな一軒家ばかり。因みに道中に自己紹介は済ませた。彼女の名前はラン。歳は29らしい。そして階級は准将。29にしてはかなり高位だ。聞いたところでは能力者でもないらしい。

「そう言えばね、私にはあなたと同年くらいの娘が居るのよ。」

はい？なんですと？それはあっちゃならん事ではないのですか？

健全な男子と女子……10〜12歳くらいなのは置いておいて……

・が1つ屋根の下と云うのはダメだろうに。俺の理性が保てないと思う。

「それでその娘がね……ってもう着いたわね。」

そこで見たのは普通より大きな2階建ての一軒家。見るからに金持ち……と云う訳でもないのですんな感じがいい。

俺は案内されて玄関に到達。

「帰ったわよー!!」

母さん……ランがそう言つとパタパタと可愛らしい足音を立てて2階から俺と同年代の可愛らしい少女が降りて来た。

その少女は母親同様に桃色髪で、可愛らしく、優しそうで、でも確りとした感じだった。そして何処かで見えた事がある様な顔。しかし思い出せない。

その少女は俺を見た瞬間に目を丸くし、キョトンとする。その姿が小動物の様で可愛らしい。

「ほら、挨拶しなさい。」

ランはキョトンとするその少女を促す。すると少女は我に返って頭を下げる。

「名前はヒナ（・・）。よろしくね?」

頭を上げてそう云った時俺は頭の上に豆電球が浮かんだ。何処かで見えた事のある桃色髪だと思っていたら後の海軍本部大佐の“黒檻”のヒナだ。

こんなところで会えるとは思ってもいなかった。そして俺は心の中でランに感謝しまくった。『じゃんけんの法則に気付いてくれてありがとう!』と。

「俺の名前はミナト。こっちこそよろしく。」

俺が手を差し出すとヒナは頭を傾げた。ランに目を移すがランも同様に。

「それ・・・なに？」

「握手・・・だけど？」

「「握手？」」

ここで俺は理解した。『この世界には握手と云う概念がないのだ』と。

翌々考えてみれば言葉が日本語でない時点で握手と云う概念がないのは普通だろう。基本の挨拶は『ハグ』なのだから。

イツツ、ジエネレーションギャップ！・・・ではなく文化の違い・・・カルチャーショック！？・・・よく分からないからいいや。

如何であれどのようにして挨拶をするのか聞かなければ。勝手に抱き付いて不審者扱いと云うのも嫌だ。

「えと・・・如何やって挨拶するの？」

「知らないの・・・？変なの。こっち来て？」

頭に疑問符を浮かべている俺をヒナは呼び寄せて手を取る。『・・・なんだ、やっぱ握手じゃねえか。』
『そう思っている』

ちゅっ

俺の右頬に柔らかく、人肌の温度のものが優しく触れる。・・・まあヒナの唇であつたわけだが。

「なななな・・・！！！」

俺は珍しく取り乱してしまった。今の俺の顔はさぞ紅くなっているだろう。それこそ茹で蛸の様に。

「ふふふ、可愛いね。」

ヒナはそんな俺の腕を掴んで・・・俗に云う腕を組んだ状態だ・・・リビングへと引っ張って行った。

「ヒナったら・・・ミナトにご執心ね。」

ランはそんなヒナを見て優しく微笑んでいた。

俺はそのままりビングに連れて行かれて現在ソファに座らされている。勿論隣にはヒナが居る。

近くで見ると矢張り可愛い。ピンク色の背中 of 辺りまで伸びた髪もサラサラで、目も大きく、唇もほんのり紅くて薄い。所謂『美人』に属する顔立ち。

そんな女性にキスされた俺は呆けていた。そして右頬を少しだけ擦る。

この自分の柔らかい頬（自分で云うのもあれだが本当の事）にヒナのあの唇が触れた

そう思っただけニヤけてしまう。

「そんなに嬉しかったの？そうだったらヒナ感激。」

この頃からあの喋り方は変わらないのだな、などと思いながら少し顔を紅くしてしまう。だってヒナの顔が目の前にあるから。俺が少し顔を前に出せばキス出来るくらいの距離。

「まあ・・・うん。でも誰ともああいいうことしてるんでしょ？」

そうだ。俺だけが特別では無い。挨拶として交わされたものならば他の人ともしている筈なのだ。その事に気付いて少し落胆する。

「あんなこと恥ずかしくて出来ないよ・・・。ヒナ、恥ずかしい。」

なんで今同じ事を2度言った？そして語尾は漢字2文字で括るのは？と云う質問はヒナが未だ子供だからと云う理由で片付けよう。それよりも今はヒナの言葉。『恥ずかしくて出来ない』・・・じゃあ何故俺にしたのか。

俺にしても恥ずかしくない。俺は男として見られていない。そう解釈するのが自然だ。

「じゃあなんで俺にしたの？」

髪の色と同じ色に頬を染めるヒナに俺は聞いてみる。自分の中で考えても結局は人の考えなど分からない。それなら聞くべきなのだ。

「う・・・ん。ミナト君ならしいいかな？って思った・・・の。恥ずかしかつたけど・・・ミナト君・・・カツコイイから・・・。」

途切れ途切れ話すヒナの言葉を聞いて俺は知らず知らずのうちに「ヤニヤしていた。しかし決して俺はロリコンなどでは無い。容れ物からだ」

の所為で気持ちが子供になっているのだ。

「あら、ミナト。あなたもヒナにデレデレかしら？」

そんな顔をランに見られて俺は直ぐにヒナから目を逸らす。するとランに笑われた。それが更に俺を恥ずかしくさせる。

「お、俺の部屋って何処？」

こういうときは一人で部屋に籠るのが一番。そう考えて俺はランに部屋の場所を聞く。

「ヒナ、案内してあげて。．．．あなたの部屋に。」

俺の人生は終わった。ひとつ屋根の下なら未だいい。．．．いや、良くは無いが。しかし同じ部屋は流石に不味い。

『これだけ広いのに何故同じ部屋なのだ。』それをランに説明するが『埃被ってる部屋ばかりだから』と云われて結局ヒナの部屋が俺の部屋になる事に。

「はあ．．．。」

「同じ部屋．．．いや？ヒナ、ショック。」

俺が嫌そうな顔をしていたのを見てヒナが泣きそうな表情になる。そんな表情にも萌え！．．．じゃねえ！女を泣かせるのは俺の流儀に反する。

「いや．．．嬉しいよ！これからもずっとヒナと一緒にだから！」

「・・・ホント？」

「ホントホント！」

「・・・良かった。ヒナ感激。」

大人の対応をした俺に拍手。今俺の心の中では拍手喝采が起こっている。それと共に滝の様に涙を流しているが。

「・・・あ、挨拶。」

「挨拶？」

「ミナト君にしてもらってない。」

そうだった。ヒナが一方的にした後俺を引っ張ってリビングまで行ったから俺はしていない。

「しないと・・・ダメ？」

俺の言葉に顔を紅くしながら無言で頷く。顔を紅くして喋れなくなるくらいならして欲しいなんて言わないでいいだろうに。・・・と、そんな事を言えば全国の内気な女子の反感を買ってしまう。

「じゃあいくよ・・・。」

俺も顔を紅くしながらヒナの頬に唇を落とす。その後互いに向き合っ
つて更に顔を紅くする。

そしてそこに沈黙が訪れた。この場面でこの沈黙。知らず知らずの
うちに互いの顔は近付いていき・・・

「ヒナ！ミナト！御飯よ！」

そう上手くいかないのが現実。ランの声に2人の体が一瞬ピクリと跳ねて目を開く。そして今自分たちがしようとした事がどれだけ恥ずかしいことが気付いて顔を背ける。

「下・・・降りようか。」

ヒナの部屋は2階。俺は小動物の様なヒナの手を引いて階段を下りてダイニングへと向かった。

「あら、仲良しさんね。もう手を繋ぐ仲になったのかしら。」

俺はこんなお母さん嫌いだ。直ぐ人の事を弄って・・・でもそれはそれで楽しいからいいか。そう思って互いに手を握り合ったまま席に着く。

そして談笑しながら夕食を食べ始める。その時は流石に手を離れた。

そして夕食を食べ終えた後、相変わらずヒナは俺の腕にしがみ付いたまま離れようとしなない。

「そろそろお風呂入りなさい。」

ランは俺とヒナの両方を見ながらビールを飲む。つまりそれは・・・

「もちろん一緒にね。」

そう云うことだ。しかし流石にそれは不味い。ヒナはもう11歳だ。

胸だつて膨らんで来ていれば、羞恥心だつてある。それは俺も同様だ。俺の場合は羞恥心と云うより理性を保てるかどうかの問題だが、漫画や小説では一緒にお風呂、なんて偶にあるが全て理性を抑え込んでいる。実際そんな馬鹿な話があるわけがない。

1人の男と1人の女が狭い部屋で2人きり。しかも裸で密室。そんな状況でよく理性を抑え込んだものだ。褒めてやりたいよ。

まあ生憎俺にはそんな自信は無い。よつて一緒に風呂には入らない。

「・・・はあ。なんでいつもこうなるんだ。」

「何か言つた？」

「ううん、何でもない・・・。」

入らないつもりだつたさ！でもヒナがまた泣きそうな顔するから。そんなことをされたら同意をせざるを得ない。

今更だけど『何故あなたはじゃんけんの法則に気付いた！』と云つてやりたいよ、ランに。いや本当に。

そして既に脱衣場まで来てしまった俺たち。嬉しそうなヒナに嬉しそうなふりをする俺。傍から見ればラブラブカップルだろうが心の中は全然違う。俺の心は曇天だ。

そんな俺の心を知らずにヒナは恥ずかしそうに服を脱いで行く。そんな姿に萌え・・・じゃねえ！何回言えばいいんだ俺！流石にそんなことしたら理性を抑えきれませんから真面目にして、俺！

そんなこんなでお互い下着姿に・・・いや、なんでこうなったの？とか聞かないで。そんなことは俺が知りたいよ・・・。

結局そのまま後ろを向いて服を脱ぎ、タオルを巻いて2人で入る。

・・・

・
・
・
・

そう云う事でお風呂に入った後俺とヒナは部屋に戻って寝る事に。因みに俺は寝巻がなかったのでヒナのやつを借りた。サイズは少し小さかったが、ランに笑いながら『似合ってる』と云われてやめようとした。

だってランは確実に俺の事を馬鹿にしていた。しかしヒナの『可愛い』発言が後押しとなり着てしまった。自分が女に弱い事を改めて実感した一件だった。

そして今は新たな問題に直面した。それは『俺が何処で寝るべきか』と云う事だ。ヒナの部屋には当然だがベッドは1つしかない。

そしてランはと云うと「急だったから布団干してないの」と楽しそうに意地悪な笑みを浮かべて俺をあしらった。

そうなれば俺には地べたで寝るかヒナのベッドで寝るかの2つの選択肢しかない。

「俺は床で寝るから……。」

俺にはこれ以上理性を保つ自信がない。一緒に風呂に入った時点で限界寸前だったのに一緒に寝ることなど出来るわけがない。出来たら俺は世界一理性が強い男としてはダメな男だ。

「え……。ヒナ寂しい。」

……そう云う事で結局一緒に寝る事に。そうして2人一緒に布団に入り、横になる。そしてヒナが俺に左腕に抱きついて眠り始めた。『よくこんなに直ぐ眠れるな。』とか思うがそこは気にしない方向

で。取り敢えず俺も寝ようと目を瞑る。

しかし視覚を使わないので他の感覚が研ぎ澄まされる。ヒナの寝息が首に触れるのと胸の柔らかい感触が腕に伝わることを伝える『触覚』。ヒナの寝息の音を聞く『聴覚』。そしてヒナの髪から漂うシヤンプーの匂いを伝える『嗅覚』。それらが異常な程に伝わってくる。

そんな中で俺は寝た。

「ズズズばズズえばほへねれるわけねえだろ《！！！！》」

と服を噛んで叫んで眠れなかったのは別の話。

桃色の甘えんぼ（後書き）

ヒロインはまだ未定ですね。

誰がいいか決めかねているので・・・。

それでは感想・評価お待ちしております!!

能力開発（前書き）

今回で能力を明かそうと思ったんですが出来ませんでした。

申し訳ありません・・・。

そして途中から何を書いているかわからなくなったという・・・す
いません

能力開発

次の日、俺はヒナとランに目の下の隈を心配された。しかしランは直ぐにどういう経緯でそうなったか分かった様で忍び笑いをしていった。・・・俺が気付いた時点で忍べていない訳だが。

そんな事はさて置き今日も仕事があるので本部にランと一緒に向かっている。

海軍本部に所属しているからと云っていつも任務で出ていくわけではない。本部の書齋で一日中書類と向き合うなんて事はよくある。どちらかと云えば任務が入る事の方が少ない。

そんな海兵の仕事を今日はしなくていいらしい。書類仕事は無い、しかし違う仕事・・・と云うよりは検査と開発が今日行われるようだった。

本来ならそう云う事は入隊した時と毎年行われる身体測定の様なもの時にやる事なのだが、俺は入隊早々任務が入ってしまったので出来なかった。なので今日、と云うことだ。

検査と云うのはそのままの意味。身体測定、身体力テストなどの日々変わるものを定期的に行って書庫バンクに書き換える為に行われる。

開発と云うのは能力者限定に与えられたもの。その能力がどのようなものかなど、様々な事を調べ上げる。

そして今は本部に着いて動きやすい服装に着替えて演習場に居る。

ここの演習場は広くて、今は誰も使っていないのでテストするのに持って来いだ。この時は知らなかったが貸し切っていたらしい。

そんな中でまず最初に行われたのが100m走。因みに使える手段は自由に使っていいらしい。なので体重をほぼ零そろにして剃そで100m一気に駆け抜けた。

記録は『0、14秒』だ。“黄猿”ことボルサリーノは勿論『0、

00秒（所謂測定不能）らしい。俺はその次に速いらしい。
そして次は垂直飛び。これは普通に測定不能だった。月歩げっぽうを使わずともそうだった。

その次がハンドボール投げ。これも勿論測定不能。と云うよりこれに関しては殆どの人が測定不能になるらしい。

この演習場は最長のところで400mあるのだが、ガープは見えなくなる程飛ばして、誰かが任務の時に近くの島で発見したと云う事件があったとか。

そんなこんなで他にも色々をやったわけだが、基本的に殆どが測定不能だった。なんかもうやる意味がなかった気がする。

そして一通り終えた俺は昼休みと云う事で昼飯を食べて開発に移った。

「え〜と、これから能力の開発を行いますが無か質問は？」

「ありません。」

科学班の1人がガラス越しに俺に訊ねて来る。そして俺の周りには耐熱ガラスがある。

「じゃあ始めて下さい。」

そう云われて俺は自分の体から水素を作り出してガラスに張り付け、熱を一気に上げた。これはどれだけの熱を一気に放出できるか、と云うものらしい。

これをした“赤犬”ことサカズキはいとも簡単に耐熱ガラスを溶かしたらしい。ならば俺は『溶かす』のではなく『蒸発させて消す』まで。

便利な事にサカズキや俺の能力は周囲に影響を及ぼさない。サカズ

キの場合はマグマだけが高熱で、近寄っても熱くは無い。その代わり触れたら別。その要領で俺は水素だけが高熱になる。しかし自分が作りだした水素にしか効果は無い。

「1万2千……過熱!!」
オーバーヒート

俺はサカズキの10倍……マグマの温度1200度の10倍の12000度まで上げて耐熱ガラスを消し去った。

『す……すごい……!!!!』

それは流石に驚かれてしまったが、実際はもう少し温度は上げられる。

科学班が研究に移りだしたところでまた別の科学班に呼ばれて俺は違う場所へと移動した。

「あ、お母さん。」

その途中で俺はランと会った。何やら大量の書類を持っている。

「あ、ミナト。開発頑張りなさいよ。これで昇進出来たらお母さんが……いえ、ヒナが何かしてくれると思うわ。」

そう云われて何を想像したかは云わないが俺の顔は紅くなった。

「べ、別にそんなのいいもん!」

「あら、ヒナが聞いたら悲しむわ。」

「……。」

矢張りランは俺の痛いところを突いて来る。だから取り敢えずその場を逃げるように去った。

そして違う研究室に移った俺は何をするかの説明を受けた。

言われた事を纏めると『発火能力の開発』だ。どの程度の範囲をどの程度燃やせるか、と云う風に調べるらしい。

是非とも全力を出してくれ、と云う事なので室内では出来ない旨を説明。すると荒れ地に連れて行かれた。

広さは十分。水素が酸素と結合する前に出来るだけ濃く広げる。そして

フロミネンス
「紅炎!!!」

俺を中心として半径100m範囲が燃え盛る。水素は軽いので上空は1キロ程まで炎が立ち上った。これが二つ名の所以。

『銜色の焰が上空に立ち上る様子がまるで髪が逆立つ様だったから』と云うもの。まあ『ミナトの髪が銜色だから』と云う理由もあったが。

兎に角それをやった時は又もや驚かれてしまった。そんなこんなで開発が終わるかと思えば今度は『水素を10秒でどれだけ生成できるか』と云う開発らしい。

それも一応本気でやってあげた。

そうして俺の1日は終えて、漸く家に帰る事が出来る。そう思って帰る準備を整える為に更衣室へ向かう途中にセンゴクと会った。

何処か気まずいのは仕方のない事だろう。しかし上司なので路を開けて敬礼をする。

「楽にしていぞ。ミナト、開発の方はどうだった？」

センゴクに言われて敬礼をやめて足を肩幅程に開く。俺は『楽しんで』と云われてその場に寝転がる程非常識では無い。

「ありがとうございます。開発の方は全てにおいて驚かれました。如何やら予想以上だったようで、コング元帥にも今日中に報告されると思っています。」

「そうk『ガープ中将の配属のミナト少佐、ミナト少佐。至急指令室まで御越しく下さい。』・・・俺も共に行こう。」

センゴクが口を開いて直ぐ後に放送が掛かり、俺に呼び出しが掛かる。ジャージ姿では悪いので軍服に着替えてセンゴクと共に指令室に向かった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「明日からお前は海軍本部大佐だ。」

指令室に着くなりいきなりそんな事を言われた。俺が混乱しているとコングはそのまま話を続ける。

「今回の能力開発で分かったがミナトの能力は自然系ロキアの中でも最強に近い。体を水素に変えれば音の倍で移動が可能、浮く事も出来る。それに加えて最高温度が1万2千度。発火能力に関しては半径10

0 mを高熱の炎で焼き尽くす。

そして実戦での成績も良い。序でに言えば六式も覇気も使える。実績次第では十分大将になれる実力だ。

海軍も出来る事なら実力のあるものには早く出て来てもらいたい。それらの理由で今回の昇進が決まったが・・・異論は？」

コングはペラペラと話して真剣な表情で俺を見る。俺には元々異論などない。

「ありません。年齢的には不十分なところがあるかもしれませんがお役目務めさせていただきます！」

「そうか。もういいぞ。」

俺はそう云われて指令室から出てランと一緒に家に帰った。

（sideコング）

ミナトの能力には流石の私でも顎が外れるかと思った。取り敢えず大佐への昇進を確認した後ミナトが外に出たのを確認して肩の力を抜いて背凭れに凭れ掛かった。

「未だ10歳くらいの子供に大佐を任せても大丈夫なのですか？」

そう言えばミナトと一緒にセンゴクも来ていたな。私は体を持ち上げて椅子に座りなおした後センゴクを見る。

「あの子からはただの子供じゃない雰囲気漂っている。お前にも分かるだろう？センゴク。」

そう、ミナトからは子供とは思えない様な大人びた風格がある。言葉遣いや上司に対する態度。本当の子供ではない様な。しかし時折見せる無邪気さからは本当の子供だと実感する。

「はい。妙に大人びています。もう少し甘えたい年頃の筈なんです
が。」

「まあ男には分からん話かもな。それより『大佐を任せられるか？』と聞いたな。寧ろ『大佐で十分か？』と聞く方が自然だがな。」

私はあそこまで飲み込みの早い子供・・・いや、人間は初めてだ。多かれ少なかれ最初は何度かミスをするもの。しかしミナトにはそれが一切ない。

それを天性の才能と云えばそれで片付くが、それでは納得が出来ん。それを確かめる為に中間職である大佐を命じた。勿論書類を丸投げさせるガープの下でな。体力が持つかどうか不安だがやらせる価値はある。」

「つまり『実験』だと？」

「悪く言えばそうなるがミスをすることも成長する為には大切なことだ。休まずに仕事を続ける事がどれほど辛い事かも、な。」

「俺はそのやり方にはあまり賛成できませんね。もう少し大人になつてからでも十分に間に合う事ですし。」

「そうだが、さつきも言っただろう。海軍には戦力が必要なんだ。ロジャーの処刑以降始まった大海賊時代。海賊が増える中で海兵は日に日に減っている。」

対応するにはいくら若かろうが戦力となるものは確りと育てなければ

ばならない。しかしゆっくりしている暇はない。
お前なら分かってくれるだろう。」

「・・・分かりませんよ。でも割り切る事は出来ます。それでは俺も新人の教育があるので・・・。」

2人のピリピリと張り詰めた空間が漸く無くなった指令室でコングは一息吐く

「私だってこんな事はしたくないさ・・・。」

能力開発（後書き）

ご意見お待ちしております！

今回の話はグダグダで批評覚悟なので・・・。

証明（前書き）

原作？映画？に関わります。

これも海兵としての仕事だと思って書いてみました。

証明

俺が大佐と云う中間職に就いて半年程が経った。中間職は書類仕事が多いので毎日が忙しく、ネコの手ならぬ九尾のセラフの尻尾も借りたくなるほどだった。

これは中間職と云うものだからではあるが、矢張り一番は『ガープの配属である』と云うところが大きい。

事実、ガープは書類を少ししかやらない。しかも比較的簡単なもの（判子を押すだけなど）を選抜してやっているので、文章を書かなければならないものは全て俺に回ってくる。

俺は最初こそ根気で擦じ伏せて来たが、最近では出来ない分を部下にやってもらっていたりする。

俺がそうだったところでコングが俺を大佐にした意図を教えてください、力が抜けた。だが降格と云う事にはならなかった。

如何も俺の仕事ぶりがガープに気に入られたようで、これから将官になるまではずっとガープの配属と云う哀しい結末が待っていた。

そんな俺にも癒しはある。ランの美味しい飯にヒナのデレデレ。セラフのふかふかなど家に帰れば数多くの癒しが俺を待っていた。

そんなプラマイ零な生活を送っていた俺だが、最近オハラのアスタールと金獅子の脱獄について考える様になった。

どちらが先に起きたか分からない為に何とも言えないが、オハラは如何しようもないと割り切った。俺的には全員が助かる道がいい。しかし今更そんな事は不可能。

なのでオハラ（ロビン）の事はサウロに任せて俺は金獅子に集中する事にした。

海兵として金獅子を倒せば名が売れると云うのもあるが、矢張り民衆を不安のどん底に突き落とす存在は消す。と云う考えが一番だ。

何せ金獅子は飛ぶのでいつどこに現れるか分からない。俺も飛ぶ事は出来るが能力を使ったり使わなかったりしなければならぬので不便だ。

・・・そうではなくて飛ぶと云う事は何処の街でも襲えると云うこと。詰り世界中の人々は常に警戒して生活をしなくてはならぬ。それで何年も怯え続け、海軍の信用が落ちるのも困る。

なのでインペルダウンから出る前に仕留める。そうは言っても俺の権限で処刑を命ずることなど不可能。しかし監視を厳しくしたり、何処かに行く前に俺が駆け付けて倒すと云うことは可能だ。

今日はその為の準備をしようと思う。

先ずは何をするべきか。それはまあ云わずも分かるだろうが『逃がさない為の監視強化』だ。

そもそも、足を切って逃げさせるほどに時間の余裕があつたのだ。どれだけ監視が薄いか分かる。

それに足枷だけでなく何故手枷も着けなかったのか。そうすればもし逃げられたとしても金獅子は何も出来ない。

他にも何故『木枯し』と『桜十』を政府に引き渡さなかったかなど様々な疑問が持ち上げられる。

まあそれらはすべて『海楼石の錠を嵌めているから絶対に逃げれない』と云う思い込みの激しさから来ている。

この世に絶対などと云うものがない事は分かっているのに『海楼石は絶対』だと信じてしまった。それはインペルダウンの署長だけでなく海軍の上層部も同様だ。

だから『海楼石は絶対』と云う考えを改めさせるために今日はインペルダウンに行こうと思う。それが金獅子に対する準備だ。

その為には先ずインペルダウンに行く許可を得なければならぬ。そう云う事で俺は指令室へと向かった。

コンコンッ・・・。

「入れ。」

「失礼します！」

2回扉を叩いた後に直ぐコングの声がして中に入る。そして敬礼。この一連の流れはもう慣れてしまった。

「ミナトか・・・如何した？ガーブが何かしでかしたか？」

俺がここに入るのに慣れたのはよくガーブの職務怠慢の報告に来るから。コングは毎回俺の軽い愚痴を聞きながら呆れて『何とかすると云っているが何とかなつた事など一度もない。』

俺もここには愚痴を言いに来るくらいなので何かをして欲しいとは思っていない。

「今日は違います。少し相談したい事がありました。」

「何だ？恋愛の事ならおつるさんに聞いた方がいいぞ？」

俺の真剣な表情を無視してコングは笑いながら告げる。相変わらず空気を読まない人だ。

「違いますよ。今回は金獅子について話したいんですよ。」

俺の言葉を聞いてコングの眉はピクリと動いた後に真剣な表情になる。金獅子が捕らえられていると云う事は有名だが、何故去年捕らえられた者の話をするのかと云うことへの反応だろう。

「それで・・・金獅子が如何した？」

「聞いたところによると金獅子は足に海楼石の枷を嵌めているだけで他には何もしていないらしいですね。」

「それが如何した。」

「それでは不十分だと思うんですよ。実際海楼石に触れなければ能力は使えますから。」

「何が言いたい。」

「このままじゃ脱獄される可能性があるってことですよ。」

「ッ！！！！！」

俺の言葉に次第に不機嫌さを露わにしていったコングは最後の俺の言葉を聞いて目を見開く。そして席を立とうするが、直ぐに座り直す。

「何故そう思う？」

そうして冷静になってコングは俺に聞き返す。俺は依然表情を崩していない。

「飽く迄可能性ですけど。そして推測も交じってますが、聞きますか？」

俺の言葉に少しだけ考えた後にコングは頷く。それを見て俺は話を続ける。

「捕まったのが去年の話。まあ約2年前ですけど。それでその間に拷問を受けながらも傷を癒していたと考えましょう。そして既に怪我が全て治っていたとします。それで足にしか枷はついていない。逃げる為なら如何すると思いますか？」

「足を切る・・・か？」

「その通りです。彼は足を切って脱獄を計るでしょう。幸いにも海楼石を信じて監視など殆どされてませんし彼は浮く事が出来ます。足を切っても移動は出来ます。」

「しかしいくら奴でもずつと能力を使い続ける訳にもいかんだろう。」

「そこで使うのがインペルダウンの宝物庫にある自分の2本の刀、木枯しと桜十ですよ。それを義足として使用します。そうすれば脱獄なんて簡単にできますよ。」

俺が紙に書いてきた事を喋っているとは知らないコングは真剣に悩み始める。俺はそれを見て自分の口八丁さに感動している。暫くコングは唸る様にして考える。実際唸りながら考えているが。

「それでお前は如何したいんだ？」

「インペルダウンに行つて海楼石が絶対でないこと、監視の薄さなどを直接伝えたいです。」

それを聞くと再度唸りだす。それから20分ほど唸って漸く電伝虫を取つてインペルダウンに連絡をして許可を貰った。

「いいか？金獅子に会わせてはやる。それにお前のやりたいことも全てやって来い。しかしガープにだけは勝手をさせるな。分かったか？」

ここに来て半年だが俺の信頼は厚い。何より背が160を越えた事があるし、書類仕事も確実にこなしていく、そして戦闘面においても将官顔負けの実力を発揮する。

事実、俺は『少将でもおかしくない実力を持っている。』とまで言われている。少将と云うのは能力が完全に制御しきれていない為。完全に自分のものに出たら中将、新たな使い道を発見したら大將にもなれると云われた。

そうは言われても悪魔の実の能力は簡単に制御できるものではないので時間が掛かる。中将になるのは随分先の事だろう。1年目で本部大佐と云う地位もかなりのものだが。

「分かりました。可能性は全て潰します。」

俺はそう言って指令室を後にした。これからはガープを探して小さな帆船でインペルダウンに行かなければならない。

これは公にする様な任務では無い極秘任務の様なもので如何しても少人数で小さな船で行かなければならない。それについては特に問題は無い。

しかし極秘任務とは関係のなさそうなガープを連れて行かなければならないのが一抹の不安だ。その他は信頼できる俺の部下なので大丈夫だ。

「あ、ガープ中将！今から任務なので来て頂けますか？」

「ダメじゃ！わしは今から行く所があるんじゃない！」

「いや、大事な任務なんですけど……。」

「よしわかった！全ての権限はお前に任せる！責任もわしが取る！じゃからわしを見逃してくれ！」

ガープが其処まで頼むのには何か事情があるのだろう。原作20年前くらいは……エースの誕生年だな。

もう少しで原作20年前くらいだからルージュの事を看取ってやるのだろう。そしてエースを預かってダダンに丸投げ……。書類だけならず赤子まで丸投げするとは流石だ。

……と、それなら仕方ないか。ガープが来れずにエースが死んだとあっては俺も後味が悪いしエースには生きてもらいたい。

「分かりました。コング元帥には俺が伝えておきますので早く行ってあげて下さい。行くところがあると云う事は誰かが待つておられるのでしょうか？」

「すまん！お前さんには今度何かしよう！助かった！」

ガープはそう言って何処かへ走って行った。それを見ながら何かしてくれるより書類を減らしてくれ、と思ったのは内緒だ。

取り敢えずコングから預かっている電伝虫でコングに電話を掛ける。そしてなんだかんだあったが、俺が指揮をする事になった。

その事が俺は嬉しくてセラフと部下を十数人だけ引き連れてインペルダウンへと向かった。

・
・
・
・
・
・
・
・

・
・

1週間足らずのうちに俺たちはインペルダウンに着いた。小さな帆船で来たが連絡は入れていたので簡単に入る事が出来た。そして今は名もない署長と話している。

「今回は金獅子のシキが脱走の可能性があると言っことで来られたようだが・・・根拠は？」

根拠は『0巻読んだからです！』などと言える筈もない。いや、云ったとしても何の事か分からないだろう。

「飽く迄可能性ですから根拠は必要ないと思います。少しでも出て来た芽は潰す。その為に来たわけですから。」

「・・・で、先ずは何をするんだ？」

話の分かる人で助かった。これなら話もほとんどん拍子に進んでいきそうだ。

「先ずは海楼石が絶対ではないと云う証明について。俺に海楼石の錠を嵌めて下さい。」

今はインペルダウンの中に入ってっ少っだけ開けた場所。そこで俺の手に海楼石の錠が掛けられる。

署長やマゼランなどはそれを見て外せるわけがないと云った顔をしている。俺はそれを見返す為っに手を下につける。

そして錠を上手く立てて、手首を錠に当てないようにする。手錠と云うのは多少は空間が出来るのでそんな事は簡単にできる。

そしてそのまま能力を発動。水素を発生させて手錠に張り付ける。そして一気に過熱。

「60万・・・過熱!!!」
オーバーヒート

俺が一気に過熱したら海楼石の手錠は跡形も残らなかった。因みに現時点での最高温度が60万度。太陽は1500万度が最高温度なので完璧には程遠い温度。

しかし海楼石を溶かすには十分な温度。いくら加工が難しいと云われても高熱に当てればどんなものでも溶ける。

そして海楼石に触れなければ能力も使える。

実際不思議に思っていたのだ。海に浸かれば必ずしも能力が使えなくなるわけじゃない。腰まで浸かっているも能力は多少なりとも使える。それなのに何故海楼石を一部につけただけで能力が無効化されるのか。

それは海楼石が触れていれば体全体に海の影響を及ぼすから。それがどんなに小さな粒でも。

だがそれは触れていなければ意味がない。波長を持っており、その波長を流し込むと云っても触れてなければ流し込む事も不可能。そこが唯一の欠点だ。

「どうです？これで俺は自由です。いつでも脱獄出来ますよ？」

俺がそう言うのとインペルダウン側は悔しそうな表情を浮かべ、俺側は勝ち誇った表情を浮かべる。

「さて、海楼石には穴があった事をお伝えしたところで次のお話。金獅子には手枷もつけた方がいいですよ、と云う事で次。監視も強化した方がいい。それと最後。それでも逃げられた時の為に宝物庫に置いてある木枯しと桜十を回収します。」

流石に俺が海楼石をいとも簡単に外して見せたのでインペルダウンの署長は反論が出来ずに命令を下していく。そして木枯しと桜十を回収する序でに金獅子を見せてもらう事になった。

流石にそこまでは俺の部下がついて来る事は出来ないで置いていく。そして俺の手には確りと海楼石の手錠が嵌められている。

LEVEL・6に着く前に宝物庫による為に途中で止まったりもしたが直ぐに着いた。エレベーターと云う文明の利器があるからだろう。

そんなことを思いながら2本の刀を完全に私用化した俺は2つとも腰に携えて金獅子の前に歩いていった。

「随分と変な鶏を変な所で飼ってるんですね。それで・・・金獅子は？」

本当にそう思った。だって頭に舵輪が喰い込んで生きている人間なんて聞いた事無いし。実際に居たら本気で恐い。だからそんな現実から逃げたかったの。

「俺だ！てめえ人の刀勝手にぶら下げてんじゃねえ！」

「鶏が喋った!？」

「俺が金獅子のシキって云ってんだろ!!」

そろそろ疲れたからやめよう。俺だってそんなに暇ではない。早く帰ってヒナやランに会いたい。

もう一週間も会っていないから会いたくなるのも当然だ。

それにインペルダウンの空気は嫌いだ。ジメジメしていて、もわもわわしていて気持ち悪い。何より囚人たちの悲鳴が聞こえて来る事が

嫌だ。

そんな所に何時間もいる程俺は悪趣味では無い。マゼランやハンニヤバルはよくここで働こうと思ったものだ。

「で、その金獅子が俺に何か用ですか？」

「てめえが会いに来たんじゃねえのか！！！」

普段は悪い人ではないみたいだな。ノリも良いし。

事実、強い海賊はみんなそうだ。例外もあるが。しかし殆どが宴が好きな馬鹿野郎だ。一緒に居ると楽しい。

「まあそう言うな。この刀・・・木枯しと桜十は俺が貰う。どうせ此処に居ても使う事なんざ無いんだからいいだろう。」

「よくねえよ！！！」

「じゃあ脱獄でもするのか？それだったら置いていってやる。」

「する！！！」

「・・・あんた馬鹿だろ。ここでそんなこと言ったら殺されるぞ？」

実際後ろの方でマゼランや署長が処刑の手配をしようとしている。

「まあ脱獄なんて阿呆な事は考えずに華の囚人ライフを送ってくれ。」

俺は金獅子が後ろで喚いているのを聞きながらLEVEL・6を後にした。そして署長やマゼランに挨拶を済ませて海軍本部に帰った。

「それで・・・大丈夫だったのか？」

そして今は指令室。金獅子の監視の強化や枷の嚴重化をするように言ってきたことへの報告をしに来た。

「はい。思いつく可能性は全て潰しましたけど・・・未だ何が起くるか分かりません。警戒しておくに越した事はありません。」

そつだ。可能性は全て潰したが絶対など無い。それは俺が一番よく分かってる。

「そつか。それでその2本の刀は？」

「これは・・・未定です。海軍本部の宝物庫に入れておくか、俺が保管するか・・・どちらにしても俺が使う事はありません。」

俺の悪魔の実際の能力は刀を使った戦いは向いていない。それに六式を使えるので刀を使う必要もない。

剣士と戦う時だって相手の刀を溶かせばそれで終わることだ。

「ふうむ・・・。お前が持っている。それで誰かにあげたりしても構わん。今回の特別任務報酬はその刀と云うことだな。」

「はい。ありがとうございます。それでは失礼します！」

「ああ。」

俺はそうして部屋を出て久し振りに家に帰った。その時はヒナが抱きついてきたが、気にしないでいた。

ランに茶化されるので直ぐに引き離れたかったが、ヒナが泣くのでそれはやめておいた。

証明（後書き）

感想・評価待ってます！！

信頼（前書き）

ここからはロビン編です

信頼

オハラのパスターコール。

先の“金獅子”の時には関わるまいとは思っていたがロビンに20年間も苦しい思いをさせるのは心が痛む。

俺だった異世界から来たと云っても人間であるには変わりない。こんな化け物の様な身体能力を持っていても人間だ。

人を見殺しにする辛さは分かっているつもりだ。

そこで、だ。

先ずオハラでバスターコールが起こった経緯。

最初に原作26年前にオハラを出発した探索チームが原作20年前に捕まった。その時にオルビアも捕まった。

そしてハグワール・D・サウロがオルビアを助けてオハラに漂流。

そしてバスターコール当日にオルビアが帰ってくる。

スパンダインとオハラが対立。その時ロビンは避難船に乗る事を拒否。そしてその時に図書館の歴史の本文ホーネケリフが発見される。

当時CP9長官だったスパンダインが大将センゴクから預かったゴールデン電伝虫のスイッチをオハラ内で発動。

その後オルビアとロビンが感動の再会の後オルビアは図書館の文献を外へ、ロビンはサウロと共に脱出を図る（サウロが無理矢理連れ
て）。

ロビンは結局避難船に乗れなかったがその避難船はサカズキによって砲撃され沈没。

そしてクザンはサウロを凍らせた後にロビンを助けて・・・それで
終わり。

これがオハラのパスターコールの概要。

現在は原作20年前。

そして今日オハラのプロサチームが捕らえられたと云う報告もあった。詰り時間はあまりない。

だから先ず何をすべきか、だ。

オハラの人全員を救うことが可能な方法は『図書館内の歴史の本文に関する文献と歴史の本文そのものを俺が先回りして消し去る』しかない。

しかしこれは不可能。俺が犯罪者となってしまうては意味がない。・
・別に自分が可愛いと云う訳ではないが俺には家族が居る。その人達を見捨てる事は出来ない。

だったらどうするか。答えは簡単。

『ロビンを犯罪者にせず海軍に入隊させる』だ。

翌々思い返せばロビン助ける事が出来るのは簡単な事なのだ。オルビアとの再会の時に自分が歴史の本文を読み解く事が出来る事を伝えなかつたら万事OKだ。

他にも方法はあるが、それが一番手っ取り早い。

ロビンが会う前に連れ去る……。少々酷だが平和に生きる為には仕方のないことだ。

そう云う事で俺はコングのいる指令室に訪れていた。

「それで、今回はどういった要件だ？」

「俺の人事異動を希望します。」

ガープの船に乗っているのはオハラには行けないのでクザンの船に乗り換えたい。それでバスターコールが決まったらクザンを説得して少々早めに出航。

あの人なら何とかできるだろうし、出来なくても寝ている間に船を出せばいいことだ。

「ガープに嫌気が差したか？」

少し怪訝そうな顔をしたコングは直ぐに表情を戻して冗談を言う。表情こそ崩れているが、目は笑っていない。

「まあ・・・それもありますけど。今回は違う目的です。」

俺はコングとは逆にへにやりと笑って見せる。

「それで・・・誰の部隊に入りたい。」

「クザン中将の部隊がいいです。」

クザンが説得しやすいと云うのもある。しかし俺の異動に持って来いな理由もある。

「何故クザンだ。」

「同じ自然系ロキアとして能力の制御の仕方を学びたいと思ひまして。」

俺にはこういった不自然でない理由を作れる。クザンでなくても能力者なら同等の理由で、六式使いなら六式を理由にして異動も出来る。補佐が必要な人なら迅速な仕事ぶりを理由にして異動出来る。つまり俺には死角がない。どんな部隊にも異動は可能だ。しかしずっとクザンの下に居るつもりはなく、頃合いを計ってガープの部隊に戻るつもりだ。

覇気の扱いが未だ完璧ではない為に俺としてもガープの下にはもう少し居たい。

「確かに・・・お前は能力を制御しきれていない部分がある。しかし異動は隊を編成し直さなければならなくなるから個人の意思で行えるものではない。それはミナト・・・大佐である君なら分かる筈だ。」

コングの云う事にも一理ある。俺がガープの部隊から抜ければ大佐が1人減る事になる。クザンのところと入れ替えにすればいいのだが、そう簡単にいくものでもない。

俺の実力は中佐の中では飛びぬけており、中将連中とも渡り合える程。そんな人間が1人でも抜けたらガープの部隊の戦力は落ち、部隊間のバランスが崩れてしまう。

それに1つの部隊に自然系の能力者が2人もいる事は普通有り得ない。

コングの言葉にはそんな意味も含まれている。

「それは分かっています。しかし大海賊時代を終わらせるためには海軍の戦力の向上が必要！その為にも俺は今より強くないといけないんです！！誰にも負けなくらいに！！！」

これだけ云っても恐らくダメだろう。『他にも力のつけ方がある』などと云われてしまうのがオチだ。

「その件は先送りだ。今度の部隊編成の時に考えておこう。」

矢張り、か。しかしそれでも俺には考えがある。金獅子の件の後俺が何日もかけて考えた計画は早々終わりはしない。

「それなら結構です。では失礼します。」

取り敢えず俺は指令室を後にしてガープの許へと向かった。

「ガープ中将、少し話があります。」

珍しく書斎で書類と睨めっこしているガープを見て俺は感心するが今はそんなことしている暇はない。

周りを確認して監視用電伝虫があるかを確認する。・・・全て壊れている。

いつもなら怒るべきだがこんな時だけガープの性格には感謝した。

「なんじゃ？わしは見ての通り忙しいんじゃ。」

まあ全く手が動いていないのだから解読に夢中なのだろう。そしてそれが忙しい、と。

突っ込みたいがそれだとガープのペースに嵌って話しが出来ないまま終わるだろう。

「その忙しいところ申し訳ありませんがオハラの件について。」

その瞬間ガープの表情は一気に険しくなる。・・・今までも険しかったが、違う険しさだ。

今ではオハラ探索チームが捕まった事は本部に居る海兵全員が知っている。バスターコールに関しては将官以上しか知らないが。

そんな話をしようと云うのだから自然と表情も険しくなるだろう。勿論声のトーンも低くなる。

「・・・それが如何したと云うのじゃ。」

ガープはどすの利いた声で呟きながら書類を置いて俺の方を見る。俺は毅然として敬礼をしたままだ。

「噂でバスターコールが起こると聞きました。」

「ッ！！それは何処で聞いた！？ラン准将か！？」

ガープは豪快に机を大破させて俺の許に来て胸ぐらを掴みあげる。分かってはいたのだろうがいざ本人の口から発せられるとなれば話は違うのだろう。

まあそれは想定内で、それはガープが地雷を踏んだことも証明する。

「いえ、ラン准将ではありません。飽く迄噂の範疇で聞いたのですが・・・その様子だと本当の様ですね。」

ここで知らない振りでもすれば何事もなく終わっただろう。しかしガープの行動がバスターコールを証明した。

そしてガープが俺にバスターコールの事を教えたと言う事になる。

ガープはそれに気付いて俺の胸ぐらから手を離して力なく椅子に座り直す。

「それで、それを聞いて如何する。わしがお前に云った事をコング元帥にでも告げて昇格でもするのか？」

「そんなに卑怯じゃありません。ガープ中將の権限でバスターコールに参加させて頂ければそれで満足です。」

「な！？お前は自分からあんなことに参加しようと言うのか！？」

ガープはもう一度席を立つて血相を変えて俺を見る。

まあ島一つ消す一方的な暴力に子供が参加したいと云うのだから当然だろう。俺だってそんなものを見たいと思う程腐ってはいない。

ただ助けたい人の為に行動する事は悪いことではないだろう。

「助けたい人が居るんですよ。あなたなら分かってくれる筈です・
・ガープ中将。こんな事はあなたの様な人にしか話せませんし、話
す気もありません。」

「……しかしバスターコールの時に行っても間に合わん
だろう。じゃから……。」

「諦めると?」

「政府の船に乗れるように手配してやろう。気に食わん馬鹿が乗っ
ておるがな。それでもいいなら上にはわしから適当な理由をつけて
伝えておく。」

矢張りこの人はいい人だ。なんだかんだでこの人は人の気持ちをよ
く考えている。

まあ今回の場合は自分もエースの事があって直ぐの事だからなのだ
ろう。

何も知らない……いや、何も知ろうとしない政府の考えを理解で
きない俺とガープの信頼は案外固いのもかもしれない。

「はい!あ……でも理由は『念の為の政府船の護衛』と云う具合
でお願いします。」

「ああ……わしに任せろ。日にちが決まり次第教えるからそれま
では仕事をしながら助ける算段でもつけておけ。」

そう云われて俺は自分の書斎へと向かった。

信頼（後書き）

感想・ご意見・評価などお待ちしております！！

政府の船（前書き）

未だオハラには着きません

政府の船

海軍のカモメのマークを掲げる船とは違って世界政府の4つの海軍の中心を意味するマークを掲げる船。それが政府の有する船・・・政府船と云ったところか。

その政府船が今日海軍本部のある三日月型の島・・・マリンスカイに停泊した。そしてその船の中から3人の男が降りて来る。

1人は黒髪でストライプのコートを羽織った男・・・名はスパンダイン。その左側に居る金髪眼鏡の男・・・名は知らないがカリファの父。スパンダインの右側に居るのが金髪サングラスに黒ハットをかぶった男・・・この男に関しては情報なし。

そんな3人はスタスタと歩いて行って大将であるセンゴクの部屋に入った。しかし入ったのはスパンダインだけで、他の2人は部屋の外で待機だ。

この3人が本部内を歩くのを見て何も知らない佐官以下の海兵はひそひそと話している。

部屋に入ったスパンダインは暫くして外に出て来た。その時には海軍の正義のコートを羽織った飴髪の史上最年少で大佐に就任した少年が隣に居た。

＼sideミナト＼

ガープと約束をしてから2週間後、俺はセンゴクの部屋に行くようにガープに云われた。俺は何も考えずに取り敢えずセンゴクの部屋に入った。

因みにこの2週間の間にサウロがオルビアを連れて逃げた事は言うまでもないだろう。

センゴクの部屋に入った俺は敬礼をしてセンゴクの言葉を待った。

「今日政府からの船がここに来る。聞いている通りオハラの本スタ
ーコールの件だ。俺がCP9長官のスパンダインに権限を渡した後、
お前もそれについて行け。」

・・・聞いてませんか？

そろそろだとは思っていたがガープは日にちの報告などして来な
った。あの人は約束も守れない人か？・・・でも政府の船に
乗れるように手配してくれたから別にいいか。

それから俺はセンゴクと適当に話をした。そうしていると部屋の扉
が2回叩かれて、センゴクが入室の許可を出すとスパンダインが入
って来た。

「センゴク大将・・・早速ですが・・・」

「分かっている。・・・ほら、こいつだろう。」

「流石センゴク大将。話しが早い。」

へへへ、とスパンダインが笑ってセンゴクからゴールデン電伝虫を
受け取って足早に去ろうとする。

「少し待て。今回連れて行ってもらう海軍本部大佐が居ると云った
筈だが。」

そんなスパンダインをセンゴクが止めるとスパンダムは怪訝そうな
顔をする。

「しかしここには・・・ってもしかして!」

スパンダインは今俺の存在に気付いたかのような口ぶりで俺の方を指差す。仮にも海軍本部大佐にそう云う事をするのは失礼だろう。

「そうだ。こちらが海軍本部大佐“飴髪の焰”ミナトだ。」

「大佐って・・・こんな子供がですか!？」

「ああ。しかし実力は十分。恐らく今乗って来た船の全員が一斉に掛かって来ても勝てないだろう。お前の護衛には十分だろう。」

センゴクの言葉にスパンダインは黙って俺の方をじっと見る。俺は毅然とした態度でスパンダインを睨む。

お前なんか人が目の目を見て心力など量る事が出来ない。そう云う思いを込めて。

「・・・まあセンゴク大將がそう云うのであれば。確か・・・」ミナトです。「・・・そう、ミナト大佐。では行きましょうか。」

俺は不服ながらもスパンダインの後についてセンゴクの部屋から出た。無論敬礼は忘れずに。

「長官、この子供はなんです?」

出た瞬間に俺の方を見てカリファの父はスパンダインに訊ねる。どうもいちいちムカつく。

「この方は海軍本部のミナト大佐だ。無礼がない様にしろ。」

スパンダインが俺に対しても謙るのは自身の昇進の為だろう。政府

からの信頼度で言えば海軍の方が高いのだから当然だ。

その言葉を聞いた2人は一瞬驚嘆の表情を浮かべるが、直ぐに表情を戻して納得した様な表情になる。

政府関連の職業に就いていれば史上最年少の大佐のことくらい知っているだろう。まあ能力や顔は分からず、分かるのは名前くらいだろう。

「こんな小さな子に『護衛』なんて出来るんですか？」

矢張り、な。サングラスの男の方が俺を嘲笑うかのように見る。

別にそんなことでは怒ったりしないが苛々は募る。適度にストレス発散が出来る程器用ではないのでガープに対する苛々と共に爆発しそうだ。

「おい、言葉を慎め。仮にも相手は大佐様だ。」

『そうでしたな。こんなチビでも大佐だ。どんな方法を使ったか知らんがどうせプライドだけが高い糞野郎だ。』

・・・そう云わんばかりに3人は俺の方を見る。正直言っただけかなりうざい。

しかしここで問題を起こしてしまったら何のために寝る間も惜しんで考えたか分からなくなる。そして水の泡にもなってしまう。

それだけはならないので怒りを堪えるが、奈何せん力の抜き方を知らない俺は太さ10cm程の柱を思いつき叩いた。

しかし音はせずに、俺の拳は柱をすり抜ける。

それを見て3人は矢張り俺が大した奴でないと判断して嘲笑を浮かべる。

しかしその直後、全く関係の無いところで爆音が響き、砂煙が立ち上る。3人は驚いてもう一度柱を見ると俺が殴った部分だけ見事に無くなっていた。

それで漸くスッキリとした俺は軽快な足取りで政府船に乗り込んだ。まああの3人には何が起きたか分かっていない様だったが。そして本部を破壊した事を怒られるのも嫌なので足早だったと云うのもある。

そんなこんなで政府船に乗り込んだ俺は何やら異物を見るかのような目で見られる。どうせまた俺がそれっぽくないからだろう。

そんな事をいちいち気にする暇もないのでスパンダインに用意された部屋まで案内させた後、俺は寝た。

……つもりだったのだが俺の船室の外が騒がしくて眠れやしない。何の嫌がらせだ。一体俺が何をしたんだ。

俺はオハラに着くまでの休息を満喫しようとしていたのに五月蠅くするのは……。大佐権限で黙らせよう……。？大佐ってCPで云うどの立場だ？分からないがスパンダインが謙っていたから長官よりは偉い。詰り大抵のやつよりは偉い。

そう云う事で大佐権限発動準備。

権力って昔はなかったから憧れてたけど少し怖いな。

逆らえない上司からやりたくない命令を下される。俺は自分が下す立場だから良いが……。逆だと嫌だ……。いや、今でも命令を下される事は日常茶飯事だが。

でもやりたくない命令はなかった。まああつたとしても俺の長足思考回路で逃れるために尽力するが。そしてそれに原作知識を引張張り出して弱みを掴んで逃れる。いずれにせよ俺は嫌な任務はやらない。……流石にやらなければならぬならやるけど。

まあそんな事は如何でもいい。俺は権限を発動させる為に扉へと向かう。

静かにしなければならぬのだ、この船に乗っている奴は全て。だから俺が無理矢理嫌な任務を押しつけられることと同じ。

……。そう、つまり俺のこの船の船員に対するただの横暴だ。

俺は水素を発生させて銃口の周りに張り付け、約30万度の『過熱』^{オーバーヒート}をさせて溶かし、発砲できなくする。

「ッ！！！！」

その現象に驚き戸惑うその人。そんな様子を見ながら俺はその人の腹を思い切り殴り飛ばした。

殴られた人間は後ろに吹っ飛んで行き、壁を壊して隣の部屋に出た。その人は気絶して口から血を吐いている。睡眠の妨害をされた制裁はこのあたりでいいだろう。

それよりも壊れた壁だ。さっきの奴の所為で壊れたこの壁を如何してくれよう。

「……まあいいか。どうせ隣は誰も使って無い部屋だし。このまま寝よう。」

俺はそうして眠りに就いた。

政府の船（後書き）

感想・評価・ご意見待ってます！！

根回し(前書き)

とうとうオハラに着きます。

根回し

とうとう着きましたよオハラ！！

ここに着くまでに政府の役人みたいな人が半分以上減ったのは気にしないでおこう。これで操作が遅れてロビンを助けるまでの時間が延びると云うものだ。

俺はスパンダインは行動を共にしなかった。あの人にはちゃんとした護衛がついているというのもあるが嫌いだからと云う方が大きい。

我が儘だし、自己中だし、うざいし。全てにおいて嫌いだ。

そんなことで俺は体を水素に変えながら月歩げっぽうと荊そるを駆使してサウロが居る海岸へ向かった。因みに岸の辺りから飛んできたので俄然スパンダインは早くオハラに入った。

「お久しぶりですね、サウロ中将。」

筏に乗って幼少期のロビンと話しているサウロに俺は気配なく近づいて話し掛ける。その事にサウロとロビンは目を見開く。

「お前は……“飴髪の焰”か！！本部の大佐がこんな所に何の用がある！！」

そんなこと言われても……。普通に裏切り者の退治とか云う理由で成り立つと思うんだが……。

しかし今日はそんなつもりで来たわけではないのでそんな事は云わない。

そしてこの人なら真実を話しても大丈夫だと思っているので本当の事を話す。

「今日はそのニコ・ロビンを本部に連れて帰ろうと思って。」

「なに！？この子を・・・如何するでよ！！！」

「義妹にする。」

シリアスな雰囲気の中で俺の言葉に呆然とする2人。俺は真実を言っただけだが・・・何か問題でもあるのか？

「だから義妹にするって云ったんだ！ニコ・ロビンは家族が居ねえんだろ？それが！それだから俺が家族になってやるって云ってたんだ！」

母さんは許して・・・くれるだろうな。ヒナは断固拒否しそうだが・・・それよりも何か反応をしてくれ。ただ恥ずかしいだけじゃないか。

そして何より初対面の人の内部事情を知っている変態みたいな人。そんなレツテルが張られた気がする。

「何・・・言ってるだぞ？」

相も変わらず変な喋り方だ。でも演習で勝てたためしがないので馬鹿にして敵に回す様な事はしないが。

「だから俺がロビンの家族になるんだよ。俺には生みの親がいねえから気持ちは分かるんだ。まあ今の俺にはよくしてくれる親が居るがな。ロビンは今でもいねえだろ。だから俺が預かる。」

知らない内に無人島に居たし、前の親の顔も名前も思い出せないし。取り敢えずロビンくらい寂しい人間だった筈だ。・・・まあどっち

がどうだなんて云う気はないが。

ロビンは未だ母親が生きている。原作を変えてロビンが犯罪者にならない様に会わせるつもりだが、如何したものか。

いっそのこと全知の樹を燃やすか？歴史の本文がいくら何事にも強かるうが超高熱には耐えられないだろう。

もしそうでないならあんなものに字を彫るなんて事は出来ないからな。・・・まあいずれにせよ弱点はあるんだ。為る様に為る。

「お前・・・それは本当ですよ？」

「何が・・・？」

質問の意図が理解できん。家族になる事が本当か、俺に生みの親が居ない事が本当か、主語が欲しい。

「ロビンを預かると云うことだで。」

「保障する。幸せに生きられる様に、俺が守る。・・・そういついとうでロビン、一緒に来ないか？」

へにやりと俺は表情を崩す。ロビンはそれを見て少し頬を桃色に染めて目を逸らす。

・・・うん。可愛い。こんな娘が俺の義妹になるって考えると嬉しいな。自慢出来るぜ！

「ダメよ・・・私はここに居ないといけないの。」

そりゃそうだ。母の・・・オルビアの帰りを待っているんだから。

自分がオハラから去るわけにはいかないのだろう。

ロビンが落ち込んだような表情を見せた時俺はサウロへと視線を移

す。因みに脱退者で犯罪者のサウロに敬語を使うつもりはなかったが、サウロが動いていなければロビンの願いをかなえる事が出来なかった為今回だけは敬語を使わせてもらう。

「サウロ中将・・・少し話があります。よろしいでしょうか？」

ロビンに聞こえない様に俺はサウロの肩に乗って耳元に寄る。

「声を出さないでくださいね。ロビンの母の名ですが・・・ニコ・オルビア、中将が逃がした考古学者です。」

「ッ!!!!!!!」

サウロは声にならない声を上げながら歯を食いしばる。ロビンはそれを見て頭の上に疑問符を浮かべている。

「オルビア氏はもう既にここ・・・オハラに着いている。俺が如何にかしてロビンと会わせませす。」

そこで協力してほしいのですが・・・いいですか？」

「ここは・・・本当にオハラですよ？」

「はい。ですから協力を願いたい。犯罪者である貴方にしか出来ず、罪を重くする事になります。それでもやりますか？」

「分かったですよ。出来る事は何でもするですよ。」

これで交渉は成立だ。作戦が成功したらこの人はかなりの重罪人になるだろう。しかしこれは罪人であり、巨人族である彼にしか出来ない事なのだ。

「じゃあお願いします。俺はロビンを連れていくんで！くれぐれも勝手な行動は慎んでください！」

俺は作戦を一通り伝えた後にロビンが居る岩の上に一瞬で移動する。ロビンは目を見開いて驚いているが、今はそんな事を気にしている暇もない。

「ロビン……行くぞ。」

「私は……行かない。」

「……面倒だ。俺がお前の母さんに会わせてやる。嫌とは言わせない。」

ロビンは頑なに拒否しようとするのでお姫様だっこをして全知の樹があるであろう方向に走った。

ロビンはお姫様だっこされた事に頬を桃色に染めている。それが俺だからかは分からないが。

「ロビン！ぼやっとしてんな。図書館の方向は合ってるか？」

実を言うと全知の樹がある場所なんて俺は知らない。海岸から中心に向かって走っているだけだ。

出来る限り早く道を知りたいのだが、ロビンは俺の顔をじっと見たまま反応していない。瞬きすらしていない。

「おい、大丈夫かあ？」

俺は手が2本しかないのでお姫様だっこの状態では頬を軽く叩いて

やることも出来ず、強めの揺れを与えてやる。
すると漸く気付いた様で、顔を真っ赤にして目を逸らす。

「……可愛いな。」

・・・は！つい口に出してしまった！こんなことヒナに知られたら殺される！理性を崩壊させるような方法で殺される！
まあヒナはいいしいいか。それにロビンは可愛いって云うと喜ぶし。

「かわいい・・・？」

とか云いながらさつきより顔を紅くするロビンは可愛い。まあ俺はヒナ一筋だが。

だからロビンを可愛いと云った事を許してくれ！ヒナ！俺は未だ本能だけで生きるなんてしたくない！
因みに可愛いと好きは別物だぞ。

「ああ。だから可愛くなった顔を母さんに見せてやれ。」

「そんなことない・・・私妖怪だもん。」

「どこが？」

「ほら。」

ロビンは俺の頭部に一本だけ腕を生やす。それは俺への侮辱か、ロビンよ。もしそうならば俺は貴様を許さんぞ・・・。

「俺の頭に変な事するな。落とすぞ馬鹿野郎・・・野郎じゃないな。」

馬鹿でもないし。取り敢えずロビンが妖怪なら俺も妖怪だ。でも俺は人間だ。つまりお前も人間だ。」

「何その理論。」

・・・怒りを抑える。相手は子供だ。それに心を許し始めている証拠でもあるんだ。

ここは保護者として喜ぶべきこと。

「俺も悪魔の实の能力者だ。だからお前は妖怪じゃねえ。サウロも言っただろうが。偉大なる航路にはわんさかグランドラインといるんだよ。」

「そう言えばお母さんの事知ってるの？」

俺の悪魔の实の能力には興味ないのか！？少しくらい興味持ってくれよ。これから語ろうとしていた俺が馬鹿らしいぜ。

それとも俺が能力者だと分かっただけで十分なのか？そして空を走っている事に興味を持ってくれ。

「オルビアさんだろ。本部の牢獄で話した事があるだけだ。」

まあその時には俺が普通の海兵と違う事を見抜かれて『私が死んだ時はロビンを頼んだわ』なんて言われたもんだから泣きそうになっ
てしまった。

云われなくてもロビンは引き取るつもりだったし、その時云わなかつたが会わせようとも思っていた。

最初にロビンに会った時に云わなかったのは信憑性に欠けていたから。

オルビアの近くでは常にサウロの部下が見張りをしていて、その合間を掻い潜って会っていたからサウロは知らない。だから云っても

信じてもらえないのだ。部下の過信と云う奴だな。

「お母さん・・・私の事憶えてるかな？」

「自分の娘忘れる様な馬鹿な親だったら俺は会ってねえよ。俺はそんなお人好しじゃないからな。その時にお前の事も頼まれたぞ、ロビン。」

さっきは云わなかったが今なら云っても信じてもらえるだろう。

「如何云うこと？」

「だからロビンを義妹にするってこと。これがどんな意味か今ならわかるだろう？」

「家族・・・お母さんの養子？」

「まあそう云うことだ。俺には母さんが居るから義母だけだな。それに正式なものじゃねえから。でもお前は俺の義妹には変わりない。だから俺がお前の世話を見る。」

オルビアと会った時にそんなこともあったものだ。まあ俺がロビンを世話する為の口実に過ぎないものだが。でも嘘では無い。

「・・・いいの？私みたいなのを助けても。」

「海兵が一般市民を助ける事に理由なんて要らないからな。一般市民なら誰を助けて連れて帰ろうが誰にも文句は云われない。それとも俺が嫌いかな？」

「そんなことない……。かわいいって云ってくれたから。それに・
」

「それに？」

「カツコイイから。」

「そうかい。」

俺は顔を赤らめるロビンを直視できずに目を逸らす。なんでこつも
一目惚ればかりされるんだ俺の顔は。

原作始まつたらサンジに整形してもらおう。・・・適度にな、適度
に。

流石に変わり果ててヒナに嫌われるのも嫌だから。

・・・まあ冗談はこの辺で。そろそろ全知の樹に着きそうだ。

道が分からないまま来た事と未だ捜査員が来ていない事の2重の
嬉しさで飛び跳ねそうになるが、既に飛び跳ねながら向かっている
ので無理だった。

俺はそのまま全知の樹の図書館の扉を開けて中に入る。

「ミナト……。」

「オルビアさん……って感傷に浸ってる場合じゃない！ロビン、
あの人が母さんだ。」

「ロビン！？」

俺の言葉にオルビアは驚嘆の声を上げるが、それを気にせず俺は口
ピンを降ろしてやる。クローバー博士などの学者は俺を異物を見る
かのような目で見ている。

「お母さんですか？本当にお母さんですか・・・？」

ロビンはボロボロと大粒の涙を零しながらオルビアを見ている。その様子にオルビアも涙を流し、その場に崩れる。

ロビンはそれにゆっくりと近づいていき、オルビアの隣に座ってギョツと手を握る。その場には数秒間の沈黙が流れた後、ロビンが口を開く。

「こっぴつしたかった。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！」

「ずっと・・・。」

「ロビン・・・・・・・・！！！！」

オルビアはロビンを抱き寄せ、ギョツと抱きしめる。その後2人は暫くの間抱き合つが、オルビアは気付いた様にロビンを引き離す。

「ごめんなさい、ロビン。私行かなければならないところがあるの。」

「やだ！！お母さんは一緒に居てくれないの！？」

「ごめんね、ロビン。わたくし行く必要はねえよ。ここにある歴史のボーンケリフ本文に関連する書物は俺が全て焼き尽くす。歴史の本文もろともなボーンケリフバスターコールの名を受けた海兵として。だから貴様ら一般市民はこの図書館からさっさと出る。」
「・・・・・・・・ミナト・・・・・・・・。」

この時間帯だとこの島の人全員を救う術は未だ残されている。それをやらずして人は俺の事を海兵と呼ぶだろうか。悉く考えが変わってしまったって申し訳ないが状況が状況だから出来る限りの事はやらせてもらう。

「ならん！これらは人類の財産じゃ！そんな勝手なことをさせるわけにはいかん！！」

クローバー博士の言葉に周囲の学者たちもその声に賛同する。全くうるさい奴らだ。

「黙ってる！この島の人間が殺されてもその紙が大事だったのか！？ああ！？」

避難船なんてものは確実にサカズキに沈められる。原作がいくら変わるうがそれだけは変わらない。なにせ俺が来る前からあの性格は固定されている。幼少期の頃から形成すれば違っていただろうが。

「バスターコールと云えど一般市民に避難船は来る筈じゃ！」

「それが如何した！！その避難船は沈められるのがオチだ！それでも退く気がねえなら・・・やめて2人と。クローバー博士もここはミナトに任せて。この子は悪い子じゃないから。きっとなにかしてくれる。だから私たちは信じて外に居ましょう。ミナトとが私達と関わりがある事が見つかったらミナトも海兵じゃいられなくなる。そうすればロビンも行く場所がなくなる。これはロビンを守る為でもあるの。」「・・・。」

オルビアの真剣な目を見て学者たちは不本意ながらも外に歩いてい

く。そして最初の人を外に出た時その人は悲鳴を上げた。
俺はそれを聞いてオルビアからロビンを即座に奪い去らった。

「みん」俺の名を呼ぶな。「……。」

叫びそうになるオルビアの口を俺は押さえて直ぐに離す。ロビンが喚かない様にも気絶させた。恐らく何時間も目を覚まさない様な衝撃を与えて置いた。

「何するの!？」

「叫ぶな。これは俺の義妹の為だ。ロビンがあんたの娘だと分かれば政府は放っておかないだろう。」

そう、これだけはばれてはならないのだ。ロビンが平和な日常を送る為に。

それを言うとオルビアは静かに引き下がった。

「作業をやめろ!全員外へ!！」

……このタイミングで来やがって……!!!!!!

根回し(後書き)

感想・評価・ご意見待ってます!!

バスターコール（前書き）

今回でオハラは終了です。

最後の方が投げ槍になっているのは決して面倒だったとかじゃありません！！

後書にてアンケートを行うので答えていただけたら幸いです。

バスターコール

「作業をやめろ！全員外へ！！」

今から証拠処分をしようとしたところでタイミング悪く捜索班が図書館内部乗り込んでくる。

あと10分もあれば証拠は全て滅却出来たのに。

それでも来たなら諦めるしかない。俺が証拠隠滅しているところを見られればオハラもバスターコールの対象になるのは確実に、俺も政府から追われる。そうなればロビンも普通の人生が送れなくなる。だからもうオハラに関しては諦めるしかない・・・わけでもない。未だサウロの作戦が残っていた。

「ミナト大佐！ここにおられましたか！！・・・それで、こんなところで何を？」

捜索班は俺が恰も裏切った様な目で見てくる。

「調査だが・・・問題はあるのか？貴様ら政府の役人の到着が遅いから俺がやっていたに過ぎない。」

「そうですか。それではその抱えられている子供は？」

「小さな力もない子供があんな事に巻き込まれる必要はないだろうと思ったただだが、問題はあるのか？」

「・・・と云う事は歴史の本文がここにあると？」

「飽く迄仮定の話だ。貴様らは搜索している。俺は学者の見張りでもしておく。」

俺と搜索班の1人は始終表情を変えずに睨み合った。先に折れたのは搜索班の方で、諦めて搜索に掛かった。

「貴様は搜索しなくていいのか？」

俺が半分以上潰したから人員が少ないにも関わらず俺の傍に1人だけ役人が居る。どうせ勝手な行動は慎んでくれとか云う事だろう。

「これ以上勝手な行動をされては搜索に支障が出るので。」

矢張りな。しかし搜索に支障が出ると云うのはおかしい。俺が学者を言い包めていたお陰で直ぐに搜索が出来たのだ。

「わかったわかった。じゃあお前は見張りでもしてくれ。俺はこの餓鬼と罪人であるオルビアを連れていく。」

「そんな勝手な・・・!？」

「罪人を取り締まるのは俺たち海兵の仕事だ。それが脱獄者であれば尚更だ。・・・文句があるのか？それより・・・。」

その後俺は役人と10分くらい図書館の中で話した。

そう云う事で見事に役人を言い包めた俺と役人は外に出て学者の中からオルビアを探し出そうと思ったが・・・学者が居ない。

何故居ないか？

それは俺が証拠隠滅出来なかった時の為にサウロと共に立てた作戦。簡単に言えば軍艦に見つからない様に学者を連れて逃げてくれと云

うこと。10分も話したのは時間稼ぎ。

俺は大佐であるが、上からの信頼は絶大。事実、書類を遅らせたこともなければ海賊相手に負けたこともない。

そのくらしいの信頼を得ていれば軍艦がどの位置から砲撃するかは聞き出せる。・・・とは言ってもサカズキなどから聞ける筈もないのでガープから聞いている。

ガープとは特に分かり合えるので、教えてもらおうと思う前に教えてくれた。この人は何でも分かるんじゃないかと云うくらい勘が鋭い。

それで軍艦に見つからない位置から大きな筏で全員を連れて逃げてもらうつもりだ。原作でクザンが居た所に軍艦が来ない場所は多くあるのだ。

「おい・・・見張りがいたんじゃないのか・・・!!?」

俺は恰も知らない様な、驚いた様な口調で隣の役人に聞く。

「居た筈ですが・・・あ！あそこに倒れています!」

役人はそこで5人程倒れている役人を見つけてそこに駆け寄る。俺もそっちの方にゆっくりと歩いていく。

「如何した!!何があつた!!」

役人は倒れている奴を揺すっているが、返事は無い。5人とも既に息がない模様だ。

サウロが殺したのだろうが、悲鳴も出させずに5人とも殺すとは・・・恐ろしいな。

「亡くなってるな・・・ん?巨人族の足跡?」

「・・・は！！海軍を脱走したサウロ元中將がやったに違いありません！」

「そうか。なら俺は追い掛ける。お前はそいつらを船まで運んでやれ。」

俺はそう言っただけで足跡の方に駆け出す。勿論この足跡の先にサウロはいない。

そもそも巨人族が1人歩いただけで地面が凹むほど地盤が悪いわけではない。

これも作戦の内態とサウロに足跡をつけさせた。体重をかければ多少は凹むから。

つまり俺がロビンを抱えたまま走って行った方向はサウロが行った逆方向で、しかも軍艦が砲撃をする方向でもある。

俺はそのままそっちの方向に走って、やがて海岸線に着く。軍艦はもう直ぐそこまで来ていた。

確かここから見える軍艦は中將が乗ってない軍艦で、指揮は准将クラスの人が執っているらしいな。

バスターコールの際は俺は軍艦に避難して、帰る時も政府の船には戻らないでいいって云われたからこの船にするか。

でも政府の船に荷物が置いてあるから・・・一回戻るか。

そう思っただけで俺は政府の船に戻る途中の様子見の為に図書館へ戻った。その時に学者が居ない事をスパンダインがギャンギャン喚いていたが気にする事ではないだろう。

関わるのは面倒だが、バスターコールについて聞かなければならぬので話し掛ける事に。

「長官、落ち着いたらどうです？」

「これが落ち着いて居られるか！！・・・と、ミナト大佐でしたか。取り乱してすみません。貴方は確かサウロ元中將を追ったのでは？」

「行くには行っただんですけど何処にも見当たりません。恐らく逃げられたのだと。」

「矢張り大佐では荷が重かったですかねえ。」

スパンダインの物言いに一瞬苛々が爆発しそうになるが、今はそんな事をするのも面倒なので適当に流す。

「それでバスターコールはするんですか？学者たちが居ないならばバスターコールよりも軍艦で追った方が確実ですよ。図書館の本は歴史の本文に関する本だけ燃やせば万事解決ですし。ここの文献はいいものばかりですから、それ以外のものは軍の書庫に入れておけばいいと思いますよ？」

「しかし・・・。」

恐らく自身の利益を考えているのだろう。このままバスターコールをしなかったら何の得もないからな。

行っただとしても利益は無いが腹癒せ程度にはなるだろう。

普通の人間ならそんな事はしないが、こいつは普通では無い。人間として根本から腐っている馬鹿野郎だ。

「今回の作戦の決定権は全て長官にあるので俺はもう帰ります。それと補足ですが長官、バスターコールを発動するなら船に戻ってか
らがいいですよ。」

俺はそれだけ言って政府の船に戻った後、適当な海軍船に乗った。

「ミナト大佐！ご無事で！」

そこには何故か俺の部下が居て、俺の心配をしてきた。こいつは俺を何だと思ってるんだ。

そりゃあ見た目は子供だけど身体能力に関しては子供じゃねえぞ。頭の回転も。

「なんでお前がここに居るんだ？」

「それはまあ・・・ガープ中將がコング元帥に頼んで・・・。」

その先は云わずとしても分かった。恐らくこのバスターコールには中將が6人参加しているのだろう、と。

その予感は少しだけ外れて、サカズキの代わりにガープが来たようだった。

ガープは笑いながら俺の方に歩いてきた。バスターコールの時くらい緊張感持ってくれ。

「その娘っ子がう・・・。船室で一緒に休ませてやれ。」

ガープは俺の抱えているロビンを見てそう言って空いている船室に案内してくれた。勿論案内したのはガープでは無く俺の部下。

その船室のベッドに俺はロビンを寝かせて、その手を握ってやった。起きた時に1人じゃ寂しいだろうから。それに母が居ない事を伝えなければならぬ為。

結果から言うとバスターコールは起きた。

しかし死傷者は零。避難船に乗り込んだ人もサカズキが居ないので攻撃されることなく全員脱出できた。

しかし問題はあった。サウロとサウロと共に逃げた学者たちには多額の懸賞金が懸けられた。

特にサウロとオルビア、それにクローバーには億を超える額が懸けられた。それでも生きている分には問題ないだろう。

大抵の相手ならサウロが倒せるだろう。

それでバスターコールを行った後にその情報が入ったので完璧に逃げ切る事が出来た。今は俺がある場所を教えたからそこに向かっているだろう。

それともう一つ問題があった。

それは・・・

「ミナト君！私と云う女がありながら・・・こんな女の何処がいの！？ヒナ心外！！」

こういう感じでヒナがロビンを一方的に攻めて、ロビンは若干涙目になるので俺はロビン側に就く事になる。

因みに今は家に居る。コングやセンゴクに労を労われた後に家に帰って来た。ランは俺がどうすればいいか分からないでいるのを忍び笑いをしながら見ている。

ランはロビンが来る事に大歓迎だったが、この通りヒナは猛反対。折角俺がロビンを慰めた後だと云うのに、ロビンを泣かせようとして如何するんだよ。そもそもヒナはロビンより4歳年上だろうが。

「ヒナ・・・お姉ちゃんならもつと優しくしてやれよ。」

「関係ないもん！そんな娘妹じゃないもん！」

「……うう……。」

ロビンを庇う俺にヒナはロビンが妹じゃないと主張。そりゃそうだけど……。

そんなところにランが漸く救いの手を伸ばしてくれた。嬉しいが少し遅すぎやしないか？

「ほらヒナもやめなさい。ロビンが可哀相でしょ？ヒナはもう大人の女でしょ？このくらい寛大じゃないと生きていけないわ。それにロビンは未だ小さいんだから虐めないの。そんなことじゃミナトが愛想尽かすわよ？」

「分かったもん。やればいいんでしょ。」

流石母親。たったそれだけの時間でヒナを丸め込むとは……感服です。

「わかったら3人でお風呂に入りなさい。」

そうそう3人で風呂に……って今何と？俺の聞き間違いでしょうか？

「いま……なんて？」

「だから3人でお風呂に入りなさいって言ったのよ。」

「なんで……？」

「なんでって……昔から言っじゃない。仲良くなるには裸の付き

合いが大事だつて。それにミナトは毎日ヒナと入ってるじゃない。それとも何？ヒナの体が厭らしくなってきたから興奮しちゃった？なんならやっちゃってもいいわよ？」

そんなこと聞いた事もないわ。それに毎日一緒に入ってるからって3人はダメでしょう。いつも理性を保つのに精いっぱいなのにロビンもいたら不可能に近い。

つか自分の娘を簡単に売るのが、あんたは。俺は決してそんな事はしないぞ。いくらヒナの胸がかなり膨らんできたからって俺は理性を保っている限りはそんな事はしない。

「3人は本当に無理……。」

「あら？女の子2人を盛大に泣かせるつもり？」

そう云われてヒナとロビンを見ると大きな瞳に涙を溜めていた。・

・はあ。俺って貧乏体質だな。

・……いや、人によつては暴走して『ロビンたんハアハア。』とか『ヒナたんハアハア』云つて襲うかもしれないよ？

でも俺はそんなことしないから。してたら俺この家に居ないし海軍何か入ってないし。

「入るから。入るから泣かないでくれ。」

俺は仕方なく入る事を承諾して2人の頭を撫でる。……まあロビンは今母親がいないからこのくらいはしてあげても良いだろう。

「「ホントに？」」

見事なハモリだな。案外仲いいんじゃないか。

「むっ。真似しないで。ヒナ心外。」

「あなたこそ……。」

前言撤回。今度はロビンまで喧嘩腰になってしまった。

「喧嘩するなら一緒に入らねえぞ?」

俺のその言葉を聞いてロビンとヒナは喧嘩をやめて俺の後ろをついてきた。なんか可愛いな。

そんな事を思いながら風呂に入った後3人で一緒に寝た。

バスターコール（後書き）

今回はアンケートを実施します。

ロビンのこれからですね。

次回は4年後まで飛びます。その時は未だ12歳なので一緒に住んでいます。

其の事なんですが、ロビンはどうしたらいいでしょうか？

- 1、15歳くらいで海軍に入隊
- 2、15歳くらいで1人で歴史の本文を探す旅に出る。

取り敢えずはこの2つですかね。

答えていただける方は答えていただきたい。

期限は次の話が終わるころ・・・2週間ほどですが早めが嬉しいです。

それでは感想待ってます！！

新人（前書き）

関係ないですがサマーウォーズ見て号泣していた作者です。

そしてもう一つ関係のない話

海軍は軍隊なのになぜ『大元帥』や『上級大将・大佐・大尉』や『代将』といったものがないのでしょうか。

大元帥は全軍総帥のコングに当たるとして・・・。

この答えがわかる方は教えていただきたい！！

新人

俺が海兵になつてもう4年が経つた。詰り原作16年前だ。俺は15・6になつて身長も180を越した。

そして俺の今の階級は少将。ガープの配属で数々の死線を潜り抜けてそこまで上り詰めた。

ロビンやヒナとは4年間別段何かあつたと云う訳ではない。

監視を強化した金獅子は脱獄が不可能となつて未だにインペルダウに収容されている。

そんな事がありながら俺はガープの配属を離れることとなつて、軍艦を所有する事も認められた。

俺の軍艦は機動力重視で、かなり小さめに造られている。しかもその船は俺が乗らないと進まない様になっている。

これは俺の能力と知識が原因で、水素を燃料にして走る船が開発された。水素が無くなつた時進めなくなる為に俺が乗らなければならぬと云う訳。

帆はあるが、海軍の船と分かる様にとつけられた飾りの様なものなので滅多に使わない。

因みに俺の許に配属される部下は少ない。これも俺の戦い方・・・周りを巻き込む可能性があるので部下は少なめになつた。これが軍艦が小さくなつた原因でもある。

そんな俺の許に、今日は新しく配属される部下が何人が来ると云う。1人は分かっている。未だに同棲している女だから。

「え〜と、海軍本部少将の“飴髪の焰”ミナトだ。よろしく。」

俺は『ミナト専用耐熱演習場』と特別に設置された演習場で校長の朝礼に使われる様な台の上に立っていた。これはセラフが火を吹く

所為でもある。

俺の正面には配属されることとなった新人海兵が数人。そして元々居た部下は俺の横に何列にもなつて並んでいる。勿論台の下だ。そんな状況で俺は部下となる人間を見渡す。何故か女性が多く、俺に色目を向けて来る。それは俺の同棲相手も変わらない。男どもは羨望の眼差しを向けて来る。

そんな部下の中でも気になるのは矢張り2人だけ。

「新人代表挨拶。代表者は前に出てきなさい。」

そんな事必要あるのかと思うが、やらなければならないらしい。グループの時はこんなことなかったのに。

まあこの中で挨拶する様な人間は1人しか居ないし、知り合いだから良いか。その女はスタスタと俺の前まで歩いて来る。

「新人代表、海軍本部3等兵、ヒナです。この度は……。」

そう云う具合に俺の同棲相手が10分近く喋り始めた。まあ聞いて分かる通り俺の許にヒナが配属となった。

これは母であるラン准将の陰謀によるものだ。断言できるのは本人から聞いたから。

それよりヒナの話が長すぎる。途中から俺の内部事情を打ち明けようとしたりするから気が気では無い。

「………これからはよろしくお願いします。」

と云う事で漸くヒナの挨拶が終わって何故か面接をするらしく俺の書齋へと全員が移動した。1人1人面接するらしく、かなりの時間が掛かってしまった。

そんな中で漸く最後の2人になった。そして入って来たのが……

「失礼します！ヒナ3等兵です。」

またお前か……。敬礼して入って来るヒナを椅子に座る様に促して、俺は羽ペンを取る。

「それで、志願理由は？」

これは本来入隊の時に行われるのでは？と思うが海兵への志願理由ではない。俺の部隊への志願理由だ。

最近では自由に選んでいいらしい。俺の時は半ば無理矢理だった癖に。

しかし俺の所に来たがる人間が多いので希望とは異なる所になる。

詰る所この俺の配属になった人はかなりの運の持ち主であると云うこと。ヒナは別として。

「好感が持てました。」

普通上司にそんな事を言えばぶっ飛ばされるが今まで俺の配下になる事を望んだ人間は全員そのような事を言っているので気にしない。そしてヒナは絶対に他の人とは違う好感の持ち方だ。……。いや、女性はみんな同じようなものか。

男は俺の人当たりの良さと実力に惹かれて来る奴ばかりだから。

「で、これからは如何したい？」

「如何したい……。とは？ヒナ疑問。」

「はぁ……。お前なあ、何かあるだろう。『前線に出て多大な戦績を上げたい』とか『書類仕事が得意なので補佐官になりたい』とか。

そう云うのを聞いてんだよ。」

俺はヒナに面接の時は恥ずかしくない様に質問する内容を全て教えて置いた筈なのだが・・・俺の思い違いか？

いや、そんな事は無い。何せ未だ一緒の部屋だ。海兵がどういう仕事をするか教えた時に何度か云ったぞ。

それに面接の時くらいその喋り方はやめてくれ。俺の補佐官がお前を見る目が厳しいぞ。

「あ・・・じゃあ後者でミナト君の・・・じゃなくてミナト少将の補佐官に就きたいです。ヒナ希望。」

お前には確固たる意志は無いのか。つーか俺の事を『ミナト君』と呼ぶな。俺の補佐官が俺を白い目で見てるから！

それに『じゃあ』って・・・それはダメでしょうよ。

もう喋り方については何も云わない。

「無理。」

「・・・・・・・・くすん。」

いや、それだけは一番やってはならんと云った筈だ。俺が悪い人みたいだから。

そして性格が原作と違い過ぎて困る。いや、普段はこれがいいが仕事中は別だ。

「あゝ、説明するから。泣くのはだけはやめてくれ。」

ようやくと俯いていた顔を上げてくれたところで話を続ける。

「補佐官って云うのは中間職なんだよ。それは分かるだろうから説明は要らないだろう。その中間職は基本上位尉官、上位佐官……つまり大尉から大佐でしかねない訳だ。中尉などでもなる人はいるが三等兵では流石に無理だ。分かるな？」

そつだ。先ず三等兵で中間職に就こうと云う事がおかしい。

「でもミナト君は、『書類仕事が得意なので補佐官になりたい』『』って云ったじゃん。ヒナ記憶。」

……全て俺の失態だったか。そんな俺に冷酷な視線を向ける俺の補佐官。なんて惨めなんだ俺……。
まあそう云われた仕方ないけど流石に三等兵で俺の傍に置くと鼻屑としか見られないからな。それにそうすればヒナにとっては鼻屑の引き倒しだ。

「今はダメだ。まあお前が立派な海兵になれば補佐官にしてやる。だから安心しろ。」

そう云う事でヒナの面接が終わった。ヒナが出ていってから補佐官に文句を言われたのは別の話だ。

さて、次は俺が最も目を掛けて育てたいと思う海兵だが……俺の云う事を聞くかどうか。でもまあ希望したんだから聞くのだろう。

「失礼します。」

そう言って入って来たのはちゃんと軍服を着た銀髪の男。少し青み掛かっているが綺麗に見える。

「スモーカー三等兵です。」

その男・・・スモーカーを促して椅子に座らせる。
実際スモーカーが俺の配属を選んだのは不思議だ。まあ規制が少ないと云う理由だろうが。それならガープの部隊でもいい話なのだが・・・まあ本人に聞けばわかるだろう。

「志願理由は？」

「少将の実戦での戦績、誰にでも人当たりのいい性格、少将の掲げる正義など全てに惹かれました。その全てを俺に叩きこんでほしいと思います、ここへの配属を望みました。」

随分褒められたな、俺。実際実践では負けた事は無い。模擬戦では大將や中将たちに揉まれる事はあるが。

しかしそれは全力を出せないから。模擬戦では簡単な悪魔の実の能力しか使えないので相手を一瞬で消し去る程の焔は出せない。

そうやって来ると体術に頼るしかないので負けてしまうことも屡ある。

正義については特に意識した事がない。『海賊は悪』と云うことも言っていないしそれならサカズキの下に就く。

俺が掲げている正義・・・『だらけきつた正義』では無いな。『勝つ者が正義』・・・でもないな。『用心な正義』・・・が一番近いな。

用心深く、どんな小さな可能性でも潰していく正義。そんなものに憧れるとは物好きもいたものだ。

「そりゃどうも。で、お前は如何したい？」

「俺は少将と共に前線に出て戦績を上げて海賊を潰したいです。自分には夢があるので出来る限り早く昇進したいんです。」

夢・・・ねえ。大海賊時代が始まってから治安が悪くなった故郷であるローグタウンの治安回復だろう。それなら俺がやっても構わない事だが・・・本人の意思を聞くべきか。

「そう言えばお前はローグタウン出身の様だな。」

「何故それを!？」

「当たり前だ。お前の調書に出身地くらい書いてある。」

まあ実際は嘘だ。原作を読んで知っていたし、何よりヒナが軍学校で一緒だったスモーカーの事をよく話していた。

その時は少しばかり嫉妬したが・・・友達らしいので如何にか怒りを抑え込んだ。

まあ調書にも書いてあるのは事実だが。

「その治安は悪いと聞いているが・・・本当か？」

俺は偉大なる航路グランドラインと凧カームベルトの帯しか航海をした事は無い。他の4つの海の治安状況など知るわけがない。

だから怪しまれない様に噂で聞いた様な口振りをしている。

「はい。海賊王の処刑以降は急速に・・・。」

「それでその治安をよくしたい、と？」

「はい・・・。」

「そう云う事なら俺の部隊が云つても良いが・・・行くか？」

「ミナト少将！そんな勝手な・・・！！！！」

俺の言葉に反論をする補佐官に少し晴れた様な顔をするスモーカー。特に事件があるわけではないし俺は未だ少将だから偉大なる航路から離れることも如何にか可能だ。中将クラスになるとそんな事は出来ないからな。

「大丈夫だ。元帥には俺から言っておく。それにこいつ等の實力を見るには調度いい。」

「しかしいきなり実践と云うのは・・・！！！！」

「お前も最初は実践だったじゃねえか。それに俺もな。俺が全員守るから気にするな。」

そう云う事で俺は補佐官を納得させてスモーカーの方を向く。

「そう云うことでこれから任務でローグタウンに居る海賊の討伐。そして支部の隊長の交代をする。だから新人全員に初任務だと伝えて来い。」

俺はニヤリと口角を上げて立ち上がり、スモーカーを促す。スモーカーは顔に似合わず元気な声で『はい！！』と云った後に外に出ていった。

「お前もさっさと行け！俺が行くまでの指揮・統率はお前の仕事だろっが！」

俺は補佐官も書斎から蹴りだして電伝虫を取って元帥に許可を取った後に軍艦の許に向かった。

因みに今の元帥はセンゴク。それと同時に3大将も就任が決まった。それが・・・いつだったか。忘れた。全軍総帥にはコングがなった。まあ今はそんな事を気にしては仕方がないので俺の軍艦・・・『アポロン』に乗り込む。オレンジを基調としたカツコイイ船だ。

「さあ行くところか!?!」

そうして船はローグタウンへと向かっていった。

新人（後書き）

感想待ってます!!

アンケートもまだまだ募集しています!!

意図（前書き）

今回は軽くNARUTOネタが入ります。
別にキャラが出てくるわけではないので安心してください。

意図

今は船の上。あらかじ予めタンクに大量に蓄えた水素を使って船を動かしている。燃費が結構悪いので俺も船に居る時は大変だ。

まあその大変な中でも新人の教育はきちんとする。育成係もいるが俺を選んできたのだから俺が直接教えてやらないと可哀相だろうと思つて。

そう云う事で甲板で訓練をしているわけだ。矢張り元々の実力が高いのはヒナとスモーカー。

ヒナは俺が家でしている六式の修行を見ながら真似て修行していたので頷ける。スモーカーも治安が悪い街で育つているので戦闘センスはある。

まあこの2人がトップで、後は矢張り新人。いくら軍学校で鍛えたからと云つても弱い。普通の人に比べれば十分いい体を持っている。しかし海兵としてはいまいちだ。

ロギア自然系悪魔の実を扱う3大将でも元々の身体能力は高い。六式こそ使えないがそれに対処できるだけの動きは出来る。それがその3人を大将にまで成り上がらせた要因でもある。

そう云う事なので俺は戦闘中における基本の動きを教える事に。六式は才能によるので普通の海兵には教えないつもりだ。鍛え方くらいは教えるが。

「じゃあ先ず・・・スモーカー三等兵、前に出て来てくれ。」

俺は最初に見せてそれを真似させながら教える方が早いと思つて一番実力のあるスモーカーを前に呼び出す。

ヒナを呼んでも良かったが、スモーカーの方がやり易いと思つて前に呼んだ。ヒナは不服そうな顔・・・と云うか配属された女性海兵全員が不服そうな顔をしてスモーカーを見ていた。

そんな中をスモーカーは表情一つ変えずに前に出て来た。俺は気ま
ずいのだが、お前は違うのか。

「それじゃあスモーカー……俺に触れてみる。」

俺の言葉にその場に居た全員がキョトンとする。これを体験した事
がある海兵たちは『可哀相に……。』と云った表情をしている。
勿論俺が触れる事の出来ない体だからというわけではない。覇気を
使わずとも俺の意思で触れさせる事は出来るが、今回はそう云う事
では無い。

「如何した？男に触るのは嫌いか？」

ニヤリと口角を上げてスモーカーを挑発する。しかし未だに呆けて
いる。

……はあ。新人はいつもこうだ。伝統行事だと云うのに知らない
のか。つい最近できたものだが。

「……触れる自信がないなら全員で掛かって来い。え〜と……
今が12時だから……7時まで誰か1人でも俺に触れる。でな
ければ晩飯は無しだ。」

これが俺が海兵になってから新人教育の為にしていること。ガー
プの配属の頃からやっていたが、今まで誰も成功させた者はいない。
……いや、成功させた者達はいない。
つまりこれは成功率『0』%の新人への洗礼。

「触れると云っても……ミナト少将の能力で触れる事は出来ませ
んよね？」

新人の中の誰かが控えめな声でそう言ってくる。

「俺の体を水素に変えてもそれは触れたと認める。それで異論は？」

俺は意見を求めるが、誰も口を開こうとはしない。まあ余裕だとも思っているのだろう。

「お前らもやるか？」

俺は新人だけでは厳しいかと思つて熟練の海兵たちに目を移すが全力で首を横に振られた。まあ晩飯抜きになるのは嫌だろうな。

まあ元々参加させる気はないが。なにせ今からする事の意図をこいつらは知っているからする意味がない。まあ飽く迄も自分から《・・・》だがな。

海兵たちのそんな様子を見て新人達の顔は自然と引き締まる。

「それと・・・そうだ。俺に触れた事が出来た奴は1週間何でも言う事を聞いてやる。更に1人で挑んできて触れる事が出来ればその倍だ。」

俺の甘い言葉にやる気を出す海兵共。ある者は『ミナト少将とあんなことも・・・』などとピンク色の妄想をしていたり、またある者は『ミナト少将と熱い修行ライフを！』と熱血な妄想をしているものもいる。

俺は絶対に触れられない自信があるし、もし触れられたとしてもそれは不合格だろう。

まあこの修行の意図はチームワークだ。NARUTOのカカシの忍適性試験を真似して作ったもの。

あれだけ『1人』だけにメリットがある条件を付ければ1人ずつ掛かってくるだろう。そうなれば触れられても結局は意味無いのだ。

まあ1人相手に触れられるほど甘くは無いが。

この洗礼をするのには理由がある。それは意図でもある『チームワーク』の大切さを学ばせる為だ。

俺の部隊は如何しても俺が1人で戦う事が多くなる為、他のものは連携して相手を倒していかなければならない。俺が全員を守る事が出来る技を開発すれば別だが、それまでは誰も死なせない為に協力する事を学んでほしいのだ。

その為の訓練。それを理解するかが鍵だ。

恐らく今は全員が私欲に埋もれているだろう。そこから這い出る事が出来れば、今年の新人は成長するだろう。

「じゃあ1分後に開始。それまで1《》人で如何やって触れる事が出来るか考えておけ。・・・あ！後俺から触れてもそれは触れたには入らないぞ。」

俺はそう言つて30畳ほどの広さがある書斎へと向かった。1人を強調したのは少し分かり易かったかもしれないが軍学校を出て直ぐのひよっこなら大丈夫でしょう。

そう思つて待つていると最初は矢張り1人で新人海兵が入つて来た。

「ノックもせずに入つて来るとはいい度胸だ・・・!!!!」

俺はそいつに座つたまま尋常じゃない程の殺気と覇気を当てる。するとそいつは泡を吹いて倒れてしまった。少々やり過ぎた感があるが、仕方ない。

俺は立ち上がつて部屋の外に放り投げて置いた。

その後20分ほど誰も入つて来なかつたので俺はセラフと遊んでいた。

sideヒナ)

1人目・・・勝手にミナトの部屋に入って直ぐにやられた。そもそもこんな事をする理由が分からない。

訓練だとしても厳し過ぎる。ミナトは空を飛ぶことだって可能なわけだし、六式と云う体術も使える。普通に考えて自分たちが手の届く人では無い。まあそんな事をするならこんな事はしないから制限はするだろう。

そしてそれに対する報酬。妥当と云えば妥当だ。しかし何故あそこまで1人を強調するのか。1人でないといけない意味があるのか。・・・1人ではミナトに触ることも近寄ることも出来ない。でもみんなで行っても近寄ることも出来ないだろう。

彼が以前殺気を剥き出しにしていた時まるで何かに押されるような感じと、真空の刃が飛んできていた様な感覚に包まれた。その殺気は自身に向けられたものでは無かったのにも関わらず、だ。

ミナトはそれを『覇気』と云っていたが、そんなに生易しいものは無かった。

軍学校の先生が覇気について語っていたが、それとは全く違う様な感じ。

近寄ることすら恐い。まさに『畏怖』と呼ぶべき感覚。それが本当の覇気なのだとその時悟った。

今はそんなこと如何でもいい。如何やってミナトに触るか、だ。出来る事ならミナトを自分のものになりたい。それは他の女も同じだろう。完全に目が野獣化している娘もいる。

何故かこの部隊は美人が多いからミナトは誑かされるかもしれない。ならば1人で・・・。

「ちょっと待て。」

そう思ってミナトの部屋に歩きだそうとした時スモーカーに止めら

れた。

｝sideスモーカー

妙だ。

それはヒナも思っている様な顔をしている。それ以外は・・・野獣だ。

何故あそこまで1人を強調するか。それは恐らく

チームワークを崩す為

だろう。飽く迄予想の範疇を過ぎないが、確率が高い。頭のキレるヒナもそれくらい分かっている筈だが・・・

「ちょっと待て。」

1人でミナトの部屋に行こうとする。それを止めて、手招く。ヒナは嫌そうな顔をしてゆっくりと近づいて来る。

｝side out

「なに？ヒナ多忙。」

ヒナはスモーカーに近付きあからさまに嫌そうな顔をして言う。それを見てスモーカーは若干呆れ顔になる。

「少将の考えている事はお前も分かるだろ？」

「1人が如何とか云ってたやつでしょ？ヒナ記憶。」

「じゃあなんで今1人で行こうとした。」

「それは……。ヒナ羞恥。」

ヒナは髪の毛と同じ色に頬を染めてその頬に手を当てる。そしてくねくねとし始める。スモーカーは大体の事を理解して溜め息を一つ吐く。その時スモーカーの心は複雑な心境だったのは言うまでもない。

「どうせ『ミナト少将の愛をこの手に』とかだろ。心配しなくてもあの人はお前のものだよ。それよりもあの人に如何やって触るかだ。1人で行っても絶対に触れねえ。かと言ってこの様子じゃ協力は難しい。」

周りは私利私欲の為にしか動かない獣。つまり思考能力も低下している。逆に身体能力が上がっているかと云うと、そうではない。よってただ馬鹿になっただけだ。

それと協力する事を不可能と悟ったスモーカーは1つの答えを導き出す。それは

「2人で協力するぞ。俺は能力者だがお前は違う。だから俺が陽動でお前が隙を突いて触れる。」

と云うもの。本来なら自分が触ってミナトを自分の能力の指導にあたってもらいたい所をヒナに頼んでいる。

つまり『自分の為では無く仲間の為に動く』と云うチームワークの現れでもある。

「分かったわ。それじゃあ行きましょう。絶対に触るわ、ヒナ決意。」

ヒナはそう言ってスモーカーと共にミナトの部屋の前に行った。

〈sideミナト〉

セラフと遊び始めて20分後、俺の部屋の扉の前に人が来た気配がした。大体のイメージからして2人。と云う事はヒナとスモーカー辺りか。

俺は音もなく自分の椅子に座り直し、入って来るのを待つ。因みにこの部屋は天井まで7m程の高さがあり、壁も固いので室内での戦闘も出来る。

俺は待っているが、一向に入ってくる気配がない。ただ入って来ないだけで何かしようとしているようだが。

「後ろから襲おうなんざ趣味が悪いぜ、スモーカー三等兵。」

椅子から飛び退いて俺は後ろを振り向く。そこには煙で出来た手があつた。

そのくらいの気配は読めるし、スモーカーと直接繋がっているので多少なりとも匂いがする。

その手は俺に襲い掛かってくるが、俺は避けずに水素を煙に纏わり付かせる。

プロミネンス
「紅炎!!!」

そして水素を燃やして、相殺させる。そして扉の方を向くと、そこにはヒナとスモーカーが険しい表情で立っていた。

「普通はそこで後ろから襲い掛かってくるだろ。」

「いくら試験の様なものだからと云って上司の部屋に入っていきなり襲いかかる事は出来ません。」

スモーカーの言葉に俺は呆れて溜め息を一つ吐く。

「甘いんだよ。敵に対して礼儀なんてものは必要ねえ。それに試験って何だ？」

そう、俺が本当の敵なら今頃スモーカーとヒナの首は床に落ちてい

る。試験って云い方をするってことは大体気付いているか。

「これはチームワークの試験かと思いました。」

ヒナは隙のない表情で俺を見ってくる。しかし俺が見つめると『でへへ』と云い、顔を赤くして目を逸らした。

「それでどこら辺がチームワークなんだ？」

チームワークなら全員で協力するだろう。まあその方が効率的と考

えるなら別だがな。

戦場でも頭が鈍って足手まといになる奴は一旦引かせて頭を冷やさ

せるのが普通だ。スモーカーならそのくらい考えられるだろう。

「他の人は思考能力が鈍っていたので敢えて2人で来ました。」

若干話が噛み合っていない気がするが・・・気にしないでおう。

「まあ・・・70点だな。」

点数をつけるとするなら70点。

チームワークをする事が出来ない状況下においてチームワークの発想が出て来たところで50点。

使えない人間は下がらせ、使える人間だけで戦場に乗り込むところで20点。

マイナス30点の理由は勝てないところに乗り込んできたところ。

「如何云う事ですか？」

「これが試験だったことは正解。まあ洗礼みたいなものだけだな。お前が云う通りチームワークの試験だ。お前の考えは大体合っているが・・・1つ抜けている。それが分からねえなら俺に触れても晩飯は抜きだ。」

スモーカーは暫く考え込むが、一向になにも思いつかないらしい。

「先輩・・・。」

そこでヒナが一言呟いて、スモーカーがハツとした様な表情になる。漸く気付いた様だ。

「ヒナが云う通り俺の部下、お前らの上司を使うことだ。俺が態とらしくあいつらに話を振ったのもそれを気付かせる為。あいつらが束になれば俺に触る事くらいは余裕だからな。」

そう、三等兵程度がいくら束になろうと俺には絶対に触れることは出来ない。俺の弱点をよく知る部下でしかそれは出来ない。

まあ俺の直属の部下で大佐以上のやつは俺を殺すことも出来るだろ

う。まあそんなことされる前に殺すが。

「まあ・・・お前らは合格だな。お前らがこの試験の意図に気付いたのは初めてだし、晩飯も喰わせてやる。そう伝えて来い。序でにこの試験の意図もな。」

「報酬はないの？ヒナ消沈・・・。」

「・・・お前ら2人の云うこと一回だけ聞いてやるよ。でも金とかは無しな。」

そう言うと2人は考え込み、不敵な笑みを浮かべた。嫌な予感しかないのだが・・・気のせいだろうか。

「じゃあ俺はこの部隊に居る間はずっと修行つけてください。」

予想はしていた。しかしこの部隊に居る間ずっととは聞いていない。せめて1年とかにしてくれ、スモーカー。

「じゃあ私はいつでも『ミナト君』って呼んで、ミナト君は『ヒナ』って呼んでほしいな！そうになるとヒナ嬉しい!!！」

「それは鼻屑みたいなものだからダメ。それに仕事じゃない時はいつもそうだろ？」

「じゃあじゃあいつでもちゅうして!!！」

「それもダメ。普段誰も見てない所ならいいけど仕事中は普通にダメ。」

実際は誰も見ていない所です。のだった。恥ずかしい。因みにロビンとは何も無いから。

この歳になっても一緒に風呂に入るくらい。ヒナも入りたがるけどそれは流石に俺の理性が戻って来そうにないので止めている。

ロビンは本当に妹の様な存在。俺に好意を抱いているが、それに応える事は出来ない。ので出来る限りの事しかしていない。逆に言えば問題の無いことくらいは俺が嫌でもしなければならぬと云うこと。

「え〜。じゃあ今日の夜は一緒に寝て？」

「それも毎日のことじゃん。」

「だっていつもはロビンが居て2人きりじゃないもん。」

「わかったわかった。だからさっさと行って来い。」

俺がそう言うとヒナは嬉々とした様子で俺の部屋を走って出ていった。スモーカーがかなり落ち込んでいたのは・・・気にしないでおう。

因みにいつも3人で寝ているわけではない。俺だって体の年齢的に・・・ねえ？ヒナの年齢的にも・・・ねえ？やることあるわけだからその時は違う部屋で寝てもらっている。

ロビンには流石に未だ早いのでこんな事は見せられない・・・いや、もっと歳とった方が見せられないか。

取り敢えずそう云う事をした次の日は必ずランにからかわれるのがオチだ。

そんなことを考えながらその日は終わっていき、俺の書斎とは違う私用の船室にヒナが入って来て一緒に寝た。

まあ直ぐに寝たわけではなく、何かしらの事をしてから2人で抱き

合いながら寝た。

意図（後書き）

ある意味今回でヒナのヒロインが確定しました

感想待ってます!!

アンケートも実施しています!!

ローゲタウン ? (前書き)

今回から漸くローゲタウン編です。

ローグタウン？

訓練をしながらの航海を数週間。長旅が終わって漸く地に足をつけた。

長い間海の上に居て海慣れすると偶に陸酔いをする事がある。現在進行形で俺はそうであった。

「揺れねえと気持ち悪い……。」

陸酔いとは普通順応性の低い者になるものだ。しかし俺の場合は順応性が高過ぎてなっている。

まあ順応性が高いと云う事は陸にも直ぐに慣れるので少し休めば大丈夫なのだが……矢張り気持ち悪い。

そして今陸に居ると云う事は俺が居る街は始まりの街ローグタウン。街の中では無く港だが。

そこから見える景色は悪く、更に俺の気分を悪くさせる。

あるところには首だけがない死体。

銃で撃たれて蜂の巣になった死体。

腹が切られ、腸はらわたと黒く濁った赤い血が流れ出ていながらも生きて、苦しそうに呻いている人。

焼け爛れて人体の原型を取り留めていない死体。

基本的に全て死体だが、俺は生きて苦しむ人を見るのが苦だった。スモーカーが何故普通の人間に出来あがったのか不思議なくらい。俺なら確実にスモーカーとは真逆の方向に走り出していただろう。つまりスモーカーにとってはこの街はそれだけ大切なもので、守りたいものと云うことだ。それが好きな人が居るからか、愛する家族

が居るからか、大切な友達が居るからか・・・それは分からない。聞く必要もないし、聞くのは野暮だ。

今俺がしなければならぬ事はスモーカーがこの街を大切にすることではなく、陸酔いを治して治安を回復させること。

それから30分くらい経って、陸の揺れない感じにも慣れて来た。云っておくが30分も（・）ではなく30分しか（・・・）だ。

その間スモーカーがそわそわして落ち着かない様子だったのは云うまでもない。ヒナは俺の傍に居てくれた。セラフは気分の悪い俺を尻目につがつと肉を食っていた。

「先ずは街の調査。出来る限りの戦闘は避けて、海賊や悪党が拠点としている場所を憶える。それを地図に書き込んで1つずつ潰していく。スモーカーの家の近所は大体分かるから良いとして・・・この街広過ぎやしないか？」

俺はスモーカーが所持していた地図を開いて作戦を説明するが、この街の広さに驚いてしまう。

スモーカーの家があるとところから半径5キロはスモーカーが全て書き込んでいるが、全体の面積の約2割。単純に端から端まで50キロは在る計算だ。

馬鹿げているとしか言いようがない。島自体がその大きさである事は普通であるにしても、街自体がそこまで大きいのは有り得ない。

「この地図は島全土の地図ですよ。ローグタウンだけでなく他の街も荒れているので序でに。」

序でって・・・どれだけ広い範囲の治安を回復させて且つ維持すればいいんだよ。普通は不可能だ。

現にこここの支部に居る人は治安を回復すら出来ていない。それは当

り前ではあるのだが。
その現状を知っているのでスモーカーは敢えて支部に行かず本部に勤めようと思っただけらしい。

「まあ気持ちは分かるが・・・人員が足りなさ過ぎる。ただ殲滅するなら未だしも守りながらだろ。」

俺の部隊が人数の少ないことで有名な事を忘れてもらっては困る。時間を掛ければ出来ない事もないだろうが、何ヶ月なんてものじゃなく何年と云う時間が掛かる。これは治安を維持して、完全に回復するまでの時間だ。

そんなに時間を掛けるわけにはいかない。今だってロビンは家で一人で寂しい思いをしている筈だ。

母であるランが居るからと云って何年も会わないとなると俺も不安で仕方ない。

「それでも俺は守りたい。」

俺に守りたいものがある様にスモーカーにも守りたいものがある。俺の守りたい人の内の1人の事を考えていた時にそんな事を言われれば、俺はやるしかない。

本当に馬鹿だと思う。なんで人の為にここまでするのかと思う。

昔はこんなこと有り得なかったが、今では有り得ている。こっちに来て少し変わってきているようだ。

そんなものは要らなかつたのに、あるのだから仕方ない。

「・・・はあ。お前女に苦労するな。」

「いきなり!?!」

「まあ気にするな。取り敢えずこの支部の基地に案内してくれ。」
俺は船番を数名置いてスモーカーに基地への案内を頼んだ。基地はローグタウンにしかないのでその道中は海賊の集まるところを調べていった。

「初めまして。今回任務でこの島の治安を回復するように命じられた海軍本部少将のミナトです。」

俺は基地の中に案内されたので、改めて挨拶をした。スモーカーなどは違う部屋で待機しており、俺の補佐官である大佐1名と中佐1名は俺の隣に居る。

「こちらこそ初めまして。いきなりのご来訪で多少疑いましたが、申しわけありません。」

一方の基地の大佐の隣にも補佐官であろう人が2人居た。

「いえ、正式な任務では無いので。」

「そうでしたか。・・・あ、自己紹介が未だでしたね。私の名前はセイナン。海軍大佐です。」

セイナンの顔は何処にでもいそうな人の様な感じで、パツとしないしかし体つきはいいので大佐と云うのも頷ける。そして頭も良さそうなので、何故治安が維持できないのか分からなかった。それから全員の自己紹介が終わって、俺は話を切り出す。

「この島の治安状況ですが・・・はっきり云うと最悪ですよ。人

「が生きる街とは思えない程に。」

「そう……ですね。」

「それだと子供の成長にも悪影響を及ぼします。俺もこの年齢だから言える事ですけど子供の頃に見たものや悪い印象はいつになっても残っているものなんです。なので出来るだけ早い対処をした方がいいですよ。」

「確かこの時期だとたしぎが子供で、ローグタウンに居る筈だ。その結果は海賊嫌いと云うものになったが、そうでない子供もいる。例えばぐれて窃盗などを簡単に出来るようになったり、殺してさえも簡単にできる様になったりなど、そう言った子供の方がどちらかと云えば多い。」

その負の連鎖で治安は悪くなる一方である。

「分かってはいるんですけど……。実行に移すのが困難で……。」

「困難とは？」

海兵が活動を遮られるほどの困難なんてそうあるものではない。それともこの大佐より強い海賊が居座っていると云うのか？
……いや、そんな海賊が居たならばとくに偉大なる航路グランドラインに入っているだろう。

「実は海賊たちは常に民衆を人質に取っているんです。」

「そう云う理由か。海賊ならやりそうなことだ。」

「さて、如何したものか。人質を取られてはこっちは満足に活動なん

て出来たもんじゃない。

海賊の殲滅は愚か、拠点を探ることすら困難だろう。

それを解決する打開策はあるが・・・俺としてはあまりやりたくないな。かなりの人員を割いて、しかも動きがかなり制限される。

しかし・・・仕方のないことか。俺は意を決して口を一回キュッと結んだ後に開く。

「潜入捜査だ。」

ローグタウン ? (後書き)

ローグタウンは読みやすい程度の量で10話ほどつくらせていただいています。

感想・評価待ってます!!

アンケートの方も絶賛受付中です!!

ローグタウン ? (前書き)

今回は完ぺきに鋼をパクリました。

とはいってもネタだけなんで。そして少し最後の方がくどいかな？

ローグタウン？

「潜入捜査だ。」

俺のは発言を聞いてセイナン大佐を筆頭に支部の人間は頭に疑問符を浮かべる。俺以外のこつち側は呆れた表情をしている。

そんな表情をされても困る。俺なりに考えた結果がこれなのだから、文句を言われる筋合いはない。

しかし少しだけ言葉に誤りがあるか。

「一番力のある海賊の下に潜入して内部破壊します。」

これでいいだろう。そう思って周りを見てみると依然変わらない表情を見せている。

何が悪いと云うのだ。海賊同士の勢力図ならあるだろうに。

それにトップが3つあって実力が拮抗していても3つ潰せるくらいの戦力はある。

「それはいいのですが……。」

何かがおかしい。さつきからそわそわと落ち着かない様子で。

作戦なんか考えずに一気に攻めたいと思っっているのか？それとも他に何か理由があるのか？

……と、今は味方の詮索をしている場合では無い。出来るだけ早く任務を終了させて家に帰りたい。

ヒナが居るから俺的にはいいものの、ロビンが俺を欲している……気がするのだ。勿論あいつは女としてだろうが俺はあいつを妹としか見ないぞ。

そう決めたんだ。この決意はその内揺らぐだろうが。

・・・いや、そうじゃねえよ。俺は取り敢えずさっさと家に帰ってゆつくりしたいだけなんだ。邪念を振り払え！ミナト！

「何か他に問題でも？」

俺がセイナンの質問に答えず脳内で煩惱と理性の戦争を繰り広げていると俺の隣に居た大佐が俺の代わりに聞いてくれた。

「既に私たちの顔と名前は割れているのでそれは難しいかと。」

「それなら俺たちがやるからいいんじゃないですか？」

「それも無理だと思います。街には至るところに監視用の電伝虫が取り付けられているのであなた方の顔も割れていると思います。」

何処まで用意周到な海賊なんだよ。普通の海賊だったら監視用の電伝虫なんか1体手に入れられただけで凄いで。

そんなものは海軍みたいな政府に関連する組織でないと手に入れない。まあ略奪をすれば別だがな。

と云う事はここに居る海賊は至るところの海軍基地に潜入して奪つて来ている。若しくは政府に何らかの繋がりがある海賊・・・七武海の配下つてところが妥当か。

そして最も確率が高いのは

この支部が海賊と手を組んでいる

だな。セイナンの態度からしてこの確率はかなり高い。

あれだけ鍛えられた体を持ちながら、東の海イーストフルごときの海賊に負けることなど普通は有り得ない。

それに街を歩いてみたが人質を取られている様な雰囲気ではなかった。

しかしセイナンが黒幕と決まったわけではない。今日来た俺たちにはセイナンが黒幕だと証明する確固たる証拠がないのだ。

もしかするとこの支部全体が海賊と協力していて、俺が問い詰めたところでその事に対して白を切ることも考えられる。

だが、全員が納得して海賊と協力関係にあるとは考え辛い。正義の名の下に、治安を回復させたいと思って入って来た者もいるだろう。・・・いや、いなければおかしいのだ。

まあ決まったわけではないので様子見をしよう。証拠を掴むまでは行動は慎もう。まだ七武海との繋がりも否定できるわけでもないし、直接政府と繋がっている可能性も否定できなくもない。

まあ後者であれば俺たちが手を出す事は難しいので有り得ないし、前者でも態々イーストブルーの島を占拠する必要もない。

結局はこの部隊の人間が海賊と手を組んでいると云うことになってしまふのだが。

「それでは少し部下達と話し合って今後の方針を決めたいと思いますので何処か広い会議室の様な場所に案内してもらえますか？」

行動が出来ずともあらゆる状況に対応できるように作戦を立てることくらいは出来る。まあ伝えるのは最も可能性の高いことだけだが。

「いいですよ。それでは案内させましょう。」

セイナンは立ち上がって俺たちを部屋の外に追い出す様にして、その後部下に案内させて扉を閉めた。

その時に不敵な笑みを浮かべたことから、黒幕はセイナンで間違いないだろう。

そんな事を考えながら俺たちは会議室に連れられた。会議室の中に

は監視用電伝虫が7体。盗聴用電伝虫が5体か。俺がここに来るのを見越しての事が、それとも毎度のことか。取り敢えず俺たちは1人ずつ席に座る。軍艦に乗る人数が入れる会議室だからかなり大きく、国会議事堂の様な感じで俺を中心に扇形に広がっている。

「じゃあ先ず・・・この支部が海賊に手を出せない理由。それは民衆が人質に取られているかららしい。」

俺の言葉に部下たちはそんな海賊に対して不快感を憶える。まあ自分の正義を持つている奴なら当然の反応だ。

「それで街には監視用電伝虫が取り付けられており、俺たちの顔も割れているので潜入して内部破壊することも無理だ。」

「じゃあ如何するんですか？」

「まあ・・・考え中だ。」

俺はそれから20分ほどこの街に関する話をして、今回の会議の本题に移る。

「そう言えば前に『マイケル』が『アレッタ』と旅行に行ったらしい。そのとき偶然『サイト』と『ティアナ』に出会ったんだと。」

その会ったところが海の有名な所で『エリン』と『リエ』と『マキ』も来てたんだとき。それでその7人で行動してたら、迷っちゃったらしい。

その時に『イリヤス』と『ナイセン』って云うこれまた知り合いの知的なカッブルに会ったらしい。それで漸く帰る事が出来ると思ったら・・・これがまた迷っちゃったらしい。

その9人で彷徨って3時間くらい経って困り果てた表情をしていた時に地元の『デステ』って人に会って道を案内されて帰る事が出来たらしい。
全く馬鹿な話だよなあ。」

俺は始終笑顔で話し続けた。普段大事な会議で俺がこんな話をするわけがないので部下はポカンとしている。
しかしスモーカーは少し違った。

「それでその後は如何なつたんですか？」

喰いついてきた。流石はスモーカーと云うべきか。

「その後迷子になつた時に『イリヤス』と『サイト』が恋に落ちた。勿論浮気だ。」

「その後は？」

「未だ聞きたいか？お前つて案外こういうの好きなんだな。」

「はい。」

「じゃあ話す。」

浮気した『サイト』だがその事が『エリン』に見つかつてな。『イリヤス』に浮気の事を『ナイセン』に云うと云って脅したんだ。それを聞いていた『アレツタ』が『ナイセン』を守つたんだ。それで浮気もなくなつて万事解決だ。
どうだ？面白かつたか？」

「気分が悪くなりました。トイレに行つていいですか？」

「おう、行つて来い！」

スモーカーは俺が云うとトイレに向かつて決して焦ることなく歩いていった。流石はスモーカー。俺が伝えたい事をきっちり理解してくれたようだ。

さて、伝えたのはいいが後はスモーカーが俺の思い通りに動くかどうかだが・・・あいつのことだ。何とかしてくれるだろう。後は・

「お前ら仕事だぁ！！」

他の奴をどう動かすかな。

く side セイナンく

なんだ今の会議は。途中までは普通の会議だった。それこそ俺たちの云っている事を信じてそのまま伝えるだけの猿でもできるものだ。矢張りあいつは餓鬼だから考える事が苦手らしい。どうせ実力もななくコネだけで上まで上つて来た糞野郎だ。

そんな奴に謙らなければならねえとは・・・反吐が出るぜ。

それはあいつの部下も同じでトイレに行った。変な上司を持つと部下が辛いよなあ。あいつには何かやってこの支部に引き込んでやるう。

顔つきや身体つきからしてかなり出来そうだな。金を少し出してやればあんな上司なんか直ぐに見放すだろう。

まあそれはあいつらが帰る時にでもすればいいだろう。

それよりも今の会議。一体何の意図があってあんなしょうもない話をしたんだ・・・って考えるだけ無駄か。どうせ餓鬼だから自分の友達の事をみんなに知ってほしかったんだらう。

その証拠に全員がポカンとしていた。
それじゃあ今日も行きますか。賄賂の受け取りに。確か今日は……
あそこか。きちんと変装して行かないとな。俺が民衆に海兵だと云
う事がばれたらダメだから。
俺はそうして海賊の様な服装で、黒いサングラスと白いマスクで顔
を隠して隠し扉から街に出た。

（sideスモーカー）

トイレに行つて監視用電伝虫がないことを確認して個室に入る。そ
の後ポケットからメモ帳とペンを出してミナトのさっきの発言を思
い出していく。

確か『マイケル』、『アレッタ』、『サイト』、『ティアナ』、『
エリン』、『リエ』、『マキ』、『イリヤス』、『ナイセン』、『
デステ』、『イリヤス』、『サイト』、『サイト』、『エリン』、『
イリヤス』、『ナイセン』、『アレッタ』、『ナイセン』だ。

それぞれの頭文字イニシャルを取ると『m』、『a』、『s』、『t』、『e』
、『r』、『m』、『i』、『n』、『d』、『i』、『s』、『s』、『s』、『e』、『i』、『n』、『a』、『n』。
これを話を区切った時で分けると『mastermind』、『i』
、『s』、『s』、『e』、『i』、『n』、『a』、『n』……そう云うことか。

『mastermind』は『首謀者』。『is』は『は』。『s』
、『e』、『i』、『n』、『a』、『n』のこと。つまり『首謀者はセイナ
ン』ってことだ。

ミナトは会議中ずっと喋っていて、セイナンと話している時も普通
に話をしていただろう。その考える暇のない時にあれだけの文章を
考えられるとは……流石だ。

頭の切れならミナトは誰にも負けないだろう。そんな彼の下で学べ
るとは運がいい。矢張り彼は期待通りの人だ。

しかしこれが分かっても如何やってそれを証明するんだ？

確固たる証拠を簡単に掴ませるわけはないし、街中に監視用電伝虫があるとも言っていたので独断は不可能だろう。

そしてその監視用電伝虫は確実にこの基地に繋がっているので動きを制限される。

まあ考えはあるのだろう。

しかし態々俺たちに伝える必要はあったのか？実際に分かったのは俺だけで出来る事なんて……あるじゃねえか。

1つだけ、俺にしか出来ねえ事が！！

俺はそうしてトイレから出てある場所へと向かった。

ローゲタウン ? (後書き)

最後の方が少しくどかったですかね？

それでも感想をくだされば作者は元気が出ます！
アンケートもまだしてますので。

ローゲタウン ? (前書き)

疑問に思っていたことが1点あります。

ダズのスパスパは鉄で構成されていますよね？それで打撃と鉄を斬れない程度の斬撃なら効果無しだと。

ではヒナのオリオリはどうでしょうか。ヒナの檻は鉄と同じ高度と云う説明もされているのでヒナにも当然効きませんよね？

そのあたりがわかる方、説明していただきたい。

それでは本文どうぞ。

ローグタウン ？

会議の後俺は会議室を出てセイナンの部屋に向かった。理由は云わずとも分かるだろうが確固たる証拠を掴む為。

「勝手に入られては困ります!!」

しかしセイナンの部下に止められてしまう。こういう時の為に俺は地位を上げて来たんだ。

「少将命令だ。」

俺がそう言つとセイナンの部下たち2人は一瞬たじろぐ。そう言えばこいつ等は正義のコートを羽織ってないから准尉以下ってことか。

「お前ら・・・お前らの正義はあるか？」

本当は覇気で気絶させて勝手に侵入するのもいいと思つたが、こいつ等はもしかしたらセイナンの反対な人かもしれない。

・・・いや、確実に反対派だろう。俺の質問に対して2人とも黙り込んで俯いている。

「あるならその正義の為に動け。いつまでも上の云い成りになつてようじゃ成長はしねえぞ。」

まあ正しい正義を掲げる上司の下で働いて、云う事を聞いていれば成長はする。それが間違つた正義でも成長はするだろう。

しかしいつまでも云われていた通りにやっている様じゃその人を超

す事なんて出来ない。現に将官は自分の正義に直向きに生きている。それだから強くなれるんだ。

・・・って云うのは全てガープの受け売りだが。でもみんなが同じような事を言っている。それは俺も正しいと思う。

『だから俺は勝手に行動することもあれば偶に違反を犯すこともある。しかしそれが自分の正義なら曲げちゃならねえ。俺が“だらけきった正義”を掲げる様に!!』とクザンが云っていた。

まあそんなことで俺も影響されて勝手なことをすることもある。現に俺は入っていた任務を蹴ってこっちに来た。

その時にセンゴクは愚か全軍総帥であるコングにも怒られたが。まあそこは御愛嬌と云う事で許してもらった。

「自分は海賊たちを追いだしてこの街の治安を良くする為に海兵になりました！しかし・・・セイナン大佐は海賊から賄賂を受け取って自分たちだけ楽な生活を送っています。そうならば治安は悪くなる一方で・・・。」

「何故抗議しない。」

相手がこの基地の隊長でその周りを取り巻く人物がいくら強かろうが人数の差で勝てない事もないだろう。

基地の割合で多いのは三等兵など兵卒だ。これは何処の基地でも、部隊でも変わらない。

それに将校全員がセイナン側についているわけでもない筈だ。

「セイナン大佐には誰も敵いません。それが偉大なる航路で“グラントライン 飴焰しえん”と恐れられるミナト少将でも。」

完全に俺の実力を計り損ねているだろう。

俺が高々支部勤めの、しかも最弱の海と呼ばれる東の海の大佐に負

イーストブルー

けるだど？そんなこと有り得ねえだろ。

支部つてことは本部に比べて3階級落ちだぞ？つてことはセイナンは大尉だ。

そんな奴に負けるわけがない。実際俺は大将と肩を並べて戦える程だ。

因みに俺の愛称は色々と変わる。と云うか人によって呼び方が違う。グランドラインの海軍なら“飴髪の焰”か“焰帝”。海賊や支部勤めの海兵は纏まりがない為今の様に“飴焰”と呼ばれたりもする。

大体が通り名を略して呼ぶが、俺的には“飴髪の焰”がいいが、通り名だが何となく“焰帝”が良かったりする。

まあ俺の呼び名はいいとして、普通に負けたら吃驚^{びっく}だな。

「理由は？」

俺が負けると云うくらいなのだからそれ相応の理由があるのだろう。剣の腕前が凄^{すご}いとか。・・・でも名が売れてないつてことは凄^{すご}くても相手じゃない。

悪魔の实の能力者とか。・・・これは炎を操る能力者以外だったら倒せる。

六式使いとか。・・・俺も六式使いだから絶対的に有利。

そう考えていくと俺の弱点が知られていると云う事になるな。でもそれは本部の人間以外知らない筈だ。なにせ俺は海賊相手に弱点を見せた事がない。情報が漏れる訳ないのだ。

「セイナン大佐は・・・抗いようのない武器でしか攻撃しないからです。」

「要するに毒ガスとかってことか？」

「はい。」

セイナンは首領・クリークみたいな奴だな。しかしそうなってくれば火炎放射も装備している可能性もある。それに普通の銃でも摩擦で火花が散るから俺にとっては最も戦いにくい相手だ。

この弱点があるから俺の部下には基本的に銃器を使わせていないのに。

何はともあれ戦い方は分かった。これで作戦を練ることもできる。そしてセイナンの戦い方を教えてくれたと云う事はこいつ等にも正義の心はあると云うこと。つまり俺がセイナンの部屋に入れると云う訳だ。

「じゃあお前らは自分たちが思う様に行動しろ。俺はやる事がある。」

そうは云ったものの勝手に動かれては困る。

「やっぱついて来い。」

セイナンの部屋の造りは分からないのでその2人を連れて入る事にさっきの部屋の何処かに隠し扉があると云う事は分かるが、俺が見る限り見当たらなかった。

それはセイナンかその部下くらいしか知らないだろう。

そう思つて2人を連れて部屋に入って、隠し扉を見つけた。その隠し扉は俺が座っていたソファの下にあつた。まさに灯台下暗し。

実際この1つ下の階の部屋は壁に囲まれていたので分かる筈もなかった。セイナンはどれだけ用心深いんだ……。

「電気はどこだあ？」

俺は指先に水素を微量出してそれを燃やして灯り代わりにして辺りを見回す。そうして見つけた電気のスイッチのもとに歩み寄って、そのスイッチを押す。

「こりやまた・・・あいつは真面目に働けばもっと昇進できるでしょうに。」

灯りがついたその部屋は機械だらけ。50を超えるモニターに尋常じゃない程のキーボード。1つに繋げてあるのでいちいち違うのを弄る必要がない様にしてある。

そして指示を出す時の為のマイクが数個。他にも色々あるが、今回はモニターとキーボードくらいしか使わないので云う必要もないだろう。

取り敢えず俺は電源をつけて、全てのモニターを起動させる。そこには街や基地内に取り付けられた監視用電伝虫から送られる映像が映し出される。

そして今は基地内の映像。これで俺たちの会議を傍観していた事が分かる。

今はそんなものが見たいわけではないのでキーを叩いて映像を街のものに変える。

「あ、スモーカーじゃん。・・・ってことは自分が何をするか理解したみたいだな。」

街中の映像を映しているとスモーカーが走っている場面を映し出ししてくれた。スモーカーの行動を確認した俺は次はセイナンの動きを確認する為にキーを叩いて映像を変えていく。

・・・あった！スモーカーの後を追う様に行ってるってことは今回はそっちに用があるんだな。だったらスモーカーが居るので調度い

い。あいつに現場を押さえてもらおう。
それで俺は・・・することがねえな。作戦の変更も必要なさそうだし。だったらセイナンがどのようにして俺たちに見つからずに基地外に出たかだな。
恐らくこの部屋の何処かに隠し扉がある筈だが・・・。

「あの、ここ押せるみたいなんですけど・・・。」

セイナンの部下の1人が降りて来た梯子の直ぐ隣の壁を押すとそこがゆっくりと横開きになる。この基地は隠し部屋が幾つあるんだ。

「じゃあそっちに行くか。」

俺とセイナンの部下2人でその開かれた扉の方に向かって歩いていく。

まあその先には大量の札束とか変装用の道具とかが置かれていた。金は証拠になるので部下2人にセイナンの書斎まで運ばせた。

その後に俺はすることもないのでスモーカーが分かっている時の為にセイナンをその隠し部屋から追い掛けた。

その隠し部屋からは滑り台の様になって、直接外に出る事が出来た。それが基地外だった事が驚きだ。

ローグタウン ? (後書き)

そういえば何日か前に総合が1000越えてました。
いつもご愛読ありがとうございます。

前書きの件ですが出来れば意見をください。
感想なども待ってます。

ローグタウン ? (前書き)

今回はスモーカーのオリジナル技出ます。

でも原作知っているミナトが教えた技なので誰かのパクリと云う...

...

ローグタウン？

（sideスモーカー（本人よりの他人称））

短い銀髪を風に揺らし、着崩れた服をはためかせながらスモーカーは走っていた。

トイレでミナトの考えに気付いて飛び出し、家に向かって走っていた。首謀者がセイナンと云う事は監視用電伝虫は直接海賊のアジトに繋がっていないと云うこと。

この街でよく問題を起こした事のあるスモーカーが海兵になったなどの情報はこの街に入ってきていない為、1人で潜入しようと考えた。そしてその潜入する海賊は家の近くを拠点としていたこの島で一番縄張りの広い海賊団。実質NO.1と云うことだ。

そんな所に潜入と云うのは危ないが、スモーカーの体は煙で構成されているので大抵の攻撃なら受け流す事が出来る。

そう云った事も考慮してミナトはスモーカーに命じたのだが、誤算が1つあった。それはセイナンが毒ガスを使って攻撃すること。

いくら自然系ロギアと云えど気体は体の中に取り込んでしまう。ロギアとて万能ではないのだ。

その事に気付いていないスモーカーはただ只管ひたすらに家に駆けて、漸く家についた。そしてガラの悪そうに見える服を選んでそれを着込む。因みに原作時のスモーカーが正義のコートでは無く黒いコートを着た感じ。それに葉巻を2本銜えてサングラスを掛けているのでかなり敵つい。

そのことを確認したスモーカーは家を出て、海賊のアジトの前まで来た。

「この海賊団の噂はよく耳にする。そんな海賊に俺もなりたくてな

あ……俺をこの海賊団に入れてくれねえか？」

アジトの前で見張りをしていた船員クルーに半ば脅す様にして入団を迫る。本当はこんな事はしたくないが、それが治安の回復の為ならそれでいいと思った。

「あ、ああ。お前の様な厳つい野郎は大歓迎だ。中に入ってお頭に挨拶でもしてきな。」

船員はスモーカーの脅迫に対してビビりながらも平静を保ったふりをしながら中に案内した。アジトは地下にあると云う事は知っていたが、鉱山の様になっていると云う事は知らなかった。しかも暗いそんな中を1人で歩かせるとは……と云うよりもこんな暗いところをアジトとする海賊団の気がしれない。

暫く歩くと奥の方から光が見えて、そこから声が聞こえてきた。そしてその方に歩いていって

「すまねえが俺も混ぜてくれねえか？俺もこの海賊団に憧れてんだ。見張りから許可を貰って入って来たが……あんたが船長だな。俺をこの海賊団に入れてくれねえか？」

これはスモーカーにとって最も口にしたくないこと。それだけ、ここにいる海賊たちを恨んでいる。

自分たちの街を住処として略奪などを行い続けている奴らだ。恨んでも当然だろう。

「いいぜえ……。お前みたいな奴は大歓迎だ。……じゃあ新しい仲間を祝して飲み直すぞ野郎どもおお！！！」

『うおおおおおお！！！！』

船長が右手を大きく上げると、船員も釣られて雄叫びを上げながら右手を上げる。そして各々が好きなように飲み始める。

ここは普通乾杯し直すのが当たり前な様な気がするが、海賊相手にそんなことを云う気もない。

ただ与えられた酒を少しずつ飲み、周りの人間と打ち解けることだけをやる。まあ話すだけでも嫌なのだが、近くで息が掛かったりすると虫唾が走る。

それを耐えながらも酒の席は進んでいき、10分後くらいだろうか。予想していなかった事が起きた。

それは酒の席にセイナンの来訪。

その時にサングラス越しに目があったが、気付かれる事は無かった。しかし何故セイナンがここに来たのか。・・・いや、それは何となく理解は出来ている。何故今日ここに来たのか、だ。

恐らくセイナンがここに賄賂を受け取りに来たと云うことだろう。それにしても変装しているセイナンによく気付けたものだ。セイナンの変装が下手なこともあるが。

「ウェイフ・・・さつさと遣いな。」

セイナンの第一声がそれ。その言葉を聴き逃す訳がなかった。

この言葉を聞き逃していたら、一体何の為に屈辱を味わったか分からなくなる。

「いつもつれねえ野郎だ。」

ウェイフと呼ばれた海賊頭もその言葉を聞いて直ぐに懐を探って札束を出した。

その光景も見逃さず、確りと目に焼き付けた。これを見逃せば、さつき同様何故屈辱を味わったのか分からなくなる。

しかし今取り押さえる訳にもいかない。状況的に言えばスモーカーが不利だ。

少なくとも相手の海賊団は50を越える人数がここにいて、しかも支部に勤めているとはいえ大佐が居る。普通に考えたら大佐の相手だけでも厳しい。

だから不服にもここは取り逃がすしかないのだ。こんな時に自分の無力さを思い知らされた。

昔から喧嘩にだけは自信があった。しかし今は如何だ？高々雑魚が大人数集まっているからと云ってビビっている。これでは何のために海兵になつたか分からない。何のために海兵になつた？それは強くなる為？・・・あっているが少し違う。

俺の守りたいものを全力で守る勇氣と力を手に入れる為

そう思つて海兵になつた筈だ。それなのに今のスモーカーには勇氣が全くない。

悪魔の実・・・それも最強と謳われるロギアを食べたから力はある。それなのに言い訳を考えて、逃げようとしている。

そんなことで本当に大好きな街の治安を回復できるか？・・・いや、出来るわけがない。

ならばする事はただ一つ。来る途中にミナトから教えてもらった技を試す・・・。

「『ホワイトボックス
玉手箱』！！」

これは相手を箱型の煙の中に包み込んで、脱出できなくする技。勿論その標的はセイナンとウェイフ。その2人を包んでしまえばあとは他の奴らを殺るだけ。

2人は見事に嵌ってくれたが、時間にも制限があるので他の奴をさつさと倒したい。スモーカーはそう思つて腕を敵に向ける。

「『ホワイト・バズーカ』!!」

これもミナトから教えてもらった技。これは半径50cmの大きさの煙の塊を拳サイズにまで圧縮させて弾丸の速さで撃ち込む技。要するに白い空気の弾丸だ。それに更に回転を加えているので掠っただけでも確実に怪我をする。

それを短時間の間に何発も撃ち続けて、残り5人。これはウェイフとセイナンも合わせての数だ。

「よくもやってくれたじゃねえか……。」

「貴様は俺の部下にしてやろうと思っていたが矢張りここで殺すでしょう。貴様はこれをつけておけ。」

『ホワイトボックス玉手箱』から出て来た2人は額に青筋を浮かべてスモーカーを睨む。そしてセイナンは自分の分とウェイフの分だけガスマスクを出す。

他のやつらは毒を受けようが関係ない。自分達だけでも生き延びれば。

そんな考えをする奴に無性に腹をたてるスモーカーだが、状況的には不利だ。毒ガスを撃ち込まれればスモーカーには抵抗のしようがないのだから。

「死ぬ!! 『青化水素』!!」

セイナンは自分のポケットから1つの球体を取り出してその栓を抜いてスモーカーの方に投げた。

その時スモーカーは死を覚悟した……。

ローグタウン ? (後書き)

玉手箱はモリアの影箱を大きくした感じですね。

感想・評価・誤字報告なんでも待ってます。

アンケートもまだやってます。

このアンケートが終わったら悪魔の実際のアンケートでもとろっかな

…… (ボソッ)

ローグタウン ？

俺は監視用電伝虫から見た景色と自分で記憶しているこの街の地図を頼りに海賊のアジトへと走った。

結構頑張つて走ったので案外に速くついて、その見張りをしている奴を張り倒して中に侵入した。

中は鉱山の様になっていた。・・・正直こんなところを拠点にするとは陰気な奴らだ。それに海賊なら1つの場所に留まらず海に出る。そんな事を思いながら進んでいくと、何やら声が聞こえてくる。既にセイナンの後ろ姿が見える距離だ。

「死ね！！『青化水素』！！」

・・・は？青化水素？即効性の神経毒の一種か？そんなものこの密閉空間で使えば確実に死ぬぞ。

見たところ防護服を着ておらずガスマスクだけだから神経ガスの癖に皮膚から取り込む事は無い様だ。

しかしスモーカーはそのガスマスクすら持っていないだろう。だとしたら俺が・・・。

「よおセイナン大佐。こんな所で毒をぶちまけようなんざ馬鹿なことをよく考えるな。」

俺はガスが漏れ始めている球体を見ながらセイナンとスモーカーの間に立ち塞がる。

「はっはっは！貴様はここで死ぬのだ！今更貴様にばれようが恐れる事は無い！」

セイナンは俺が来た事に驚く事もせず、ただ高らかに笑った。

「ミナト少将！危険です！」

スモーカーは多少噎せ込みながら俺に逃げる様に叫ぶ。・・・今俺がここに居るからお前は生きているのだが。

それからなんやかんや会話があつて1分が経過するが、俺とスモーカーのどちらも倒れない。

「な、何故毒ガスが効かない！！！」

その事にセイナンは驚きを隠せず、うろたえ始める。

「種明かししてやるよ。今お前が使った『青化水素』の本当の名前は『シアン化水素』。それを気体にしたら『青酸ガス』。まあ『青化水素』は呼び名の1つだ。その化学式はHCN。名前の通り青酸化水素だ。

俺の能力は太陽の基になっている原子を操る事が出来る。つまり水素を操れるってことだ。

それでHCNの周りを囲んで結合させて違う気体に変える。つまり毒素の無いものに変えるってこと。

まあ噎せてるスモーカーみたいに多少息がしづらいがな。」

まあ今説明した通りの事だ。ガスが辺りに充満する前に水素で覆ったわけだ。水素は無色、青化水素は薄青色だから半球状に滞っているのが分かる。

まあ結合していつているから無色になっていつてるけどな。

因みに補足として青酸ガスは空気中の0.05%を占めただけで十分な毒ガスだから入っているのは少量だった。

『・・・・・・・・・・・・・・・・？？？』

俺以外の人間は何の事か分からずに頭を傾げている。

まあこの世界に化学式の話がわかる人間が居たら吃驚^{びっくり}だ。水素で動く船も俺が関わったから出来たもので、この世界の住民だけでは不可能。

化学と云うよりは航海術のほうが発展しているので仕方のないことではある。

しかしそれなりに化学も発展している。まあこれは武器に関しての事だがな。核は作れないにしても古代兵器を作るだけのものがある。それにエースが原作時に使っていたストライカーもスモーカーが使っていた三輪車も化学が成し遂げたものだ。・・・いや、この場合は科学か。

「取り敢えずお前らに手は残されてないってことだ。」

既に相手には戦う手段が残されていない。

もしこの水素が充満している密室で火花の一つでも散らせたら如何なるかは目に見えている。

だからこの中では銃も使えない。剣で火花を散らす事も出来ない。つまり能力者である俺たちが圧倒的有利。

まあセイナンが自分の命を惜しまずに俺たちを道連れにするような奴なら別だがな。

「くっ・・・・・・・・！！」

セイナンは何も出来ない事が分かったのか唇を噛みしめる。そして俺は既にガスの放出をやめた球体の周りから水素を取り払う。

「スモーカー、後はお前がやれ。」

「・・・無責任ですね。」

俺はスモーカーに任せてスモーカーの後ろに回る。そして薄暗いのは嫌いなので『100万・過熱^{オーバーヒート}』で岩盤を蒸発させて光が差し込むようにしておいた。

上は特に公道と云う訳でも他人様^{ひと}の家があると云う訳でもないので関係ない。あるとすれば海賊の見張り小屋くらいだ。

まあ案の定見張り小屋があつたのでそこも蒸発させておいた。

そのことで水素も抜けていくのでセイナンとその隣に居る空気と化している山賊頭が有利になるが、別に構わないだろう。

それよりも・・・

「うるさいぞお前ら。」

何やらギャンギャン喚いている奴を何人を覇気で沈めて、スモーカーの方を見る。この時のスモーカーは七尺十手を持っていないので攻撃手段は拳と俺が教えた技くらいしかない。

本部に帰ったら十手を開発してもらおう。

「貴様なんぞ毒ガスを使わずとも楽勝だ！！ウエイク、行くぞ！！」

セイナンとウエイクと呼ばれた海賊頭が左右に別れる様に走りだす。スモーカーはそれを見ているだけで別段何かをする気配はない。

未だ能力を使っていない？

・・・いや、俺が来た時は煙が少しだがあつた。だから能力の事は既に2人にはばれているだろう。

そんな事を考えているとウエイクと呼ばれた海賊頭がスモーカーに駆け寄る。そして腰に携えていたククリ刀を2本抜いて斬り掛かる。

まあ自然系相手にそんなものが通用する訳もなく、それはスモーカーの気を引きつける為のものに過ぎないだろう。セインンはスモーカーの気がウェイフに引かれたのを見て小さめの火器を取り出す。全く何処から出てくるのだろうと思うが、そればかりは俺も害を被るので外に出る。

『ぶるぶるぶるぶる・・・ぶるぶるぶるぶる・・・』

「おわっ！！」

その直後に持っていた受信専用の電伝虫が鳴き始める。正直これがいきなり鳴くとビビる。

心を落ち着ける為に深呼吸するが、その声をいつまでも聞きたいわけではないので直ぐに受話器を取る。

「はいこちらミナト。何処の区域だ？」

「こちらD区のヒナ三等兵です。」

「ああ。それでどうだった？」

「はい。予定通り進んでいます。ヒナ順調。」

「そう。ならいい。それで他の区域は如何なってるか分かるか？」

「はい。何処も予定通りに進んでいると思います。ヒナ推測。」

「これで治安も回復されるな。それじゃあ俺もスモーカーが勝ったら基地に戻るわ。」

「ご武運を。ヒナ心配。」

「死ぬみたいな言い方するな。俺もスモーカーも無事に戻るよ。」

俺は一通りの報告を聞いた後通話を終える。何処の区域も順調に行
つてるみたいだからいいか。

まあスモーカーが聞いたら反対される作戦だが最も効率的なのでこ
の作戦を取った。

「さあて。そろそろ終わった頃かな？」

俺は電話を切った後にもう一度穴の中に入った。

ローグタウン ? (後書き)

ミナトの能力によって結合しましたので、誤解がないように。

ローグタウン ? (前書き)

今回はスモーカーの戦闘です

ローグタウン？

（sideスモーカー（完全な他人称））

セイナンが火器を取り出してからミナトは逃げる様に穴の外に出た。スモーカーはその事に気付いていない。と云うよりは気にも掛けていない。

スモーカーはただ敵を倒す事だけを考え、集中していた。

「喰らえ！！貴様が煙人間だろうが炎は受け流せねえ筈だ！！」

セイナンは火炎放射をほぼ零距离でスモーカーに放とうとする。確かに物理的とは言えない火炎による攻撃は自然系ロギアであつても防ぐ事は難しい。

しかしそれは熟練度の低い者に限る。クザンやボルサリーノ、サカズキやミナトと云つた自然系ロギアの熟練者であれば容易に受け流す事が出来る。

まあミナトの場合炎だけは受け流せないが。

それ以前に今名前を上げた人物たちは火炎放射すら撃たせないまま、圧倒的な力で薙ぎ倒すだろう。

シュボツ！！！！

火炎放射の引き金を引いて銃口から炎が放出される。

「煙だから防げるってこともあるんだよ。」

スモーカーは炎が放たれると同時に自分の体を煙にして腹部から銃

口に向けて煙を放つ。すると2つはぶつかり合い、見事に相殺される。

「「なッ!?!」」

その様子に敵2人は驚嘆の声を上げる。

それもそうだろう。自分たちはこれで確実にスモーカーを焼き殺せると思っていたのだから。

しかしスモーカーは炎を煙で相殺した。原作でもあつた様に炎と煙が互いにぶつかり合えば、相殺される。要するに両者が両者の天敵であると云うこと。

煙が炎と相殺される事など知らないセイナンとウェイフは驚嘆の表情を見せながらも直ぐに正気を取り戻して距離を取る。

この辺りの身のこなしは流石大佐と海賊頭と云ったところか。

「これでお前らに打つ手は無い。観念して御縄につきな。」

敢えてウェイフの迫りくる凶刃を煙になって躲し、敢えて火炎放射を撃たせて煙で相殺する。そうする事によってスモーカーは2人に勝ち目がない事を教えたのだ。

「ま・・・未だだ!!未だ終わっちゃいねえ!!俺が・・・俺がこんな青二才の三等兵に負けるわけがねえ!俺は海軍大佐だぞ!!!?」

何処から湧いて出ているのか分からない程大量の武器をスモーカーに向けて放ってはみるが、矢張り全て擦り抜ける。

槍・剣・刀・小太刀などあらゆるものを投擲し、銃ピストルを構え銃弾を発射してはみるものの、それはスモーカーに触れることすら出来ない。これで完全にセイナンは戦意喪失。

武器を使い果たしたセイナンはがっくりと項垂れる。

「（くっ・・・！こんな化け物相手に出来る訳がね×！あのセイナンを倒す奴なんて俺には倒せるわけがねえ！！逃げなければ・・・」

死ぬ！！！！」

そう思ったウエイフはスモーカーの視線がセイナンを捉えている内にゆっくりと足音を立てない様に逃げようとした。気配も消して、ただ見つからない様に。

「何処行くんだ・・・海賊。」

しかしそれは不可能だった。

急に気配が消えた事を怪しんだスモーカーが後ろを振り向いたのだ。つまり自分が上手く逃げようとした為に取った行動が裏目に出たのだ。

ウエイフは自分の行動を呪った。そして何よりも自分の非力さを呪った。

「チィ！！こんな所で死んでたまるか！！」

ウエイフは自分の攻撃が効かないと分かっているながらも生への執着から2本のククリ刀を握り直してスモーカーの居る方へ走った。そして一矢報いようと、スモーカーの腹を横薙ぎに斬りつける。

バサッ・・・！！

スモーカーの腹は斬れなかった。しかしスモーカーの服を切り、そ

して腹に一閃の薄い切り傷を負わせた。

その状況にスモーカーとウエイフは何が起きたか分からずに、目を見開く。スモーカーの腹部には微かだが痛みが、ウエイフの手には僅かだが斬った感触が残されていた。

これは別段覇気と云うものでも、スモーカーが自身の体を煙に変えなかつたわけでもない。これはウエイフの『生への執着』。

自身が殺される・死ぬと思つた時に唯一解放される、火事場の馬鹿力。それは身体的な力でもあり、精神的な力でもある。

それをウエイフは自身の凶刃に宿したのだ。そうする事によって煙を切る事が可能になった。

「（今ならやれる！！）」

ウエイフの動きは格段に良くなった。それを何とかギリギリのところでスモーカーは躲していくが、徐々に避けきれなくなってくる。

「死ぬ！！」

そしてウエイフは両の手を大きく振り上げ、スモーカーの体をクロスに斬りつける。

その時スモーカーもウエイフと同様に自身の死を覚悟する。

「（死ぬ！！）」

そう思つてスモーカーは目を瞑る。しかしウエイフの刀が自身の体を傷付ける事は無かつた。

これはウエイフの気持ちによるもの。ウエイフは確実に勝てると最後に油断して、自身の力だけで断ち切ろうとした。

それはつまり火事場の馬鹿力を使わない。簡単に言えば自身の真価を解放しているリミッターを油断により閉めたのだ。

そうしたのでスモーカーを斬る事が出来なかった。

「・・・何が起きたかわからねえが・・・終わりだ!!!」

スモーカーはウエイフより早く立ち直って未だに呆けているウエイフの腹に自身の持てる最高の力を込めた拳をぶち込む。

「グボハアアツ!!!」

ウエイフの体は見事に吹っ飛び、背中を壁に打ち付けて気絶する。スモーカーはそれで満足して今度は戦意喪失して魂の抜けているセイナンの許に歩み寄る。

ウエイフは自身の死を覚悟したのにも関わらず、殺されなかった。結局は無駄な力を使ったに過ぎなかったのだ。

「お前は海軍の恥だ。自身の欲を満たすが為に権力ちからを利用する大馬鹿たれだ。お前の様な人間が居るからこの街は・・・。この街はこんな事になったんだ!!!それを償う為に・・・

死ね!!!!!!」

今のスモーカーの目は将に海王類がキレた時に見せる、獰猛な獣の目。それはスモーカーが自身の恨みの為だけに動いていることを証明している。

「雲の宝剣!!!」
ミルキー・エスパード

スモーカーは右手を雲に変えて、それを鋭利にしたものでセイナンの首を斬り落そうとする。

ガキンツ！！

しかしそれは飴色の長い髪を1つに括った少年の持つ一本の刀によって防がれた。

「そこを退いて下さい・・・！！ミナト少将！！」

「嫌だね。俺がここを退いたら俺は大切な部下を1人失っちまう。」

ローゲタウン ? (後書き)

上手く書けたかどうか分からないので感想を頂ければ幸いです!!

ローグタウン？

俺が穴の中に戻るとスモーカーは憎しみを露わにして魂が抜けて頂垂れているセイナンの前に立っていた。

それを見て俺は辺りを見回して、刀を探す。そして一本の刀を見つめる。

決している刀とは言えない代物だったが、スモーカーのあの技を止めるには刀が必要だった。

「お前は海軍の恥だ。自身の欲を満たすが為に権力ちからを利用する大馬鹿たれだ。お前の様な人間が居るからこの街は……。この街はこんな事になったんだ！！それを償う為に……

死ね！！！！！！」

今のスモーカーの目は将に海王類がキレた時に見せる、獰猛な獣の目。それはスモーカーが自身の恨みの為だけに動いていることを証明している。

俺はその時に漸く刀を拾う。

「『雲の宝剣』！！！！」

『雲の宝剣』ミルキー・エスパーダ……それは俺がスモーカーに教えた技の中で最も殺傷能力が高く、岩でも軽々と切断できる技。

これはクロコダイルの『砂漠の宝刀』デザート・エスパーダを基にして作った技だ。

ガキンツ！！！！

そしてスモーカーが雲の刀をセイナンに向けて振り下ろされる途中で割り込む事が成功。何とか受け止めて、凌いでいる。

「そこを退いて下さい……！！ミナト少将！！」

「嫌だね。俺がここを退いたら俺は大切な部下を1人失っちまう。」

俺に憎しみだけの眼を向けてくるスモーカーに対して俺はニヤリと口角を持ち上げながら告げる。

そう、ここで退けば俺は自分の部下を失う事になる。それだけは死んでも嫌だ。

それが期待の新人であるからとか、同じ自然系ロギアだからとか、不器用なヒナに出来た友達だからとかそう云う理由じゃない。

ただ……失いたくねえものは失いたくねえ。

それ以外に理由もなければ、そんな理由は要らないと思う。理由なんて所詮は後から付けるもの。今は失いたくないと云う感覚で動いているだけだ。

「この糞野郎のことですか……？！こいつは死んで償わなければならぬ罪を犯したんです！！民を欺き、自分の欲を満たした……！！そんな下郎を……あなたは部下だと云うのですか！！」

完全に勘違いだな。俺も後ろに居る下郎は部下だと思ってるねえ。

「ちげえよ。いまここで俺が退いて居なくなる部下はスモーカー……てめえの事だ。」

「ッ！！！！？」

「お前の目には憎しみしか移っちゃいねえ。そんな時にこいつを殺して如何なる？ 一時的にお前の欲は満たされるだろうよ。」

だがなあ・・・それはこいつとやってる事が同じだ。憎しみから来るこいつを殺したいと云う欲望のままに動く事はこいつが私利私欲の為に民衆を欺き続けた事と同じなんだよ。

お前はそんな奴になりたいのか？ 私欲の為に本能に突き動かされる賊になりたいのか？

・・・違うだろ。お前はここの街の治安を回復させてみんなの笑顔を取り戻したいんだろ？

あわよくば俺からヒナも奪ったりとか。いつかは全軍総帥になつて海軍の組織体制を変えるんだとか。夢もあるだろ。

お前は私欲の為じゃなく、夢の為に生きる人間だ。だからこの男だけはお前に殺させねえ・・・！！」

始終笑顔で話す俺に対してスモーカーの表情から憎しみの色は消えて、徐々に暗くなっていく。

そして俯いたと思つたら急に顔を上げる。その時は既に技の発動を止めていた。

「しかし！！俺は・・・俺は・・・！！」

珍しいものを見せられた。

俺の前でスモーカーが・・・泣き崩れた。

声を必死に押し殺す様にして、手で顔全体を覆いながら地に膝を着く。そんなスモーカーの様子を俺は直視できず、自身の正義のコートをスモーカーに掛けた後にセイナンとウェイフを担いで穴の下に向かった。

「まあ・・・あれだ。適当な時間に基地に戻って来い。」

そう云つて穴から出て、俺は2人を基地にまで運んで、確りと捕縛させておいた。

さてと、俺はこれからどうしようか。これまたする事がなくて困つてるんだよ。

もう少し俺が活躍できる作戦にすれば良かったか……。

『ぶるぶるぶるぶる……ぶるぶるぶるぶる……』

そんな事を思っていると電伝虫が再度鳴り始める。いちいち報告はしなくてもいいのだが、嫌に肉刺まめな奴らが揃つたものだ。

「もしもし、何か問題でも？」

「いえ、全部隊の作戦が完了したようです！」

「あゝ、じゃあ基地まで連れて来てくれ。……手伝ってくれた海賊を。別に約束を破るわけじゃねえから安心しろと伝えて連れて来い。他の部隊にも連絡よろしくな。」

「はい！失礼します！！」

まあ作戦も上手くいったようだし俺がここから動く必要もなくなつたわけだ。

作戦と云うのは簡単に言えば海賊を利用すること。

俺たち本部の実力を示したところで実力のある海賊を『手を貸せば今回は見逃す』と云う餌で釣つて利用した。

しかし利用したからと云つて約束を破るつもりはない。それはある意味でも信用が下がるから。

まあスモーカーがこんな事を知れば猛反対されただろうが、今回は特例だ。スモーカーもいなかったので実行した。

こついう事をした理由は手っ取り早く終わらせる為。態々自分たちで時間を掛けて海賊を殲滅するよりも手伝ってもらった方が効率がいいし、後処理も楽だ。

「ただ今戻りました！！」

続々と俺の部下たちが戻って来て、この街に巢食っていた海賊たちを連れて来た。その中に協力させた奴もいれば捕えられた奴らもいる。

それを見て俺は溜め息を一つ吐く。
何故なら海賊の量が異常に多いから。1日でこの島全土の海賊たちを基地の前に集めた為に、人の列が限りなく続いている。

「これで全部隊だな。えゝ、それじゃあ海賊たちは解散。その時は適当に欲しい人材を連れて行っても構わない。名もない海賊の処理は面倒だからな。
それとこの街には二度と近付かない様に。それを他の海賊にも伝えておけ。もし来たら俺が灰も残さねえからよろしく。
えゝと、他には・・・特に無いな。後一時間以内にこの島からな
いと1人残さず俺が殺すから。それじゃあ解散！」

俺が殺気を込めたまま話し終わると海賊たちは港へ向かって一目散へと逃げて行った。今まで使っていたアジトの財宝の回収もしないくらいの逃げ様だ。

俺はそれを見て軽く微笑んで基地の中に入った。

「スモーカーが帰って来たら会議を始めるから全員会議室へ集ま
てろ。」

そう言葉を残して。

ローゲタウン ? (前書き)

なんだか最近パソコンに向かう気力が起きない

ローグタウン ？

海賊たちを逃がしてから30分ほど経った時、漸くスモーカーが帰って来て、会議室の中へと入って来た。

その顔には未だに涙の筋が残されていたが、それについては誰も突っ込む事はしなかった。

「それじゃあ始めるぞ。議題・・・と云うより話し合いの題名は云う必要もないだろうが、確認の為に一応伝えて置く。

先ず1つ目はセイナンの部下の処分。処分と云ってもこれからどうするか決めるだけだ。」

2つ目はこの街の復興作業についてだ。元帥や全軍総帥に聞かないと分からないが復興作業は次の大佐が来るまで俺たちがする事になるだろう。だからその分担当。」

セイナンの部下と云ってもセイナンと関わりが深く、一緒になつていた者は本当の処分だ。その場で処刑なり、何をされてもおかしくは無い。まあこれもセンゴクやコングに問い合わせなければならぬが。

街の復興作業は大体俺たちがやる事になるだろう。ここに勤めてくる大佐の初仕事は修繕工事や死体・海賊の宝の回収などは嫌だろうから。

まあ俺も早めに偉大なる航路グランドラインに戻らなければ本部の戦力が薄くなる。どうやら最近は何事も多くて中将クラスが出張っているようだ。

「じゃあ先ずはお前ら、如何したい？」

セイナンの部下が固まって座っている方に目を向けて問う。

ここに居たいだろうが民衆からの信頼を失ったので居辛いだろう。かと言って本部で通用する程の根性も実力も持っていない奴らばかりだ。

偉大なる航路グランドラインの入り口を守る街の海兵ならもつと屈強な兵が集まるべきなのだ。

「私たちは・・・ここで働きたいです。」

暫く全員で考えた後に1つの意見に纏まる。

ここで働くって言っても信用もないだろう。それに何より気になる点が1つある。」

「お前ら2度と今までみたいな惨劇を起こさない自信はあるか?・・・いや、自信があつたとしても実力不足で惨劇は起こるだろう。」

次に如何に優秀な指揮官が来ようと1人で街中の治安を維持できる人間なんて奴は来ない。所詮は大佐だからな。

その時に必要となるのがお前ら部下だ。指揮官の云う事を忠実に実行できるだけの実力がねえとダメなんだ。

それがお前らには出来るか?」

原作でスモーカーが務める様になって治安は回復したと云っていたが、それはスモーカー1人による力では無い。

スモーカーの力は大きかつただろうが、他の海兵も確りと鍛えられていた。そのお陰でもある。

指揮官の命令を実行できるのも実力のうちだ。

「今の自分たちにはあなた方の様な実力はありません。しかしこの街は我々の大切な宝。」

その宝の為なら命を捧げる事など安いもの。しかし私たちが死ねばこの街の治安は維持できない。

ならば強くなつて見せます。海軍の誇りに掛けて。」

まあこの支部のやつらは俺の部隊の兵卒にも勝てない様な奴ばかりだからな。

自分でその程度の実力つて分かつているなら鍛えるか諦めるかの2つだな。それでこいつらは鍛える方を取った、と。

でもそんなに短期間で強くなれる程人間は出来てないからな。次期大佐が来るのが1か月後だとしてもそれしかないんだ。たら精々本部の軍曹止まりか。それでもここで一番実力のある大尉がそれだから三等兵などになると本部の一等兵がいいところだ。

それに街の復興作業もあるので十分には鍛えられない。

「まあそうしたいなら勝手にしろ。俺たち本部の人間はお前らに修行をつけるほど優しくはねえからな。」

そこで一先ずこの話は中断。次は街の復興作業の役割分担。

……え？支部連中が不満そうな顔をしている？

そんなこと知った事では無い。事実を伝えたまでだ。そもそも自分たちで鍛える気がないのならやめてしまえ。

「次は復興の役割分担だ。これは死体の埋葬、家屋の再建、廃屋の処分、生きている民衆の生活確保、怪我人の治療などいろいろある。人員は出来るだけ家屋の再建と民衆の生活確保に割きたい。だから人数の少ない支部は怪我人の治療と死体の埋葬に回れ。」

それで本部の人間が家屋の再建と民衆の生活確保。廃屋の処分は俺が1人でやるからいいだろう。」

それじゃあ各自行動開始！！」

俺の言葉と同時に全員が敬礼をしながら立ち上がり、各自行動へと移った。残っているのは俺だけ……な筈のだが。

「何でヒナが居るんだ？」

ヒナだけがその場に残った。俺はそれを無視しようかとも思ったがそれは恋人として如何かと思うので声を掛けた。

「ヒナもいっしょにやる。ヒナ懇願。」

「・・・まあいいけど。仕事中は敬語使えよ？ヒナだけ敬語使ってなかったら他の部下に示しがつかないだろ。」

「ふにゃあゝ／＼／＼／」

頭を下げるヒナの綺麗な桃髪を撫でる。するとヒナは目を細めて気持ち良さそうな声を上げる。

全く、小動物みたいで可愛い奴だ。

本当にかわいい。俺と会ってから原作とはかけ離れて俺に甘えてくるところがなんとも言えない。

「じゃあ少し待ってる。俺は本部に電話しないといけないから。」

そう言つて電伝虫に手を掛けて本部に連絡する。勿論これは普通階級の低い者に聞かせていいものではないのでヒナを少し遠ざけて。

『もしもし、こちら海軍本部です。』

「こちら海軍本部少将のミナト。センゴク元帥殿に御代わり願いたい。」

『わかりました。今直ぐに。』

知らない人が出たので直ぐにセンゴクの方へと回線を回してもらった。

『もしもし、ミナト少将だな。なにか問題でも発生したのか？』

暫く経ってセンゴクが出てくる。俺が任務中に問題を発生させた事は無い筈だが。

「いえ、今回の任務中にローグタウンの支部のセイナン大佐が海兵としてあるまじき事をしていたので捕えました。

その後任を本部の方で取り決めて頂きたい次第で連絡をさせていただきました。尚その際には出来るだけ指揮能力・統率能力・戦闘能力に優れた人材を選出して頂きたい。」

『随分と優れた人材をそこに送りたいようだな。』

「はい。いくら最弱の海とはいえ偉大なる航路入ろうとする海賊が集う街ですから。若い芽は早めに摘むべきですし。」

ここは東の海の偉大なる航路への唯一の入り口だ。そこにはいずれ政府の脅威となる海賊も立ち寄るだろう。

その時にその海賊を取り逃がすか捕えるかによって政府の運命は大きく変わってくる。原作で云うルフィの様に。

まああそこまでの人間が他に東の海に居ると思えないが、一応だ。それに並大抵の人間が派遣されてきたところで治安は維持できないだろう。

『確かにお前の云うことも一理ある。しかし本部の戦力が薄くなってきたことも知っているだろう。』

東の海イースト・ブルーごときに戦力は割けないんだ。分かるな？」

確かに本部の戦力は年々落ちて来ている。未だ3大将がいるから大丈夫なもの、それを落とす海賊だっているのだ。念には念を入れる。俺の考えがセンゴクやコングにも色濃く影響している様だ。

「確かにそうですが・・・次期の戦力なら俺が保証しますよ。今年は粒が揃ってますから。

そう云う事ですから本部の心配はしないで、こっちに送ってきてください。それでは。」

『おい！ちよっ・・・』

センゴクが最後に何か言いたげだったがこれ以上は時間が勿体ないので切った。こっちは街の復興をしながら海賊が来たら潰すと云う事をしなければならぬのだ。要らない議論をするつもりはない。それに戦力ならある。今年はスモーカーとヒナの2人が俺の配下になったんだ。10年後には立派な将校に育てて見せるさ。

「じゃあ行くか、ヒナ！」

「うん！ヒナ出発！」

ヒナは桃色の髪を揺らしながら小走りで俺の許に来る。

「敬語使えって・・・。」

「2人きりの時ならいいでしょ？」

そう云いながらヒナは俺の腕に自分の腕をからませる。

「わかったからその腕を離せ。」

「ええ。ヒナ悲観。」

俺に涙目＋上目遣いで訴えてくるヒナ。そんなもの見せられたら・・・断れないでしょ。

「まあいいや。作業の時は離せよ?」

「ヒナ了解!!」

・・・はあ。嬉しいやら哀しいやら・・・。

ローゲタウン ? (後書き)

感想を頂ければ更新頻度が上がるかも……!!!!?

ローゲタウン ? (前書き)

ついにあの子が……!!
しかも独自設定。

ローグタウン？

ヒナと腕を組みながら俺は廃屋が立ち並ぶところへと歩いてきた。途中で銀髪の誰かに『やれ不謹慎』だの『いつか奪ってやる』だの云いそうな目で睨まれたが気にしないでおこう。どうせあいつは戦闘面においても頭脳面においても俺には勝てん。勿論恋愛面でも。

「それじゃあ焼きますか。」

廃屋の処理と云うのは木が腐ったり折れたりしている使い物にならない家を焼く・・・と云うより俺の能力で蒸発させることだ。

無駄な木材をゴミ処理場に持っていくよりは大分効率的なやり方だ。まあ別に全ての家を消す訳ではないので文句を言われる筋合いはない。

「おにーちゃんたち今から何をするの？」

何と云うか、こう、トロンとした聞くだけで癒される様なおっとりとした声が俺の耳に入ってくる。そしておにーちゃんと呼ばれた事に萌える・・・じゃなくて。

「こんなところに女の子が一人で歩いてたら危ないぞ？」

俺の真下にはまだまだ小さな、小学1年生にも満たないくらいの少女が居た。その少女の髪は黒く、ショートカットだ。瞳の色も黒。しかし服装は明るく、ピンクの花柄のワンピースと云った子供らしいもの。

目もパツチりと大きいので大きくなればかわいくなるだろう。・・・
・・・今でも十分かわいいが。
それよりもこんな娘におにーちゃんと呼ばれた事に萌え・・・じゃないって。なんでこんなところに居るんだ。

「こわいひとたちがいなくなったから、おうちにかえってきたの。」
要するに海賊がここらを溜まり場にしていた為に違う所に避難していたと云う訳か。それで俺たちが全て追いつた為帰って来た。まあそんなところだろう。

「そうか、よかったな。お母さんは如何した？」

飽く迄も俺は何もしていない様な口振りで話す。こんな子供に恩を売る様な事はしたくないからな。勿論大人にもするつもりはない。まあこんな子供にそんなことをしたところで何かが起きるわけではないからな。どうせ『ありがとう！おにーちゃん！いいひとなんだね！おにーちゃんだーいすき！』と云われるだけ。
・・・いや、それも良いな。

因みに俺はロリコンでは無いぞ？

「お母さんは・・・ころされちゃったの。」

俺の質問にそれだけ呟いて俯くその少女。ひしひしと悲壮感が伝わってくるのは気のせいではないだろう。

そんな様子を見て、そんな雰囲気を感じて俺とヒナは顔を見合わせる。俺の顔もヒナの顔も申し訳ないと云った表情で、特に俺は罪悪感を半端じゃないほど感じている。

しかしこういう時に限って言葉が出て来ないもの。俺がたじろいでいるとヒナが俺を一瞥した後一度溜め息をついてしゃがんで少女と

目線を合わせる。そして綺麗な白く透き通った肌をしている手を少女の綺麗な黒髪の上に乗せる。

その一連の行動は自然過ぎた。まるでいつも自分の子供をあやすかのようなものだ。

そうされた少女は一瞬驚いた様な表情をするが、気持ちいいのか目を細める。まるで小動物の様だ。・・・この表現何処かで使った気がするが・・・いいか。

「ねえ、あなたのお名前を教えてください？ヒナくんが・・・知りたいな。」

今『懇願』って言おうとしたんだろうな。でも子供だから分かりやすい言葉に・・・。いい子だよ、ホント。

「私の・・・？」

不安そうな表情でヒナを見た後に俺の方を見てくる。その時に俺は初めて瞳の中を見たが、その少女の瞳には哀しみと憎しみしか宿っていないかった。まるでいつかのスモーカーの様な眼だ。

それを見て一瞬俺の体はピクリと跳ねる。

だってそうだろう？こんな小さな少女の目にそれしかないなんて。

普通この歳ならキラキラして、希望を宿している筈だ。

それなのに哀しみや憎しみと云ったもの・・・つまり絶望などしか宿されていないかったら、普通は驚く。

まあ目を見ただけでここまで読みとる事が出来るのは少数だろうが。

「そう、あなたの。教えてくれないかしら？」

ヒナの言葉に少女はもう一度ヒナに視線を移す。その目は依然変わらないが、ヒナの目を本当の意味では捉えていないのでヒナは気付

いていない。

「たさ「ミナト少将！！海賊が攻め入って来ました！」・・・。」

その少女が口を開き、名前を言うところで邪魔が入る。

「海賊う！？港に軍艦が泊まっていれば普通攻め入ったりしてこねえだろ。」

その少女の事は一先ず置いておいて、俺は走って来た部下に対応する。

普通は軍艦が泊まっていれば攻め入って来ない。いや、逆に逃げる筈だ。それでも逃げないのは自分たちの実力を過信しているか、それとも本当に実力があるかは分からない。

しかしどちらにしても俺たちが勝つことに変わりはない。

「どうやら略奪を目的としている様です！」

「それで、相手の海賊の名前は？」

「船長の首に5百万ベリーが懸けられている海賊団です！」

その言葉を聞いて俺はその部下の頭を軽くどついてしまった。

「そのくらいなら俺に報告することもねえだろ！そんな時間がありやさっさと始末して来い！！」

「はいい！！！！」

そう言って俺の部下は泣きそうになりながら走って帰って行った。

本当に無駄な時間だった。全世界指名手配犯でもない様な奴を俺の耳に入れる暇があるなら自分たちで如何にかしてほしいものだ。そのくらいなら10人もいれば余裕で勝てるだろうに。俺の部下はそこまで弱くないんだから自信を持ってほしい。

「はぁ……。それで、君の名前を教えてもらっても良いかな？」

さっき云いかけになった少女の名前を今度は俺が訊ねる。その際はヒナと同じように視線を合わせた。

まあ幼稚園や保育園に行った時にそうした方がいいと云われたこともあるからするだけで、別にその行動に意味は無い。

口調については小さな子に対してなので気にする事もない。

ただ俺がさっき怒鳴った所為で多少怯えているから優しい口調にしたというのもある。

「え……。名前……。たしぎ……。」

確かたしぎはこの街の出身だったな。原作開始時の年齢が21だからここにこの年齢でいても不思議では無いな。まあ原作には母親の死は出て来なかったが。

「そうか、たしぎちゃんか。いい名前だな。」

俺はヒナの手の上に自分の手を重ねてたしぎの頭を撫でてやる。そうすると怯えた様な表情がなくなり、再度気持ち良さそうに目を細める。

俺が手を重ねた時にヒナの頬が紅く染まったのは言うまでもない。

「たしぎちゃんは何歳なの？」

ヒナは自分の独特の口調を封じて自然に話す。そんなヒナもいいな、など思ったり。

俺がそんなことを考えているとたしぎは手を前に突き出して親指だけを折る。つまり4歳と云うことだ。

それを見て俺とヒナはまたも顔を見合わせる。母親が亡くなったと云う事は恐らく父親も亡くなっている可能性が高い。

もしそうであればたしぎは1人だ。誰かが預かっているのだろうけど、矢張り心配だ。

そして俺とヒナは互いに同時に頷いてたしぎの方を向き

「俺（私）たちと一緒に来ない？」

同時に発言する。

たしぎはそれを聞いて顔を上げて俺の目を見てくる。・・・その時に多少の光が宿って来ている事に俺は安堵する。

つまりそれは俺たちについて来たいと云う意思の表れでもある。

「いい、の？私・・・いつもドジだから、伯母さんに嫌われてる。おにーちゃんたちもどうせそうなる。」

たしぎはそういって瞳に漸く宿った光を消し去る。

ドジっぷりは昔から変わらないみたいだな。でもそんなことで人を嫌うなんて如何かしてる。

これで分かった。たしぎの闇は両親の死も大きいけど、伯母が酷い扱いをしていることが大きいのだと。

それなら連れて行く事に何の躊躇いもない。

「俺たちはそんなことしないよ。たしぎはまだ子供だ。だからドジしていいんだよ。だから俺達と一緒に来ないか？」

もう一度、たしぎの背中を押す様に誘う。

「ほんと・・・？」

たしぎの目には再度光が宿り始める。それを見て俺は微笑んでいた表情を優しい笑みへと変える。

「ああ。俺たちは嘘なんて吐かないから。」

そう言っただけ俺は手を広げてたしぎを待つ。

「うわあああん！！」

たしぎは涙を零しながら俺の胸へと飛び込んでくる。

そんなになるまで4歳児に我慢させるなんて・・・。4歳は泣きたい盛りだろうに、たしぎはずっと我慢して来たんだろう。

でもそれも今日で終わりだ。泣きたい時に泣いて笑いたい時に笑う。1人の子供としてこれからは生きていいんだ。

原作でもどうせ海兵になっただけだから本部に連れて行っても誰も文句は言わないだろう。

ランは絶対に分かってくれる自信があるし、ロビンだって同じような思いをしてきたのだから分かってくれる。ヒナだって目の前で真実を話されたのだから放って置くわけにもいかない。

そういうことで家に連れて帰っても大丈夫だろう。

「じゃあヒナ、基地に連れて帰って面倒見ててくれ。俺は仕事があるから。」

たしぎが一頻り泣いたところで俺は胸の中のたしぎをヒナに渡す。たしぎは何処か寂しそうな表情で俺を見る。

「ヒナ了解。それじゃあたしぎちゃん行きましょう。」

ヒナはそう言ったたしぎを抱きかかえる。たしぎはそれでも俺から視線を外そうとしない。

たしぎの目にはもう憎しみなどと云ったものは無いが、哀愁が漂っている。・・・そう云うことが。

「安心して良いぞ。この家はたしぎの家なんだろう？だから壊したりしないさ。それに俺も直ぐに帰るから。」

たしぎは俺の後ろの家を見ていた。まあ俺の事も見ていたわけだが、それで俺はこの家がたしぎが以前住んでいた家だと悟って頭を撫でてやる。するとたしぎは安堵の笑みを俺に向けて来た。

「じゃあ後でな。」

「うん！おにーちゃんもお仕事がんばって！！」

そう云われ俄然やる気が出て来た俺は作業に取り掛かるうとするが

この家って誰かしらの思い出が詰まってるんだよな。たしぎみたいに。嫌な思い出も良い思い出も、纏めて大切な思い出だ。それを跡形もなく消すなんてよく考えたら不謹慎だよな。

死者への冒瀆？・・・いや、そんなものじゃなくて他人^{ひと}大切なものをなくすのはただ単に気が引けるだけ。それでも街の復興の為にはやらなければならない。

そう思っていると1つの案が浮かんできた。確かこつち(ONE

P I E C Eの世界）に来る前にあったもの。

『原爆ドーム』などと云ったもの。これからはこういう事がない様に・・・と残された過去への戒め。

そう云う事でこちら一帯は綺麗に掃除して、でも建物の再建などはせずに襲撃時の様相を保たせることにした。

これについては民衆も賛成だった。こちらに住んでいて、違う所に避難していた人達も納得してくれた。

そう云う事がありながら、街の復興は進んでいった。

ローグタウン ? (後書き)

少し独自設定が強すぎましたかね。
不快に思われた方は感想まで。
そうでない方も感想まで。

ローグタウン ? (前書き)

漸くローグタウン編が終わった……。

ローグタウン ？

とある夜の出来事。俺はその日の街の復興作業を終えて風呂に入り、ご飯を食べた後ヒナと談笑して就寝した。

キンキンキンキンツ・・・！！

しかし金属と金属がぶつかり合う嫌な音で目を覚ます。音としてはかなり小さいが、耳に障る音なので起きてしまった。

それで俺は厠に行く序でに真夜中にそんな事をする奴に注意するべく音のする方へ向かった。

しかし・・・注意するのをやめてしまった。自分も甘くなったものだと心の中で自嘲気味に笑う。

何故ならそこには昼間の作業で疲れきっている筈なのに夜遅くまで肉体の鍛錬をする支部勤めの海兵たちがいたから。

ある者は基礎筋力をつけるべく腕立て・背筋・腹筋・スクワットをしたり、ある者は刀で打ち合ったり、またある者は拳を硬くする為に岩を殴ったりしていた。

そんな人達を咎めることなど俺には到底できない為、結局見逃して用を足して床に戻ってしまった。

キンキンキンキンツ・・・！！！！

甲高い金属音は朝日が昇る寸前まで止む事は無かった。・・・何故か？

それは俺がその金属音に苛まれて眠れなかったからさ！！

はあ不幸だ。

そんな事があつてから数週間後、漸く本部からローグタウンの支部に勤める大佐が送られてきた。それと同時に中・少佐が一名ずつ、尉官がそれぞれ2人ずつ送られてきた。

恐らくだが実力のある大佐を1人送るよりそれ相応の実力を持つ何人かの人間を送って済ませようと言う上の魂胆だろう。

まあそれでも問題は無いので俺は出航の準備を整える。未だ作業は終えていないが大佐たちが来たので俺たちには帰還命令が出された。それについては全員があつさり承諾した。反対しそつだったスモーカーも途中で帰る事に反論は無かった。

そつ云う事なので現在帰還の準備中と云う訳だ。

「おにーちゃん！お別れしてきた！！」

嬉しそうにたしぎは軍艦の方へと走って来る。勝手に攫っていたが、最後くらいはきちんと別れさせてやりたいと云う事で別れの挨拶に向かわせた。

……実を言えばそれは嘘。なんだかんだで搜索届でも出されて俺が犯人扱いされるのが嫌だったただけだ。

「えらいぞお、たしぎ！」

「じゃあナデナデして？」

「任せとけ！」

そんな会話が繰り返り広げられて、俺はたしぎの頭を撫でる。たしぎは気持ち良さそうに目を細め猫の様な声を上げる。

しかし俺がそれを見たのは一瞬の事で、直ぐに他の事へと目が移った。それはたしぎの付き添いとしてついていったヒナ。ぐったりとした表情で、生気がない。たしぎの伯母さんにでも生気を絞り取られたのだろうか。

そんなことを思いながらも公衆の場でも出来るヒナを慰める行動を取るべくたしぎを撫でる手とは逆の手でヒナに向かって手招く。

ヒナはそれを見ずして俺の意思を汲み取ったのか、はたまた自分がそうしてほしただけなのかは知らないがゆっくりと歩みを進めてくる。

そしてたしぎの隣に無言のまましゃがみ込んで頭を突きだしてくる。俺はそれを見て呆れた様な笑いを零してヒナの頭も撫でてやる。するとたしぎ同様に目を細める。

しかし恋は盲目と云うのだろうか。ヒナの方が断然かわいく思えてしまう。

「ミナト少将！準備で来たんでそろそろ出航しますよ！？」

俺達3人のそんな光景を見ていた俺の部下が出航の準備が整った事を大声で伝えてくれる。それを聞いて俺は2人の頭から手を離す。すると名残惜しそうに2人は俺の手を見つめて視線を逸らそうとはしない。それが面白くて腕をクルクル回したりして遊んでみたりした。それでも視線を外さない事が楽しかったが、出航しなければならぬので軍艦に乗り込む。

「親子みたいですな。」

「お、本当だ！仲睦まじいですね！」

俺とヒナがたしぎを挟んで手を繋いで歩いているところに俺の部下がからかう様に俺の方をニヤニヤと見ている。

それを聞いた他のやつらもニヤニヤしながら俺たちの方を見てくる。俺とヒナは恥ずかしくなつて顔を赤くさせるがたしぎの手だけは離さなかつた。

その光景を見ているスモーカーは少し妬んだ様な目で俺を見てくる。まあ理由は分かつているのでスルーだ。

「おにーちゃんとおねーちゃんお顔真つ赤だよ？あついのかな？」

そんな俺たちを心配した様にたしぎが顔を覗き込んでくる。

「大丈夫だよ。何でもないから。それよりお前ら上司をからかうんじゃねえ。」

たしぎに優しく笑いかけた後、離し立てる部下たちを軽く殺気を出しながら睨む。すると部下たちはたじろいで、俺たちを茶化すのをやめる。

普通部下が上司の事離し立てるなんて事はねえぞ。そんなこと許すの俺の船とガープの船くらいだ。

「それじゃあ船を出せ。」

そう告げて俺はヒナにたしぎを任せて動力室に向かつた。

動かしてないとはいえ1ヶ月も水素供給してなかつたからタンクには殆ど残つてないだろう。

行ってみると案の定水素がほとんどなく、俺は全てのタンクに満タンになる様に水素を供給した。

その後俺は船室にでも戻ろうと動力室を出て一度甲板に出る。

「ミナト少将。今から俺に修行をつけて下さい。」

しかし船室で休もうと云う考えはスモーカーによって打ちひしがれた。俺はこの言葉には逆らえないのだ。何故ならスモーカーと約束しちまったから……。

「まあいいけど……休まなくて大丈夫なのか？復興作業で疲れてるだろ。帰還中に指令が下されることだつてあるんだぞ？」

尤もらしい理由をつけて俺は如何にかスモーカーを休ませようとする。そうなれば俺も休めるからな。

その言葉に思っ節があるのかスモーカーは俯く。これで俺も休む事が出来る。

「確り休めよ。お前はそんな柔^{やわ}じゃねえことは分かつてるが人間には限界があるんだよ。」

「ッ！！俺は強くなんかありません！！」

「うおっ！吃^{びく}驚したあ……。いきなり大声出すなよ。っーか珍しく悲觀的になつてるのか？」

俺の言葉に反応して大声を出すスモーカーに俺はピクリと体を瞬間跳ねさせてスモーカーを見る。

そして申し訳なさそうな表情になる。……いや、困った？哀しそうな？よく分からない様な表情。

「すみません。でも……俺は弱いんです。あの時も少将殿が助けて下さらなかつたら俺は死んでました。」

そんなことあつたか？

俺がスモーカーを死にそんな状況から救った……。

あ、毒ガスの時か。あの時は必死だったからよく憶えてないな。

「まあ生きてるからいいんじゃないかねえの？」

取り敢えず今回の任務中に誰かが死んだと云う訳ではないので俺はいい。怪我をした奴もいるけど軽症だしな。

「それではダメなんですよ！！俺は弱いから強くなりたい……！！ミナト少将以上に……。だから俺に修行をつけて下さい！！」

なんなんだ？

俺に断る事が出来ない状況を作りながら懇願するのか？変わったやつだ。

まあそんな変わったやつでも誠意はあるみたいだし、センゴクにも期待の新人が居るって言ったしな……。

「いいよ。まあ強くなるかはお前次第だ。俺は煙の特性や性質を教えるだけだからな。」

ローグタウンに着く前に技を教えたけど今回は自分で成長する為の方法を取る事にした。来る時は出来るだけ多くの戦力が欲しかったから仕方なかったが今回は違う。

未だ多くの時間があるわけだからゆっくりと自分で成長していけばいいのだ。俺みたいに能力の概念を知っている人間なんてこの世界には零だろうからな。

恐らくだが原子などの概念はないだろうから。

「ありがとうございます！！それじゃあ早速……。」

そうしてスモーカーの修行は始まり、本部に変わるまで毎日続けられた……。

ローゲタウン ? (後書き)

感想待ってます

V S 黄猿（前書き）

今回は少し戦闘をさせてみました。

V S 黄猿

通称“閃光の黄猿”こと海軍本部大将ボルサリーノ。“黄猿”と云う愛称の方がよく耳にするだろう。

自然系悪魔の実であるピカピカの実を食べた地上最速の光人間。この世界でその名を知らない人間は産まれて来たばかりの赤子が歳で痴呆の老人くらいの有名人。

原作で天竜人の云う事を素直に聞いて麦わらの一味を殲滅せんとする人物。俺は原作でそれを見て何となく嫌な気分になっていた。まあ嫌いだったわけだ。

それもそうだろう。あんな下衆共の云う事をほいほいと聞く人物に好感を持つと云う方が無理がある。

個人的にはサカズキよりも好かない。まあ前世で俺も中国出身と云うことで愛着があると云うだけだが。

しかしそれも本人と直接2人きりで対談するまでの事だ。

「やっぱり君はおもしろいことをいうねえ。わっしも今度試してみようかなあ。」

実際は気さくでいい人。そして俺の様な子供には滅法優しい。

優しい事はいつかあった『ミナト争奪じゃんけん大会』の時に知ったが。

それでもやはり直接対談までは信用ならなかった。まあ今では俺の能力の師匠であり、掛け替えのない友人？である。

本当は上司なのだが、如何もボルサリーノは俺と友達が良い様で友達？なのだ。

そして今は2人で縁側に座って煎餅を齧り、緑茶を啜りながら談笑している。話題は2人の友人？でもあるモモンガの事についてだ。

「いや、あの時は如何にかして逃げたかったんですよ。まあ結局それで更に怒りを買ったわけなんですけどね……。」

昔俺が准将の頃モモンガとは特に仲が良かった。……いや、今でも十分仲はいいが。

その時の話なのだが、昼食中にモモンガがいきなり雄叫びを上げて俺に斬り掛かって来たのだ。

何故かはわからなかったが覇気を纏わせた刀を振るってくるものだから能力で躲すわけにはいかず、自分の運動神経だけで避けた。

最初の一太刀は右斜め上から振り降ろして来て、二太刀目は左から横薙ぎに、三太刀目は右下から左上に掛けて斬り上げる様に………と云った感じで人外な速さの剣戟を繰り出された。

俺は何とか躲しているものの徐々に後ろに追いやられ、遂には背中を柱にぶつけてしまう。

「ま、待って！話せばわかる！何を怒ってるかは知らんが暴力は良くない！親友でしょうが！！今言った母さんの事なら謝る！！許してける。」

俺はモモンガのあまりの剣幕に俺は即座に膝を折って額を地面に打ち付ける。まあ所謂土下座だ。

『問答無用ッ！！』

そんな俺の事など気にせずモモンガは容赦なく刀を振り下ろす。

『……………？』

しかし一向に刀は俺を切り裂く事はなく、不思議に思っただ顔を上げてみるとランがモモンガを制止していた。

『ダメでしょ。モモちゃんはもう大人なんだから。小さな子供……それも私の子供に手を出さないの。』

因みにモモンガとランは同期らしい。俺は階級が同じで仲がいいから敬語は使っていない。

それよりもモモちゃんって……。モヒカン頭には似合わなさ過ぎるあだ名でしょう。

周囲の人間……。それも俺たちより階級の低い奴らも笑ってるよ。つか撫でられて気持ち良さそうに目を細めんな。気持ち悪いぞ。それにそんなことされると何か妙な感じになるからやめてくれ。母親がそんなことしてたら嫌だ。……いや、ランの行為は百歩譲っていいとしてモモンガの行為は無いわ。おっさんが何してんだよ。

『う、うめん……。』

素直に謝るな。余計気持ち悪いわ。

『モモちゃんって母さんの事好きなの？』

いや、もう分かってるけどモモンガって耐性なさそうだから楽しいと思っただ。

『なッ！？／／／／／』

案の定顔を紅くして俺を睨むモモンガ。鈍感なのかそれにすら気付

かないラン。

俺とヒナの事には五月蠅い癖に自分の時は気付かないもんなんだな。それとも態と気付いてない振り？……だとしたら相当黒い女だ。まあランに限ってそんな事は有り得ないけど。

『じゃあ告白しちゃえば？母さんはロリ顔だからいいと思うよ。』

まあその言葉でモモンガ激昂ですね。何がいけなかったのかと云うと………

『ランは童顔じゃねえ！！大人の魅力を感じるだろうがぁ！！！！』

と云うまあ何とも意味不明な理由で激昂したんです。その所為で俺はまた剣戟を避けなければならなくなつた……。

そんな話。俺としては面白いことなど言っていないつもりなのだがポルサリーノは俺が面白い事を言つたと感じているらしい。
不思議な人だ。

「そう云えば最近模擬戦やってないよねえ。久し振りにやってみるかいい？」

いきなりだな。それにポルサリーノと模擬戦なんかしてもどうせ勝てないし。

能力を本気で使えば勝てるだろうけど模擬戦でそんなことすればセングクとコングに怒られる。そう云う意味では扱いにくい能力だ。異常な程の能力ちからを発揮できるが中途半端な事は出来ないんだよな。500度くらいの焰を出すのにどれだけ集中しなければならぬこ

とか。

100万〜1000万くらいが一番扱いやすいのにそれだと当たった瞬間人体は確実に消えるからな。

そう云う事で俺は模擬戦だと結構弱い部類に入る。まあ体術と多少の能力だけで大体は何とかなるけど。それでも大将クラスや中将の上位クラスには勝てない。

「どうせ勝てませんよ。自分の力の15万分の1の力を自在に操る事なんか不可能なんですから。」

まあ限界が1500万度だから15万分の1は100度。生憎そんな精密な制御は出来ない。その10倍の力でも無理がある。そんな事出来れば俺は間違いなく大将になれるぞ。

「まあそんなこと云わないでさあ。ここはひとつ上官の命令ってことで……。」

「黄猿さんが俺たちは友達だって云いませんでしたか？」

「それはそうだけどねえ。今は上官として命令するよあ。」

結局模擬戦をする事になった俺とボルサリーノはセンゴクに申し出て、近くの島まで連れて行かれた。大方マリントフォードでやれば本部だけならず街が壊れると思ったのだろう。そして何故かギャラリーが多数来ている。

「わしの下から離れてどのくらい強くなったか楽しみじゃわい。」

海軍の“英雄”ことモンキー・D・ガープ中将。

「また本気を出さずに負けるのがオチじゃ！」

“赤犬”ことサカズキ大将。

「まあまあ。そんなに怒ることないじゃない。模擬戦なんだからしよつがないだろ。」

“青雉”ことクザン大将。

「クザンの云う通りだ。ミナトに本気なんざ出されたら島一つ消えてしまう。」

“智将”こと“仏”のセンゴク元帥。

その他にも豪華な面々が揃っている。まあ最高戦力の内の1人と異常な能力を扱う奴が模擬戦をすると云うのだから当然と云えば当然だ。

side out

「じゃあ始めましょうか。」

「そつだねえ。じゃあわっしから行かせてもらつよ……！！！」

黄猿が言葉を発すると同時に消えた様にいなくなる。勿論比喻などでは無く、ミナトの目には本当にそう見えた。

光の速度で動くのだから当然と云えば当然。目で追える方が異常だ。

「ここだよあ。」

黄猿がミナトの真上で足を光に変えている。足から光線を放つ一步手前と云う訳だ。

それに気付いたミナトは黄猿の下から瞬時に退いて、ミナト以外には見えない鉄と炭素の原子を生産し、操作する。

ピュンツ!!!

有り得ない速度で黄猿の足から光線がミナトに向かって放たれる。まあ光の速度だ。それを普通は避けれる人間などいない。それはミナトも例外ではないが、防ぐことは可能。

「『ウイツィロホチトリ黒鉄の盾』!!!」

光線がミナトに当たる寸前にミナトは自分の前に鋼の大きな盾を作り出す。それで如何にか光線の軌道を逸らして一息吐く。

「甘いんじゃないのかい？」

しかし安堵する暇さえミナトに与えず、ミナトの後ろに回り込んで右人差し指の先から光線を放とうとする。

ミナトは放たれる前に重量感たつぷりの盾を構え直す。そして如何にか間に合つて光線の軌道を再度逸らす。

黄猿は本気でミナトを潰しに来ている。それを感じたミナトは盾を消して剃そると月歩げっぽうを使って黄猿の懐に潜り込み、鳩尾に掌底を叩きこむ。

勿論剃を使う時は体を水素に変えて、掌底を入れる時は掌を元に戻している。そして覇気も纏まとっている。

そして更には鉄塊てつかいも掛けて、腕には約100万度の焰を纏まとって。

「『サウイトリ隻腕の焰掌!!!』」

焰を纏った剛腕は黄猿の腹を跡形もなく抉ろうとする。しかしそれは黄猿の光剣によって防がれる。

「危ないねえ。そんなの喰らったらイチコロだよ。」

『天叢雲剣』あまのむすぶのしんを持った黄猿が額の汗を拭きながら唇を擦じらせる。しかしその間にもミナトは手を抜く事はない。

「背後をお粗末にすると死にますよ？」

ミナトは笑顔で告げて黄猿の傍から離れる。ミナトの言葉を聞いて黄猿が後ろを振り返ると、そこには巨大な焰の龍がいた。

「『火龍』」サラマンダー

サラマンダー火龍と呼ばれた焰の龍はうねりながら黄猿に突っ込んでいく。大きな口を広げて喰わんとする火龍サラマンダーに対して黄猿は持っている光剣で防ぐのが精いっぱい。

この時ミナトも攻撃に参加すればよいのだが、サラマンダー火龍の制御には神経を集中させなければならぬので参加できない。

元々ミナトの体から生産した水素を発火させてそれを操っているのだが、集中が途切れると消えてなくなる為サラマンダーに異常なほど神経を使う。

「君は強いけどねえ。もう少し考えた方がいい。」

防戦一方な黄猿に見えたが上手く火龍サラマンダーを誘導してミナトの方に向いている。それに気付いたミナトは一步手前で龍の形を崩して炎上させる。

そうした事により2人の間には焰の壁が出来てミナトは神経を休め

る事が出来る。

……そう思ったのも束の間、光の弾丸が焰の壁を突き破って一発放たれる。

「『やさかにのまがたま八尺瓊勾玉』」

黄猿の言葉と同時に無限の光弾が壁境に撃ち込まれる。ミナトの場所を気配だけで探って撃っているのでミナトの周囲だけを狙って。

「チツ！！『レーヴァテイン焰の双流剣』！！」

両手に焰で出来た短剣を作り出し、弾く事の出来る光弾だけを弾いていく。出来る限り弾くのは自身に当たりそうなものだけだと居場所が特定されてしまうからだ。

やさかにのまがたま八尺瓊勾玉は光線程の速度がない……とは言っても光りに限りなく近い速度だが。

しかし高威力高連射なのでウィットイロボトリ黒鉄の盾では防ぎきれないし何より居場所がばれてしまう。

なので必然的に頑張って弾かなくてはならなくなる。
因みに短剣の形は干将・莫耶に酷似しているが、レーヴァテイン焰の双流剣の方が長い。

「クソツ！そろそろ限界……！！！！」

段々と動きが鈍っているミナトに更なる不運が舞い降りる。

「見つけたよオ。まさか焰の剣で防いでるとは思わなかったねえ。」

漸々と焰の壁が消えてミナトの位置は完璧に特定された。そして黄

猿は手を休めることなく光弾を放ち続ける。
多少の光弾なら受け流せるが全てと云う訳にはいかないので傷を作
りながら躲していく。

「模擬戦だからねえ。剣の腕だけで戦うのもいいねえ。」

やさかにのまがたま
八尺瓊勾玉をやめて黄猿は自身の右手に光で出来た長剣……先程も
使っていた天叢雲剣あまのむらゝのつゑを持つ。

「そうですねえ。でも剣としての性能は俺の焰レーヴァテインの双流剣の方が上
ですよ？俺のは『斬る』のではなく『焼き消す』ですから。」

「それならわっしの天叢雲剣は光線あまのむらゝのつゑを放つ事が出来る代物だよ。」

つまり互いに普通の刀にはない特性を持っていると云うこと。そし
て互いに殺り合うには申し分ない条件だと云うこと。

「じゃあ行きます（行くよオ）！！」

シュン……ポフウウツ……！！！！

2人は残像だけを残して互いの中心点であつた場所でぶつかり合う。
互いに刀を使っているにもかかわらず金属音はしない。

そしてぶつかり合った覇気ちからと能力は上空へと駆け抜けて、暗雲を割
つて曇天だつた空が晴れ渡る。

そしてその直後ミナトは双剣で連撃を入れていく。しかし黄猿はそ
れを全て防いでいく。光は融かす事が不可能なので直接黄猿に触れ
るしかないのだが、実力は拮抗しているので両者は気を抜かずに集
中している為ミナトが黄猿に触れる事は困難だ。

「結構いい腕してますね……!!」

「そつちこそ。わっしは昔から鍛えてるのにまさか渡り合つてくるとはねえ……!!」

長剣でリーチでは圧倒的に有利な黄猿と双短剣で速度では圧倒的に有利なミナト。

互いに一步も譲る気はない。

ミナトは海軍に入って焰レイヴァテインの双流剣を編み出してからは剣術の修行を怠つた事は無い。

それは黄猿も同じで、そこらにいる賊程度には負けない腕前を持ち合わせている。

「これで最後……!!!!」

2人は一旦距離を取って睨み合う。そして……

「『ケツアルコアトル
羽毛ある蛇』!!」

「『蛇斬り』!!」

ミナトは両手の短剣の残像が蛇の姿に見える形でボルサリーノを斬り抜く。

黄猿は斬り後が蛇に見える様にミナトを斬り抜く。そして勝敗は

「結構なお手前で……」

引き分け。2人は同時にその場につつ伏せに倒れた。

「おい！医療班！もたもたせずに行け！」

それを見たセンゴクが見惚れていた医療班に激を飛ばす。2人はかなりポロポロになっているので仕方のない事だろう。

「全く……。どっちも本気じゃないのにこんな激しいのか。」

2人は模擬戦なので互いに同じような戦いをしたまで。本当の戦場なら黄猿は有無を言わせず八尺瓊勾玉やさかにのまがたまで敵を潰すだろうし、ミナトだって初っ端からMAXの1500万度で一気に敵を殲滅するだろう。

2人がかなり戦い方を制限された上でここまで激しい戦闘を披露したのだから溜め息が出て当然だ。

「それにミナトのやつ力の使い方が上手くなったな。」

ミナトは完全に能力を御していた。それに模擬戦ならではの戦い方も身につけた。

「中将昇任どころか大将の座も危ないのじゃないか、サカズキ？」

センゴクの心の内を代弁するかのようにガープが豪快に笑いながらサカズキの背中を叩く。ここでクザンを指名しないのはミナトの能力がサカズキの能力の上位だからである。

「ふん！わしはあんな小僧には負けんわい！何なら今からやっちゃろうか？」

「いや、それは卑怯でしょ。」

額に青筋をピキピキと浮かべるサカズキにクザンが突っ込む。確かにクザンの云う通り今からやれば卑怯際まりない。

「まあ帰って起きたら中將の就任式じゃのう。」

ガープが嬉しそうに笑みを零す。自分の部下（今は違う）が4、5年と云う短期間で中將にまで昇進したのだから当然だろう。こんなことは海軍の歴史上初めてだ。勿論最年少中將としても。

本当に化け物の様だ

その場に居るガープ以外の人間の心の声は重なる。

まあ転生・憑依と云うことを囓ました人間なので化け物ではあるが。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

それから全員が本部に帰省してミナトの就任式が行われ、晴れてミナトは海軍本部中將“焔帝”のミナトとなった。

VS黄猿（後書き）

感想があれば是非。

奴隷解放

時は流れて原作開始13年前。

ミナトの年齢は既に17歳ほどになった。つまりヒナはもう19歳。ロビンはもう直ぐ15歳だ。たしぎはまだまだ子供で8歳。

たしぎを拾って4年が経ったこの年、ミナトの頭からは大事な事件の事が忘却の彼方へとすっ飛んでいた。

「そう云えばロビンは如何するんだ？そろそろ家から離れてもいい頃だと思っけど。」

今ミナトは家に居る。そしてミナトと共にいるのはロビンとたしぎ。それにセラフ。ヒナとランは何かしらの問題を起こして残業だとか。それで3人と1匹でテーブルの備え付けの椅子に座って夕食を取っているわけだが、ミナトが急に口を開いてロビンに訊ねた。

ロビンは冒頭でも紹介した様にもう15歳になる。まだ14歳だが。それで、今後のロビンの方針を決めようと云う訳だ。

「私は……たしぎの世話もあるし。たしぎが大きくなるまでは保留かしら。」

義妹いもつと思いない娘だ。しかしそれはミナトも変わらない。

「まあたしぎの世話は俺がするから、やりたいことやってみたくないのか？」

自分がたしぎを拾ってきて、その所為でロビンを縛り付けているよ
うでならないのだ。後悔自体はしていないが。

「でもミナト兄と離れ離れになるのも嫌……。」

ロビンは寂しそうに目に涙を溜めてミナトを見る。

ミナトもロビン同様に離れ離れになるのは嫌だと思っている。血が繋がっていないと云えど家族と云う事には変わりないのだ。

それに何より心配なのだ。海兵になるにしても1人で海に行くとしても死と隣り合わせだ。そんな危険な事はしたくない。

「俺も嫌だけどさ。やっぱりロビンには好きなことやってほしいから。」

今まではロビンに全然好きなことさせてあげられなかったし、それにロビンにはオルビアさんの意思を継いでもらいたいし。

如何しろとかは云わないけどさ……。自分の為に生きてみるのも良いんじゃないか？」

ミナトは微笑みながらロビンに告げる。しかしロビンは未だに哀しそうな表情をしている。

そうして暫く2人の間に沈黙が訪れる。たしぎも下手に口を挟む事が出来ずに黙々と夕食を食べている。

バタンツ！！ダツダツダツダツ……………！！！！

そんな沈黙を破ったのは無情にも悪報を告げる者が扉を開けて、廊下を走る五月蠅い足音だった。

「大変！！聖地マリージョアで……………冒険家フィッシュャー・タイガーによる奴隷解放が！！！」

そのランの叫びだけを聞けば別段悪いものではない。しかし原作を知っているミナトにはいくつつかのあるキーワードが忘却の彼方から

帰ってくる。

奴隷解放、フィッシャー・タイガー、聖地マリージョア……その3つから導き出される答えは……

「暴動の鎮圧か!」

そう、海兵としてその地に赴いてフィッシャー・タイガーの鎮圧。それと同時に逃げ出した奴隷の中の反乱因子を殲滅。

そしてミナトとしては何よりやりたいこと……ゴルゴン三姉妹の救出。放つておいても助かるのだから、自身が関わっている時点で大きな変動が起こる可能性もある。それならば助けるしかないのだ。

「そう!だから急いで!大将たちも先に向かっている!」

「なら俺はその船に乗る!」

既に出航した船にどうやって乗ろうと云うのか。しかし出来るだけ早く到着する為にはその船に乗る必要があるのだ。

実際大将たちが乗り込んだ船は海軍最速の大型帆船。この島にはそれより速い船はないのだ。

「でもどうやって!」

「能力で。……ロビン!今の話はまた今度しよう!今はたしぎと一緒に居てやってくれ!」

ミナトはそう云って家から飛び出し、グツと足に力を入れて、飛んだ。体を水素に変えている為、かなりの跳躍力だ。

「私も行かなきゃ……！！！！」

ランもミナトの背中を見て心を決め、ドッグへと向かって走る。

・

・

・

・

・

・

それから数分後、ミナトは一隻の帆船を見つける。海軍の象徴であるカモメを掲げているので、それが大将たちの乗る船だと思い乗り込む。

それは正解で、ミナトは甲板に降り立つ。本来ならここで大将たちに敬礼するべきだが、現在はそんな事をする空気は流れていない。

「黄猿、ミナト！！お前らは先に行って様子を見て来い！！」

それから数十分が経ったところでセンゴクが指示を飛ばす。

奴隷の処遇などは既に全て決めてある。なのでそこで聞く事は

「死体の数が少なくても？」

「ああ、構わん。」

ミナトが云っているのは奴隷全員を見逃そうと云うものではない。

『抵抗する奴隷は物理的に消しても構わないか？』と云うこと。ミナトにとっての時間短縮の方法でもある。

いちいち模擬戦の様に相手をするのは時間の無駄。どうせなら全員

この世から消してやる、と云うことだ。

「了解。」

2人はそれだけ言うと赤い土の大陸レットライオンの上にあるマリージョアへと上って行った。

「おい！海軍だ！逃げろ！！」

そう云ってミナトから逃げようとするもの。ミナトも去る者に害を加える気はない。

「たった1人の海兵に俺たちが負けるかあ！！」

そう云ってミナトに襲い掛かる者。害を被らせようとする者は全て消し飛ばした。そしてミナトの周囲からは誰もいなくなる。

「助けて下さい！！」

焼け焦げた皮膚をした青年がミナトに助けを請ってしがみつく。それをミナトは一瞥して

「貴様、そんなものが俺に通じると思っているのか？」

殺気を込めた言葉でその青年に告げる。ミナトにはその青年が心から助けを請っている声でない事を聞き取れた。そのお陰でその青年の陰謀を防げた。

「チッ！だがもう遅い！！」

青年はポケットから小さなナイフを取り出してミナトの腹に刺す。しかし刺した感触は無く、何度刺しても擦り抜けるだけ。そしてミナトの体は段々と消えていき……

「何処行きやがった!!」

「後ろだ。」

青年の後ろに回り込み、青年が振り向く前に超高熱で消し去る。

「なかなか惨い事をする海兵だ。なあ、“焔帝”のミナト。」

「……フィッシャー・タイガー……!!!!」

ミナトは声のした方を向くと、そこには今回の事件の首謀者、冒険家フィッシャー・タイガーがいた。

奴隷解放（後書き）

投稿遅れてしまつて申し訳ありません
感想待つてます

また逢う日まで（前書き）

なぜだ……

なぜこんなことをしてしまった……

そんなことを感じるでしょうがどうぞ

また逢う日まで

飴色の長髪を靡かせる海軍本部中將の“焰帝”のミナト。それに対するは冒険家として名高い魚人のフィッシャー・タイガー。その2人が今互いに殺気を放ちながら対峙している。

「俺の名を知ってもらえて光栄だな。」

「今の若いもんは目上の人物に敬語を使うことも出来ないのか。」

「笑止、犯罪者に敬語を使う馬鹿など海軍にはおらん。」

ふん、と鼻で笑ってミナトはフィッシャー・タイガーを侮蔑する様な目で見る。それは相手が魚人だからと云う訳ではなく、犯罪者として見ているから。

「そうか。それなら戦うしかないのか？」

「ああ。勝ち目がない戦いほど辛いものは無いだろう。」

「それは貴様の敗北を悟ってか？」

フィッシャー・タイガーは指の関節を鳴らしながらミナトを睨む。

「逆だ。犯罪者は消しても良いと元帥も仰っていた。だから……潰すぜ？」

ミナトは予め周囲に半球体になる様に散らばしておいた水素を発火させる。この焰はかなりの高温なので侵入者はおるか、光くらいし

か入る余地は無い。

そしてそれは炎燃え盛る今のマリージョアでミナトが万全の状態
で戦う事が出来る場所にもなり、ミナト以外逃げる事が出来ない空間
でもある。

しかしその中に3人の少女が入り込んでいた。……いや、少女と云
うには体が発達しており、綺麗な大人びた顔立ちをしている。それ
は将にゴルゴン三姉妹だ。3人とも美人なのは今は置いておこう。
それよりも……

「触るな！死にてえのか！！」

ゴルゴン三姉妹の長女、ボア・ハンコックが焰の壁に触ろうとする
のをミナトが大声で制止する。するとハンコックの華奢な体はピク
リと跳ね、怯えた様に縮こまり、ミナトの方を見る。

「……………いいからその焰には触れるな。触った瞬間この世から跡形
もなく消えると思え。」

ミナトはハンコックの怯え様に若干傷付きながらも再度注意を促す。
すると3人とも理解して深く頷く。……………いや、この場合頷かせた、
か。

「“焰帝”もいいところがあるんだな。見直した。」

「貴様に見直される義理は無い。それにゴルゴン三姉妹は被害者だ。」

その被害者を助けることすら出来ないもどかしさと云うのは、半端
なものではない。今は奴隷解放をするのではなく、フィッシャー・
タイガーを含める対政府派を殲滅しなければならぬのだ。

救護船に乗せればいいだけの話だが、それではいつまた奴隷にされるかわからない。それだけゴルゴン三姉妹は美貌があるのだ。特に長女のハンコックは16歳であるにもかかわらずスタイルは完璧。それに妖艶な顔立ち。全てを魅了する様な容姿は本当に全てを魅了する。

「それじゃあ始めようか、“焔帝”よ……。」

「ああ。久し振りに拳だけの撃ち合いってのも悪くねえ気がしてきた。」

「そうか。ならば魚人空手の真髓見せてやる!!」

フィッシャー・タイガーは足にグツと力を入れてミナトの方へと一直線に駆けていく。そして右手を腰に引きつけて、タイミング良く放つ。

「『魚人空手 千枚瓦正拳』!!!」

「鉄塊!!!」

フィッシャー・タイガーの正拳突きは見事にミナトの腹を捉える。ミナトはそれを鉄塊で防ぐが、受けた状態で後ろに滑って行く。そして漸く止まったところが焔の壁ギリギリの場所。ミナトの腹には重い感覚が残り、ミナトの動きを鈍らせる。多少痛いのを我慢して一步前に踏み出す。そしてそこから足に力を入れてフィッシャー・タイガーのところまで瞬時に詰め寄る。

「今度はこっちの番だ!」

「全て見きつてやる！」

ミナトはアッパーカットに近いモーションでフィッシャー・タイガーの顎を狙う。

顎と云うのは強い衝撃を受ければ一時的な脳障害を起こせるのだ。

例えば記憶障害だったり、神経障害だったり。

取り敢えず脳を揺らす事によってそう云った障害を起こすのだ。そうすれば必然的にミナトの勝利が決まる。

「甘い!!」

しかし初撃の顎へのアッパーカットは躲される。しかし隙を見せることなく逆の手でストレートを放つ。

しかしそれもいなされ、逆にミナトに正拳突きが放たれる。ミナトはそれを間一髪のところまで避けて、その勢いを利用して左足でフィッシャー・タイガーの顎を狙う。

しかしそれも間一髪のところまで躲され、ミナトの防御はガラ空きになる。

「隙あり！」

そんな僅かな隙を見逃さずにフィッシャー・タイガーはミナトの腹に掌底を叩きこもうとする。

しかしその瞬間ミナトの口角は持ち上げられ、不敵な笑みを浮かべる。

「戦闘つてのは流れを切つたらダメだ。そうだろう、フィッシャー・タイガー。」

ミナトは発言と共に左足をフィッシャー・タイガーの右肩に掛けて

後ろに回り込む。

「ああ！そうだ！魚人空手の真髄はそこにある！絶え間ない連撃！それに加え確実に隙を突いて大技を入れるしなやかさ！魚人空手は全ての武術の中において最も優れている！！」

フィッシャー・タイガーの発言中はミナトが手を休めることなく連撃を叩きこんでいる。それも流れを一切途切れる事のない様な打ち込み。

それを打てるミナトも凄いが、それを全て受け流せるフィッシャー・タイガーも相当な手練だ。

「それじゃあそろそろ終わりにさせてもらおうか。」

ミナトの言葉と同時に2人は後ろに飛んで、距離を取る。そして一瞬の間もおかずに両者はぶつかり合う

「サウイトリ 隻腕の焰掌！！」

「魚人空手 五千枚瓦正拳！！」

ミナトの右腕には焰が纏われ、相手の腹を貫かんと閃光の如く速く掌底が繰り出される。フィッシャー・タイガーはそれに対してアッパーカットに近いモーションの正拳突きでミナトの顎を狙う。

フィッシャー・タイガーの正拳突きはミナトの顎を捉えることなく、ミナトの焰掌もフィッシャー・タイガーの腹を貫く事は無かった。

それもその筈。2人はこのままだと互いに死ぬことが分かったので引いたのだ。

「魚人空手 槍風！！」

そして距離を取ったままフィッシャー・タイガーがミナトに仕掛ける。

これはジンベエが海中から水の大槍を投げた技を水では無く空気を槍にして投げる技。その威力は軍艦をいとも簡単に貫通する程。そしてこの技の最大の利点は

「チツ！！見えない槍なんて性質が悪いぜ……………！！」

そう、空気であるから視認が不可能。多少の歪みは見えるものの、形が把握できる程クツキリしたものではない。

ただ1つ言える事はかなり大きいと云うこと。恐らくこれを喰らえば人体は木っ端みじん。

幸いな事にその槍には覇気が込められていなかったのでミナトは水素になって受け流す事が可能だった。

「やってくれるじゃねえか……………！！それなら俺も……………」
『一投げると稲妻となって敵を死に至らしめる灼熱の槍』ブリューナク「！！」

ミナトは右手に2m程の焰で出来た槍を形成して、それをフィッシャー・タイガーへと投げつける。

それはまるで意思を持っているかのようにフィッシャー・タイガーの下へと向かっていく。

「厄介な能力だ……………！！」

フィッシャー・タイガーは躲そうとするがその焰の槍は敵を捕えんとして追跡する。これは槍自身に意思があるわけではなく、ミナト

の誘導によるもの。

水素を延々と出し続け、それを伝わらせてフィッシャー・タイガーの下へと向かわせているのだ。

要するに見えない糸を焰が走っていると云うことだ。故に敵がいくら逃げようとも焰の槍は敵を逃さない。

まさに『一投げると稲妻となつて敵を死に至らしめる灼熱の槍』ブリューナクだ。

「これで……終わりだ!!」ミスラ『契約の両焰掌』!!」

焰の槍を誘導しながらミナトはフィッシャー・タイガーに接近して、両手に焰を纏わせて掌底を叩きこもつとする。

「……くっ！何故殺さない……!!」

「あんたにはやってもらつ事がある。」

しかしその焰の掌底はフィッシャー・タイガーを貫くことなく目の前で止められる。それはミナトの意思によって。

それと同様に『一投げると稲妻となつて敵を死に至らしめる灼熱の槍』ブリューナクも消え去る。

「おいお前ら、こつちに来い。」

ミナトは抵抗する気のないフィッシャー・タイガーから目を離してゴルゴン三姉妹に目を移す。その時の目は敵を見ていた鋭いものではなく、優しいもの。

それを見たゴルゴン三姉妹は頬を染めて呆けた後、直ぐにミナトの方へ駆け寄る。それを確認したミナトはもう一度フィッシャー・タイガーに目を移す。

「いいか？この三人を意地でも守りぬいてここから逃げる。この三人はシャボンディ諸島の13番GRにある『シャツキー・SぼったくりBAR』ってところに連れて行け。」

そこには“海賊王の右腕”のシルバース・レイリーが居る筈だ。もしいなくてもその内現われる。だからこの3人をそこで匿ってもらえ。

「わかったか？」

「何故俺がそんなことまでしなければならんのだ。」

「ああ？見逃してやるってんだ。そのくらいはやれってんだ。糞野郎が。」

ミナトは飽く迄政府の犬としての悪役を演じてこの4人と関わりがない様な状況を作り出し、干渉させないつもりだ。

そうしてミナトは踵を返して焔の半球体を消し去る。火の手が迫っていたのもうここに居るつもりはない。戦えない状況なのに居たら他人に迷惑を掛けるから。

「あの！名前は……？？」

「……ほら。」

ミナトはハンコックの質問には答えず、ボロボロになった正義のコートを投げる。

「次に会う時まで俺の正義を背負っとけ。」

そう言い残してマリージョアを後にした。

「なんか……カッコ良かった……。」

投げられたコートを受け取ったハンコックはギュッと握りしめながらミナトの後ろ姿を見て、ポツリと呟いた。

「……くっ、仕方ねえから行くぞ。」

『は……はい!』

少しキレ気味なフィッシャー・タイガーの声に3人は怯えてそそくさと歩き出した。

（sideミナト）

はあ。なんて言うか……気障っぱかったな。

もう少しいい感じの別れ方は出来ないものか。そして名乗っておけばよかったと少しばかりの後悔。

そもそもフィッシャー・タイガーと遊び過ぎたな。誰も見てないからって悠長にやり過ぎた。

でも面白かったから良いか。

それよりも帰ったらセンゴクに怒られるんだろうな。取り敢えずフィッシャー・タイガーとは会っていない事にしよう。

与えられた任務……反乱因子の殲滅はしたわけだし。

「その人間!止まれ!」

随分と失礼な奴がいたもんだ。人間ってある意味差別用語だぞ。

「あ?」

その差別用語に苛々しながら俺は後ろを振り向く。そこには名もない海兵。将校ではあるが絶対に俺より階級は下だ。まあ中将以上は全員顔と名前は憶えてるから当然か。

「す、すみません！ミナト中将殿でしたか……！！コートを羽織ってらっしやらなかったので……。」

「いや、別にいいよ。どっかで無くしたみたいだから仕方ない。それより俺はこれ以上戦えそうにないから離脱する。」

「はあ。この状況では仕方ありませんね。先に戻っていてください。後は俺たちだけで如何にかしますから。」

そう云う事なので俺は乗って来た大型帆船に乗って暴動が鎮圧されるのを待った。

また逢う日まで（後書き）

最後の方意味不明ですね。

まさかこんな展開になるとは思いませんでした！

感想待ってます！！

決意の夜

（side ロビン（本人よりの他人称視点））

「……………はあ。」

ミナトが臨時の任務で出て行って、少し侘しさを感じながら溜め息を一つ落とす。

また云えなかった

云いたい事があったのに、また云えなかった。

ミナトやラン、ヒナは……如何かわからないが、兎に角この家のみんなは優しい。だからその優しさにずっと甘えたくて、言い出せな
いでいた。

自分のやりたい事を偽って、この家に居たいと思ってしまう。もし
かしたらそれがやりたいことなのかとときどき思うが、それは違う。
ミナトはロビンのやりたい事に気付いて、いつも話を持ち掛けてく
れる。まあ心配そうな顔してそんなことされても却って云い辛くな
るだけだ。

でもやりたい事をやらせたいと云う事と一人にするのは心配と云う
優しさはとても嬉しい。

そう思っ胸に手を当てて服をギュッと握りしめる。

「ロビンおねーちゃん如何かしたの？元気ないよ？」

たしぎが心配そうな表情でロビンの顔を覗き込む。……矢張りこの
家の誰もが優しい。

「ううん。何でもないわ。」

そう云ってたしぎの頭を撫でてあげる。こんなやさしい家族に心配を掛けるなんて如何かしている。そう思つて立ち上がり、たしぎの手を取る。

「お寝んねしようか。」

洗いものは……たしぎを寝かせてからやろう。ミナトのは食べかけだけど如何したらいいだろうか。帰つて来てから食べるかな？それとも捨てられちゃうのかな？

……馬鹿だ。ミナトがそんなことしないのは分かつてるのに。それなのに疑つてしまう自分が恥ずかしい。

人が信じられる様になつたつもりなのに、未だ信じれてない。それも最愛の人の事を。

今日はもう寝よう。

たしぎを寝かせつけて洗いものをした後ロビンは自分の部屋に戻つてベッドの中に入った。するとセラフも入り込んでくる。

「どづかしたの？」

人語を答える筈のないセラフにポツリと呟く。そして返答を待たずにギュツと抱きしめる。

「くうん……。」

苦しかったのか、今まで聞いた事のない様な悲痛な鳴き声を上げる。それを聞いて抱きしめる腕の力を少し弱める。

「やだ、くすぐりたい……！」

セラフはロビンの顔を舐める。セラフにも心配される様な顔をして

いたのだろうか。

そしてセラフはスルスルと服の中に入って来て、服の中で暴れ出す。暴れると云っても普通に柔らかい毛が肌にあたって気持ちいい程度だ。

「ふふふ、くすぐつたいわ…。」

そこで不意に思ってしまった。

セラフにも心配を掛けたのではないかと。

自分を笑わせる為にそうしてくれたのではないのだろうか。

深く考え過ぎなのかもしれないけど、今はそんな風に思ってしまう。

だから、決めた。

こんな気持ちはもう嫌だから、全てに踏ん切りをつける。そしてミナトが云ってくれる様に、自分のやりたい事をやってみる。

だからまずは準備。荷物を纏めて、部屋を片付ける。そして最後にミナトたちが帰ってくるまでのたしぎの料理を作った。

その後に置手紙をして、家を出た。

「セラフもついて来るの？」

後ろをちよこちよここと歩いてきたセラフに問うと、セラフは首を縦に振った。

「でもダメ。セラフがいなくなるとたしぎが1人になっちゃうし、それにミナトも悲しむわ。」

その言葉にセラフは首を振って、どこからか一枚の紙を取り出した。

ロビンはそれを手に取り、中を見る。

その内容を見て家の前で号泣した後に、セラフを連れて本部の使っていないドッグへと向かっていた。

手紙の内容の一つにその場所の事が書いてあったからだ。

行ってみると指定された場所に小舟があった。それも襲われない為に海軍の旗を掲げてあるものだ。

「ミナト中将から聞いております。ロビンさんで間違いないですか？」

誰も使っていない筈のドッグの動力室から誰かの声がして、それからドッグのゲートが開かれた。

そこでまたミナトの偉大さと云うか、思慮深さと云うか、何かそういったものを感じてしまう。

「ありがとうございます!!」

顔も分からない人に礼を言って小舟にセラフと乗り込む。その船の中には何かがあった。

これもミナトの仕業なのだろう。そう思ってロビンは再度涙を流す。何故ならそこには暫くは困らない程度のお金とロビンへの誕生日プレゼントがあったから。

そのプレゼントの中身はネックレス。ミナトも中将なだけにいいもの……紫が似合うロビンにピッタリな紫水晶のネックレスだ。

紫と云う色には信頼できる仲間を持つ・愛情と献身・高い目標を持つと云う意味合いがあり、紫水晶アメジストを持つと弱気になったとき強いパワーを与え、くよくよした時何らかの形で勇気づけるといいう力がある。

そう云う意味でもロビンにはピッタリなものだ。

それをロビンは直ぐにつけえ軽く微笑む。

「セラフ、行きましようか。」

「くうくん。」

ドッグから出るまでは帆をはずさず水流によって外に出る。外に出た後に帆を張って船を進める。

先ずは何処に行こうか。

最初は西の海ウェスト・ブルがいいかな？

でもそれじゃあまり意味がないかな？

他にはどこがいいだろうか。

偉大なる航路にいたらミナトに会えるかな？
グランドライン

……… それじゃあいつまでも変わらないや。

思いきつて東の海イースト・ブルに行こう。

あそこは4つの海の中でいちばん平和な海だとミナトが云っていた。

そうして決まった目標地点は東の海イースト・ブルにある何処かの島。いざとなれば能力やミナトから教えてもらった護身術で何とかしよう。
それにセラフも六式とか云う体術も使えるから安心だ。

そうしてロビンとセラフは船を進めた……。

たしぎの憂鬱

side たしぎ

朝起きたら、ロビンがいなかった。あつたのは経った一枚の紙切れ。そこには

『たしぎへ。

冷蔵庫の中に料理が何日分か作つてあるからミナト兄が帰ってくるまでそれをレンジで温めて食べてね。

ご飯はごめんだけでパンがあるからそれで我慢して。

火を使う時は気をつけて、火傷はしないようにね。たしぎが怪我しちゃうと私もミナト兄も悲しむから。

私の事は心配しないでいいわ。それでも伊達に能力者じゃないんだから。

だから私の心配はしないでミナト兄たちが帰ってくるまでいい子にしてるのよ。

最後になるけど私は暫くの間帰れないわ。でもこの家が嫌になつたわけでも、家族の事が嫌いになつたわけでもない。

ただミナト兄に云われた通り自分のやってみたいと思つた事をやってみるだけ。だから泣かないでね。

ロビンより。』

そう書かれた手紙が一通。ミナトたちへの手紙は見当たらない。

それにセラフも居ない。と云う事はセラフも連れて行ったのだろうか。

なんでだろう。哀しくなんか無いのに、涙が零れ落ちてくる。……いや、涙なんかじゃない。ただ目から水が零れてるだけ。

私はいい子だからロビンの云い付けは守る。だからこれが涙なわけがない。

「うっ……うっぐ……!!」

違う。今のは嗚咽なんかじゃない。絶対にそんなものなんかじゃない。

だって私は泣いてない。だからそんなものが出る筈がない。

「……ロビンおねーちゃんのばかあ……!!」

遂に我慢が出来ずに言葉を漏らし、大声を上げて泣き始める。泣くのは今日だけ。明日からは次にロビンに会う時までには絶対に泣かない。

そう、絶対に……。

side out

「おいヒナ。俺が面倒みるのはこの子供か？」

「そう、ミナトの命令。ヒナ伝令。」

「チッ……!あの糞上司……。」

「今何か云ったかしら。もしミナトの悪口なら、ヒナ激昂。」

「ち、違えよ……!!」

「ふうん。ヒナ不審。」

「だから違うつて言ってるんだろ……!!」

たしぎが朝起きてから昼過ぎまで延々と泣き続けているとき、銀髪の男と桃髪の女性がミナトの家に不法侵入していた。

いや、この家は本来……と云うか普通に桃髪の女性の家なので不法とは言えないか。

そんな2人はたしぎの前で今から喧嘩でも起きそうな会話をしている。

この2人は実は海兵なのだが、マリージョア襲撃事件には行っていない。何故なら2人は4年と云う月日がありながら未だに将校になっていないので徴収される事が無かったのだ。

それでこの2人は本部に残って太陽が頭の上に昇るまで仕事をしていた。

ここに来た理由はミナトからの連絡が入ったから。

先日のロビンの1人旅のことを勘づいていたミナトは見張りの海兵にロビンの行方を聞いて、何処かに行った事を確認したのでそのまま2人に言伝するように頼んだのだ。

まあ桃色髪の女性は家に帰るだけなので別段問題は無い。しかし銀髪の方は全くと言っていい程無関係。

唯一たしぎと関係している点と云えば同じ街の出身であると云うこと。

「おねーちゃん……?」

「たしぎ……心配ないわ。ヒナ激励。」

「いや、その語尾はシリアスがシリアスじゃなくなるから。」

2人を見つけたたしぎが桃色の女性……ヒナの事をおねーちゃんと呼び、たしぎのくしゃくしゃになった泣き顔を見たヒナがたしぎを抱き寄せる。そして銀髪の男……スモーカーがその家族感溢れる雰囲気の水を差す。

まあスモーカーが云っている事は一理ある。あそこで『激励』と云えば恩を売っている様な形になる。

しかしヒナにとってはそんな事は如何でもよく、水を差すスモーカーを睨みつける。

スモーカーはその眼光に一瞬たじろいだ後、溜め息を吐いてやれやれと云った表情をする。そして心の中で

何故俺を連れて来たんだ

と思ってしまう。

「じゃあ行こうか。ヒナ出発。」

ヒナはたしぎを抱きかかえて家の外へと歩き出す。それをスモーカーは呆れながら見て、たしぎは訳が分からず呆けている。

しかしヒナにとって他人の意思など関係のない話。全てはミナトの命令を忠実に行うまで！！

それほどまでにミナトに陶醉しているのだ。

「ミナトおおん……。もっと、そう……。！！あっ……。！！」

「これから何処に行くんですか？」

ヒナがミナトとあらぬ事をする妄想モードに入ったのでたしぎは仕方なくスモーカーに訊ねる。

「海軍本部だ。」

スモーカーは妄想しているヒナを見ながら呆れるやらミナトに嫉妬するやら、でもヒナの妖艶な声が聞けた事が嬉しいやら、すごく複雑な思いをしながらたしぎの質問に答えた。

「本部に行つて……どうするんですか？」

何故自分が本部に行かなければならないのかわからないたしぎは矢張りスモーカーに訊ねる。まあヒナは絶賛妄想中だ。

「これ、興味あるんだろ？」

スモーカーは何処からか嘗ての“金獅子”が使っていた名刀で大業物の桜十おうつを取りだす。それを見たたしぎの目は酷く輝いている。それもその筈。たしぎはミナトの部屋に入つては延々と桜十と木枯しを眺めていた程の刀マニア。そこだけは原作と変わらないらしい。それにその2本を見るだけでは飽き足らず、業物名鑑なるものを常に所持して、その全てを記憶したとか。

「それ……おにーちゃんのですよね？」

「ああ。あの糞上司　　じゃなくてミナト中将に預けられたんだよ。」

スモーカーがたしぎの質問に答えようとして、ミナトの事を悪く言おうとした瞬間に絶賛妄想中だったヒナが鋭い眼光を送って訂正させる。

スモーカーも一回でやめれば毎回恐怖せずに済むのだが、マゾな体質なのでそれが快感なのだ。だからヒナも自分も尊敬している上司

の事を悪く云って、ヒナから罰を受けようと云う魂胆だ。
まあこれは飽く迄もミナトの考えだから、本当のところはわからない。

「おにーちゃんがなんであなたに預けるんですか？如何にも刀とは縁のなさそうな顔ですけど……。」

たしぎの発言を聞いて妄想を中止したヒナがクスクスと忍び笑いを始める。スモーカーはそんなヒナを見ながら銜えていた2本の葉巻を噛みしめる。

自分がスモーカーを傷付ける発言をしたことに気付いていないたしぎはわけがわからずに頭に疑問符を浮かべる。

「云ってくれるじゃねえかこの糞餓鬼　　チツ！わかつたよ、やめりゃいいんだろ？」

たしぎに拳骨を噛まそうとするスモーカーにヒナが再度鋭い眼光を送る。

こう何回もやっていると言いつつ、『スモーカーM発言』は本当なのかと思ってしまう。

「子供を殴ろうとするなんて最低、ヒナ軽蔑。」

スモーカーの精神はそのヒナの一言でスタボロにされた。そしてスモーカーは見事にorzとなる。

それを見たヒナとたしぎはスモーカーに更に軽蔑の眼差しを送る。するとスモーカーの体はその重圧で地面をと減り込んでいった。

「あ、桜十だけは回収しないと。」

地面に減り込んでいるスモーカーを気にすることなくたしぎはヒナの腕から逃れて桜十を拾う。そして再度ヒナの腕の中へ。

「それで本部で何をするの？」

ヒナは既に妄想世界から帰ってきているのでスモーカーに訊ねる必要のないたしぎはヒナに訊ねる。

勿論桜十を大事そうに抱えて。

「確か　　」本部でお前に剣術を教えてやれって云われたんだよ。でも俺たちは剣術なんて一齧りもしてねえから基礎筋力鍛えるだけになるだろう。」　　そう云うこと。ヒナ完璧。」

いつの間にか復活して後ろを歩くスモーカーが説明してヒナがそれに頷く。なんとも自然な溶け込み方だ。

ただ鼻血が出ている事が多少気になるが。そしてヒナのどのあたりが完璧なのかは誰もわからない。

「じゃあこの桜十は……？」

「当分の間使えないな。基礎筋力を鍛え終えたとしても竹刀や木刀での素振りや打ち合いが多いだろうしな。まあ持つてる分には問題はねえよ。だが未だ抜いて振ったりするんじゃないぞ？」

「……………はい。」

たしぎに初めて見せるスモーカーの笑顔は綺麗とは言えないがミナトの様に無邪気なものだった。

普段微笑みすら零さないスモーカーにしては珍しいものだ。

それを見たたしぎは一瞬ドキリとするが直ぐに「おにーちゃんの方

が1那由他倍カツコイイし可愛いし優しい』と思ひ直した。因みに『那由他』と云うのは数の単位で10の60乗を表す。それより上の『不可思議』や『無料大数』を使わなかったのは何となくカツコイイからと云う理由。

簡単に説明すればスモーカーよりミナトの方が断然上。神とゴミの差と云う訳だ。

「使えないのかあ……。一回使ってみたかったなあ。」

目の前に刀があれば振りたくなくなる。それは人間として当然の思考。目の前に山があれば登る。海があれば泳ぐ。飯があれば食べる。そう、それは全て

そこに山があるから

と云うジョージ・マロニーの名言から来ている。

まあこれは誤訳で本当は『山があるからさ』なのだが、今は関係ない。

兎に角たしぎは一回でいいから振ってみたいのだ。目の前にある名刀を。

「使っちゃダメよ？たしぎは未だ子供だから。ヒナ正論。」

まあそりゃ正論だ。しかしそれでどや顔をするのはいかなものかと感じてしまう。

「ヒナの云う通りだ。お前はまだまだ子供だからな。」

「……はあ〜い。」

たしぎは気のない返答をして桜十を見つめる。そのまま時が流れて10分後、3人は本部のミナト専用の演習場についた。今はミナトはいないため3人で自由に活用する事が出来る。そうは云っても修行するのはたしぎとスモーカーだけ。ヒナは連日の疲れからかミナトとの妄想を開始する前に眠りに落ちた。

「じゃあ始めるか。名前はたしぎでよかったな？」

「はい。えくと、スモーカーさん？」

「ああ、好きなように呼べ。」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

その日の修行は終わって3人は本部に泊まり込みする事になった。料理の苦手なヒナとたしぎ、それに絶対に料理が出来なさそうな3人では余りに頼りなさ過ぎる。

なので一回ミナトの家に帰ってロビンが作り置きしておいた料理を本部の冷蔵庫に移動させて食べる事になった。

コックたちが居る事にはいるのだが、態々3人の為に料理を作る暇は無いらしい。それが階級の高い相手であれば別だが。

まあそうしてご飯も食べ終えたスモーカーは外へ修行に、たしぎとヒナは談笑した。

そしてヒナとたしぎはそのまま本部の不必要な設備？である大浴場

へ。

この浴場は無駄に広く大きい割に殆ど使われない。それには列記とした理由がある。それは『男女混浴』と云うこと。その所為で女子のシャワー室はいつも人で溢れ返っている。男女の比率が限りなくおかしい海軍の男どもの不埒な考えが見え見えだ。しかし今は誰も使っていない様なのでヒナとたしぎは安心して湯に浸かる。

ガラガラガラガラッ……………！

ヒナとたしぎの使っている風呂に誰かが侵入してくる。心当たりは1人しかいないのだが、ヒナとたしぎは焦って何故か備え付けの岩の後ろに隠れる。

「ああ。ミナト中将が羨ましいよなあ。ヒナと毎日一緒の布団で一緒の風呂。……………はあ。俺も味わいてえよ……………」

本人がいるとは知らないスモーカーはヒナへの思いを次々に口にしてい

ていく。譬え自分の好きな人から褒められるわけでは無くても嬉しいものは嬉しいのだろうし、改めてミナトとの日常を口にされると恥ずかしいのだろう。ヒナの顔は見る見る赤くなっていく。

「（たしぎお願い！スモーカーを連れて行って！そろそろ上がりた

いから。ヒナ恍惚。）」
湯に浸かって1時間半。スモーカーが来てから20分といったところか。

そろそろ風呂からあがりたいと思っているヒナだが、今ここで出ていけば何か大切なものを失って、スモーカーに襲われそうなのでそ

れは出来ない判断。

そして脳内で行われたヒナ会議の結果子供のたしぎが行くと云う事になった。飽く迄ヒナが決めた事だが。

「(スモーカーさんが口リだったら如何するの?!)」

無きにも非ずな可能性なものをたしぎは引つ張り出して、自分を守ろうとする。

たしぎだって未だ8歳とはいえ女性と云う事実は変わりない。全裸がスモーカーに見られれば何か大切なものを失う気がしている。譬え体にタオルが巻いてあるうが関係ないのだ。

「(それは……その時よ。ヒナ無策。)」

ヒナの言葉に互いは少し気の毒そうな目で見つめあう。

「あの岩の後ろ……何かありそうだな。」

そんな時にスモーカーがそんな発言をする。しかし結構小声で呟いたのでヒナとたしぎには聞こえていない。

しかし呟きは聞こえずとも、スモーカーが立ち上がった時の水の音は聞こえる。

「(はあ……。よかった。(ヒナ安心。))」

しかしその水の音はスモーカーが出るものと勘違いした2人は心の中で安堵の声を漏らす。

「(……こつち来てない?)」

その異変に気付いたたしぎは小声でヒナに訊ねる。ヒナもそう思っていたので軽く頷く。

「（ことうなったら……）こっちに来ないでえ〜！！！！！！」

耳が張り裂けんばかりの大声でヒナは咆える。ここで変態ならばそのまま来るのだから、スモーカーは男としての最低のモラルがあるので足を止める。

「……いるならいるって言えよ。それだったらもう少し早く上がったのに。」

「う、五月蠅い！いいからさっさと出なさい！ヒナ憤怒。」

「わかったわかった。」

スモーカーはそそくさと歩いて外に出た。ヒナはそれを感じて大きな溜め息を一つ吐く。

「よかったねた……し……ぎ？」

そうしてヒナが隣を見てみるとそこには湯の上にぶかぶかと浮かんで白目をむいているたしぎが。

ヒナのあまりの大声量に気絶してしまったのだ。

「ちょ、スモーカー！来なさい！」

「ああ？てめえが出ていけって云ったんだろっが。」

「五月蠅い！早く来るのよ！でも来る時は目を瞑って！ついても開

「けちゃダメ！開けるとヒナ激昂！」

「わかったよ。人遣いが荒過ぎだぜ……。」

スモーカーは悪態を衝きながらも少し嬉しそうだ。それはヒナの裸を上手く見ようと云うものからではなく、スモーカーの体質、『M』
ツ気によるものだ。

女王ヒナに扱き使われる奴隷スモーカー。昼はそうでも夜は愛と云う名の暴力を振るわれる。……そんな妄想がスモーカーの脳内で覚醒していた。

「それでどうす　　「だから目を開けないで！ヒナ心外！」

仕方ないだろ。何すればいいかわからねえんだから。」

スモーカーの意見は正しいのだが、ヒナとしてはタオルを巻いていても自身の裸をミナト以外に見せるなど死に等しいのだ。

そしてみられた相手がスモーカーだとスモーカーも死ぬ可能性がある。……恐らく理性を失ったミナトの手によって。

ヒナはそう考えているのだが、実際ミナトは軽く流すだけだろう。内心では結構傷付くが、表情には出さない。

「はい、連れて行って。ヒナ譲渡。」

そう云ってヒナはたしぎをスモーカーの腕の中に押し付ける。そしてその状態を維持したままヒナは先に上がる。

「もういいわ。たしぎを返して。ヒナ命令。」

そう云ってスモーカーの返答は待たずに無理矢理奪い取って部屋に連れて行って氷を頭に当てた後に寝かした。

「まだか？」

風呂場に残されたスモーカーは1人で目を瞑って3時間も待ったとか。

ロビン外伝（前書き）

これからは少しロビンの話です。

本編にも関わってきます。

それと後書でアンケートを実施します

ロビン外伝

sideロビン

海軍本部を出発してから約1ヶ月、私は今風の帯カームヘルトにわ。

海軍で貰った船だから船底には海棲石が敷き詰められていて、海王類が襲ってくることはない。

しかしずっと船を走らせているのは疲れる。

それにあまり船に慣れていないから船酔いみたいな感じになったりする。

そんな時に1つの島が見えた。

その島には『九蛇』と描かれていることから、女ヶ島だと推測する。

一回だけ本で読んだことがあるけど女ヶ島には女しかおらず、産まれてくる子供は全て女の仔らしい。

私もミナトとの間に女の子が出来て欲しいから産むときはあの島に行こうかな……。

取り敢えずあの島に入って休ませて頂こうかしら

うん？

島の反対側から小さな船がやってくる。

あの船も女ヶ島へ行くのだろうか……。

それならば是非一緒に行かせてもらおう。

そう思って私はその船がやって来るのを待った。

sideハンコック

あつたかい……。

名前も知らぬ海軍将校から貰ったコートに身を包んで、そんなことを思っつ。

あの日フィットシャー・タイガーに助けられてから、フィットシャー・タイガーにこの持ち主の名前を訊ねたが教えてくれなかった。でも未だに容姿は鮮明に憶えておる……。

スラリとした体形で背が高いのに、痩せていると思わせない引き締まった体。

腰まである綺麗な長い飴色の髪を黒いシユシユで1つに括っていた。大きな目の奥の瞳には澄んだ蒼色を潜ませており、唇は薄っすら紅く、厚みがない。

そしてそれをより際立たせる白く透き通った肌。

なにより印象的なのが威厳に満ち溢れた表情の奥に潜む優しさ。そんな彼のコートは彼の熱がこもっていないのに、温かい。

「姉様、そんなに嬉しいんですか？」

「妾はそんなこと……。」

「でも嬉しそうにニヤけてましたよ？」

知らず知らずのうちに妾はニヤけておったようで、それをサンダーソニアに指摘された。

それが恥ずかしくて、直ぐに視線を外して俯いた。

でもニヤけるのは仕方がない事じゃ。

それだけ嬉しくて、でも逢えないことがそれだけ恋しい。

ああ……妾はどうにかしてしまいそうじゃ……。

帰ったらニヨン婆にでも相談してみようか……。

「ん？あれは……船だな。誰か乗っておるようだし、それに私たちを待っている様にも見えるな。」

髭が特徴的な老人のレイさんが前を見て、そんな事を呟いた。

実は奴隷解放の後フィッシャー・タイガーにシャボンディ諸島に連れて行かれ、その時にレイさんに逢って、序でに連れて帰ってもらつとると云う訳じゃ。

妾たち3人だけじゃ何やら不安らしい。

レイさんは所謂世話焼きのジジイじゃ。

今はそんなことは如何でもいいので、妾もレイさんの見つめる先を見てみる。

そこには確かに船が一隻あつた。

船には妾と同じくらいの女と狐のペットが乗っておつた。

ペットと2人旅とは味気ない旅じゃ。

「レイさん、折角じゃからあの女も女ヶ島に連れて行くのじゃ。」

「云われなくてもそのつもりらしいぞ?」

レイさんの云う通り、待っていると云う事は一緒に女ヶ島に入ると云うことじゃな。

仕方ないから一緒にいつてやるか……。

sideロビン

「君も女ヶ島に行くのかい?」

特徴的な髭を生やした男が船を寄せて来て、そんなことを訊ねて来た。

この人……何処かで見たことがあるわ。

確か過去の新聞で、約20年前くらいのもの。

……あつ、思いだした!

彼は海賊王の右腕の“冥王”のシルバース・レイリーじゃない。
なんでこんなところに……。
いえ、考えるくらいなら訊けばいいじゃない。

「そうですね、何故海賊王の右腕がこんなところに？」

「……！！ほう、君は面白いな。なぜ私が海賊王の右腕だと？」

私の質問に彼は一瞬だけ強張った表情をするが、直ぐにそれを微笑みに変えて逆に訊ねてくる。

「私は過去に新聞を漁ったりしているから大抵の事はわかるわ。」

「ほう。」

「あなたの質問には答えたわ。それじゃあ私の質問に答えてもらえるかしら。」

「はっはっは、君はやはり面白いな。いいだろう、私がここにいる理由は彼女らを女ヶ島に送り届ける為じゃ。」

そう云って彼が示す先には3人の女性。

顔も似ているので恐らく姉妹なのだろうが、それよりも気になることがあった。

「それはミナトのコート！！何故あなたが持っているの！？」

つい声を荒げてしまった。

しかしそれは仕方のないことだろう。

何故なら黒髪の女性が包まっている海軍のコートは如何見ても自分

の最愛の人 ミナト のものなのだから。

「ミナト……？それがあの方のお名前なのか！？そなたはあの方の事を知っておるのか！？」

私の質問には答えてくれず、その女性は逆に質問してきた。

云い方からして彼女はミナトの事を知らない。

それなのにミナトのコートを持っていると言う事はあの事件 フ
イッシャー・タイガーにのマーリージョア襲撃 の時に解放された
奴隷の1人と云う事になるわ。

それ以外に彼女とミナトに接点はない筈。

「少し落ち着いてもらえるかしら。まずは私の質問に答えて。」

自分の中で整理をつけて、彼女に話し掛ける。

「す、すまぬ……。で、質問とはなんじゃ？」

今更だけど、随分と高貴な喋り方をする女性ね。

もしかして九蛇の皇帝の家系の方かしら……。

まあ今は如何でもいいわ。

「先ずは何故あなたがそのコートを持っているのかを訊かせてもらえるかしら。」

「わかった。これはマーリージョアで飴色の髪を腰まで伸ばして、火を使う海兵から貰ったものじゃ。」

彼女の今の言葉で確信した。

このコートの持ち主はミナトで、彼女はその時助けられた天竜人の

奴隷だった人だ、と。

火と云うのは恐らく悪魔の実の能力で水素を発火させたもの。
飴色の髪を腰まで伸ばしているのだからミナトしかない。

「そう、ありがとう。それじゃああなたの質問に答えるわ。答えられる限りの質問ならなんでも答えるわ。」

「うむ。それでは訊ねるがこのコートはそのミナトと云う人物のもので間違いないのじゃな？」

「そうね。」

私がミナトのコートを見間違えるわけがない。

あの大きな背中に描かれた正義の2文字とコートに刻まれた傷は絶対に忘れる事はない。

「そうか。それではそなたとミナトと云う海兵の関係は如何云ったものじゃ？」

彼女の質問にどのように答えるか少しだけ迷ってしまう。

ミナトとの関係……。

見ていればわかるけど彼女もミナトに心を寄せている。

もし私がここでミナトの『義妹』^{いもつと}と答えれば彼女に希望を与えてしまう。

もし私がここでミナトの『彼女』と答えれば彼女の希望の灯を消し、自分にもミナトにもヒナにも嘘をついたことになる。

どちらにしてもメリットはないが、何故かばれなければ大丈夫と思う自分がいて、後者を選択しようとする自分がいる。

『ミナトなら許してくれる。』

そんなことを頭を過ぎるが、そんなことは当り前だ。

そんなミナトの優しさを振り翳し、他人を傷付けようとしている自分が恥ずかしい。

それでもミナトの『彼女』と答えたい自分がある。

「わ。。。」

「着いたぞ。それじゃあ後は歩きながら話そうか。」

声にならない様な言葉を発した時に、“冥王”さんが女ヶ島についた事を告げる。

いつの間にか船と一緒に進めてくれていたらしい。

それが私とハンコックの出会い……。

ロビン外伝（後書き）

今回はアンケートを実施させていただきます。

それはオリキャラについてです。

自分は船医的なオリキャラを考えているのですが、これは出すべきでしょうか？

もし出すならば、悪魔の実を食べさせるべきか。

オリキャラの大体の概要

F a t eの間桐桜のような風貌で、髪の毛だけ栗色にした感じ。

おしとやかで、ミナトの事を大切に思っている海軍きつての医療技術の持ち主で、海軍一の美貌の持ち主で人気NO・1

こんなところでしょうか。

意見があれば是非ともください。

純粋にこんな悪魔の実も出してほしいというのもあれば、それはそれで構いません。

感想までお越しく下さい

ロビン外伝 ? (前書き)

みなさんのおかげでPV100万、ユニーク10万いきました。
ありがとうございます!!

ロビン外伝 ?

Sideロビン

女ヶ島に来てから約2年が経った。

何故1つの島にこんなに長い間留まる事が出来たのか、自分でも不思議なくらい。

でもその理由はなんとなくわかる。

この島はみんな女の人で、みんな優しい。

それにハンコックも不器用ながらも優しい。

「ロビン！海軍本部に招集されたからそなたも来るのじゃ！」

そうそう、云い忘れていたけどハンコックは七武海への加盟を果たした。

一回の航海で8000万ベリーと云う高額賞金が懸けられて、政府は直ぐに七武海に入る様に促した。

ハンコックは『ミナトに逢えるかも』と云う単純な理由で加盟した。それで就任式があるので今から海軍本部に行く事になった。

「ふふふ、随分と元気ね。」

それと私の事も話した。

ミナトとの関係は『義妹^{いもつと}だけどミナトに想いを寄せる女の1人』と云う事を云っておいた。

今ではハンコックといい好敵手^{ライバル}の様な感じね。

「そなたも久し振りにミナトに逢えるのじゃから嬉しいじゃろう！」

ハンコックはそう云って顔を赤くさせる。

確かに、最後に逢ったのはハンコックと同じで2年前だから逢うのは楽しみ。

だけどついて行くだけで私が逢えるかどうかはわからないから、気持ちは抑えておかないと。

「そうね。それよりもそれ、本当に着ていくの？」

私はハンコックの服装を指摘する。

いつもは肌の露出が多い妖艶な服を着ている。

今日もそれなのだが、今日はその上からミナトの正義のコートを羽織っている。

因みにハンコックがミナトのコートを受け取った経緯も訊いた。

その話を訊いてミナトらしいな、と思ったり、それが知られたらヒナに怒られるんじゃないかな、と心配したり、取り敢えず色々な事を感じた。

「当たり前じゃ！でないと妾の事がわからぬかもしれぬ！」

ハンコックはそれだけ逢うのが嬉しいのか、顔を更に赤くさせる。

ミナトの事だから助けた人の顔は忘れてないと思う。それにハンコックは美人だから尚更。

とは絶対に云わない。

そんなこと云ったらハンコックが調子に乗るもの。

「ふふふ、そうね。それじゃあ行きましようか。もう迎えの船が来ているんでしょ？」

「そうじゃな。サンダーソニア！マリーゴールド！妾の留守中は頼んだぞ！」

「はい！姉様！」

* * * *

「妾の通り道に子狐を　　うん？セラフか。ならば仕方ないな。
ロビン、連れていくのか？」

船で海軍船が停泊させてあるところまで行き、その渡り道の途中で
セラフが待っていた。

いつもならハンコックはあそこで蹴りを噛ますのだけど、私とミナ
トのペットであるセラフだけは蹴らない。

「うん。セラフ、おいで。」

「くうん。」

私がしゃがんでそう云うと、セラフはちょこちょこ走って私の胸
に飛び込んできた。

「ふふふ、くすぐったいわ。」

セラフは跳び込んできた後私の顔をペロペロと舐め、甘えた様な表
情をする。

その所為で私も自然と笑みを零す。

「行くぞロビン。」

それから暫くじやれた後、ハンコックの声で我に返ってハンコックの隣を歩きだした。

「海賊女帝か。隣の女はだれだ。」

海軍船についた時、1人の海軍将校が私とハンコックを出迎えた。

そしてその海軍将校は私の方を見て怪訝そうな顔をする。

セラフは海軍本部でも有名な筈だからわかる筈だけど、この人は知らないのであらう。

「妾の側近じゃ。連れて行っても問題はなかるう。」

海軍将校の言葉にハンコックはキツと睨んで返す。

そしてそれを見て後ろにいた海兵たちは何やら歡喜の声を上げる。

「まあいい。名前は？」

「海軍本部ミナト中将の義妹いもむすめのロビンよ。それでこっちがミナトのペットのセラフ。」

「な!？」

私の言葉にそう反応して、私とセラフを凝視する。

そして思いだしたかのようにハツとして焦った様な表情を浮かべる。

「行くぞ、ロビン。」

「ええ。」

そしてハンコックと私はその海軍将校を無視して海軍船に乗り込み、

2人の船室へと案内された。
そして船は海軍本部のある島
くりと動き出した。

マリンフォードを目指してゆっ

七武海（前書き）

おかげさまでお気に入り件数が1000を超えて、感謝です。
これからも頑張ります

七武海

「なあ鷹の目。なんであんたが来てんだ？」

「お前と久し振りに刃を交えたいと思ってな。」

「今日就任式なんだけど……。」

何故か俺は七武海の待遇をしなければならなくなった。
説明は面倒なので回想モード、オン。

回想

「ミナト中将！！センゴク元帥殿が呼ばれております！」

俺が書類に目を通してる時に、1人の海兵が俺の書斎に入り込んできた。

「センゴクさんが？」

「はい！至急指令室に来いとのこと……！！！」

「わかった。直ぐ行く。」

「はっ！」

適当に返事を返して、海兵をさがらせた後に書類を机に置いて、思案を巡らせる。

今日は新たに七武海に加盟する事になった“海賊女帝”ボア・ハンコックの就任式だ。

それだからそれまでは休んでいいと云う指令が出されている。

だが俺は無視して書類仕事をしていた。が、それで呼ばれるとは到底思えん。

他に何か理由はあるのだろうか……。

考えても何も思い当たる節がないので、取り敢えず行ってみるか。

テクテクテクテク……

「おはようございます、ミナト中将。」

テクテクテクテク……

「ミナト中将、実家から贈り物が届いたので、御裾分けとして中将の御宅に贈らせていただきました。」

テクテクテクテク……

「中将！今日もカツコイイです！」

……………。
さつきから長い時間歩いているように感じるが、進んだのは10歩ほどだ。

それはいつもの事だからいいとして、センゴクは怒ると恐いから誰にも見つからない方法で指令室まで行こう。

……………

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

体を水素に変換して空気の流れに乗って指令室の前に到達。

これは歩くより断然移動速度は遅いが、本部内では速い。

これこそが『急がば回れ』というやつだ。

コンコン……

「入れ。」

指令室の扉を2回ほど叩くと、中からセンゴクの声が聞こえる。

「失礼します。」

俺もそう云って、指令室の扉を開く。

扉は音も立てずに開いて、扉の奥から独特の香りが鼻を衝き刺す。

それはなんと云うか、自然と云った感じだろうか。

まあその原因は何かわかってるので特に突っ込む気はないが。

指令室に入っすぐ右のところ、仔山羊が紙やら葉っぱやらを与えられてもしかやもじゃと頬張っていた。

自然な具合に溶け込んでいるが、それはその生物から放たれる自然の香りが原因だろう。

「何をしている。さっさとこっちに来い。……もしかして最近セラフに逢ってないから寂しいのか？」

「違いますよ。特に意味はないです。」

センゴクの言葉でセンゴクに意識を向け直し、センゴクの机の前まで移動する。

「ふむ、心配では無いのか？」

「セラフですか？セラフなら強いから大丈夫ですよ。それにロビンもついてますし。」

「ニコ・ロビン………か。」

俺の言葉を訊いてセンゴクが少し暗い面持ちになる。

ロビンの本名は海軍上層部　と云ってもセンゴク・ガープ・クザン・ボルサリーノ・モモンガくらい　には伝えてある。

それでロビンの処遇をどうするかと云う話にも何回かあったことがあるが、全て俺が責任を負った。

『ロビンがオルビアの下で生活したのはごく短い時間で、オハラにいたのも考古学が憶えられる歳ではない』
と云う事を主張して。

その結果ロビンのことは大事にならず、片付けられた。

「心配ないですよ。もう文献はないですし、もしロビンがそうなったときは俺がロビンの始末をしますから。」

俺は曇りのない、そして真剣な面持ちでそう伝えた。

「そうか。それなら問題はない。では、本題に入るとしよう。今日海賊女帝の就任式が行われる事は知っておるな？それで他の七武海　まあ鷹の目とドフラミンゴしか来ておらんわけだが　その鷹の目の方の待遇を頼む。ドフラミンゴの方はおつるさんがしてくれるから問題はない。鷹の目の方は何故扱いにくい奴だからお前に頼む。この任務、受けてくれるな？」

「どうせ断れないんでしょう？ならばやりますよ。」

「はあ、と溜め息を吐いて答える。

「本当はそんなことしたくはないのだが、仕方のないことだろう。

「鷹の目とは面識があつて、鷹の目自身の就任式の時に刃を交えたほ
どだ。」

「それ以来交友を持っているのも確か。」

「これと云つて断る理由もないので取り敢えずOKだ。」

「そうだな。それと鷹の目の待遇が終わり次第海賊女帝の出迎えにも行つてくれ。海賊女帝たつての希望だ。頼んだぞ？」

「流石にそれは無理でしょう。それなら鷹の目　。」

「コート。」

「わかりましたよ。」

コート。

「それは海軍将校が各々の正義を背負つた象徴である。」

「だが俺は今そのコートを羽織っていない。」

「その理由は云わずともわかるだろうが、ハンコックと次逢つた時に」

返してもらおうと云う約束をしたから。
お陰さまでこの2年間はコートを羽織らずにいた。
それでセンゴクには何故かその事実がばれており、弱みを握られた
と云った感じだ。

「それでは失礼します。」

敬礼をして、指令室の外に出る。
そして鷹の目がいる部屋に移動した。

回想終了

回想モード、オフ。

まあそう云った経緯で俺は鷹の目の相手をする事になったのだ。

「今日は就任式だから死合はしねえよ。つーか七武海なんだから自重しろよ。」

「ふん。今日ここに来たのは海賊女帝の就任式に出る為ではない。
お前と 焔帝と一戦交える為だ。」

鷹の目の発言に俺は肩を落としながら溜め息を一つ零す。
それなら別に今日でなくとも別の日に本部に来ればいいものを、この忙しい時に何故来たのだ。

大体俺では鷹の目に勝てない。

剣術は鷹の目の方が圧倒的に上だ。

俺は銃弾が飛んで来れば融かすかそのまま体を透き通らせるかして

躲す。

それに対して鷹の目は銃弾の軌道を逸らして躲す。
そんな相手に剣術で勝負しようなどとは到底思わない。

「それはまた今度頼むとして　あ、鷹の目に鍛えて欲しい奴がいるんだけど、そいつの相手をしてくれないか？」

「俺は弱き者の手助けをするほど生易しい性格はしていない。」

俺は鷹の目との会話中にたしぎのことを思い出した。

ロビンがいなくなってからと云うものの、たしぎは真剣に剣術修行に取り組み出した。

いや、前から剣術に対してはいつも真剣だったが、それに対する気迫が変わった。

「そう云うな。そいつは俺の妹みたいな奴だから見込みがある。剣術に懸ける情熱はあんたよりすごいかもな。」

「その程度の安い口で俺が乗ると思うか？」

鷹の目は言葉とは裏腹に、うずうずとした様子だ。

ここでもう一押しすれば

「ミナト中将！もう直ぐ海賊女帝が来るようなので、行かれた方がよろしいかと。」

バタアンツ！！

そんな音を立てて襖が開かれ、海兵が入って来た。

そしてそれだけ告げて、敬礼をして無言で佇んでいる。

「ああ、直ぐ行く。それじゃあ鷹の目、就任式が終わった後にでも逢ってやってくれ。」

「気が向けばな。」

「いい暇潰しになると思うぜ?」

「気が向けばな。」

「ふっ……。」

鷹の目との会話とは云えない会話が終了して、俺はハンコックが来るであろう場所まで向かった。

七武海（後書き）

何気にアンケートトします。2つくらいします。アンケートじゃないかもしれませんが、お付き合いください。

それじゃあ1つ目。

最近いいアイデア（アイデアじゃなくてアイデアってところ重要）が思い浮かばなくて、更新が遅くなっちゃってます。

だから息抜きで海賊になる感じの作品も書いてみようかなあ、と思ってます。もちろんメインはこっちです。

それで主人公が食べる悪魔の実はクモクモの実の雲人間って感じですよ。詳細はそっち側の作品で上げることが出来たら詳しく描きます。とまあ要するに『書いてほしい』か『書いてほしくない』か聞きたいわけです。意見は感想の方まで。

2つ目はこっちの作品の話、あたりまえだけど。

なんとなく思いついて、ミナトが焼ける事件でも書こうかな〜と思ってます。

一連の流れはこう！！

ミナト仕事 スモーカー登場 スモーカーの葉巻からミナトに引火

ミナト燃える ヒナ消化 ミナトがスモーカーフルボッコ スモ

ーカーエクスタシー 本部ドン引き

こんな感じですよ。

番外編になりそうですが、出してほしい方は感想までお越しくさ

い。個人的にはスモーカーを絶頂させたいです。それ以上を求める
方の意見も聞かせてください

再開

〈sideハンコック〉

遂に、遂にこの日がやって来た……！！

妾は今日、この日の為、この時の為にこの2年間生きて来たと言っても過言ではない。

「ふふふ、手と足が一緒に動いてるわよ？」

自分の事を憶えているのかと云う不安。

久し振りに逢える喜び。

他にも色々な物がごちゃ混ぜにされて、妾はいつになく緊張しておる。

そしてその緊張からか妾の手足は同時に動いて、妙な動きを取っていた。

所謂なんば歩きじゃ。

「別に緊張などしておらんぞー！」

「ええ、わかってるわ。それに私は『緊張してる』なんてことは一言も云ってないわ。」

ロビンは妾をからかう様に笑みを浮かべる。

気がつけば妾とロビンは仲良くなっておった。

自分で云うのもあれじゃが少し厳格な人柄の妾と謙遜気味な態度を

とるが妾と対等な位置にいるロビン。
仲良くなっても不思議ではないが、自分でもここまで人に心を開く
とは思いついしなかった。

「うっ……！！いいのじゃ！行くぞ！」

「そうね。久し振りにミナトに逢えるから楽しみだわ。」

ロビンは始終嬉しそうな表情を浮かべて、妾とともに海軍船を降り
た。

（sideミナト）

“海賊女帝”ボア・ハンコックが海軍船から降りて来た。

それは当り前の事なのだが、その隣にはイレギュラーが存在した。
何故いるのかはわからないが、色々あつてハンコックと仲良くなっ
たのだからと云う事は容易に想像できる。

なにしろロビンとハンコックが楽しそうに談笑しているのだから。

そしてロビンが俺の姿を捉え、驚愕やら歡喜やら様々な感情がごち
や混ぜになつた様な表情を浮かべる。

更にハンコックがロビンの様子がおかしいことに気付き、ロビンの
視線を追って俺の方を見た。

するとハンコックも驚愕の表情を浮かべて、2人でその場に立ち竦
んだ。

「はあ〜。なにやってんだ……。っーか俺のコート着てんのかよ。」

俺は溜め息を吐いて、ハンコックとロビンのもとに歩み寄る。そして今更だが、ハンコックが俺のコートを着ている事に気付く。確かに『次逢う時まで俺の正義を背負っとけ』とは云ったが、なにも着てくることはないだろう。

それに海賊稼業を行った時点で俺の正義背負ってないし。そんなことを思いながら俺はハンコックとロビンの直ぐ傍にまで来た。

「何やってんだ。話は歩きながらするから行くぞ。」

ハンコックが七武海で初対面に近かろうが、初対面でタメ口だったので敬語は使わない。第一俺の方が年上だと思っし。

「え、ええ。」

ロビンは如何にか声を絞り出して、我に戻る。

それでハンコックも我に返った後、俺は両手に華を持って本部に向かって歩き出した。

「まあ先ず俺のコートを返してくれ。それがねえとセンゴクさんに弱みを握られっぱなしで、それに就任式にもきちんとした格好で出たい。」

取り敢えずは自分の服装を整えるためにハンコックに話し掛ける。俺の今の姿は上は黒のワイシャツの上に白のスーツ。スーツには大きい黒い薔薇の花柄が数個ある。ボタンは真ん中の辺りしか止めず、スーツに限っては袖を通してあるだけ。ズボンには紅いストラップス。靴は黒のブーツ。

上記の通りなのだが、コートがないと如何にも落ち着かない。

「わ、わかったのじゃ……。」

ハンコックは名残惜しそうに、シユンとした様子でコートを脱ぎ始める。

そんな姿を見せられたら少しだけ悪い気分がする。

「あゝ、いいよ、やっぱり。また新しく作ってもらえばいいだけだし、それはあんたにやるよ。」

流石にそんな顔をされて返されても嬉しくはないので、ハンコックがコートを取る途中でやめさせた。

「しかし……。」

しかしハンコックは悪い気がするのか、戸惑った様子で話しかけてくる。

恐らくだが初見の人物に対しても『見降ろし過ぎて見上げてる現象』を起こすハンコックが恥ずかしそうに縮こまって話すのは結構萌えたりする。

所謂ギャップ萌えだ。

「いいんだよ。あんたは気にしないで着てろ。」

だから敢えて名前では呼ばない。

まあ初見に近いのにいきなり『ハンコック』って呼ぶのは違和感あるしな。

「そ、そうか……。」

そして顔を赤くして俯くハンコックも結構萌える、

「ねえミナト。」

そんなハンコックに萌えている時に、ロビンが話し掛けて来た。

ロビンの腕の中にはセラフもいる。

そしてロビンの首には俺があげた紫水晶アメジストのネックレスもつけられている。

「なんだ？」

俺はロビンからセラフを受け取りながら答える。

久し振りにセラフと長い時間を掛けてのほほんと遊びたいが、時間がないので今回はやめておこう。

「私がないでここにいないか訊かないの？」

「訊いて欲しいのか？」

「もう？」

俺が悪戯な笑みを浮かべるとロビンは『反則だよ〜』と云いながら顔を赤くして俺の腕をポカポカと叩いて来る。

なんか暫く逢ってない内にデレ度が増したな。

「それじゃあ訊くけどロビンはなんでいるんだ？」

もともと訊こうと思っていたことなので、ハンコックとの話が終わり次第訊きだすつもりだったのだが、ロビンに先に云われたのでついからかいたくなると云うのがさっきの俺の反応。

「それはね。。。」

かくかくしかじか。

ロビンの話は小一時間続いて、終わるころには海軍本部に着いていた。

「　　ってことだから、よろしく。」

俺は海軍本部に着いてからハンコックとロビンを指定されていた客間に案内して、予定を説明した後に俺はその部屋を去った。

俺は先に就任式の場において、ハンコックは主役なので後から登場。なので俺とハンコックは一緒にいる事は出来ない。

ロビンはハンコックの側近扱いなのでハンコックの部屋で待機。

そう云う事で俺は就任式の会場となる場所へと向かった……。

同じ気持ち

長い就任式も終わり、俺は自室で休憩を取っている。

就任式自体は面白いこともなく、大した事件もなかったので普通に終わった。

1つだけ事件があったとすれば鷹の目が来なかったことか。

恐らくたしぎの相手でもしてくれているのだろう、現在進行形で。

ハンコックとロビンとセラフは既に帰って、もういない。

俺としてはもうすこしゆっくりして行って欲しかったのだが、海軍と海賊と云う関係上不可能だった。

あとハンコックらが海軍船で連れて来られたと云うことも関係している。

「はあ。」

溜め息の原因は疲れから来るもの。

ここ最近はいや、ここ最近も働き詰めだったので疲れが溜まっている。

書類仕事に、武器生産の手伝い。新しい船の案を提案したり、能力の検査を受けさせられたり。これ以外にもいろいろとやらされているので、正直しんどい。

まあ泣き事も行っていられないので全てそつなくこなしているが。

さて、短い休憩だったが休憩には変わりないのでそろそろ仕事に戻るか。

センゴクに呼ばれた時に置きっぱなしだった書類を手に取り、羽ペ

ンも手に取る。

そして羽ペンに墨をつけて仕事を始めようとした時に

『プルプルプルプル……プルプルプルプル……』

緊急連絡用の電伝虫が鳴った。

はあ、と溜め息を吐いて羽ペンを置いて、受話器を取る。

緊急連絡用と云ってもガーブやクザンやボルサリーノが部下に連絡させるのすら面倒な時に使うのが大半なので、決して急いだりはない。

ガチャッ

「はい。こちら海軍本部ミナト中将。どちら様で。」

流石に緊急連絡だったら不味いので少しだけ急いだ様な口振りです。喋ってはみるが、どうせ急ぐほどの事でもないだろう。

「ミナト中将ですか！？至急演習場まで来て下さい！！たしぎがたしぎが」

取り敢えず料簡は理解したので受話器を置いて電話を切った。

話の内容からしてたしぎがどうかしたのだろうが、たしぎには鷹の目がついているので特に心配な点など無い。

が、たしぎは俺にとって義理であれ家族なので結構急いで行くことにした。

水素になって風に乗り、自分の演習場に着いた。相変わらずだが耐熱性に優れた壁になっている為ものさびしい。そしてその演習場の一角で、鷹の目とたしぎはいた。

鷹の目がたしぎを滅多打ちにしている、傍から見れば虐待にしか見えない。

だが、剣術に優れるものならそれは虐待ではないと云う事は直ぐに理解出来る。

鷹の目が振るう短刀の太刀筋はしっかりしていて、たしぎも本気で見極めようと思えば見極められる速さで刀を振るっている。

まあ今の状況じゃ精神的に無理だろうな。

「ミナト中将！」

「わかってるって。」

たしぎを心配する海兵共がおろおろと俺を頼ってくるがそれを言葉一つで制止して鷹の目の方に歩み寄る。

そして俺の気配に気付いたのか鷹の目は剣を振るのをやめる。

「焰帝か。何か用か？」

「ん、まあ俺の部下がこいつが殺されそうになってるみたいなこと云ってたんで来てみたんだ。そしたら普通に修行してて何よりだ、ツて云う話？」

たしぎは既にボロボロで動くことすら儘ならなさそうなので、俺はたしぎを抱えながら鷹の目に告げる。

「そうか。」

「まあ剣の道を歩いてねえ奴はそう見えるのが普通だ。それよりも鷹の目、たしぎは気に入ってもらえたか？」

「ふん、まあまあだ。」

あ、結構気に入ってそう。

相変わらずツンデレなんだから。

「そんなもんか。それじゃあこれからも出来る限り修行つけてやってくれ。」

「無料ただでか？」

「……わかったよ。今度やりやあいんだろ？やりやあ。」

「心得た。それではこれから暫くの間は厄介になろう。」

はあ、と一つ溜め息を零して、俺は鷹の目を置いてたしぎを医療班のところに連れていく。

『やる』って云うのは模擬戦みたいなもので、実質何でもありの殺し合いみたいなもの。まあその中にもある程度のルールはある。

鷹の目が厄介になると云うのはマリソフォードに少しだけ留まると云うこと。

その際には俺の別宅に住む事になっているので、俺に厄介になると云うことだ。

コンコンッ……

数ある医療班の中でも俺が最も信頼を置いて、医療班の中で最も美

人だと思つ人間のいる部屋に着いて、扉を2回ほど叩く。
美人と云うのは主観だが、客観的に見ても人気があり、『彼女にしたい人ランキング』や『結婚したいランキング』など全てにおいて1位の完璧超人なのだ。
因みにヒナは海兵たちが俺に遠慮してランキングに入っていない。
まあ逆の男性のランキングなのは全て俺が支配しているが。

閑話休題

今はたしぎを寝かしてやるのが先決か。

俺はノックしたのにも拘らず勝手に扉を開けて、中に入る。

「あ……お邪魔かな？」

そして扉の奥には裸で仰向けに寝転がるスモーカー　と云つても下半身にはシートが被つているので下はどうかわからない

とその体を妖艶な手つきで撫でている女性海兵人気NO.1の女性。その女性の名前はアレッタ。

栗色の髪を膝の裏程まで伸ばし、白衣を着ている。

わかり易く云えばFateの間桐桜の栗毛バージョンと云つた感じ。

「ち、違いますよ！誤解しないでください！これは治療であつてそんなミナトさんが思つ様な事では……。」

そして俺を見つけたアレッタが慌てた様に立ち上がり、手を左右に振りながらパタパタと俺のもとに小走りで駆け寄つて来た。

「ふ〜ん、そう。あのいやらしい手つきで揉むのが、治療ねえ……。」

別に俺は何かを感じているわけではないが、楽しそうなので弄ってみることにした。

「ホントに違うんですう！ホントに治療なんですう！！揉んでません！」

うう、と瞳を揺らしながら必死に弁明しようとしている姿はかわいらしい。

なのでもう少しだけ楽しませてもらうとしよう。

「ま、いいんじゃないの？俺はアレツタ中佐が職務中にスモーカーとにゃんにゃんしてました、ツて云うだけだから。」

「違いますう。私はスモーカーさんなんて興味ありません。」

何気に振られたスモーカー……可愛いそうだ。

因みに医療班だからと云って階級がないわけではない。

まあ少しだけ特別な扱いであるには変わりないけど。

「まあそんな事はこの際どうでもいいからたしぎを寝かしといてくれ。」

「どうしてもよくないです。それよりも先にたしぎちゃんの傷の手当てをしましょう。スモーカーさん、さっさと出て行って下さい。女の子の裸を見るつもりですか？」

公私を切り替えたアレツタはスモーカーに冷酷に告げる。

「は、はい……。」

立場的にもスモーカーの方が下なので逆らうことが出来ずに、服を着てそそくさと出ていった。

そしてスモーカーが転がっていたベットのシーツを取り換えて、そこにたしぎを寝かせる。

因みに俺はたしぎの保護者的立場なので追いだされる義理はない。

「どうしたんですか、たしぎちゃん。体中傷だらけですよ？」

まさか！

虐待してるんですか！？」

何を言い出すかと思えば、そんなことが。

「意味わかんねえ。つーか虐待してたら連れてこねえし。俺の事どんだけ疑ってたんだよ。」

これは鷹の目と修行した時についた傷だよ。これから数週間くらいここに厄介になるから。」

俺は興奮するアレツタを窺める様に云って、たしぎの傷を摩る。

たしぎは既に全裸だが、変な感情は湧いたりしない。

いや、するわけがないのだが。

「ふふふ、冗談ですよ。ミナトさんがそんなことしない人って云う事はわかってますから。」

「そりゃどうも。」

真顔で冗談を云われても冗談に訊こえない、という突っ込みはしない。

折角キラキラと輝く様な笑顔を見れているのだから、崩す必要もないだろう。

「そう云えばミナトさんは海賊女帝と知り合いなんですか？」

たしぎの傷の治療をしながら、アレッタはそんなことを訊ねてくる。どのように答えるのがいいか、いろいろと考えてはみるがやっぱり本当の事を云うべきだろう。

「ああ、少しな。あの時に解放された1人だ。」

「そう……ですか。あの方も……。」

実を云うとアレッタも奴隷だった。

ハンコックの様に天竜人の奴隷でもなければ、あの事件《マリージョア襲撃》の時に逃げ出した者でもない。

だが、奴隷だったと云う事実には変わらない。

扱いはどこぞの貴族の性奴隷。

ハンコックとアレッタのどちらが酷い扱いを受けたなんかは比べる気はないが、アレッタも苦しい思いをしているのも確かだ。海兵になったのは俺が助けたからかな。

と、暗い話はここまでだ。

「気にすんな。それよりもたしぎの治療をしてくれ。お前の腕を頼りにここに来たんだから。」

ニツと笑ってアレッタの頭をくしゃくしゃと撫でる。

「はい！それじゃあ終わったら……。」

「まあ付き合ってやるよ。今日は休んでも問題ないし、ヒナも仕事

だから。」

浮気ってわけじゃないぞ。

アレッタと仲良くしているのはヒナ公認だし、疾しい関係じゃないし。

「はい！じゃあ早く終わらせますね！」

アレッタは昔は見せる事の無かった笑顔で、そう云った……。

同じ気持ち（後書き）

オリキャラは……桜じゃなくなったorz

次逝ってみようか！ ルフィと赤髪

「俺が逝くんですか？」

「当たり前じゃ！わしの孫が会いたがっっておるからのう！」

「……はあ。そんな理由で中將がグランドラインを離れていいんですか？」

「大丈夫じゃ！センゴクには黙っておくからのう！」

「……余計大丈夫じゃないじゃないですか」

「ぶわっはっはっは！そう固いことを云うな！後生の頼みじゃ！」

「こんなところでそんなもの使っでいいんですか……」

今のは俺とガープの会話。察して頂けるとありがたいが、一応説明しよう。

何故か話の流れで俺はガープの孫に会いに行く事になってしまった。しかも俺一人で。

……まあこれが簡単に説明した結果。將に『行く』のではなく『逝く』だ。

それよりもこんな事で後生の頼みを使うガープの神経が信じられないのだが……。

まあこの際それは置いておこう。

ガープの孫と云う事は恐らくモンキー・D・ルフィだ。

それにこの時期……原作10年前だと赤髪のシャンクスがいてもおかしくない。

そんな時期に俺をそこに向かわせる意図が掴めん。

そもそもなんでルフィが俺に会いたがっているのかもわからん。俺はなんかしたか？

……いくら考えてもわからん。取り敢えず逝くか。

「あ、誰も連れて逝っちゃいけないんですか？」

「まあ……1人くらいならええんじゃないか？」

1人、か。それならヒナを連れていくのもいいけどヒナはもう中尉だしな。

……いや、中尉になって俺の補佐官になったから連れて行ってもいいのか。

でも俺がいない間の仕事をやってもらうからダメだな。

それじゃあスモーカーか。

……流石に男と2人旅って云うのは気が引けるな。

かと言ってヒナ以外の女とツて云う訳にもいかないからアレッタはダメだよな。

仕方ねえから1人で行くか。

「じゃあ俺は逝きますんで、俺の部下の統率とか俺がいない間の任務の時の面倒とかしてやってくださいな」

「そのくらいなら喜んでやるわい！」

怪しいな。つーか何でガープも会いに行こうとしないんだよ。

まあ今行けばシャンクスを捕まえるかもしれないからねえからな。

考えるのは面倒だし、行くか。

海軍本部を出て早2週間。

俺はフーシャ村沖で見た事のある光景を目の当たりにしていた。

「はっはっはっはっは！！まんまと逃げてやったぜ！！まさか山賊が海へ逃げたとは思うまい！！
さて、てめえは人質として一応連れて来たがもう用無しだ！俺を怒らせた奴は過去56人みんな殺してきた」

「……………！！！」

何処かで見たことある様な山賊は小さな子供と小舟に乗って話している。

いや、山賊が一方的に話しているだけで小さな子供は海を見て言葉にならない声を出している。

まあ俺から云わせれば56人しかだな。

つーか殺した人間の数を鮮明に憶える様な小物か、やっぱり。

「お前が死んじまえ！！」

小さな子供は振り返って山賊に殴り掛かるが、それは当たらずに避けられる。

「プッ！あばよ……………！！！」

躲した瞬間に山賊は子供を嘲笑うかのように見て、海に蹴落とした。全く、大人がそんな事していいものか。俺が助けなきゃならねえじゃねえか。

「くそ！くそ！あいつらクズのくせに……！！一発も殴れなかった……！！畜生　　え？」

小さな子供が落ちる途中に俺は水素を引き伸ばして、小さな子供を支えて自分の船に乗せた。

傍から見れば小さな子供が勝手に浮いて、俺の船まで勝手に飛んできたように見える。

「あゝあ、まったくめんどくせエ……。俺がこんな小物を始末する必要があるのか……。まあこいつを狩りに来たわけじゃねえから別にいいんだけど……。」

なああんた。俺に殺されるか、それとも逃げるか、どっちがいい？」

小さな子供を船に乗せた後、俺は山賊の乗っている船に自分の船を寄せた。

別に仕事じゃないからこんなカスは逃がしてもいいし、この程度放つておいても上からは文句は言われない。

「な……！！てめえ、何者だ！！」

「何者……か。まあ……海軍本部の結構強い方の部類に入る人つてことで。」

俺は自分の後ろ頭を搔きながら面倒臭そうに告げる。

まさかここまで自分の気持ちさが前面に出てくる敵キャラがいるとは思わなかった。

らないが、その海王類は不気味な音を出している。

「な、何！この怪物は
ぎゃあああああーーーーー
！！！！！」

バクンツ、と山賊は乗っていた船ごと一思いに飲み込まれた。
そして山賊を食った海王類は未だ食糧が足りないのか、俺の方を見
てくる。

「焼くぞカス……………！！！」

俺は殺した後に中から山賊が出てくるのではないかと思って殺気を
出しながら海王類を睨みつける。

俺に睨まれた瞬間海王類は震えあがり、脱兎のごとく逃げていった。

「つーかあんたはいつまでそこにいるつもりだ？」

海王類が逃げたのを確認して俺は後ろを振り返る。

そこには赤い髪で左目の周囲に3本の爪後の様な傷を負った青年が
水に浮いていた。

歳は20代後半と云った感じで若いが、威厳のあるいい男だ。

「気付かれてたか！！いや、見つかってないと思っただけどな
！！取り敢えず礼を言おう！ルフィを助けてくれてありがとな、
“
焰帝”さん。」

少年の様な屈託のない笑顔に向けてくる赤髪だが、その笑顔の奥に
は何かあるのか。

果たしてそれは敵意か、はたまた違う何かか。

まあ今はそんな事を考える必要もない。

「いや、人助けが俺の仕事だ。礼を云うならこの子供ガキに云うべきだろう。なにかあったみたいなのぶりだったからな。」

俺は少年の首根っこを掴んで猫の様に持ち上げ、赤髪の青年に渡す。それからなんやかんやがあつて俺と小さな子……ルフィと赤髪……シャンクスは自己紹介をして、今はフーシャ村に帰る途中だ。因みに俺の船にシャンクスとルフィも乗り込んでいる。

「そう云えばあんたは俺を捕まえに来たのかい？」

シャンクスが思いだしたように口を開いて、俺に訊ねてくる。

「いいや。俺はガープ中将に云われてここに来たんだ。ルフィが俺に会いたがつてるって云われてな。」

「俺はお前みたいなグラサンなんかに会いたいなんて一言も云ってないぞ？」

………は？

ルフィの言葉に俺の時間はフリーズするが、直ぐに解凍して頭を回転させる。

「じゃあ会いたい海兵とかいるか？」

「うーん、あの人！確か“焰帝”とか云われる海軍本部の中将！！名前は確かミナトだった！！すっげーカッコよくて、すっげー強いんだ！」

ルフィの返答に俺はホッと胸を撫で下ろし、シャンクスと目を合わ

せて呆れた様に笑う。

さっき俺は自己紹介した筈だが……顔を见せないのが原因か？
そう思つて俺はサングラスとハットを取つて见せる。

「あ！ミナトだ！ミナトがミナトだったのか！！」

今改めてルフィの理解力が馬鹿以下だと云うことがわかつた瞬間だ
つた。

オハラ再来（前書き）

今回は久々にあの人が出てきます！

オハラ再来

「はあ。行くか」

今まで纏わり付いてきたルフィを引き剥がして、俺はフーシャ村の裏山のコルボ山に入っていく。

エースやサボに会うつもりなんて毛頭ないが、不確かなものグレイターミナルの終着駅には用事があるのだ。

面倒だが、行かなければならない。

そう思つて不確かなものグレイターミナルの終着駅に来たのはいいが、何処が何処だかわからない。

それもこの広さと悪臭の所為で、一回来たところかそうでないところかの区別も出来ないほどだ。

「よお兄ちゃん……。殺されなくなったら金目の物置いて行きな……！！！」

後ろから『グへへへ……』と気味の悪い声が訊こえたので振り返ってみると、3人組の男が気味の悪い笑みを浮かべて立っていた。何やら不穏な気配がするので

ドガツバキツボコツ！！！！

「……いやあすいませんでした！！あなたが海軍本部中将“焔帝”のミナトさんとは露知らず生意気な口を叩いて申し訳ありません！

！！！！

全員を下僕にしたがえた。

3人の顔は既に原型を留めていない様な気もするが、初めから原型が無かったと云う事で納得しよう。

「まあそれはいいから、ここらで巨人見なかったか？」

「巨人ですかい？確か巨人なら向こうの方で見たことがあります！」

「じゃあ連れてけ」

「……あいあいさあー！！！！」

3人はビシツと敬礼をして金 日率いる北朝 軍の兵隊の様に地面と水平になるくらいまで足を上げながら歩いて行った。

俺もその後ろを少しだけ距離を置いて歩いていく。

真後ろ歩いてたら俺も変な目で見られかねないからな。

暫く歩いて、異臭も結構強くなってきた頃、1人の女性と目があつた。

その女性の髪は白く腰まで伸びていて、以前の艶やかさはなく、ごわごわになっている。

それにもう10年近く逢っていない人物とそっくりの顔つきだ。

「……オルビアさんですか？」

見間違えるわけがない。

自分が3年前まで預かっていたロビンの母で、10年前のオハラのパスターコールの際に助けた人なのだから。

「なんで私の名前を知っているかは知らないけどあなたの様な人は

知らないわ」

白髪の女性はそう云って俺の横を通り抜けようとする。
哀し過ぎるんだけど……。

「ニコ・ロビン……」

しかし俺のその言葉に立ち止り、俺の肩を掴む。

「なんであなたがその名前を!？」

「俺ですよ。海軍本部中将のミナトです」

今まで掛けていたサングラスを取って、オルビアに微笑みかける。

「ミナト……? 本当にミナトなの……?」

「本当ですよ。ッて云うより成長した子供の顔もわからないなんて心外だなあ……。オルビアさんが『私の事を母親と認めていいのよ』って言ってくれたのにさ」

まあ母さんはランだが、オルビアはそれくらい俺に良くしてくれた
ってことだ。

「如何して……こんなところに?」

「如何してって……ここを紹介したのは俺じゃないですか」

肩を掴んでいた力が弱まり、オルビアは地面に膝を着く。

その時には俺の下僕は既にどこかに逃げていて、この場には俺とオ

ルビアしかない。

オハラのパスターコールの際に逃がした学者たちは俺がここに来るように指示しておいた。

ここなら政府の目は届かないし、東の海でも偏狭イースト・ブルの地であり、さらには法律がない場所なので世界的な犯罪者の住む場所にはもってこいだ。

「ロビン……ロビンは無事なの!？」

下から俺のズボンを掴んで見上げながらオルビアは訊ねてくる。

脱がす気か？脱がす気なのか!？」

「何処にいるかはわからないけど元気だと思いますよ？それにセラフ
フ　俺のペットがついてますし」

ペットと云うと心許ない気もするがセラフは六式も体得しているの
で億越えない程度の奴なら勝てるだろう。

それにオルビアは名前までは知らないがセラフの存在自体は知っ
ているのでそれで安心するだろう。

「よかった……。でも何処にいるかわからないって如何いうこと？」

「ロビンは旅がしたいって云うので、旅に行かせました。でも懸賞
金が掛かっていないので狙われる事は先ずないと思います。

あ、母さんの意思を継ぎたいみたいなこと云ってましたよ」

「そう……。それならよかった……。私の事は喋ってないのよね？」

「はい。それよりも少し大事な話があるんですよね……」

俺はオルビアを立たせて共に歩きながら話をしている。
久し振りだな、この感じ。

「大事な話って？」

先程までの不安そうな表情から一変して、神妙そうな表情でオルビアは訊ねる。

「うーん、これからの話なんですけど……」

俺はそれからドラゴン率いる革命軍がここに来るかもしれないという事を伝えた。

原作でも10年間ロビンを探し求めていたそうなのでオルビアを含めオハラ学者がいるとなれば彼女らを獲得に動くだろう。

特にそのうち火災が起ころるので、その時には革命軍も必ずこの人間を保護するので絶対だ。

「そう……。そこで匿ってもらえばいいのね」

しかしこの時期はドラゴンの名前など知られていない為、オルビアはその存在すら知らない。

それに加えてこの10年の間外の情報なんて手に入れようがないので知っている筈がない。

「そう云う事です。それじゃあ俺は帰るので、その時まで待って下さい」

「ばいばい。帰りも怪我しないようにね」

「俺はもう心配される様な歳じゃないよ」

火災の時も俺がドラゴンを手伝えればいいのだが、生憎火は苦手なのでそう云った事が出来ない。
そう思いながら笑顔で見送るオルビアに対して俺も笑顔で手を振り返して、その場を去った。

それから暫く歩いてきた道を引き返していき、とある少年に出会った。

その少年は黒髪で大きな棒を持って森を元気に走り回っていた。
なんとも微笑ましい光景だろうか。ここが不確かなものグレイ・ターミナルの終着駅でなかったら、な。

「おいサボ！今日はどうだった？」

その少年は俺の横を駆け抜けたかと思うと直ぐ近くの木に登り、ハットを被った同年代の少年に訊ねた。

ハットを被った少年　サボと云われた少年　はその質問に答える事はなく俺の方に視線を向けてくる。

それから黒髪で頬に雀斑がある少年　エースにも視線を送り、アイコンタクトを取る。

大方、他人ひとがいるところでは話してはいけない、と云う事だろう。と云うよりまさかこんなところで逢うとは予想外だ。
挨拶だけでもしとくか……。

「うわあああ……！」

そう思つて右腕を水素にして引き伸ばし、2人で掴んで俺の前に連れて来た。

2人は何が何だかわからずに叫んでいるが、そんなことは気にする価値もない。

「子供^{ガキ}がこんなところで何してる」

2人を俺の目の前に置いて、話し掛けてみる。

しかし自由にはせず、拘束したまま。

だつてこいつら物騒だし、エースに霸王色の覇気なんて使われたら溜まったもんじゃないし。

「うるせえ！！お前に云う必要なんでねえんだよ！！」

エースが怒り心頭と云つた様子で咆えている。

関係ないけど、五月蠅過ぎる。

「そうか。それなら俺にはお前らを保護する義務があるな。なにしろこんな子供が捨てられてんだ。政府の保育施設に送るべきだろう。なにせ俺は海兵だからな」

俺の言葉にエースとサボは一瞬怯む。

はっはっは！！職権乱用じゃ！！政府権力舐めんなよ！？

「さつさと放せ！お前なんか捕まえられなければ勝てるんだ！！」

「おい、エース！相手は本物の海兵だぞ？！勝てるわけがねえ！！」

「そんなことやってみねえとわからねえだろ！！」

2人はそんなことで口論をしているが、俺が捕縛した時点でエースの負けだろう。

俺が生成する水素には多少だが俺の気配と匂いが付着しているので気付かれ易い。

それに気付かない様では絶対に勝てない。

「騒ぐな、五月蠅い。放して欲しかったら名前くらい名乗れ。それで身柄保護の件はなしだ」

俺の言葉にキツと睨みつけてくるエース。

サボは案外に冷静で、エースの様に感情的に行動することはない。

「俺はサボ。隣はエースだ。……これでいいだろう？放してくれ」

訊きわけのいい奴で助かる。

サボが名乗ったので俺は直ぐに2人を自由にしてやる。

「俺の名前はミナト、海兵だ。精々火には気をつける。それと海賊の金には手え出さない方が得だぞ。世の中には勝てねえ相手って云うのは誰でもいるもんだ」

因みに俺はヒナだ。

と訊こえない程度に呟き、俺は体を水素に変えてスモーカーの様にしてフーシャ村まで帰った。

「なんなんだ、あの金髪……。今度逢ったらぶっ殺してやる！」

「ミナト……どっかで聞いたことあるな……」

餓鬼1人に殺せるほど海軍本部中将は甘くないよ、などと考えなが

ら俺は2人の眩きを見聞色の覇気で訊いていた。

ルフィ連行（前書き）

更新遅くなって申し訳ありません。

ルフィ連行

「なあミナト！俺に悪魔の実の使い方教えてくれ！！」

俺がマキノの酒場でマキノと談笑しながら酒を飲んでいる時に、ルフィがドタバタと店の中に入って来た。

「空気読めよ」

息を切らせてハアハア云っているルフィに俺は振り返りもせずにもそっとう告げる。

「空気？空気って読めるのか？ミナトってすげえな！！」

「はあ……」

「ふふふ、ルフィ違うのよ。空気を読むって云うのはそう云う事じゃないの」

ルフィの発言に俺は呆れて溜め息を吐く。

そしてマキノがその意味を説明しようと言ったが、理解されなかった。

「よくわかんねえけどわかった！！」

と云う事でルフィは割り切ったらしい。

そしていつの間にかルフィは俺の隣に座っており、オレンジジュース

スを口いっぱいに入れてる。

その所為でルフィの頬は顔の3倍近くに膨張していた。

『一回にどれだけ含むんだ』って云うより『どうやってコップに入ったジュースをそこまで含んだんだ』って云う突っ込みの方が正しいな。

「隣で飲むのはいいが悪魔の実の使い方は如何でもいいのか？」

「んんんん《そうだった》！！」

云いたい事は大体わかるのでルフィが口に含んだジュースを飲み込むのを待つ。

面倒だが……付き合わなければもっとめんどくさそうだ。

「それじゃあマキノさん、また後で来るよ」

「俺は今日はもう来ないぞ！！」

「2人とも怪我しないでね」

ルフィがジュースを飲んだので俺とルフィはマキノに見送られながら村外れへと向かった。

因みに俺は何故かマキノの家に厄介になっている。

それとシャンクスは既に村を拠点にするのをやめて、ルフィにロジャーからもらった麦わら帽子を預けて去っていった。

あのシーンは……居合わせなかったから知らんが原作通りだろう。

「悪魔の実の使い方教えるって云っても俺とルフィの喰った実は根本的に違うから教える事なんてねえぞ」

「ふ〜ん、そうか。それじゃあ俺は何をすればいいんだ？」

ダメだ……。

ルフィと会話を成立させようとしていた俺が馬鹿だった。

ルフィに自然系ロキアやら超人系パラミシアやら云ってもどうせ理解出来ないだろうから云う必要もないし。

取り敢えずまっすぐ伸ばすくらいなら手伝ってもいいか。

その程度なら原作にそこまで影響しないだろうし、こいつには「弱くても一緒に居て欲しい仲間」が出来るんだから、その手伝いならいくらでもする。

「じゃああれだ。俺を殴ってみろ」

「いいのか？俺のパンチは銃ピストルみたいに強いんだぞ！？」

「あ〜、わかったわかった。いいから殴ってみろ。」

俺は自信満々なルフィに呆れながら促す。

自信満々なルフィだが、覇気も扱えないルフィに俺が殴られるわけがない。

それに第一ルフィの『ゴムゴム』系統の技はまっすぐ飛んで来ないし。

「いづくぞお……！！ゴムゴムの銃ピストル！！」

大きく振りかぶってパンチを繰り出すルフィだが、そのパンチはまっすぐに地面へと向かった。

つかまっすぐ殴る云々より無駄にでかいモーションの方が問題あるだろ。

「あれ？こんな善じゃねえんだけど……。よし、ミナト！ーもう一回だ！ー」

そう云ってルフィは自身の腕をグルグルと回している。

「ちょっと待て。ルフィ……殴り方知らねえだろ」

「殴り方って……ただ殴るだけだろ？」

「まあ……違うけどそう云う事でいいや」

ルフィに殴り方を説明したところで理解しないだろうし、なにより殴り方など関係ない様な感じだし。

そこら辺は独学で大丈夫だろう。

それからルフィが俺を殴ろうとしたが全て地面に向かって拳を飛ばすと云うカオスが続いた

「やっておるのうー！」

そんなカオスが続いて暫く、何故かガープが来た。

何故か小さな村に中将が2人もいると云うある意味カオス。

「「なんでガープさん（じいちゃん）がいるんですか（いるんだよ）！ー」」

「そう云えばセンゴクがミナトが帰って来んからキレておったのう」

ちよつと待て。

会話になつてない事はこの際置いておこう。

「いや！あんたが休暇取らせてくれたんだろ！？」

それが問題だ。

わざわざ俺に休暇を取らせてここに送らせた癖にガープが責任を取らないなんておかし過ぎる。

「まあその話はそこら辺にしておいてルフィ、お前はわしと一緒に海軍本部に來い！」

完全に無視された……。

ガープは自分の立場が悪くなると直ぐにそれだから嫌いだ。まあ本心からそう思つてゐるわけじゃないけど。

「イヤだ！！俺は海賊になるんだ！！」

ガープの勧誘にルフィはそう即答した。

その時ガープが俺に哀しそうな目を向けて來たのは気のせいだと信じたい。

「まあいいんじゃないですか？そうなつたら俺が捕まえるんで、捕まえたら海軍に入れればいいじゃないですか」

「それもそうじゃな！！よし、ルフィ！！ちよつと來い！」

この時俺が思つたこと。

『ガープって扱いやすい』

この冥利に尽きる。

まあそれは置いておいてガープは『ちょっと来い』と云っているが頬を掴んで無理矢理引っ張っている。

「いでっ！！いででっ！！なんでゴムなのにしてえんだ！！」

ルフィの悲痛な叫びは誰にも届く事はなく、ガープに連れられてコルボ山へ入っていった。

俺はと云うとその後をしつかりとついて行っている。

ガープに文句を云われたり制止されたりすることもないので問題ないのだろう。

因みに俺は覇気を込めないでルフィを殴る事により、日頃のストレスを発散させてもらった。

それから数十分歩いて山道を抜けて、カーリー・ダダンのアジトについた。

俺はそこからエースがルフィに唾を掛けたりなどの原作風景を見ながら仄々していた。

その時にエースから睨まれたのは気のせいだと信じたい。

ガープは俺を置いて先に帰って、センゴクに嘘の報告をしてくれるとかしてくれないとか。

ルフィ連行（後書き）

やっぱり難産です。

感想とかいただければ励みになりますのでよろしくお願いします。

何気に革命軍（前書き）

イエス！ご都合主義！この後の展開に迷った……なんてことはない！

何気に革命軍

「て、てめえがなんでここに居る……!!」

「さあて、何故でしょうか？海賊が賄賂なんて……情けねえなー、全くよお」

「……くッ！つまり俺たちはあの貴族どもに嵌められた訳か！」

「そんなことはどうでもいいさ。いいからさっさと帰りな。」

俺だって鬼じゃねえ。休暇でここに来たんだから仕事なんてする気はねえのさ。だからさっさとこの島から去りな」

あゝ、ホント面倒だ。

海岸線歩いてたらブルージャム海賊団とエンカウトするなんてマジやめてくれ。

「……くっくっく！はーっはっは！そうはいかねえさ！こんなに侮辱されて黙ってられるほど海賊は出来てねえんだよ！」

追いつめられて精神が破綻したのか、ブルージャムは声高らかに笑いだす。

なんでこんなに面倒な展開になるかな……。さっさとどっかに行ってくれば済むものを、わざわざ死を選ぶとは。

「なら……死ね」

そう言つてブルージャム海賊団の船の甲板で戦闘を
始める。 暴力を開

「てめえが死ね！」

迫りくる凶刃や銃弾は能力で全て受け流し。

「チツ……ぶつ殺せ！」

白兵戦を挑まれれば水素を発火させて皮膚が爛れる暇もなく融かし、
この世から命を削り取り。

「残り1人だがどうする？」

そんな事をしていたら残るは船長であるブルージャムだけ。

「つつつても殺す気なんだろ？」

「当り前だ。船長が最後まで戦わない様な海賊なんて生かす価値も
ねエ。 隻腕サウエイトルの焰掌」

剃でブルージャムの懐に潜り込み、焰を纏った右手の掌底でブルー
ジャムの心臓を穿ち抜く。

「！！！」

ブルージャムには悶える猶予も与えずに、死をもたらした。
それから俺は自分の腕をブルージャムから引っこ抜き、ブルージャ
ム海賊団の海賊船を海の藻屑として葬った。

あれから暫く海岸線を歩くと、もう一隻船が見えた。

今目の前にある船はかなり大きく、船首が龍で象られていて、船の横には龍の胴体が描かれている。

パツと見シャンクスの船かとも思ったが、この間去っていったのでそれはないだろう。

あるとすれば、後に世界最悪の犯罪者となる男の船だと云うことだ。まあ今は仕事じゃないので多少名が売れている奴でも捉える気はないが。

と、云うのは俺の面子を保つためで、あの3人相手に勝てる気がしないだけである。

「まあ挨拶程度はしても問題ねえだろ。」

そう思つて俺はその船目掛けてスモーカーの真似をして下半身を水素にしてジェットのような要領で船の中に転がり込んだ。

船の中には人が全然おらず、ものさびしい。

これだけ大きな船ならもつと人が乗っていてもいいと思うのだが、これから増えるのだから調度いいのだろう。

ん？

だれかがこつちに近づいて来てるな。

俺も向こうも喋ってないから共に気配だけで察知したが、ピリピリと伝わってくる見えない相手の雰囲気からして普通たまたものの人間ではないだろう。

見つかるぞと拙そうだし隠れるか。

俺は近くにあった船室の陰に隠れて、様子を見計らった。

「気の所為か……。」

顔に刺青をして黒い外套を羽織っている男がコツコツと歩いてきたが、気付かずにそのまま帰った。

流石俺！！気配遮断のスキルはアサシンのクラス並みだぜ！

「ったく、ビビらせんなよ……。」

俺はその刺青男が去ったところで溜め息と同時に呟く。

ホント、俺がアサシンだからって止めて欲しい。

「それはすまなかったな、海軍本部中将の“焰帝”のミナトよ。」

「うおっ！？いつの間に!？」

全く気がつかなかった気配がいきなり後ろに存在すればかなりビビる。

もしかして朝死^{アサシン}んだんすか？

……哀しくなってきた、やめよう。

「お前が安堵した時からだ。」

なんつー早技。是非ともその気配の消し方を師事したい。

今日から君もアサシン講座みたいなノリでね。

……だからこれ以上痛くなる発言は控えよう。

「まあそれはいいとして、何故海軍本部中将のお前がここにいる。」

「海軍本部中将だって休暇くらいもらえるさ。あんたの親父がここに来るみたいなものだ。」

「ッ！！！！ははは、貴様はその事を知っているのか。ならばこの俺を捕まえるか？」

刺青の男　　ガープの息子のドラゴンが楽しげに笑いながら俺に問う。

うん、なんか恐い、色々な意味で。

「いいや、今云った通り俺は休暇中だ。その際に仕事するほど堅くはない。それに俺1人で勝てる程ここの戦力は甘くはないだろ。」

俺は周囲に意識を集中させながら、見聞色の覇気でオカマと熊の声を探る。

2人は誰かしらと会話中で、原作通りここに来ている様だ。

「随分と弱気な発言だな、焰帝よ。大将に劣らない実力を持つと云われる男が、高が一隻の船に乗る奴らが恐いか？」

「まあそう云う事にでもしといてくれ。それよりも、いい事教えてやるつか？」

俺はニヤリと口角を持ち上げて、不敵な笑みを浮かべる。

「ほう、それで、その貴重な存在を俺たちの手に渡そうと？」

「ああ。俺にはあんたらがあの人達を悪い様に扱わないと感じる。」

だが、物事には時期ってものがある。焦って尚早にしないことが大事だ。」

恐らくこの船に乗るであろうオルビア達の事を話した。
これ以上はガープに勘づかれるかもしれないしな。

「時期、か。確かに、早過ぎる決断はいい事を産まない。」

そして何より重要なのがオルビア達と共に務める時期だ。

早過ぎれば原作が色々と崩れかねないし、逆に遅すぎても原作を破壊しかねない。

原作で2年間ロビンが革命軍に入るが、この世界では如何なるかわからないので色々大きく逸れない様に手を回さなければならぬ。ホント、原作知ってる分面倒だね。

「ま、そう云うことだ。時期ってのは自分で考えてくれ。それじゃあ俺は失礼する。」

俺はそう云っていつの間にか案内されていて船室から出て、去っていく。

色々と考え事をしながら歩いていたので、また周囲への注意が散漫になっていたのだろう。

俺は曲がり角で誰かとぶつかってしまった。

「いたっ！」

ドサッ……

俺はぶつかった衝撃で不恰好にも尻もちをついてしまった

これで相手が制服を着て食パンを銜えている美少女で、自分が書類

をぶち撒け、それを拾おうとして互いの手に触れる　　なーんて
ことがあればロマンチックなのだろうが、この船の中でそんなこと
が起こるわけではない。

「にゃはは……こりゃあ拙いだろ……。」

俺の見上げる先には暴君として有名なバーソロミュー・くまその人
だ。

普通に立った時の俺の3倍以上の身長はあるってのは知ってたが……
異常だろ、このでかさは。

「お前は……焰帝か。」

目からビームでも放射しそうな勢いでくまは俺の事を睨んでくる。
この頃はまだくまも七武海じゃないけど、やっぱりそのくらいの実力
はあるだろう。

「そうだけど、ドラゴン公認でこの船に乗ってるから文句は云われ
ない筈だ。」

そうだ、俺はドラゴンに連れられて船室の中に入ったのだからくま
に文句を云われる筋合いはない。

「それならば問題はないが、どうしてお前の様なやつがここにいる。

」

本日2度目のこの質問。

確かに、海軍本部中將がこんな辺境の地にいるのはおかしいと俺も
思う。

それをおかしいと思わせない人物が1人居るから特に違和感を抱か

なかったが、よく考えればすごいことだ。

「休暇だ。詳しくはドラゴンに訊いてくれ。それじゃあ。」

ドラゴンにも休暇としか云ってないけど……大丈夫だろう。それに休暇以外にここに来た理由なんて特に無いし。

「まあ待て。目的地があるなら、連れて行ってやろうか？」

「いや、いい！！全力で断る！！それだけはいい！！」

何やら不穏な空気が流れ始めてくまが手袋を外し始めたので俺は全力で首を横に振った。

それでも尚くまは手袋を外すのをやめないの俺は全力で逃げた。そしてデッキに出た辺りで、少しばかりの休憩をする。

「旅行するなら何処がいい……。」

「だあ~~~~！！したくねえつて。」

そこまで云ったところで、俺は無惨にも弾かれた。

つーか……ご都合主義満載な展開乙。

そんなことを思いながら俺は抗う事も出来ずにただただ空を舞った。

知名度は高いはずだけど……（前書き）

連投

知名度は高いはずだけど……

「ぐほあ！！いてえ……………」

俺はくまに飛ばされて何処か分からないところに落下した。

落ちた時の衝撃で腰に激痛が走ったのでそこを摩りながら周りを見渡してみるが、辺りは木、木、木。木しかない。

それでも見聞色の覇気で声を探ってみると、人の声が聞こえることから近くに街があるのだろう。

いつまでもくまを恨んでいても仕方がないし、そっちに行ってみる事にして俺は歩きだした。

『グルルルルル！！』

俺は三日三晩飯を食ってないので歩くのでさえきついと云うのに、そんな時に限って猛獣と云うのは現われる。

幸い動物なので覇気が使えないから放っておいても大丈夫なのだが、辺りをちよろちよろされるとウザい。

「糞が……。消える。」

取り敢えずその猛獣を滅却して俺は目的地である街を目指した。

暫く歩くと、漸く街に着いた。

活気がある街だとか、妙に視線が集まるだとか、そんなものはどうでもよくて取り敢えず飯屋に直行した。

場所は……匂いで探した。

そついうことで俺は飯屋に着いた。

「取り敢えず何でもいいから持って来てくれ……。」

俺は飯屋のカウンターに座り、女店主に注文といえるかどうかはわからないが、それっぽいことをした。

「はいよツ!!しっかりと食べな!ウチの料理は絶品だからね!」

暫く経って差し出された料理に俺はがつついて、空腹を満たした。

ぶはぁ。よく食った。

俺は溜め息を一つ吐いて、水を飲みながら周りを眺めてみる。

「つをツ!?!」

そのあまりの光景に俺はついつい口に含んでいた水を吹いてしまった。

何故そうなったかと云うと、店内には女性しかいなかったからだ。

それも『え?それって隠せてなくね?』って云う格好をしている女性ばかりだからだった。

しかも殆どが美人ってところが、また俺を動揺させる。

「おいおい、あんた大丈夫かい？ここじゃああれくらいの格好は普通で、寧ろあんたが異常だよ。もしかしてあんた、外海から来たのかい？」

俺が異常って……おかしくないか？

女性が殆ど裸同様の姿で過ごすような国なんて あった。

その国には女しかないから、人目なんて気にする必要がないんだ。

「お代置いていきますー！！」

俺は財布の中から10万ベリー程出して、それをカウンターに叩きつけて店の外に出る。

女店主の『お釣りが。』と云う言葉が聴こえたが、今はそれよりも大事なことがある。

「やっぱりか……！！」

俺は店の外に出て、一際目立つ建物を発見して、ポツリと声を零す。その建物は東洋の城の様な造りになっており、『九蛇』と書かれている。

来る時に気がつかなかったのは空腹の所為で意識が朦朧としていたからだろう。

そしてその城とさっきの女店主の『外海』と云う言葉で確定した。ここは女の島、つまり女ヶ島のアマゾン・リリーだと云うことが。

「あの熊……！！今度逢ったら捕まえてやる。」

俺はここまで飛ばしたくまの悪態をつきながら、これからどうするかを考える。

sideマーガレット

今日は変なことがあった。

なんか熊の手形肉球の痕見たいなものが森の中にあった。それを見た時は『なにがあったんだろう』と云う程度にしか驚かなかったけど、また来てみたら人が寝てた。

私と同じ様な髪の色をしていて、変な格好の人。

私は好奇心と、奇怪感から近付いて、その人の顔を見た。

綺麗な寝顔……。

蛇姫様やロビンと同じくらい綺麗……。

「んん……。やば……。寝過ぎたかも……。」

その人は少しだけ唸りながら体を持ち上げる。

なんか……。この人の行動すべてが整えられていて、隙がない。

それに加えて胸もないから驚き。

「はあく、昼寝たら夜寝れねえんだろうなあ。せめて屋根のあるところに泊まって、飯くらい食いたい……。」

その人は私の存在に気付いていないのか、それとも気にしてすらないのか、なににせよ私の方を見もせず立ち上がった。

そしてそのまま何処かへと歩いて行った。

人間観察は好きだし、少しだけあの人に興味があるのでついて行ってみることにした。

よし！レッツ人間観察！

sideミナト)

いや、寝過ぎた。

起きたらもう夜だったし、取り敢えず腹が減ったので食糧を調達するべく起き上り、俺は宛てもなく歩きだした。

その後ろから視線を感じるが、気のせいではないだろう。

と云うより俺が寝てる時に近くにいた金髪だろうが、俺に害を加えそうにないので放っておく。

「今日の晩飯は……、あれだな。」

ドゴオオオオンツ……！！

俺は巨大な猪的動物を見つけて、体術だけで簡単に沈める。

動物相手にわざわざ能力を使ってやるまでもない。

調理する時は別で、鉄を生成して包丁の形にして切ったり、焦げない様にチマチマと能力を使って燃やしたりくらいはする。

「ただ　　く前に、あんたもこっちに来てくれ。尾行されたままじゃ上手い飯が食えん。」

俺は後ろにいる金髪を呼んだ。

原作で出てきたキャラだったが、名前は忘れた。

「いつから気付いてたの？」

「最初から。」

「なんで無視したの？」

「別に話しかけられたわけじゃないし、用事があったわけでもないからな。」

「そう、それならいい。」

適当に言葉を交わして、金髪は俺の横に座った。
やっぱ露出度高い……。

「今までずっと尾行^{おっけ}してたみたいだけど、何か用か？」

俺は金髪にも食べる様に促しながら肉を食べる。

「少し興味があつたから。」

興味ってなんだよ。

そんなに興味持たれる様な行動は一切していない筈だ。

「ま、それはいいとして、俺に泊まるどころか提供してくれねえか？」

「『俺』？……変なの。でもいいよ。私の家で良かったら、泊めてあげる。」

優しい！優し過ぎるぞ金髪！！

俺はお前を好きになりそうだ！！

「ありがとう。恩に着るよ。」

「外海から来たんでしょ？外海に興味があるから

外海の男っ

て云つのに興味があるから、その話を訊かせてくれるなら泊めてあげる。」

「そのくらいなら、喜んで。」

とは云つたが、如何したものか。

男の話なんて　　って俺の話をすればいいだけか。

「それじゃあ行きましょう。」

俺と金髪は晩飯を食べ終わり、金髪の家へと向かった。

「汚れてるから、お風呂に入ったら？　でも使い方わかんないよね……。なら私も一緒に入るから、先にお風呂に行つて。」

おいおいおいおい、少し待とうか。

いくらなんでも風呂の使い方がわからないなんて有り得ないだろ。

初めて見る風呂でも、臨機応変に対応すればいいだけの話だろ。

まあシャンプー等々の場所やタオルの場所などはわからないが。

「　　ッ……!」

「……如何かしたの？　恥ずかしがることなんてないのに……。」

俺が思考に没頭している時に金髪は既に下着姿になって家中を歩きまわっていた。

それを見て俺は紅潮して、更にそれを見た金髪が首を傾げた。

「いや、なんでもない。」

男と云う事を云うべきなのか？

でもそんなこと言えば俺は色々と拙い、色々。

だが、このままだったら裸で同じベッドなんてことになり兼ねない。俺にはヒナがいるのにどうすればいいんだよおおおおお！！！！

「それじゃあお風呂に入ろうか。」

心で叫ぶ俺を無視して金髪は俺の服を瞬時に脱がして、風呂に放り込んだ。

取り敢えず下は隠した。

後は上だけだが、どうする……。

「胸ないんだね。それじゃあ寂しいでしょ。私の、触る？」

俺にはあんたの思考が理解できないぜ、金髪。

別に寂しくねえし、胸なんてなくていいんだよ。

それにどうやったたら自分の胸を他人に触らせるって云う思考になるんだ。

それに胸ならヒナのを　　って今は関係ないだろ。

「遠慮する。」

俺は極力金髪を見ない様にする。

だって金髪はタオルすら巻いてないし、全裸だし、スタイルいいし、美人だし、取り敢えず男として誘惑されない方がおかしいくらいのもものだから。

まあ俺にはヒナと云う強固の壁が立ち塞がっているから、理性崩壊なんてことは有り得ないだろう。

いないときまで威圧するとは……末恐ろしい奴だ、ヒナめ……。

「ふうん、まあいいや。それよりも、男の話訊かせて！」

「ん、ああ。」

それから俺は男の概要と云うか容姿と云うか、そんなものを話して、風呂を出た。

侍女エニシダの独壇場

「そう云えば未だ名前聞いて無かったつけ。」

俺は風呂から上がって、漸くその事に気がついた。

今までずっと金髪としか呼んでいなかったし、見覚えがある様な気もするのでこのもやもやを晴らしたい。

「そうだね。私の名前はマーガレット。そっちは？」

あー…… やつと思いだした。

何処かで見たとある様な気がしていたのは原作キャラだったからか。

「俺はミナト。今日一晩だけかもしれないけど世話になるよ。」

「ミナト……。何処かで訊いた事がある気がする……。」「

やっぱ名前は伏せといた方が良かったか……。

訝しまれるのは当り前だよな。

「何処にでもある名前だ。それより今日は寝ないか？」

随分と疲れた気がする。

昼は寝てただけけど、それでも女性と一緒に風呂って云うのは色々な意味で疲れた。

だから今日はもう寝たい。

「そうね。それじゃあ寝ようか。」

マーガレットの提案に反する理由もないので、黙ってマーガレットについて行く。

恐らく寝室にベッドが幾つか設けられているのだろう。

「なん……だと……!!?」

その予想は裏切られて、寝室にはベッドが1つしか無かった。それもかなりピンクでコーティングされた、ヒナの寝室以上のものだ。

お嬢様気分を味わいながら一日を終えたいんだろうと云う気持ちは痛いほどわかる、ヒナも昔はそう云っていたから。

それでもピンク一色だと男としては悶々としてしまう。

「もしかして……ピンクだけじゃイヤ？フリルも嫌いなのか？」

まあ好きではないことは確かだ。

いや、女性が身につけたりするのは好きだけどそこで寝るのはいかななものかと、男として。

「それよりも……もしかして同じベッド寝るのか？」

流石に同じベッドは無理だ。

俺にはヒナと云う妻？恋人？がいるのだ。

いくらヒナがいない時だからって、そんな事は出来ない。

風呂は……不可抗力だ、流れだ、俺の所為じゃねえ。

「そうだよ。一緒にお風呂も入ったのに、なに云ってるの？それと

も私なんかと一緒にじゃイヤかな……。今日は一緒に寝てくれる人が居て嬉しかったんだけど……。」

哀しそうに俯く彼女。

そんなことまで云われたら、断ることなんて出来ないだろう。ヒナ、ごめん。取り敢えず謝るけど、変な事はしないから!!

「別にイヤじゃないけど……。」

「本当?」

「まあ……。」

「ありがとう!!」

お礼を云われる事なんて一切してないんだけどな……。

まあマーガレットがそれでいいならいいか。

その日はそのまま同じ布団の中に2人で入った。

昨日はやばかった。

俺は何もしなかったが、マーガレットがな。

何をしたかは察してくれ、若しくは思い思いに想像してもらえたらいい。

「そう云えば訊いて無かったことが1つあった。ここに未だロビンって奴が居るか?」

「ロビン？ロビンならもういないけど……ミナトはロビンと知り合
ってミナトってまさか！！？」

完璧なミスだ。

ロビンって呼ぶくらいだから仲は良いんだろうし、もしそうだった
ら海軍本部から来たことも知っている筈。
そうなってくれば俺の話も自然と出てくるわけで。

「む、むぐう~~~~~！！」

大きな声を出しそうだったので咄嗟に口を抑えた。
柔らかい何かの掌を転がるが、葛藤するまでもなく鉄壁ヒナに砕かれた。

「いや、悪い。俺は男で、ロビンの兄だ。黙ってて悪かったな……
ごめん。」

そこまで云ったところで俺は彼女の口に当てた手を外す。
こんな程度で信用されるとは思っていないが、少なからず口を抑え
ているよりはマシだろう。
それに家の中だから多少なりなら大きい声でも訊こえないだろう。

「あ……いや、こっちこそ勘違いしちゃってごめんなさい。」

なん……だと！？

俺アてつきり殺されると思ってたが、謝られるとは……聖者です
か！？あなたは聖者なのですか！？

俺は頭を下げるマーガレットを見て惚れそうだったが、またもや鉄ヒ
壁ナに砕かれた。

「いや、全部俺が悪いことだ。」

「じゃ、じゃあ昨日のお風呂の時も……見たの？」

「じゃあって何ですかね！？じゃあって！」

その接続語を使う様な発言はしてませんけど！？

と、頬を赤く染めるマーガレットに反撃することも出来ず、俺も恥ずかしさから顔が火照っているのが分かる。

俺は、俺は

ヒナが好きだー！ー！ー！ー！ー！（棒読み）

よし、落ち着いた。

「あの……謝らなくてもいいからお願いを1つだけ訊いてもらえる？」

「喜んでー！！」

ぐぼはぁー！！

恥ずかしそうにモジモジするマーガレットを見ながら心の中で吐血した俺は了承する。

そもそも裸見たんだから願いの1つや2つ叶えてやらねばならんだろっ。

「その……男の人にしか無いって云うもの……触らせて？」

「……………」。

マーガレットの発言で、長い様で短い沈黙がこの場に訪れた。
いや、待とうか。

男にしか無い部分って……あれだよな？一物だよな？
それをヒナ以外の女に両者了解で触らせるなんて……出来るわけね
えよ！！

俺の理性がどうこうとかじゃなくて、それは俺の存在が消されるわ
！！
主にヒナとかヒナとかヒナとかに！！

「ダメ……かな？」

ぐほあっ！！！！

俺は決して折れない……。

たとえマーガレットが上目遣いと涙目と云う最強のコンボで攻めて
来ても俺の本丸は墜とさせない。
俺は浮気なんかしないんだ！！

「それだけは……勘弁ツす。他なら大丈夫ツす。」

「じゃあ……触らせて？」

「……………何処を？」

「手とか、お腹とか……体を。」

「それくらいなら……。」

男を見るのは初めてだからさぞかし興味があるんだろう。

浮気にならない程度なら、大丈夫な筈だ。

そう、これは決して浮気ではない、謝罪だ。

俺が浮気なんてするわけないだろ？ベイベ―。

体中を柔らかく白くか細い指で撫でる様に触られた後、俺とマーガレットは九蛇城に赴く事になった。

ロビンはいないが、一応ハンコックとも知り合いだし、帰る為に船くらい貸してくれる若しくは本部に連絡する為に電伝虫を貸してくれるかもしれない。

何より俺が男だと云うことが島民に先にはれるより皇帝であるハンコックに言っておいた方が騒がれないで済みそうだ。

「女装しなくても大丈夫？」

「いや、女装しない方が精神的には大丈夫だ。それに俺は空を飛べる。お前も連れてってやろうか？」

「いいの!？」

マーガレットは空を飛べると云う発言に訝しむが、誘ってやると目を輝かせて喰いついてきた。

なんて子供っぽくてかわいいんだ……じゃない。

「ああ、街中歩くよりは目立たないだろ。」

昨日も服装の所為かかなり目立ってたし、マーガレットは今日も『k n e g g?』って感じの服装だし。

男としては誘われないわけがない……のだが、そんなことを考えて

いると不意に般若ヒナが現れ兼ねないので止めて置く。

普段は素直でかわいい、エロイ体の少しエロイ思考の可憐な少女な
んだけど、自分以外の女の事になると豹変するからな。

俺が女ヶ島にいたってだけで殺されそうだと、肉体的な意味じゃなく、
精神的に、主に性的に殺されそうだと。

「うん！連れて行って！！」

マーガレットは年相応のかわいらしい笑顔で力強く頷いた。

……なんかたしぎに似てる。

「それじゃあ行くぞ。」

マーガレットを抱きかかえ、外に出た直後に下半身を水素に変えて
一先ず屋敷の上に立つ。

それから結構な速さでこの住居区からなら何処からでも見える大き
く聳え立つ九蛇城に向けてジェットの要領で飛んだ。

道中では誰にも見つかることなく九蛇城の天守閣に到着。

天主には普段誰もいないってマーガレットも云ってたし、一番高い
ところだから逃げるのも易い。

それに正門から入ろうとしたところでマーガレットが面会を求めて
も拒否されるだろうし、俺の正体をばらしては元も子もない。

そう云う事で来たわけだが、落ち着かない。

城って云うだけはある、煌びやかな装飾品で飾られて、如何にも豪
華な雰囲気漂っている。

如何にも気負いしてしまうような感じ。

俺が金ぴかの英雄王だったら物足りないんだろつなあくど多少の現実逃避を試してみたり。

「ミナト、下に降りるの？それともここで様子を覗ってる？」

そんな俺にマーガレットは心配した様に訊いてくる。

彼女は女ヶ島の住民でも城に勝手に入れればハンコックに石にされるなんてことは有り得なくもない。

かと言って俺が入ってもどうしようもないし。

……………俺、ここに来てからの事全然考えてなかったorz

考えても仕方ない、俺が行くしかないか。

「俺が行くわ。マーガレットはここで待ってて、取り敢えず騒ぎを起こさないようにするから。騒ぎが起きたら……………まあその時で。」

「え？そんなテキトー？」

「俺が誰かに殺された時は……………一緒に死んでくれ。」

「それはイヤよ。」

「そう云うな。一緒に風呂に入った裸の仲……………！！！！」

俺の発言にマーガレットは顔を紅潮させ、俺も自分の発言に顔が火照る。

俺はアホか！？

自ら墓穴を掘るなんて愚の骨頂！！

「ん、んじゃあ行ってくる！」

上擦り掛けた声で告げて、俺は階段から天守閣を降りた。

やばいやばい、俺はうっかりスキルを持っているのか？

いやいや、そんなことねえよ……でもうっかりは結構あるかもしれねえな。

まあいいや、今はそんなこと考えてる場合じゃなくて、見つからない様にしないと。

つてことで今は天主を降りて上から2つ目の階層。

未だに火照る顔を手で煽ぎながら辺りを見回すが、生活感を感じられない。

ガチャ……

あー、逃げ場がないけど、無情にも下の通路へと繋がるであろう場所の扉が開かれた。

何も無いところに咄嗟に隠れるなんて芸当は出来ないので、俺は誰が入って来るのかを観察することに。

呆れるほど緊張していない自分に多少の嫌気が差す。

「はあ……蛇姫様は人遣いが荒いんだから……。でもそこが美しい……！」

と、ドアを開けた金髪の小さな女性は恍惚とした表情でハンコックを褒め称える。

見事なまでに良い様に使われてる侍女だな。

まあ最初は普通に陰口だったけど。

「確かこのあたりに……。」

侍女は俺の存在に気付かぬまま押入れを開けてガサガサと段ボールの箱を漁りだす。

人間って誰かに見られてないと思うと自然と行動を口にするんだよな……。

それで恥ずかしい思いを何度したことか。

それを逆の立場から眺めるのは……悦楽だ。

「じーじよじーじよ侍女女の子　腹の中から、やってきた」

ぽ……ポ　ヨだと!?

いや、それよりもジ　リ作品でそんなグロイ替え歌を創っていいのか!?

「じーじよじーじよ侍女妖艶の　まん丸小顔の、女の子」

まあ……小顔だけどさ、自賛し過ぎでしょ。

それに丸いけどなんか平べったいし。

そして俺は侍女さんから妖艶さを全く感じられない。

「あつ、あつたあつた。」

侍女さんは目的の物を見つけたのか、何かを持って下に降りていった。

将に侍女の独壇場だった……。

1人であるカオスな空間を創るとは……感服ッす。

蛇姫様は見下しすぎ

侍女が降りたのを確認して、俺もそれに続いて降りていった。

そこからは徐々に人　　侍女が増えていき、この階層にはハンコックの部屋もあるらしい、マーガレット曰く。

だからと言ってそこが簡単に見つかる筈もなし、隠れながらの探索。相手がいくら覇気が扱えるとは云え、意識していなければ発動も出来ないし、俺も気配遮断ならそこそこ出来るので視界に入らなければまず見つからない。

それと同時に見聞色の覇気でハンコックの声を探ればベストなのだが、2つの併用は出来ないので自力で探していると云うわけだ。あまりの緊張に溜め息を吐きたいけど、見つかるので吐けないと云うある意味拷問。

それでもスモーカーなら敢えて吐くだろう、マゾ心を撥られて

いや、あいつならこの状況に置かれた時点で満足しそうだ。

ツて云うかこの状況、リアルゼ　ダの伝説だな。

衛兵の目を盗んでゼル　姫に会いに行く……うん、ハンコックは蛇姫だし、雰囲気はありそうだ。

そんなことを考えながら俺は誰にも見つからずに、明らかにハンコックの部屋とわかる部屋の前に到達。

部屋と云うよりは王の間と云った様な感じだろうか。

扉は木製で重量感のある茶色で観音開き、そしてその前には門番が2人。

ここの突破はほぼ不可能か……？

いや、無音で気絶させればいいか。

そう云う事で俺は腕を水素にして伸ばし2人の首裏を同時にチョッ

プ。

名付けて『アルティメットバクフーン』だな。

それで気絶した2人を適当に影に連れていき、ハンコツクの部屋に堂々と潜入。

たぶんこの娘にはプライバシーとか関係ないから。

「しつれ〜い。」

流石に無言で入るわけにもいかないの、取り敢えず適当に挨拶。

これで海軍との交友関係を壊してもらってもあれだし、俺なりに気を使った結果だ。

「なんじゃ、無礼者。扉を開ける時にノックも出来ぬ　　ッ！！
？」

「いや、すまん。驚かせただろうけど、大声は出さないでくれ。あと他に誰も呼ばないでくれ。それと……あれだ。服来てくれ。」

ハンコツクは俺の存在に気付いて大声を上げようとするが、俺は口元に人差し指を当てて制止する。

その問題のハンコツクは言葉通り裸で、布団の上に座っている。

たぶん毎日こんな生活送ってるんだろうけど、しっかりと背中だけは隠されている。

「わ、妾はこのままでも構わぬぞ？」

赤面しながら、ハンコツクの大胆発言。

そりゃああんな悩ましい体して誘われたらおちるだろうけど、俺にはヒナがいるわけで、その言葉に乗るわけにもいかない。

「俺が構う。それに背中、見られたくないなら服着てた方が良いだろ。」

「ッ!!?そなた……何故それを……!?!」

俺の言葉に、ハンコックは身構える。

「つか隠せとか云いながらいちいち行動を観察してる俺って……。だって綺麗なんだもん、仕方ない、男として当然だ!!」

「ほら、これ。」

これで服を貸すのは2度目になるが、ハンコック目掛けて着ていたパーカーを投げる。

俺の今の服装は白いYシャツの下にブラッドレッドのTシャツを着ていて、赤いネクタイを緩めてその上に薄紫のパーカーを着ていた。今投げたのはそのパーカーだ。

ズボンには普通に白のスラックスで、靴はこげ茶のブーツ。

……あ、今更だがこっちではアメリカの様に家でも靴は脱がない。まあ元日本人の俺は自宅じゃ脱いで、客人を呼ぶ度に変人扱いされたりするけど、家族だけは理解してくれる。

「やっぱいい娘だ、ヒナとたしぎ、それにロビンも……。」

「す、すまぬ……しかし何故じゃ?」

「だってマリージョアにいたし、あいつらのあれだったならそれはついてるだろうしな。」

あまり公言できないことなので大半の固有名詞は隠させてもらったが、ハンコックはそれで理解してくれた。

「それより、じゃ。そなたが何故ここに？」

俺が貸したパーカーを肌直に羽織る。

やば……そう云う使い方させる為に貸したんだけど、後から着るのに困るわ。

っーか……胸部がのびてる……。

「まあいろいろあってな。来るつもりはなかったんだが、来ちまったわけだ。それで本部に帰りたいから小舟を一隻貸してくれないか？俺に出来る限りなら礼もするから。」

「そ、そうか……。それならば……。」

俺の一言が失言となってしまい、ハンコックを赤面させる。なにを考えているのやら……。

「わ、妾の手を握ってくれぬか!？」

「……………あっ、ああ。」

こんなことで良いのかと思いつつも、彼女の白く艶のある細い指に、俺の指を絡め合わせる。

「は……………はじょうっ……………!」

それでご満悦の海賊女帝。

こんなことくらいなら頼まれなくてもするんだけど……まっ、いっか。

「それじゃあ小舟を一隻、貸してもらえるか？」

「そ、そなたの仰るままに……」

「そっか、ありがとな」

「はうっ！！」

感謝をこめて微笑むと、ハンコックは胸を抑えて蹲る。
この初々しい感じは好きだ。

「（はうっ！な、なんと凶悪な笑みじゃ……あれを直視しては身
が持たぬ！顔を見ることすらままならぬと云うのに……！！）」

何やらハンコックが考えていそのだが、独自解釈はよろしくないだ
ろう。

……そう云えばマーガレットも連れてきてたんだっけ。

「天守に街の女がいるんだけど……ロビンと仲が良かったみたいだ
から好意にやってくれ」

「名は何と申すのじゃ？」

「マーガレット。金髪のショートカットだ」

「あれなら妾もそこそこ仲が良いぞ。ロビンが居た頃に話もしたこ
とがあるからな」

えへんと形の良い豊かな胸を強調するハンコック。

そんなことしたら俺の理性とパーカーがはち切れるのでしゅいけ
ません！

……ッて云うかマーガレットめ、そんな話一回もしてねえじゃねえか。
だったらわざわざ不法侵入することも無かっただろうに。

「じゃあ今から連れてくるけど……俺の顔は城の人に知られてないよな？」

「何を云っておるのじゃ？城にそなたの写真が引き伸ばして貼ってあったのに気付かなかったのか？妾はいつでもそなたの顔を見ていられる様にとポスターを作り城に張り、それだけでは留まる事はなく生活必需品には全てそなたがプリントされておる。
ほれ、この抱き枕などは等身大じゃ」

そこまでしたらストーカーじゃね？とか思うがかわいいから許す！

「海軍もいい仕事をするものじゃ。」

「は？何で海軍が関係してんだ？」

「これらは全て海軍からの支給品じゃ。加盟条件として掲示させてもらったところ、快く承諾してくれたぞ？」

センゴクか！？コングか！？ いや、絶対ガープの仕業だ……。

あの人中將のくせにセンゴク並みの権力あるからな。

「確かスモーカーとか言ったか。奴がガープに頼んで作らせる権利を貰って科学班に作らせたとか。そのお陰で匂いまで再現出来ておる優れものじゃ！」

よし、帰ったらあの煙野郎をしばき倒そう。

その後はマゼランに頼んでインペルダウンに収容して……。妄想がつきそうにないからここで一時中断しておこう。

閑話休題。

これ以上は話が拗れそうなのでグッズに関しての事は考えないよう
にしよう。

「それで、俺の顔が知られてるんなら城の中は堂々と歩いていいの
か？そつちが了解ってことで」

ニヨン婆とかに見つかったら何か言われるんだろうな。

皇帝承認でも色々と女ヶ島こじの法律に詳しい婆さんの方が論争は有利
だろうし。

ハンコックが味方でも勝てそうにないなあ……。第一ハンコックとは女ヶ島に海軍を近付かせないって云う条件で契
約してるから、その時点で賠償求められたらよっぽど軍が不利にな
る。

下手すれば軍とここの上下関係が逆転するかもな。

「大丈夫」 「蛇姫様！！侵入者です！！」 部屋に
入る時はノックをせよと申した筈じゃ」

「あ、いえ……。って海軍本部中将！？」

ハンコックを無視して、さっき気絶させた筈の門番2人が一斉に指
をさす。

あゝあ、それはいろいろと問題ある気が……。

「皇帝を前に何と云う無礼！そなたらは死刑じゃ！」

バン！！！！

そんな効果音がつく程に反り返ったハンコックが見下し過ぎて見上げながら2人に指をさす。

非常にかっこいいけど、下なにも穿いてないから丸見え……。
いかんいかん、理性を保て！俺はヒナ一筋だ！

「「そんな蛇姫様も美しい！！蛇姫様のあそこを崇めながら死ぬのなら本望……」」

変態だ……！！

ここに生粋の変態が2人居る……！！

「そのような気品の欠片も感じない発言をするなど……九蛇の人間として恥ずかしく思え！　メロメロ　「ちよつとたんま。
流石に石化する事はないだろ。失礼を承知でノックをせずつ入って来たのもお前の命が一番大事だと思ったからだろ？　ま、俺には関係ないけど、無暗にそう云う事はするものじゃない。」
そなたが云うのであれば……。」

恍惚とした2人を石化させようとするハンコックの腕を掴み、制止させる。

国の政治のやり方に指図する気はないが、今回は俺が悪いので流石に止めさせてもらった。

「（はう！！このパーカーにミナトの手が……！！このパーカーは何としてでももらい、何としてでも洗わぬ！）」

黙ったのでハンコックが起こっているのかと思ったが、そんな事を

小声で呟いていたので俺の心配は徒労に終わった。
取り敢えずマーガレットでも連れてくるか……。

初めての名前

「マーガレット!」

「あ……ミナト、如何したの?」

「いや、お前ハンコックと仲いいなら先に言えよ。潜入した俺の立場がない」

「あはは……ごめんごめん。楽しそうだったから、つい……」

天守に戻ってくると、マーガレットはちょこんとかわいらしく小さくなって座っていた。

寂しい思いをさせただろうか、寒かったのだろうか、取り敢えず心配するように声を掛けたが、どちらでも無かったらしい。

「まあいいけどさ。今からハンコックのところ行くぞ」

「え、あ、うん」

状況を理解していないマーガレットの手を引いて、俺は来た道を引き返す。

ここに来るまでの道のりは大変だった。

ハンコックが云っていた通り俺の写真がそこら中に張ってあるし、せめてハンコックの部屋とかだけにして欲しい。

自分に見つめられるほど気持ち悪いものはないからな。

その所為で侍女に声を掛けられたり握手を求められたり、終いには

サインまで求められて……なんてオープン!!
じゃなくて俺は芸能人じゃねえ……。

「そう云えばマーガレットはそんな格好で寒くないのか？」

ここに来る前にも言った通り、彼女は隠すべきところを隠し切れていない。

「え……うん……!!」

俺の質問が悪かったのか、視線がエロかったのか、彼女は顔を紅潮させて視線を逸らした。

そして向けた先は俺が握っている彼女の小さな手。

ああ、そう云うことが。

「あ……ごめん。悪気はなかったんだが……許してくれ」

すぐさまその手を離して、謝罪の弁を述べる。

「ううん、違うの……。嬉しかったから……!!!!」

更に顔を紅潮させた彼女は、恥ずかしそうに言う。

そんなこと云われたら……こつちが恥ずかしいわ!!

えらいこつちやえらいこつちや!!

俺はヒナが好きだ…… (棒読み)

よし、これで大丈夫。

「それじゃあ……行くか」

俺はマーガレットの手は握らずに、そのまま歩きだすが後ろからマ

「ガレットがついて来る気配がしない。

「如何した？」

後ろを振り返るとさっきのところまで立ちすくんでいる。

「手……」

ぐぼはあっ……！！！！

そんな……かわいらしく手を出されて『手……』って云われても俺の城塞は落とせねエ……！！

「ダメ……かな？」

「………了解ッす」

これは任務だ。

これは任務だ。

これは任務以外のなにものでもないんだ！
仕方ないんだよ……！！！！！！！！！！

「それじゃあ行こうか」

「うん……！！」

赤面させるマーガレットの手を引きながら俺はハンコックの待つ部屋へと向かった。

暫く歩き、ハンコックの部屋の前に着いた。
道中に色々とあって、俺とマーガレットの顔は火照っている。
道中で何があったのかは……想像に任せよう。

「もう離していいか？ハンコックに見られるといろいろと厄介だし」
「う、うん……」

するりとは抜けず、名残惜しそうにマーガレットの手は離れていった。
なんか若いころを思い出す……未だ若いけど。

「入るぞ」

親しき仲にも礼儀あり。
親しいかどうかはわからないが、女性の部屋に入るにあたって何も
しないのは失礼で無作法で、プライバシーがないだろう。
それでもさっきはやってしまったわけだが……まあいい。

「み、ミナトか……。入ってよいぞ」

中から承諾の声。
か細く、可憐でいて、それが震えているとあらば、守りたくなるの
が男の道理。

捕捉するがこれは絶対に浮気ではなく、人としての務めだ。
目の前に女性が転んでいたら手を差し伸べるか、差し伸べないかの
問題と同様、誰などとは関係なく、手助けをするのと同義だ。
これを浮気と呼ぶものは俺が抹殺してやるぞ。

ガチャリ

扉を開けて中に入る。

そこには先程俺が貸したパーカーを羽織って、下には「隠せてくね？」スカートを穿いている。

アマゾン・リリーの住人は全員こうなのか……。
目のやり場に、非常に困る。

「あ……ミナトのパーカー。着てないと思ったら、蛇姫様に貸してたんだ」

ハンコックへの挨拶も忘れて、ハンコックの着ているパーカーに見入るマーガレット。

そして俺とそのパーカーを交互にジト目で見る。

俺……悪くないよね？

「……蛇姫様、申し訳ありません。挨拶が遅れました」

ジト目で俺の方をチラチラと見ながら、ハンコックを前に跪くマーガレット。

だから俺は悪くないのに……なんなんだ。

「そなたと妾の仲じゃ。気にすることなど無い。頭を上げてくれ」

ハンコックは原作じゃ珍しく　と云うかルフィ以外に見せたことがあるのかと疑うくらい笑わなかったハンコックが、微笑みながら告げた。

ほほう、これはかなり仲がよろしいことで。

「ありがとうございます、蛇姫様。ああ、今日も美しい……」

絶対そんなこと思ってないだろ、と思うほどジト目でパーカーを見ながら棒読みする。

いや、思っではいるのだろうが、それよりもパーカーが気になるのだろう。

そろそろこっちに火の粉が

「蛇姫様、無礼は承知ですが御服を貸していただければしませんか。少々肌寒いです」

「……むう。妾は今何も持っておらぬから……そうじゃ。ミナト、そなたの服を貸してやってはくれぬか？」

降りかかって来た。

俺が貸せるのはもうYシャツくらいで寒さをしのぐことなんて出来ないし、マーガレットはさっき大丈夫とか云ってたし。

ハンコックはマーガレットに相当な信頼を置いてるな……。いや、厄介だ。

「まあいいけどさ……」

Yシャツ一枚、寒さなど防ぎようがないので着ていても変わらないので、脱いでマーガレットに手渡す。

「ありがとうございます、ミナト!!」

するとお礼には極上の笑顔。

さっきジトツとした表情を見ていたからか、それが天使の物の様に思えたのは仕方ないこと。

でもヒナには及ばないな、何せ俺が愛した女だから、当り前なんだからどね！
えっへん！

「そう云えばさつきから下が妙に騒がしいんだけど……」

「それはミナトの為の宴の準備をしておるからじゃ。今日1日くらいは休んでいってもよいじゃろう?」

うるうると瞳をに心の汗を溜めて、上目遣いなハンコック。

それはさあ……ずるいよね。

人の好意を無碍にする様な人柄じゃない事を知っての行動か、否か

……。

どちらにせよハンコック、恐ろしい娘!!

「まあ1日くらいはな」

1日くらいと言うが、個人的には1日でも早く本部に帰りたいのだ。出来る事なら俺だって夢の樂園に　夢の樂園と書いてアマゾン・リリーと読み、そしてそれを現代ではキャバと云う　いて現実逃避し続けたいのだが、結構な期間仕事を放置していたので早く帰らないと拙いのだ。

センゴクもご立腹らしいし……帰ったら肩でも揉んで差し上げるか。これこそ世界最強の『媚』と云う技だ。

まあおじさん軍団はそんなことしなくても俺には甘いんだけどな。

ふっ……喘ぐセンゴクが目には浮かぶぜ!

「(な、何を考えてニヤニヤとしておるのじゃ？ま、まさか今夜の妾との行為を妄想して……！！！！早く夜になれ！！！！)」

「(ミナト……もしかして私の事考えてニヤついているのかな？だったら今夜はつくしてあげないと……！！一緒に寝るだけじゃなくて、その先もね……！！)」

センゴクの怒りを納める為の作戦を練っていたミナトに対し、見当違いの妄想を膨らませる2人だった。

カコーーーーーンッ！

ガラスでも金属でもない、木で出来た杯がぶつかり合う。

俺は見事なまでに歓迎され、持て成しを受けた。

ニヨン婆にも何故か今回だけは見逃してもらえたと云う奇跡を肴に俺は酒を飲む。

あとでハンコックとマーガレットの2人にも礼を云わないとな、後で。

今は

「はい次、ワンタッチ60ゴルね」

大事な部分だけは触られない様にしないとな。

小さな茶髪の女性　ネリネは俺に一回触れたら60ゴルと云うぼったくりな商売を始めるし、それに肅清されて勝手に無暗に触っ

ていた連中は列になつてるし。

少し先には何故かハンコックとマーガレットも楽しそうに並んでるし……。

あいつらは馬鹿ですか？

あ、あとポ ヨの替歌を唄っていた侍女 エニシダと云う名前

であることが判明 もちゃっかり並んでる。

仕事しろよ、侍女なら。

「え×！？ニヨン婆様もですか！？」

奥の方に気を向けていたら、俺を使って法外な商売をしているネリネが声を上げる。

列の先頭にはニヨン婆。

その熱い眼差しを送る瞳の奥には俺の姿。

これは……………不味い！！！！

「な、なんだ！！」

咄嗟の防衛本能が機能して、無理な体勢から無理な立ち上がり方を
する。

それでも無事なのは能力のお陰だ。

「ニヤんだとはニヤんじゃ！折角触りに来たと云うニヨに」

「全力で、全力で遠慮します！！ここで負けたら俺の人生が終焉を
迎えそうなので、それだけは遠慮します！！逆に60ゴル払うんで
帰って下さい！！」

別にニヨン婆が嫌いだから触らせないわけじゃない。

なんとなく、この人はダメだと脳が警鐘を鳴らしているのだ。

失礼とかそんなこと云ってる場合じゃないんだよ!!

「……………シクシク」

そんな言葉を残してニヨン婆は本当に6ゴルくすねて帰っていった。いや、焦ったわ、マジで。

「そ、それじゃあ次!」

ネルネは見なかった事にしようとして、次の人に催促する。

嘲笑が明らかに顔に出てるぞ……………。

そんな憐れんでやるな……………。

そんなこんなで宴は終わり、夜は何事もなく終わった。

そして今は次の日の朝、ハンコックたちに連れられて、カムベルト 凧の帯の外

まで連れて来てもらった。

本当に優しい人達でよかった。

やっぱりハンコックはいつものチャイナドレスっぽいのに俺のパーカーと正義のコートを上から着ていた。

ファッションとか考えようぜ?

「ありがとう、世話になったな」

「れ、礼を云うくらいなら名前を……………!!!!」

そう云えば名前を読んだことが一度もなかったな、と思いながら、噴火寸前のハンコックの顔を見る。

マーガレットとは既に島で別れを済ませているから、何の問題もな

い。

「ああ、ありがとな、海賊女帝」

「ハンコックと……………！！！」

焦らす俺にも純粹に早く呼んで欲しいと云う視線をぶつけてくる。

反則だー……………！！！！

かわいいと好きは違うから云うけど、めっちゃかわいいとおもっよ？
まあでも、ヒナには及ばないけど。

「小舟ありがとな……………ハンコック」

少し気恥ずかしかったので、ハンコックの耳元で囁くとハンコックは卒倒した。

大丈夫……………だろうな。

生命力は強そうだし。

それを証明するかのようによく成長するし……………色々。

そう云う事で、俺は漸く帰路に着いた。

俺があなたでヒナが姫？

「いや、ホントすいませんでした」

「……まあ今回はガープの責任でもあるからな。溜まった書類と雑務程度で許してやろう。だが次はこの程度じゃ済まんぞ？」

俺は無事に海軍本部に着いて、現在センゴクのいる指令室に。

本当なら中將が1ヶ月近くも無断逃暇休すればコング いや、もつと上に掛け合われて降格処分とかあるんだけど、今回はラッキーってことで。

早く説教終わってヒナに愛達に行きたいなあ。反省とかはしてるけど、愛には勝てないって！

「ありがとうございます。それではこれで……」

「まあ待て。このくらいで許してやるんだ。何かする事があるだろ？」

「はあ……」

音声だけでお送りしようと思ったが、それすらも嫌なので止めさせてもらった。

おっさんの喘ぐ音声だけでお送りしても誰も喜ばないし。そう云う趣味がある人は別として、取り敢えず肩を揉んだと云う事だけは報告しておこう。

そう云った経緯で俺は書類を整理するために自身の執務室に。

「はあ〜……早くヒナに逢いたいなあ〜」

その為には早く仕事を終わらせるしかないか、ともう一つ溜め息を吐いて心を切り替える。

ホント、中將は仕事が多いから大將になりたいわ。

あのオツサン三人はホントに雑務とかしないで暴れてるだけでいいんだから。

「そんなに逢いたかった？ヒナ感激……！！」

「うおっ!?!」

執務室の扉を開けると、オレのぼやきを訊いたヒナが出迎えてくれた。

心なしか顔が赤くなっているが……。

「ヒナも……逢いたかったあ〜〜!!!!」

突然ヒナが涙を零しながら抱きついて来る。

かわいい　　じゃなくて、ヒナも逢えなくて寂しかったんだろう。やっぱ……ヒナが一番落ち着くな。

「泣くなよ……困るだろうが」

「ヒナ泣いてないもん!!」

がらそっけなく返事をする。

ここぞでなにか捻れば良かったんだけど……生憎俺の頭が限界で羞恥心も唸りを上げたので出来なかった。

「もう……！ミナトにも言ってお欲しかったのに……！ヒナ渴望……！」

今度はヒナに渴望された。

渴望にハマって……るわけないか、作者の語彙力の問題だ。

「云うって……何を？」

「えっと……『ただいま、嫁』？あれ？何か違う様な……でも、それみたいなこと！ヒナ所望！」

これがヒナの語彙力か、それともこんな事しか言わせられない俺の実力不足か、ランのゆとりの所為か、いずれにせよ問題はあるな。ツて云うか『嫁』ってなんだ、『嫁』って。

その単語自体に批判はしないがその応用の仕方はおかしいと思う。

「わかったよ……。ただいま帰りました、姫」

それでも1ヶ月のぶりの再開だ。

ヒナの好きなようにさせてやるのが旦那の筋つものだろう、正式な婚礼は挙げてないがな。

「~~~~~ツ！！！！！！」

（いい！！ヒナ感激！！えへへ……癖になっちゃいそ／＼／＼／＼／）

悶絶しながら破顔させ、体をくねらせるヒナ嬢。

やべえ……かわいすぎるだろ……！！

「それじゃあヒナ、俺は仕事があるからまた後でな」

そんなかわいひの頭に手をポンと置いて、自身の椅子に向かう。出来る事なら永遠にイチヤイチャしていたいが……そう云う訳にもいかないからな。

「もう終わり？ヒナ残念」

「俺も残念だ」

「家に帰ったら主従プレイ出来る？ヒナ渴望」

ああ……さっきの悶絶は俺が執事的何かに当てはまったから起きたものなんだろうな。

ツて云うか公然で恥ずかしげもなくプレイなんて云うんじゃありません！

帰ったら大変そうだけど、久し振りの夜は賑やかそうだ。

「まあ……考えとくよ。それよりもヒナ少尉も仕事に戻るように」

「はい ミナト中将閣下」

にこやかな笑みを浮かべたヒナは敬礼をして直ぐに走り去ってしまった。

これは……いいわ。

ヒナがハマる筈だ、俺もハマったから。

やっぱ俺とヒナは似てるのかねえ……主にスモーカーで遊ぶのが好きなサドの意味合いで。

それじゃあさっさと仕事終わらせて、夜を楽しみますか！！

その日の夜は長い様で短かった。

何があったかは大体察してくれば嬉しいが、主従プレイだけは確実にやったことを報告しておこう。

別に変態的意味合いは全く持って含まれてないからな！

「久しぶりだねえ、ミナトくうくん」

「あ、黄猿さん、お久しぶりです」

誰にでも無く下手な言い訳をしている時に、顔が皺皺の黄猿大将が出現した。

帰って来てからもう1週間は経つが、大将とは初めて逢うな。

「随分と大変だったみたいだねえ、センゴクさんの肩揉み」

「ええ、まあ、あの人はガーブさんやクザンさんの所為で年中肩凝ってますから。偶には労ってあげないと、身体が持たないでしょう」

と言いつつも俺も本人から遠まわしにやれと云われるまでやらなかったわけだが。

「相変わらず良いお嫁さんだねえ、わっしも君みたいな子供が欲しいよ〜」

そう云えばこの人は俺争奪じゃんけん大会で決勝くらいまで残ってたんだっけ。

まあ負けてくれたお陰で今の俺があり、ヒナと『付き合っている／結婚している』？わけだが。

ツて云うか俺は嫁じゃない、男だしな。

まあ家事全般は出来るが……それが原因かorz

「はは、ありがとうございます。それにしてもここ最近は何やかです。海賊がいなくて云うか、海賊も不作と云うか、軍でさえ不作だし」

「海賊がないに越したことはないけどねえ。それじゃあわっしらの給料が無くなってホームレスだから、骨のあるピースメインばかりだといいいねえ」

ボルサリーノの云う通り、俺の云う通り、海賊稼業も不況だろう。なにせ最近は何もあるやつが全くないのだから。

それとボルサリーノが思っている事は、海軍全員が思っている。

モーガニアみたいな民衆を襲う下衆な海賊よりもピースメインで海賊を潰してくれる海賊の方がよっぽど便利で楽チンだ。

そうすれば自然と民衆への被害は保たれるし、海賊を追って俺たちの給料にもなるし、なにより楽しいし。

そう云う訳で海軍全員がそう云う事を思っているわけだ。

あのサカズキでさえこの論には反しない程だ　　まあ海賊がいない世界が最高だと謳うのは変わらないが。

「そうですね。大抵の海賊なら能力を使うまでもなく【六式】だけでいけますから」

「いいいねえ、若いつて云うのは。わっしなんか若い時でもその【

六式】は使えなかったのにいゝ」

「でも黄猿さんには能力があるじゃないですか。それには及びませんって」

「そうだねえゝ。これがなかったら今頃ミナトくんに大将の座を譲ってるねえゝ」

「いえいえ、俺なんか黄猿さんの足元にも及びませんよ。それじゃあ失礼します」

實力は拮抗しているが、そこら辺はキャリアの高いボルサリーノの方が上だろう。

実際に前に戦^やった時は負けかけたわけだし。

「足元にも及ばない、ねえゝ。謙遜なんかして、わっしら大将と互角に渡り合う實力は持つてるだろうにねえゝ」

残されたボルサリーノがそんな事を言っているなど、知る由もなかった。

報告（前書き）

お久しぶりです

今回はストーリーと関係ありませんが、読んで頂けると幸いです

報告

しばらくの間更新を止めていて申し訳ありません。

というのも、作成したプロット・書き置きしていた数話分の原稿・今までの話等のデータがとんでしまい、修復不可能で作者のやる気も修復不可能くらいに下がってました。

しかし久し振りにログインしてみたところ、多くの方々から応援されている事に気付き、やる気も徐々に出てきました。

それでもいざ書こうと思いPCの前に座ってみると、暫くの間離れたせいも全然続きが浮かんで来ません。

過去の自分の作品を読み返してもまったくと言っていいほどアイデアが出ません。

我ながら本格的に重症だと思っています。

もう話の続きを書けないんじゃないかってくらいに。

446

そこで読者のみなさんに聞きたい事があります。

この話をこのまま続けるか、心機一転気持ち切り替えこの作品をベースに新しい話を書くか、ということです。

こんなことも自分で決められないのか、書き始めた作品を完結させることも出来ないのか、と罵ってくださいしても構いません。

自分の勝手な判断ですが、このままグダグダ続けるのも読者に失礼ではないかと思ったので今回このようなことをさせていただきますました。

こういうのは活動報告でも良かったのですが、より多くの方に見て頂けるこちらに書かせていただきました。

また、上の2つ以外に、リハビリ作として書いて欲しいという作品があれば受け付けます。

こんな不甲斐ない作者ですが、支えてくれる方は是非とも感想の方やメッセージ等に意見を述べて頂ければと思います。

最後に

暫くの間小説とは離れていたのですが、駄文で読みづらかったかもしれませんが、これからも精進していきたいと思いますので、よろしくお願ひします。

報告 2

このたびは多くの方からご意見を頂きました。

1人1人感想を返そうとは思ったのですが、ここに書いた方が多くの方に見てもらえると思いいちらに書かせていただきました。

感想をくださった方、この無礼をお許しください。

本題ですが、この物語は書きなおすことに決定いたしました。

続けてほしいという意見も多く見受けられたのですが、読み直してみたところかなりグダグダだったので、それらを修正しながら、この物語を基盤に進めたいと思います。

勝手な判断で申し訳ありませんが、ご了承願います。

この小説はここで一時休載。

過去作がこの話の時系列に追いついた次第に削除なりしていこうと思います。

そしてもう一つ報告が。

リハビリ作としてこの作品と同時に、ISの二次創作も連載する方向で決定しました。

3作品を同時に連載することは容易ではないでしょうが、多少は無理をしても待つていてくださったファンの方々の希望に応えたいと思った結果、自分の中の最善策がこれでした。

これからは骨身を削って頑張りますのでどうかよろしく願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8738m/>

ONE PIECE 世界を照らす太陽譚

2011年7月28日18時21分発行